

国富論

国の豊かさの性質とその原因についての検討 第
5 版 (1789)

An Inquiry into the Nature and Causes of the Wealth
of Nations. 5th Edition (1789)

アダム・スミス著^{*1}

翻訳: 山形浩生^{*2}

2024 年 1 月 9 日

^{*1}著作権消滅

^{*2}©1999-2023 山形浩生 本翻訳は、この著作権表示を残す限りにおいて、訳者および著者に一切断ることなく、商業利用を含むあらゆる形で自由に利用・複製が認められる。クリエイティブコモンズライセンス 表示 4.0 (<https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/>) プロジェクト杉田玄白正式参加。 <https://www.genpaku.org/>

目次

序文と、この本の構想	i
第一巻：労働の生産力向上の原因と、その生産物がいろいろな階級の 人々に自然に分配される秩序について	3
第 1 章 分業について	3
第 2 章 分業をもたらす原理について	9
第 3 章 分業は市場の規模によって制約される	13
第 4 章 お金の起源と使われ方	17
第 5 章 商品の本当の価格と名目の価格、あるいは労働での価格とお金での価格	21
第 6 章 商品価格の構成要素について	31
第 7 章 商品の自然な価格と市場価格について	37
第 8 章 労働の報酬について	43
第 9 章 在庫の利潤について	57
第 10 章 様々な労働雇用と在庫における報酬と利潤	63
第 11 章 地代について	89
第 I 部: 常に地代を支払える土地の産物	90
第 II 部: 土地の産物のうち、ときには地代を払え、ときには払えないもの	99
第 III 部: 常に地代を払える種類の産物と、地代を払えたり払えなかったりする 種類の産物との価値の比率変動について	108
過去 4 世紀にわたる銀の価値の変動についての余談	110
11.1 Variations in the Proportion between the respective Values of Gold and Silver.	133
11.2 Conclusion of the Digression concerning the Variations in the Value of Silver.	153
11.3 Effects of the Progress of Improvement upon the real Price of Manu- factures.	157

11.4 Conclusion of the Chapter.	160
訳者あとがき	173
はじめに	173
題名と翻訳について	173

序文と、この本の構想

それぞれの国での毎年の労働は、そこで毎年消費される必需品や、生活上の便利なものを供給する源だ。そしてその必需品や生活上の便利なものは必ず、その労働から直接産み出されるものと、それを使ってほかの国から買うものとで構成される。

だからこういう産物やそれを使って買う物が、それを消費する人間の数に比べて多いか少ないかに応じて、その国のすべての必需品や、ときどき欲しくなる生活上の便利なものが、十分に供給されるか不足するかも決まってくる。

でも、この比率はどの国でも、二つのちがった条件によって制限されてくる。まずはその労働が全体としてどれだけ上手に使われるか、どれだけ柔軟に使われるか、どれだけきちんと考えて使われるか、といったことだ。そしてもう一つは、役に立つ労働で雇われている人数と、雇われていない人数との比率だ。それぞれの国の土壌、気候、領土の広がりなどがどうであろうとも、その年間供給の豊かさや枯渇ぶりは、それぞれの場合におけるこの二つの条件によってくる。

この供給がたっぷりあるか、カツカツかという問題は、この二条件の中でも後者よりは前者に左右されるほうが大きいようだ。狩猟や漁業を中心とする野蛮な国では、働ける個人はすべて、おおむね役に立つ労働のために雇われていて、生活上で必要なものや便利なものを、自分自身のためか、さもなければ老いすぎるか幼すぎるかして、狩猟や漁業にいけない家族や部族の者たちのために、精一杯供給しようとする。でもこういう国は、悲惨なほど貧しいから、しばしば物資の不足だけのために自分たちの幼児や老人や長期の病人を直接殺害するか、あるいは遺棄しなければならない（またはそう自分では考える）ところまで追いつめられる。飢え死にさせたり、野獣に喰われるに任せたりするわけだ。

逆に文明化されて栄えている国では、多数の人はぜんぜん働かないけれど、その多くは働く人々の大部分に比べて、10 倍、いやしばしば 100 倍もの労働の産物を消費する人々だったりする。それでも社会全体としての労働の総産物はきわめて大きいので、全員に供給がたっぷりいきわたり、労働者は一番階級が低く貧困な者であっても、倹約して生産的な者ならば、どんな野蛮人であっても手に入れられないほどの、生活必需品や生活上の便利なものの分け前を享受できることが多い。

この労働の生産力という点での向上と、その生産物が社会の様々な階級や状態の人々に自然に分配される秩序というのが、この検討における第一巻の主題となる。

ある国で実際に労働力がどれだけ上手に、柔軟に、考えて使われているにせよ、その状態が続いているときには、その国での年間供給が多いか少ないかは、その年に有用な労働に雇われた人数と雇われなかった人数との比率に依存するしかない。有用で生産的な労働者の数は、後に示すように、どこでもそういう労働を働かせるための資本ストックの量に比例する。だから第二巻は、資本ストックの性質をとりあげる。資本ストックがどのよう

にしてだんだん蓄積されるか、そしてその利用方法のちがいに応じた、使役する労働量のちがいについてもとりあげる。

労働の使いかたのうまさ、柔軟さ、判断力などがそこそこ先進的な諸国でも、その一般的なやりかたや方向性の面で、かなりちがう考え方を採っている。そして各国の産物の量から見て、そうした考え方がすべて同等の成果を挙げているとは言えない。ある国の政策は、地方部の産業を大幅に奨励してきた。別の国の政策は、都市部の産業を大いに奨励している。あらゆる種類の産業を平等かつ無差別に扱ってきた国は、ほとんどない。ローマ帝国の崩壊以来、ヨーロッパの政策は、地方部の産業である農業よりも、工芸、製造業、商業など都市部の産業を重視してきた。この政策を導入して確立させることになったと思われる状況については、第三巻で述べてある。

こうしたいろいろな考え方は、たぶん特定の人々の個人的な利害や偏見に基づいて導入されたものだ。それが社会全体の一般的な福祉に与える影響なんて、まったく無視され、それを予測する努力さえなかっただろう。だがそれは大きく異なった政治経済理論へとつながった。そしてその政治経済理論のうち、一部は都市部で行われる産業の重要性を強調し、あるものは地方部での産業の重要性を強調する。こうした理論は、学者の見解のみならず、君主や独立国の公共運営に対しても大きな影響力を持ってきた。第四巻では、こうしたさまざまな理論をできるだけ十分かつ明確に説明し、それが様々な時代や国々に与えた主要な影響についても解説しようとしている。

人々の集団としての収入がどうなっていたか、あるいはいろいろな時代や国において、そうした人々の年間消費分を供給した資金の性質を説明するのが、最初の4巻の目的だ。第五巻と六巻は独立国または連邦の歳入を扱う。この巻では、まず独立国ないし連邦で必要な歳出とは何かを示そうとしている。その歳出のうち、社会全体からの一般的な貢献によってまかなわれるべきなのはどれか、ごく一部の団体のみがまかなうべきなのはどれか、あるいは社会のごく少数のメンバーのみが負担すべきなのはどれかを示そうとした。第二に、社会全体が負担すべき支出を、社会全体から徴収する時に使えるさまざまな手法を示し、それぞれの手法の主要なメリットと欠点を示している。最後の第三点としては、現代の政府はほとんどすべて、こうした歳入の一部を債務返済にあてたり、借り入れを行ったりしているが、その理由は何かを示している。そしてそうした債務が、真の豊かさ、つまり社会の土地と労働の年間産物に対してどんな影響を持っていたかを示している。

第一卷：労働の生産力向上の原因
と、その生産物がいろいろな階級の
人々に自然に分配される秩序につ
いて

第 1 章

分業について

労働の生産力や、それを各種の方向に導く上手さ、柔軟さ、判断力などのかなりの面で、いちばん大きな向上をもたらしたのは、分業の効果のようだ。

社会一般での分業の効果は、具体的な製造業でそれがどう機能するかを考えればわかりやすい。一般的な見方だと、分業を一番徹底的に活用しているのは一番つまらない産業だ。たぶん実際には、つまらない産業でそれが他の産業よりも大きく導入されているというわけではないのだろう。でもそういう、ごく少数の人々の小さな要求を供給するよう運命づけられた小製造業者では、作業員の総数はどうしても小さくなる。そして作業の各種部分で雇用されている人々が、みんな同じ作業所の中に集められることも多く、見るものがそれを一望に収めることができる。ところがこれが大製造業者となると、仕事で雇われる作業員があまりに多いので、それを同じ作業所に集めるのは不可能だ。一度に見られるのが、一つの作業部門の人員を超えることはほとんどない。つまりこうした製造業者でも、仕事は本当はもっと慎ましい製造業者よりたくさんの部分に区分されているのかもしれないけれど、その別れ方がはっきりとは見えず、したがってあまり認知されてこなかったのだろう。

だからとても小さな製造業者を例にとろう。でも例にとる製造業者は、分業が非常にしばしば認識されてきた業者、ピン製造業者だ。この業界（分業のおかげで確固たる産業となっている）に馴染みのない作業員や、そこで使われている機械（その発明にもたぶん分業が貢献したことだろう）の使い方に馴染みのない作業員は、最高の生産性を発揮したとしても、一日にほとんどピン 1 本すら作れないだろうし、どうがんばっても 20 本は絶対に無理だ。でもこの産業がいま実行されているやりかただと、この仕事全体が一つの業種であるばかりか、それがたくさんの作業に枝分かれしていて、その大きな枝もまた、一つの別個の業種になっている。一人が針金を引き出して、別の人がそれをまっすぐにして、3 人目がそれを切り、4 人目が先をとがらせ、五人目がてっぺんを研磨して針の頭がつくようにする。その頭を作るには、ちがった操作が 3 種類必要だ。その頭をつけるのも、独自の作業だし、ピンを磨くのも別の作業だ。そしてそれを紙に挿すことでさえ、別個の仕事となっている。というわけで、ピンを作るという大事な仕事は、こんなふうにおよそ 18 個の別個の作業に分けられ、一部の製造工場ではそのそれぞれを別の人が行っている。中には同じ人がそのうち二つか三つをやることもあるけれど。この種の工場で小さめのやつを見たことがあるけれど、そこで働いているのはたった十人で、だからそのうち何人かは二つか三つの別個の作業を担当していた。でも、かれらはとても貧しくて、必要な機械にあまり習熟していなかったが、頑張れば一日 12 ポンドくらいのピンを作れる。1 ポンド

には中くらいの大きさのピンが、4000 本以上含まれる。つまりこの 10 人は、一日 4 万 8 千本以上のピンを毎日作ることができるわけだ。でもかれら全員が個別に独立して働いて、だれもこの商売でことさら訓練を受けていなければ、だれ一人として一日 20 本以上は作れないだろうし、一本も作れない人もいるだろう。これはまちがいがなく、各種の作業の適切な分業と組み合わせの結果として達成できているものの 240 分の 1 や、4800 分の 1 ですらない。

その他のあらゆる技芸や製造業において、分業の効果はこの実に些末なピン作りと同水準だ。ただしそれらの多くでは、労働はこんなに細分化できなかったり、こんな単純作業に還元できなかったりはするが、分業が導入可能な場合には、それはあらゆる技芸において、労働の生産力をそれなりに高める。各種の業種や雇用の相互分離は、この利点の結果として生じたもののようだ。またこの分離は一般に、最高度の産業と改善を享受している国々において、最も進んでいるようだ。社会が野蛮な状態においては一人で行われる作業が、もっと向上した社会においては数人がかりの作業となることが多い。多くの先進的な社会では、農民は普通は農業だけに専念し、製造業者は製造業以外には手を出さない。どんな製品であれ、一つの完成品として生産するために必要な労働も、ほとんど必ず多くの人々に分割されている。亜麻布やウール製品の各部門では、いくつものちがった商売が雇用されている。綿花や羊毛を育てる人々、亜麻布の漂白とシワ取り人、布の染色や仕立てを行う人々まで！ 農業は、確かにその性格からして、製造業に比べるとこれほどの労働分業が可能ではないし、各仕事同士をここまで完全に切り離すこともできない。牧場主と小麦農家の仕事の区別は、大工と鍛冶屋の仕事の差ほどは完全に分離できない。紡績業者は、ほぼまちがいがなく布を織る業者とはちがう人物だ。でも耕やす人、畝を作る人、種をまく人、小麦を取り入れる人は、同一人物であることが多い。こうしたちがった種類の労働機会は、一年の季節ごとにめぐってくるので、ある一人の人物が、年中このどれかの作業だけに雇われるのは不可能だ。農業において使われる、各種のちがった労働分野をすべて完全に分離できないということが、この分野における労働生産力の向上が製造業での向上に追いつかない理由なのかもしれない。最も裕福な諸国は、確かにその近隣諸国と比べて、製造業でも農業でもはるかに高い成績をおさめている。でも、その格差がどちらのほうで大きいかといえば、農業よりはむしろ製造業のほうだ。かれらの土地は一般に耕作状態もいいし、労働や費用をかけているので、地面の広さや自然の肥沃度から見て大量に生産する。でもこの生産量の優位性は、その労働と費用のかけ具合の多さとほとんど比例する程度に毛が生えた程度のものでしかない。農業では、豊かな国の労働は、必ずしも貧困国に比べそんなに多いわけではない。あるいは少なくとも、製造業で普通見られるほどの生産力の差を見せることはほとんどない。したがって、豊かな国の小麦は、同程度の品質でも貧困国に比べて安く市場に提供されとは限らない。フランスはポーランドに比べて豊かさや進歩の面で優れているけれど、でもポーランドの小麦は、品質が同じだとしても、フランスのものと同じくらいの安さだ。フランスの小麦は、小麦の生産地では、イングランドの小麦と品質ではまったくひけをとらず、そしてほとんどの年では値段も同じくらいだ。でも豊かさや進歩の面で、フランスはイングランドより劣っているだろう。イングランドの小麦畑は、フランスよりも耕作状態がよいとされ、フランスの小麦畑はポーランドのものよりはるかに耕作状態がいいとされる。でも、貧乏な国は耕作状態が劣っていても、一部の尺度、たとえば小麦の安さや品質において、豊かな国と張り合えるのに、製造業の製品ではそんな競争ができるようなそぶりすらまったく不可能だ。少なくとも、そ

うした製造業が、その豊かな国の土壌、気候、状況にふさわしいものであれば。フランスの絹はイングランドのものよりも品質がよくて安い。それは絹の製造が、少なくとも現在の生糸輸入の高い関税のもとでは、フランスに比べてイングランドの気候には適していないからだ。でもイングランドのハードウェアと硬い羊毛は、フランスのものとはあらゆる点で比較にならないほど優れており、品質が同じならずと安い。ポーランドにはほとんどどんな製造業者もいないそうで、国の自給自足に不可欠いくつか粗悪な家内制手工業が例外的にあるだけだとか。

分業の結果として、同じ数の人々がこなせるようになる仕事量が大幅に増えたのは、三種類のちがった条件が効いている。まずは、個別の作業者それぞれにおける技能の増大、第二にある種の仕事から別の種類の仕事に移る時に通常無駄になる時間の節約、そして最後に、労働を支援して補い、一人が多数の仕事のこなせるようにする、いろんな機械の発明だ。

まず、作業者の技能増大はまちがいでなく、その人物のこなせる仕事量を増大させる。そして分業は、各人の仕事をたった一つの単純な作業に還元してしまい、その作業だけが人生で唯一の仕事にするので、その作業者の能力をまちがいでなく大幅に高める。普通の鍛冶屋で、金槌の扱いには慣れていても釘を作ったことのない者がいるとする。それが何かの拍子に釘を作ることになったら、一日 200 か 300 本以上の釘は作れないだろうし、できた釘も劣悪なものとなるのは確実だろう。釘を作るのは慣れているけれど、でも唯一の仕事、あるいは主要な仕事は釘を作ることではない鍛冶屋なら、思いっきり専念したところで一日 800 本から 1,000 本しか作れないだろう。でもわたしは、釘を作る以外に何の仕事をしたこともない 20 歳以下の若者たちで、一日 2,000 から 3,000 本を上回る釘を作れる連中を知っている。とはいえ釘を作るというのは、そうそう単純な作業ってわけじゃない。同じ人物がふいごを吹いて、必要に応じて火を掻いたり焚きつけたりして、鉄を熱し、釘のあらゆる部分を作る。釘の頭を作るときにも、道具を換える必要がある。ピンや金属ボタンの製造がさらに分割される各種の作業は、それぞれずっと簡単なもので、一生涯それをやることだけに専念してきた人々の技能は、ずっと高いことが多い。こうした製造業の作業の一部が実施される速度ときたら、見たことのない人なら人間の手には習得不可能だと思えないレベルに達している。

第二に、ある作業から別の作業に切り替えるときに通常失われる時間をなくすことで得られるメリットは、一見して想像するよりもずっと大きい。ある作業から、場所もちがうし道具もぜんぜんちがうような別の作業にすばやく切り替えるのは不可能だ。田舎の織物師で小さな畑を耕している人物は、織機から畑に移動し、畑から織機に戻るのに、かなりの時間を無駄にしなければならない。その二種類の仕事と同じ屋根の下で実行できるなら、もちろん時間のロスはずっと少ないだろう。その場合ですら、ロスはかなりのものになる。一つの仕事から別の仕事に切り替えるとき、人は普通は手を休める。新しい作業についても、すぐには集中できないし専念もできない。いわば身が入らなくて、しばらくはきちんと仕事をするようりもあれこれ雑事をやる。手を休める習慣と、気乗りしない中途半端な作業の習慣は、生涯のほぼ毎日にわたり、作業や道具を 30 分ごとに換えて、20 通りもの作業をこなさなくてはならない田舎の労働者すべてが自然に、というか必然的に身につける作業態度であり、おかげでそういう人はほぼ間違いなく怠惰で怠け者で、とても緊急性の高いときにすら、精力的に身を入れてはたらくことができなくなっている。だからその人の技能という点でのハンデとはまったく関係なく、この一点だけでもその人がこ

なせる作業量は確実に大きく下がってしまう。

最後の第三番目に、適切な機械を使えばどれほど労働の手助けとなって手間が省けるかは、だれでも知っているだろう。だからここでは、労働を助けて手間を省く各種の機械は、もともと分業のおかげで生まれたようだ、と指摘するにとどめる。どんな目的の場合でも、人はあれこれ様々なことに関心が分散しているときよりも、その一つのことにだけ専念しているほうが、それを達成するためのもっと簡単に優れた手段を発見しがちだ。でも分業の結果として、それぞれの人の関心はすべて、何か一つのとても単純な目的に集中することとなる。だから、それぞれの労働分野に雇用されている誰かしらが、やがてその仕事をこなすもっと簡単に優れた手段を、その作業の正確として改善が可能なところでは見つけることが当然期待できる。労働がきわめて細分化されている製造業で使われている機械の相当部分は、もともとふつうの労働者の発明で、かれらはみんなごく単純な作業に雇われていたために、自然にその作業をこなすもっと簡単に優れた方法に頭が向いたのだった。こうした製造所をたくさん訪ねた人であれば、とてもきれいな機械をしょっちゅう見せられるだろう。そういう機械は、そうした作業員が自分の個別の作業部分を補助し高速化するために発明したものだったりする。最初の蒸気機関では、ピストンの上下に応じてボイラーとシリンダーとの間の管路を開けたり閉めたりするために、少年がずっと貼り付けられていた。こうした少年の一人は、仲間と遊ぶのが大好きだったので、機械の別の部分と、管路を開くバルブのハンドルとをひもで結ぶことで、バルブはこちらの手を借りなくても勝手に開いては閉じて、自分は遊び仲間のところに好き勝手に出かけられることに気がついた。この機械の発明以来最大の改良は、こういうふうにして、自分の手間を惜しんだ少年によって発見されたのだった。

でも、機械の改良のすべてが、その機械を使うチャンスのあった人々によるものでは決してない。多くの改良は、その機械を作ることがある商売の事業となったとき、その機械の作り手の工夫によって生じた。そして一部は、科学者や思索家と呼ばれる人によるものだ。こういう人たちの商売は、何をするわけでもなく、単にすべてを観察するだけだ。そして、その観察に基づいて、まるで縁遠い何の共通性もないもの同士の力を結び合わせることができるのだ。社会が進歩するにつれて、科学や思索は他の各種仕事と同じく、ある特定の階級に属する市民の唯一の生業にして職業となる。そしてこれまた他の各種仕事と同じく、たくさんのちがった分野に枝分かれして、それぞれが学者の特定の集団や階級を擁することになる。そしてこの仕事の細分化は、他の各種仕事と同じく、技能を高め、時間を節約することになる。各個人はその独自の分野の専門性をどんどん高めて、全体としてもっとたくさんの仕事が行われ、学問の量はそれによってものすごく増える。

よく統治された社会で、普遍的な裕福さが人々の最も貧しい階層にまで広がる結果となるのは、分業の結果として各種各様の技芸における大幅な生産の増大のおかげだ。それぞれの労働者は、自分自身が消費するよりも自分の作業の産物をずっとたくさん提供できる。そして他の労働者もまったく同じ状況にあるので、かれは自分の作る財を大量に出して、他の人の作った大量の財、あるいは結局同じことだけれど、その人たちの作った大量のものを代償として交換できる。かれは、他のみんなに自分の作れるものをたっぷりと提供し、かれらはかれの使いたいものをたっぷりと提供し、そして全般に豊富さが社会の各種階層を通じて広がるわけだ。

文明化して繁栄している国で、どこにでもいるような職人や日雇い労働者の衣食住を見れば、その人物にこの衣食住を提供するために一部（ものすごくわずかな一部とはいえ）

が使われている産業で雇用されている人の数は、まったく数え切れないほどだということ
がわかる。たとえば日雇い労働者の身を覆うウールのコートは、粗雑でごわごわに見える
だろうけれど、でもものすごい数の労働者の共同作業の産物だ。羊飼、羊毛の選別人、
羊毛を梳く人、けばだて職人、染め師、あらすき職人、紡ぎ人、織り師、縮充工、仕立屋な
どが、その他多くの人々とともに、みんなそれぞれのちがった技芸を結集しなければ、こ
んな慎ましい産物さえもできない。さらにしばしば田舎の僻地に住んでいるこうした職人
の一部から別の職人へと材料を運ぶのに、商人や輸送人が何人雇用されたことか！ 商
人や輸送人、さらには造船人、水夫、帆の製造者、縄の製造者などが、染め師の使う世界
のものすごい僻地からくる薬物を運ぶのに何人かり出されたことか！ こうした労働者
の一番つまらぬ者が使う道具ですら、作るのにどれほど多様な労働が必要だろうか！

水夫たちの船、縮充工の紡績機、あるいは織り師の織機のような複雑な機械などと言うま
でもないで、ここでは羊飼いが羊毛を刈り取るハサミというとても簡単な道具を作るの
に、どれだけ多様な労働が必要かを見よう。鉱山の採掘人、溶鉱に必要な炉を作る職人、
燃料の材木の販売者、溶鉱炉で使われる炭を焼く人、煉瓦職人、煉瓦を積む職人、炉の番
をする労働者、水車大工、鍛冶職人、鍛冶屋、こうした人々のすべてが、ハサミを作るに
はそれぞれの技能を発揮しなくてはならない。同じようにして、この日雇い労働者の服や
家具のそれぞれの部分を検討したらどうだろう。たとえば肌身にまとったごわごわの亜麻
布のシャツ、足を覆う靴、横たわるベッド、そしてそれを構成する各種の部品、食べ物を
調理する台所の火格子、かれがそのために使う石炭（地の底から掘り出され、長い海路と
陸路で運ばれてきたもの）、その他台所用品のすべて、テーブルのすべての食器、ナイフと
フォーク、食物を盛りつけて取り分ける陶器や錫製の皿、パンやビールを造るのに使われ
た各種の人手、熱と光を通し、寒気と雨を閉め出すガラス窓を作るのに使われた人手や、
こうした北方の地では快適な暮らしに不可欠だったであろうガラスという美しくもすばら
しい発明を用意するために必要とされた知識と技能、さらにはこうした便利なものを作る
のに使われた各種労働者の道具まで、同じように検討してみよう。これらをすべて検討し
て、それぞれにどれほど多様な労働が使われているかを考えてみれば、何千人もの支援と
協力がなければ、文明国の最も慎まじやかな人物ですら、通常暮らしている慎ましく単純
なものといわれわれが誤解している暮らしぶりの水準ですら、生きてはゆけないのだとい
うことに気がつくはずだ。もちろん、偉大な人々のもっと豪勢な贅沢に比べれば、かれの暮
らしは実に単純で慎ましい。それでも、ヨーロッパの君主と勤勉で質素な百姓とを比べた
ときの暮らしぶりの差は、何万人もの裸の野蛮人たちの生命と自由を絶対的に支配する多
くのアフリカの王さまとの暮らしぶりをその百姓の暮らしぶりがどれほど上回っているか
という差に比べれば、それほど大きくはない可能性だってある。

第2章

分業をもたらす原理について

こんなにたくさんの長所が生じる分業というのは、もともとだれか一人の知恵が、それのもたらす普遍的な豊かさを予見して意図して導入した結果ではない。それは一見するとまるでそんな広範な効用を持っていない、人間のある性質の、きわめてゆっくりで段階的とはいえ、必然的な結果なのだ。その性質というのは、いろいろなものを交易、交換、取引するという性質だ。

この性質というのは、人間の原初的な性質の一つで、それ以上は分析不可能なものなんだろうか。それとも、それは理性と発話という能力の必然的な結果なんだろうか。後者のほうがありそうだけれど、でもそれがどちらであるかはここでの検討の範疇ではない。それは全人類に共通だし、ヒト以外のどんな生物種にも見られず、また動物界には他に契約をするどんな種も見つからないようだ。同じウサギを追いかけるグレイハウンド二匹は、時になにやら協調した行動のような振る舞いはする。お互いがウサギを相手のほうに追いや、そして相手がウサギを自分の方に追いやったら、それを引き受けようとする。でもこれは別に何か約束あつてのことじゃなくて、その時点において両方が同じ獲物に情熱を向けていたために起きた偶然の一致でしかない。だれもイヌが、自分の骨を別のイヌの骨と公明正大に交換するような契約を交わしているところなんか見たことはない。動物が仕草や自然な鳴き声を通じて、他の動物に「これはオレのでそれはおまえの、そっちをくれればこっちをあげよう」と宣言するところを見たことがある人もいない。動物は、人や他の動物から何かを手に入れたい時には、その必要とするサービスを握っている相手の好意を惹く以外に説得方法はない。子イヌは母イヌにじゃれてみせ、スパニエルは食卓のご主人からエサがほしいときには、歓心を得るための仕草を何千通りもやってのける。人も、自分の仲間相手に同じ手口を使うし、自分の希望通りに相手を動かす手段が他になれば、卑屈な媚びた歓心を買うための振る舞いを試してみる。でも、あらゆる場合にこれを実行できるほどの時間はない。文明社会では、常にものすごい数の人々の協力と支援が必要だし、一方で人の一生は短すぎてほんの数人しか友達にはなれない。ヒト以外のほとんどすべての動物種では、その動物が成獣になれば完全に自立するし、その自然状態ではほかの生き物から何の支援も必要としない。でもヒトは絶えず同胞の支援を必要としているので、博愛だけでそれを得ようとしても無駄だ。他人の自己愛を自分に有利なように惹きつけ、自分が求めることをしてくれればあなた自身のためになるんですよ、と示せばずっと生き延びやすい。他人にどんなものでも取引を持ちかけるヒトはすべて、これを提案しているわけだ。わたしの求めるものをくださいな、そうすればあなたが欲しいこれが手に入りますよ、というのが、そうした申し出すべての意味だ。そしてわれわれが必要と

する事物のうち、相当部分を他人から得るのはまさにこのやり方を通じてのことだ。夕食が期待できるのは、肉屋や酒屋やパン屋の博愛のおかげではなく、かれらが自分の利益に留意するからだ。われわれはかれらの人間性ではなく自己愛に訴え、かれらに話すのはわれわれ自身のニーズのことではなく、かれらにとっての利益の話だ。同胞市民の博愛にもっぱら頼ろうとするのは乞食だけだ。そして乞食でさえ、それだけに頼ったりはしない。乞食は裕福な人々の慈善に全面的に頼って生き延びている。でも、このやり方が最終的には必要な生活必需品をもたらしているにしても、その乞食の必要にあわせてそれが都合よく提供されるはずもないし、実際にそんなことにはなっていない。乞食であっても必要物の大部分は、他の人々と同じようにして手に入れる。つまり取引や交換や購入によってだ。ある人にもらったお金で、乞食は食べ物を買う。別の人にもらった古着は、もっと自分に適した服やら宿泊やら食料やらお金と交換し、そのお金を使って乞食は必要に応じ、また食べ物や衣服や宿泊を買える。

お互いにとってよい必要品を手に入れる方法の大部分が取引や交換や購入によるものだし、そもそも分業をもたらしたのも、人間の取引をするという性質だ。狩人や羊飼いの部族で、ある人物がたとえば他のだれよりも上手に弓矢を作るかもしれない。かれはしばしばその弓矢を、仲間の家畜や肉と交換することになる。そしてついに、自分で野原に出て狩りをするよりも弓矢と交換したほうが、もっと家畜や肉を手に入れられることに気がつく。自分の利益を考えるが故に、弓矢を作るのがその人の主な仕事となって、かれはいわば武器屋になるわけだ。別の人は、部族のテントや移動式住居の枠組みや覆いを作るのに秀でている。それを作ることでご近所の役にたち、そしてその報酬に同じように家畜や肉を代わりに得るようになり、やがてこの仕事に専念するほうが自分の利益になることに気がついて、一種の家大工になるわけだ。同じように、三人目は鍛冶屋や真鍮細工師になり、別の人は革職人や毛皮の服屋（毛皮や革は、野蛮人の衣服の主要部分を占める）となる。こんなふうに、自分の労働のうち、自分自身の消費できる以上の余った部分をすべて、他の人の労働のあまりで自分の必要なものと交換できるということで、すべての人はそれぞれ特定の仕事に専念するようになり、その商売において自分が持っている才能や天与の才を育み完成させようと努力することになるわけだ。

実際のところ、各人の自然な才能の差なんて、みんなが思っているほど大したものじゃない。そして達人の域に達した各種職業の人同士を隔てるように見える、ものすごい才能の差というのは、多くの場合は分業の原因というよりは、その結果なのだ。まるで共通点のない人々、たとえば学者と町の赤帽のちがいは、天性によるものよりは、習慣や慣行、教育によるものだ。生まれ落ちたとき、そしてその後6年から8年にかけて、かれらはたぶん似たり寄ったりだったし、その親たちだって遊び仲間たちだって、大したちがいは見て取れなかっただろう。でも6歳から8歳、またはその直後くらいに、その子たちはちがった仕事に就く。そのときはじめて才能の差が認識されて、どんどんそれが広がり、やがて学者の高慢ぶりはそこに何か共通点があったことさえ認めたがらなくなる。でも取引、交換、交易しようという性向がなければ、すべての人は自分の欲しい生活上の必需品や便利な品を自分であつらえるしかない。全員が同じ作業をこなすしかなくて、同じ仕事をするしかなく、才能の大幅なちがいなんかをもたらせるような、職業上の差だってあり得なかっただろう。

ちがった職の人同士でかくも異なる才能のちがいを形成するのは、この取引性向であり、そしてそのちがいを役にたつものとしているのも、この同じ性向だ。同じ種に属する

とされる動物の族同士は、習慣や教育で人々の間に生じるとされるちがいよりもはるかにすさまじいちがいを自然に生み出しているようではある。天性から言えば、学者は町の赤帽と比べて、才能的にも志向的にも、グレイハウンドとマスチフ犬のちがい、あるいはグレイハウンドとスパニエル犬のちがい、あるいはスパニエル犬と牧羊犬のちがいの半分もちがっているわけじゃない。でもこうした動物のちがった族は、同じ種に属してはいるけれど、お互いにはほとんど何の役にも立っていない。マスチフ犬の強さは、グレイハウンドの素早さにまるで支援されることはないし、スパニエルの機敏さや牧羊犬の従順さからも何も得るところはない。こうしたちがった能力や才能の効果は、交換交易能力や性向がないために、共通のストックに枯券できず、種全体の充足や便宜にちっとも貢献しない。それぞれの動物は、やっぱり個別に独自に自分で食料を得て身を守るしかなくて、自然がその仲間たちに別々に与えた、才能の多様さから何も便益を引き出すことがない。一方の人間の愛だでは、それとは逆に、まるっきりちがった才能が相互に役にたつ。それぞれの能力がもたらす別々の産物が、交易、交換、取引への一般的志向のために共通の場にもたらされて、そこでだれもが自分の必要に応じて、他人の能力が生み出したものの一部を買うことができる。

第 3 章

分業は市場の規模によって制約される

交易の力は分業をもたらすけれど、一方でこの分業の進展はその力の範囲によって制約されてしまう。言い換えると、市場の規模によって制約される。市場がとても小さければ、だれも一つの職業に専念しようという気にはならない。自分自身の消費できる範囲を超えた、自分の労働の産物を、他人の労働の産物で必要なものの余剰部分と交換できないからだ。

一部の産業は、きわめて低級な産業であっても、大都市でしか実施できない。たとえば赤帽は、大都市以外では仕事もないし食べてもいけない。村は赤帽にはあまりに狭すぎる。そこらの市場町でさえ、絶えず仕事が見つかるほど大きいことは珍しい。スコットランドのハイランドのような人のいない田舎で、一軒家やとても小さい村が散在しているだけのところでは、すべての農夫が自分の一家の肉屋、パン屋、醸造屋を兼ねなきゃいけない。こういう場合には、鍛冶屋だろうと大工だろうと煉瓦職人だろうと、同じ職業の人が 30 キロ以内にいる見込みはほとんどない。最寄りのご近所でさえ 10 キロから 15 キロも離れて住んでいる家族は、ものすごい小さな仕事のあれこれを自分でこなすことを学ぶ必要がある。そういう作業はもっと人口の多い地域では、そうした専門職人の助けを借りることになるだろう。田舎の労働者はほとんどどこでも、使う材料が同じという程度の親和性しかないありとあらゆる職業分野に手を染めざるを得ない。田舎の大工は、木でできたものならなんでも扱う。田舎の鍛冶屋は、鉄でできたものならなんでも扱う。前者は大工であるばかりか、指物師でもあり、箆笥職人でもあり、木彫り細工師ですらあって、さらには車輪職人だったり鋤職人だったり、馬車やワゴン製造者だったりすらする。鍛冶屋の仕事となると、さらに多様になる。スコットランドのハイランド地域では、釘屋という程度の仕事すらあり得ない。そうした労働者は、一日釘を千本作り、年間 300 日働くので年間 30 万本の釘を作れる。でもこんな環境では、年間に千本の釘、つまり一日分の釘さえも売りさばけないだろう。

水上輸送によって、陸上輸送だけで可能なよりもずっと大きな市場があらゆる産業に対して解放されるので、あらゆる産業が自然に細分化されて改善されるのも、海沿いや航行可能な川沿いになるし、そうした改善が内陸部にまで拡大するのは、ずいぶん後になってからのことになる。乗員が二人ついて、馬八頭が引く幅広輪の馬車は、6 ヶ月かけてロンドンとエジンバラの間で 4 トンの品物を積んで往復する。同じ時間で、6 人から 8 人の乗員を持つ船は、ロンドンとリースの港の間で 200 トンの品物を積んで往復することも多

い。つまり6人から8人は、水運の力を借りることでロンドンとエジンバラの間で、同じ時間で幅広輪の馬車50台分、乗員100人分、馬400頭分に匹敵する量の品物を運ぶわけだ。つまり、ロンドンからエジンバラの一番安い陸運で運ばれる品物は、100人三週間分の維持費、そして馬400頭と巨大な馬車50台の維持費のみならず、維持費と同じくらいの消耗損傷費用を輸送費の中で負担しなくてはならないということだ。一方、同じ量の品物を水運で運べば、6人か8人の維持費と、積載量200トンの船の消耗損傷費用、さらにリスクが高くなる分の価値、あるいは陸運と水運との保険料の差を負担することになる。だからこの二ヶ所の間で輸送手段が陸運しかなければ、重さに対してかなり高い値段がつくような品物でないと運べないので、現在この両都市間で営まれているよりもはるかに小さな規模の商業しか営めず、結果として現在それぞれの都市が、相手の都市に対して相互に提供できている事業機会に比べるとごくわずかしかな提供できない。世界の離れた地域同士では、どんな商業だろうとほとんど、あるいはまったくあり得ないことになってしまうだろう。ロンドンとカルカッタの間の陸運コストを負担できるような品物なんてあるわけがない。あるいはこれだけの費用を負担できるほどの貴重品があったとしても、あれだけ野蛮な国がいろいろある中を、まともに安全に運べるわけがあらうか？ でもこの二都市は、いまお互いにかんりの商業を行っているし、お互いに市場を提供することで、お互いの産業を大いに奨励しているわけだ。

というわけで水運のメリットはこんなに大きいことから、技術や産業における最初の改良が真っ先に起きるのも、こうした設備があらゆる種類の労働の産物に対し、全世界を市場として開いてくれる場所なのは自然なことだし、それが内陸部に広がるのがずっと遅いのも当然のことだ。国の内陸部は、自分の品物の大部分について、自分と沿海部や航行可能な大河とを隔てる周辺地域しか市場がない期間がとても長い。だからかれらの市場は長いこと、そうした国の富や人口の多さに比例せざるを得ず、結果としてかれらの発展は、そうした地域の発展より後にならざるを得ない。イギリスの北アメリカ植民地では、プランテーションは常に沿海部か航行可能な河川の沿岸に沿って広がり、これらからある程度以上離れたところにはほとんど広がっていない。

最高の公認歴史によれば、初めて文明化された国々は地中海沿岸に位置していた国々だったようだ。地中海は、世界で機知のなだやかな内海であり、潮もなく、だから風で起こる以外の波もなく、だから海面の穏やかさと、島の多さと、岸がどこからでも近いこともあって、世界の航海技術の草創期には実に具合がよかった。当時、まだ方位磁針が知られていなかったのも、人は陸の見えないところに出るのを怖がったし、造船技術も未熟だったので、大洋の荒波に身を任せるのも怖がった。ヘラクレスの巨柱を越えて進む、つまりジブラルタル海峡から外に出るのは、古代世界では長いこと、航海技術の最先端できわめて危険な応用と思われていた。あの古代における最も技術の高い航海者たちにして造船者だったフェニキア人やカルタゴ人ですら、それを試みたのはずいぶん後になってからで、その後もかなりの長きにわたって外洋航海を行ったのはこの二カ国だけだった。

地中海沿岸諸国のうち、農業や工業がどっちもある程度のところまで発達して改良されたのは、エジプトが最初だったようだ。エジプト上流部は、ナイル川から数キロ以上離れて広がることはまったくないようだし、エジプト下流では、あの大河が多数の運河に別れ、ちょっとした技術の適用で大都市間のみならず大きな村同士すべての間でも、さらには田舎の農家の多くでさえ水運による輸送が可能になっている。これはライン川やメーセ川がいまオランダでやっているのとほとんど同じだ。この内陸部の航海の範囲の広さと容

易さこそが、エジプトで早い時期に発達が生じた主要原因の一つだろう。

また農業と工業での改良は、東インドのベンガル地方や中国の東部地域の一部でもはるか古代から生じていたようだ。ただしこの古代史のかなりの部分は、世界のわれわれのいる部分でよく保証されているような歴史では裏付けられていない。ベンガル地方ではガンジス川と、その他何本かの大河が、エジプトでのナイル川と同じように、航行可能な多数の運河を造っている。中国東部地域でも、何本かの大河がいろんな支流によって無数の運河を造り、運河を渡ることによってナイルやガンジス、あるいはこの両者をあわせたよりはるかに大規模な内陸移動が可能になっている。古代エジプト人や古代インド人、あるいは古代中国人のどれも外国貿易を奨励しなかったというのは驚くべきことだが、でもいずれもこの内陸航海からその大いなる繁栄を導き出した。

アフリカ内陸部のすべて、そして黒海やカスピ海よりある程度以上北の地域、つまり古代スキタイ、現在のタタール地方とシベリア地方は、この世のあらゆる歴史を通じて、現在見られるのとまったく同じ、野蛮で非文明的な状態にあったようだ。タタール海は船が航行できない凍った海だし、この地域には世界最大の川がいくつか流れてはいるけれど、それぞれはあまりに離れすぎていて、その大部分は商業や交易を運んだりできない。アフリカには、ヨーロッパのバルト海やアドリア海や、ヨーロッパとアジアの両方にまたがる地中海や黒海、そしてアジアにおけるアラビア湾やペルシャ湾、インド湾、ベンガル湾、シャム湾のような大きな内海は一つもなく、あの大陸の内部に海洋貿易をもたらすことができない。そしてアフリカの大河はお互いに離れすぎていて、一定以上の内陸航行を生み出せない。大量の支流や運河に分岐しないような川、そして海に到達するまでに他の領土を通過する川に沿って展開できる商業は、どんな国であっても決して大したものにはなれない。というのも、その他の領土を握っている国々は、常にその上流の国と海との輸送を妨害する力を持つことになるからだ。ドナウ川の航行は、ババリア、オーストリア、ハンガリーの各国にとってあまり役に立たないけれど、そのどれか一カ国が黒海に流れ込むまでのその流域すべてを掌握していたら、状況はかなりちがうだろう。

第 4 章

お金の起源と使われ方

いったん分業が十分に確立したら、人は自分のニーズのごく小部分しか自分では供給できなくなる。ニーズのずっと大きな部分は、自分の労働産物で、自分が消費する分以上に余った部分を、自分が必要とする他人の労働産物の同じようなあまりと交換することで入手する。つまりあらゆる人は交換によって生きるわけで、つまりみんなある意味で商人となり、そして社会そのものが文句なしの商業社会へと発展する。

でも分業が最初に起こり始めたときには、この交換の力は実際の運用面でかなり障害の多い不満なものだったことがとても多かったはずだ。たとえばある人が、ある品物を自分自身で必要な量よりも多く持っていて、ある人が必要量より少ししか持っていなかったとしよう。結果として、前者はこの余りをよろこんで処分したがるし、後者はそれを喜んで買ったがる。でも後者がたまたま、前者の必要とするものを何も持っていなかったとしたら、両者の間では何も交換は生じない。肉屋は自分で消費できるよりたくさんの肉を店に抱え、パン屋とビール屋はそれぞれその一部を買いたいと思う。でもかれらは、自分たちの個別の商売の産物以外に提供できるものがなくて、肉屋はとりあえず消費するのに十分なだけのパンもビールも持っている。この場合、この人たちの間では交易は起きない。肉屋は売り手になれないし、残り二人は買い手になれない。だからかれらは相互に、お互いに対してサービスを提供できる能力が下がる。こんな不便な状況を避けるためには、分業が確立した後の社会のあらゆる時代において、まともな人であればすべて、常時手元に自分の産業の固有の産物以外にの何かある商品か何かを手元に置いておくような形に身邊を整えようとするのが当然だ。その品物は、各種産業の産物と交換で受け取るのを拒否する人がほとんどいないだろうとかれが考えるような商品でなきゃいけないわけだ。

おそらくは、この目的のために数多くのいろんな商品が、次々に考案されては利用されてきただろう。野蛮な時代の社会では、商業の共通の道具としてウシが使われたそう。たぶんそれはずいぶん不便だったろうけれど、でも古代ではいろんなものがしばしば、その対価として与えられたウシの数で価値を計られていた。ホメロスによれば、ディオメデの甲冑は雄牛 9 頭分の値打ちしかなかったという。でもグラウクスの甲冑は、雄牛 100 頭分だったそう。アビシニアでは、商業と交換の共通の道具として塩が使われるという。インド沿岸の一部では、ある貝の一種だ。ニューファウンドランドではタラの干物。ヴァージニアではタバコ、西インドのわれら植民地の一部では砂糖、他の国では毛皮や皮革、そして聞くとところによれば今日ですら、スコットランドのある村では労働者がパン屋やビール酒場に向かうときには、お金の代わりに釘を持って行くことが珍しくないとか。

でもすべての国で、人は最終的にはこの仕事を任せる対象として、他のどんな商品より

も金属を愛好することになったようだ。金属は他のどんな商品にくらべてもほとんど目減りすることなく保存できるのみならず、いくらでも目減りせずに分割できるし、溶接すれば二つの部分をくっつけるのも簡単だ。これは他の同じく耐久力のある商品がまったく持たない性質だし、この性質は他のどんな性質よりも、金属を商業と流通の道具となるのにふさわしい存在にしている。たとえば塩を買いたくて、交換に出せるものが家畜しかない人は、たぶんウシ1頭分の塩か、羊1頭分の塩をまとめて買うしかなかっただろう。それ以下の量はまず買えなかったはずだ。というのも、交換に渡すものを損失なしに分割することがまず不可能だからだ。そして1頭分より多く買いたいと思ったら、同じ理由で二倍の量とか三倍の量を買うしかないはずだ。つまり雄牛2頭や3頭分、あるいは羊2匹か3匹分に相当する価値分だけ買うことになる。さて、もしそうではなくて、羊や牛のかわりに交換に金属を渡せたら、かれは自分がその時必要とするその商品の正確な量にあわせて、金属の量を簡単に切り分けられる。

この目的のために使われる金属は、それぞれの国によって違う。古代スパルタ人の間では、鉄が共通の装置となった。古代ローマ人の間では銅、そしてすべての豊かな商業国では黄金と銀だ。

こうした金属はもともと、延べ棒の形で利用されていて、特に刻印も貨幣化もされていなかったようだ。だからピレニウスが古代の歴史家ティマイオスの権威に基づいて述べるころでは、セルウィウス・トゥッリウスの時代まで、ローマ人は硬貨の形でのお金を持たず、刻印のない銅の棒をつかってなんでも必要なものを買ったそうだ。つまりこういう延べ棒が、当時はお金の機能を果たしたことになる。

この延べ棒状態での金属の利用には、とても大きな不便さが二つつきまとう。まず、重さを量るという面倒。そして二番目に評価するという面倒。貴金属では、少量のちがいが大きな価値の差を生み出すので、適切な精度で重さを量るという仕事ですら、少なくともきわめて正確な秤と分銅を必要とする。特に黄金を図るのはかなりの精密さを要する作業だ。卑金属だと、確かに多少の差でも大したちがいはならないし、だから必要な精度も下がる。それでも、貧乏な人が一ファージング（訳注：お金の単位。1/4 ペニーでとても少額）ほどの値打ちの品物を売り買いする必要があるとき、そのファージング分を測らなきゃいけないならえらく手間だ。評価の作業はそれよりもっとむずかしく、もっと面倒で、その金属の一部が坩堝で適切な溶媒と共に十分に溶かされない限り、評価から引き出される結論はきわめて不確実なものだ。でも硬貨型のお金という精度の前は、この面倒で難しい手間をかけない限り、人々はすさまじい詐欺やインチキに会うかもしれない。自分の商品の対価として純銀や純銅一ポンド重量のかわりに、卑しく安物の材料を混ぜ合わせて外見だけそうした金属に似せたものを受け取ることになったかもしれない。こういう濫用を避け、交易を支援して、その結果各種の産業や商業を奨励するためには、その国で通常ものを買うのに使われている実際の金属の一定量に公的な刻印を押すことが必要だというのは、事態をある程度以上改善しようとしたすべての国で必要とされたことだった。これが貨幣型のお金の起源であり、造幣局と呼ばれる公的機関の起源だ。

これらの機関は、羊毛や亜麻布生地の商品監査人や刻印監督（スタンプマスター）とまったく同じ性質の機関だ。どれもみんな、公的な刻印という手段で市場に持ち込まれるこうした商品の量と均一な品質を確実にしているわけだ。

この種の流通金属に押される公的刻印として最初のものは、多くの場合は最も確認が難しく重要な、金属の良質さや純度を保証することを意図して作られたもので、現在の銀

板や銀のべ棒に押されるスターリング印や、黄金のインゴッドに時々押されるスペイン印と似たもので、金属の一つの面だけに押されて表面全体を覆ったりはせず、金属の純度は保証しても重量は保証しなかったようだ。アブラハムはエフロンに対し、マクペラの畑の対価として合意した 400 シェケルの銀を量って渡す。でもそれは、商人の流通用のお金だと述べられているのに、金額ではなく重量によって受け取られている。現在、黄金のインゴッドや銀の延べ棒で行われているのと同じだ。イングランドの古代サクソン王たちの収入は、お金ではなく物品払い、つまり食料や各種支給品で支払われていたという。征服王ウィリアムが、お金で支払う習慣を導入した。でもこのお金はずいぶん長いこと、国庫から金額ではなく重量をもとに払い出されていた。

こうした金属を正確に量るのが不便でむずかしいために、硬貨という制度が必要になった。ここでは刻印が金属片の両面全体を覆い、ときには縁も覆う。これは金属の純度だけでなく重さも保証するものとされていた。こうした硬貨は、したがって、現在と同じように金額で受け取られ、いちいち重さを量る手間が要らない。

こうした硬貨の単位は、どうやらもともとはそれに含まれた金属の重さや量を表現していたようだ。ローマで初めてお金を硬貨にしたセルウィウス・トゥッリウスの時代では、ローマ・アスまたはポンドは、良質な銅をローマポンド重量だけ含んでいた。それはイギリスのトロイス・ポンドと同じように、12 オンスに分割され、書くオンスには本当に良質の銅が 1 オンス重量含まれていた。イギリスのポンド・スターリングは、エドワード一世の時代には、明確な純度の銀を一ポンド（タワー尺重量）含んでいた。タワー尺ポンドは、ローマポンドよりもちょっと多かったようで、トロイ・ポンドよりは少なかったらしい。この最後のやつは、ヘンリー八世の 18 世紀になるまでイングランドの貨幣製造には導入されなかった。フランスのリーブルは、シャルルマーニュの頃には、明確な純度の銀をトロイ重量で 1 ポンド含んでいた。シャンパーニュのトロイーは、当時はヨーロッパのあらゆる国から人が集まっていたので、こんなに有名な市場の度衡尺はよく知られていたし尊重もされたわけだ。スコットランドのお金のポンドは、アレクサンダー一世の時代からロバート・ブルースの時代に至るまで、イングランドのポンド・スターリングと同じ純度と重量の銀を含んでいた。イングランド、フランス、スコットランドのペニーもまた、どれも一オンスの $\frac{1}{20}$ と一ポンドの $\frac{1}{240}$ を含んでいた。シリングもまた、もともとは重量の単位だったようだ。ヘンリー三世の古いおふれにはこうある；「小麦がクォーターあたり 12 シリングであるときには、ファージングのワステルパン（訳注：質の高いパン）は、11 シリングと 4 ペンスの重量であること」。でも、シリングとペニー、またはシリングとポンドとの比率は、ペニーとポンドの比率ほどは一定で均一ではなかったようだ。フランスの王たちが最初に覇権を争ったとき、フランスのソウまたはシリングは、その時々に応じて、5 ペニーだったり、12 ペニーだったり、20 だったり 40 だったりした。古代サクソン人の間では、シリングはある時はたった 5 ペニーで、それがご近所の古代フランク人たちと同じく、かれらの中でもかなり変動したことは十分考えられる。フランスのシャルルマーニュの時代以来、そしてイングランドでは征服王ウィリアムの時代以来、ポンド、シリング、ペニーの比率はいまと同じでどこでも一定だったようだが、それぞれの価値は大きくちがっていた。それはなぜかということ、思うに世界のあらゆる国で、王や主権領土は強欲や不正のため、臣民たちの信頼を悪用して、だんだんもともと硬貨に含まれていた金属の本当の量を減らしていったからだろう。ローマのアスは、共和国の後期になると、元の価値の $\frac{1}{24}$ にまで減ってしまったし、重量も 1 ポンドだったのが、半オ

ンス（訳注：ポンドは 450g、半オンスは 14g くらい）の重さしかなくなった。イングランドのポンドとペニーは、現在ではたった 1/3 くらいしか含んでいない。スコットランドのポンドとペニーはもとの価値の 1/36 くらい。そしてフランスのポンドとペニーは、もとの価値の 1/66 ほどだ。こうした手口によって、これを行った王や主権領は表面上は負債を支払って、もともと必要だったのに比べて少ない量の銀で約束を果たせた。でもこれは、まさに表面上だけのことだ。というのもその債権者たちは、支払われるはずだったものの一部をごまかされたことになるからだ。その国の他の借り手たちもすべて、同じ特権を認められて、自分たちが昔の硬貨をもとに借りた金額を、新しい改鋳された硬貨で同じ名目金額だけ返済することが認められた。つまりこういう手口は、いつも借り手のほうに有利で、貸し手にとっては破滅的であり、時にはそのために、ものすごい公共的な不穏事態で生じるよりも個人の運命にとって大幅で広範な変動を引き起こしている。

このようにして、お金はあらゆる文明国で、商業の普遍的な道具となり、それが介入することであらゆる種類の財が売買されたり交換されたりしている。

これから検討するのは、人々が財をお金や他の財と交換するときに、どんな規則に自然にしたがうか、ということだ。こうした規則は、財の相対価値、または交換価値と呼ばれるものを決める。

「価値」という言葉は、二つのちがった意味を持つことがわかる。時にそれは、ある具体的なものの効用をあらわし、そしてある時にはそのものの所有が意味している、他の財を購入する力をあらわしている。前者は「利用の価値」、後者は「交換の価値」と呼べる。利用価値がとても大きいものが、しばしば交換価値は小さかったりゼロだったりする。そして逆に、すさまじい交換価値を持つものが、しばしば利用価値は小さいかゼロだったりする。水より役にたつものはない。でも水ではほとんど何も買えない。水と交換で得られるものもほとんどない。逆にダイヤモンドは、利用価値はほとんど何もない。でもそれと交換で、他の財を大量に入手できることが多い。

財の交換可能な価値を律する原理を検討するために、以下のことを示してみたい：

1. まずこの交換可能な価値の真の尺度は何か、あるいはあらゆる財の本当の価格は何ではかればいいのか。
2. 次にこの本当の価格を構成・形成するいろんな部分には何があるだろう。
3. 最後に、こういう価格の構成部分の一部またはすべてを、その自然水準または通常水準以上に引き揚げ、時に引き下げる条件というのは何だろう。つまり、ときどき財の市場価格つまりは財の実際の価格が、その自然価格とも言うべきものときっちり一致しない原因は何だろう。

この三つの主題について、続く三章でなるべく完全かつはっきりと説明してみたい。そしてそこでは読者の辛抱強さと注意力を心から願います。ときには無用なほどくどくど思われる細部を検討するだけの辛抱強さと、わたしにできる限りの完全な説明の後でも、まだいささか不明確と思われるかもしれないものを理解するための注意力だ。明瞭であるためには、わたしは常にくどくなるのを辞さない。そして明瞭であろうと最大限の苦労を重ねた後でも、本質的にとても抽象的なテーマである以上、多少の不明点はまだ残るだろう。

第5章

商品の本当の価格と名目の価格、あるいは労働での価格とお金での価格

すべての人は、人間生活の必需品、便利な品、娯楽をどれだけ享受できるかという度合いに応じて、豊かだったり貧乏だったりする。でも分業が十分に生じた後では、人が自分の労働で用意できるのは、その中のごく一部でしかない。そのずっと多くの部分は、他の人の労働から手に入れなくてはならないし、だからその人は、自分が自由にできる労働の量に応じて、あるいは購入できる労働の量に応じて、豊かだったり貧乏だったりする。だからあらゆる商品の価値は、その商品を持っていて、それを自分で使ったり消費したりするつもりがなくて、他の商品と交換するつもり的人物にとっては、それによって購入したり自由にしたりできる労働の量に等しい。だから労働こそは、すべての商品の交換価値の真の尺度だ。

あらゆるものの本当の価格、モノを買いたい人にとっての本当の費用は、それを獲得するための労苦と手間だ。あらゆるものが、それを買った人にとって持つ本当の価値、それを処分したり別のものと交換したい人々にとって持つ本当の価値とは、それによりその人が節約できる労苦と手間であり、そしてそれが他人に課せる労苦と手間だ。お金や財で購入されるものは、自分自身の身体の労苦により獲得するものと同じくらい、労働によって購入されている*2。そうしたお金や財は、その労苦を節約させてくれるものだからだ。それは、何らかの量の労働の価値を含んでおり、それはその時点で同じ量の価値を含むと想定されたものとわれわれが交換したものだ。労働こそが最初の価格であり、あらゆるものに対して支払われる、大本の購入資金だ。世界のあらゆる富が元々購入されたのは、黄金や銀によってではなく、労働によってだ。そしてその価値は、それを保有する者やそれを何か新しい産物と交換したい者にとっては、それを購入したり好きに使ったりできるようにするために必要な、労働の量と厳密に等しくなる。

ホッブス氏が言うように、富は力だ*3。でも巨額の富を手に入れたり相続したりする人は、必ずしも政治力（文民的な権力にせよ軍事力にせよ）を獲得したり相続したりするとは限らない。その財産は、もしかすると、その人が文民権力や軍事力を手に入れる手段を与えてくれるかもしれない。でもその富を単に保有しているからといって、必ずしもそうした力がその人にもたらされるわけではない。そうした富の保有が即座に直接的にその人にもたらす力は、購買力だ。その時点で市場にでまわっているすべての労働あるいは全ての産物に対するある程度の支配力となる。その人の富の多寡は、この力の大小と厳密に比例する。あるいは、その富により購入したり支配したりできる、他人の労働、または同じ

ことだが他人の労働の産物の量と、厳密に比例する。あらゆるものの交換可能価値は、常にそれがその所有者にもたらす力の大きさと厳密に等しくなければならない。

でも労働は、あらゆる商品の交換可能価値の真の尺度ではあっても、それらの価値を推計するときに使われるのは、通常は労働ではない。二つのちがった労働量の比率を見極めるのはしばしばむずかしい。二種類のちがった労働に艶された自館は、必ずしもこの比率を決めるわけではない。それぞれがどのくらいの労苦に耐えているのか、どのくらいの創意工夫が行使されているかといったちがいが、やはり考慮しなければならない。一時間の重労働のほうが、二時間の簡単な仕事よりも多くの労働を含むかもしれない。あるいは習得に十年かかる職を一時間適用した場合のほうが、通常の自明な雇用で一月働くよりも多くの労働を含むかもしれない。でも、労苦や創意工夫はどちらも正確な尺度がなかなか見つからない。実際、ちがう種類の同等によるちがう産物を交換するとき、そのどちらについても多少の誤差は一般に認められている。でもそれは、何か正確な手段で調整されるものではなく、紫綬の値引き交渉や相談によるものであり、それは日常生活での仕事を続けるにあたって十分な程度の大ざっぱな公平性が得られる程度のものである。

それに、あらゆる商品は労働と交換されるよりは他の商品と交換され、したがって他の商品と比較されることのほうが頻繁となる。だから交換価値を推測するにあたり、それが購入できる労働で見るとは他の商品の量を使うほうが自然だ。人々の大半も、ある特定商品の量のほうが、労働量で表現されるよりも理解しやすい。商品の量は、平明で手に取れる物体だ。もう一つの労働は抽象的な概念で、それをある程度理解しやすくすることは可能だが、全体としてはそんなに自然で明解ではない。

でも物々交換が終わり、商業の共通道具がお金となった場合、あらゆる個別商品は、他のどんな商品よりもお金と交換される場合のほうがずっと多くなる。肉屋は牛肉やマトンをパン屋、あるいは酒屋に持って行って、それをパンやビールと交換することはまずない。むしろそれを市場に運び、それをお金と交換して、その後でそのお金をパンやビールと交換する。肉のかわりに得るお金の量は、その後肉屋が買えるパンやビールの量をも左右する。だから、肉の価値を肉屋が見定めるときにも、パンやビールといった、他の財が介入しなければ交換できないような商品の量で見極めるよりは、肉を直接交換する対象となるお金の量で見極めたほうが、肉屋にとって自然でわかりやすい。そして、この肉屋の肉は一ポンドあたり三ペンスとか四ペンスとか言うほうが、パン三ポンドや四ポンドに相当するとか、ビール小瓶を三クォートか四クォートの価値があるとか言うよりは自然でわかりやすい。だから、あらゆる商品の交換価値は、労働やその他それと交換できる他のどんな商品の量よりも、お金の量で見極められることのほうが頻繁だということになったのだ。

でも、黄金と銀も、他のあらゆる商品と同じく価格が変わり、安くなったり高くなったり、買うのが容易だったり難しかったりする。それぞれの一定量が買ったり左右したりできる労働量や、それらと交換される他の財の量は、常にその交換が行われる時点でそれらの鉱山がどれだけ豊富または乏しく産出しているかがに依存する。16世紀に、アメリカでの豊富な鉱山発見は、ヨーロッパでの黄金と銀の価値をそれ以前の三分の一にまで引き下げた。こうした金属を鉱山から市場に運ぶのにかかる費用が下がったので、実際に持ってこられると、それは購入したり支配したりできる労働の量が下がった。そしてこの金銀の価値の革命は、歴史上で最大のものかもしれないが、決して記録が残っている唯一のものではない。でも量の尺度として、たとえば自然のフィート尋、一握りなど、それ自体とし

て絶えず変動しているような尺度では、決して他のものの量についての正確な尺度にはなれない。一定量の労働は、労働者にとっては常にあらゆる場所で、同じ価値であると言えるかもしれない。通常健康状態、強さ、気力にあって、技能と工夫が通常の状態なら、常に同じだけの安楽さ、自由、幸福を犠牲にしなくてはならない。その人物が支払う対価は、その労働の代償として受け取る財の量がどうであっても、常に同じでなくてはならない。これについて、確かに時には受け取る財の量が多くなったり少なくなったりするかもしれない。でも変動しているのは財の価値のほうであって、それを購入するための労働の価値ではない。それが希少だったり入手が難しかったりすれば、常にあらゆる場所でそれを手に入れるのにはずっと多くの労働がかかる。そして容易に手に入り安い場合には、とても少ない労働で得られる。だから労働だけが、それ自体の価値が決して変わらないので、常にあらゆる場所のあらゆる財の価値を推計し比較するための、究極かつ本当の基準なのだ。労働こそが財の真の価格だ。お金はその名目価格にすぎない。

でも労働者にとって同じ労働量は常に同じ価値ではあっても、それを雇用する人物にとっては、価値が大きいこともあれば、小さいこともある。その労働を買うのにかかる財の量も多かったり少なかったりするので、雇用者にとっては労働の価格は、他のあらゆるものと同じく変動するように見える。でも実際には、前者ではむしろ財のほうが安くなっており、後者ではそれが希少になっているのだ。

だからこの一般的な意味だと、労働は商品と同じく。本当の価格と名目の価格を持つことになる。本当の価格というのは、それに対して提供される必要物や便利さの量で構成されると言っていこう。そして名目価格というのはお金の量だ。労働者たちは、労働の本当の価格（名目価格ではない）に比例して金持ちだったり豊かになったり、報酬をたくさん得ていたり少なかったりする。

商品や労働の本当の価格と名目価格は、単なる思索上の問題にとどまらず、ときには実務でもかなり使える。本当の価格（実質価格）が同じならどこでも同じ価値だ。でも黄金や銀の価値変動のために、同じ名目価格のものが、ときにはかなりちがう価値を持つ。だから土地付きの領地が、永続地代を維持する形で売却される場合、この地代が常に同じ価値を維持することが意図されているのであれば、その地代を受け取る一家にとっては、それが一定額のお金という形にならないようにしておくことが重要だ。その価値は金で決めておいたら、二種類の変動に曝されることになる。一つは、同じ名目金額の硬貨が時代ごとに含む黄金や銀の量の差から生じるもの。そしてもう一つは、同じ量の黄金や銀が時代ごとに持つ価値のちがいで生じる変動だ。

王様や独立国家はしばしば、硬貨に含まれる純粋な金属の量を減らすことで一時的に利益を得られるのではと思いついてきた。でも、それを増やすことに何か利益があるなどとはほとんど考えてこなかった。だからこうした硬貨に含まれる金属の量は、すべての国にあてはまることだと思うが、ほぼ継続的に減り続け、ほとんど増えることはなかった。こうした変化は、したがって金額で決めた地代の価値をほぼ常に引き下げる傾向にあった。

アメリカでの鉱山の発見は、ヨーロッパでの黄金や銀の価値を引き下げた。この減価は、私見では確実な裏付けが特にあるわけではないけれど、まだじょじょに続いているというのが一般的な見方だし、おそらく今後長いこと続くものと思われる。だからこの想定に基づき、こうした変動はおそらく金額で決めた地代の価値を増やすよりは減らす可能性が高い。そうした地代が、硬貨としての量での表示（たとえば何ポンドスターリング、といったもの）ではなく、純粋な銀や、ある基準での銀が何オンス、という形で決められて

いる場合でもこれは当てはまる。

小麦で決められた地代は、お金で決められた地代よりずっとよくその価値を維持してきた。これは、硬貨の金銀含有量が変わっていない場合ですらそうだ。エリザベス女王第18次法制によれば、あらゆる大学のリースの三分の一はすべて小麦で収められるべきであり、現物で支払うか、あるいは最寄りの公共市場での当日価格に基づいて支払われるべきとされている。この小麦地代から生じるお金は、もともとは全体のたった三分の一ではあったが、現在ではブラックストーン博士によれば、他の三分の二から得られるものの倍近いのが通例なのだという。大学の古い金銭地代は、この話に基づけば、かつての価値のほとんど四分の一に落ち込んだことになる。あるいは、もともと持っていた小麦価値の四分の一強の価値しかないということだ。でもフィリップ国王とメアリー女王の時代以来、金銀含有量はほぼまったく変わっておらず、同じだけのポンド、シリング、ペンスはほぼ同じ量の純銀を含んでいる。だからこの、大学の金銭地代の価値に見られる価値劣化は、すべて銀の価値の減価から生じたものだ。

銀の価値の劣化が、同じ額面の硬貨に含まれる銀の量の減少と組み合わせると、その損失はさらに大きくなる。スコットランドでは硬貨の額面は、イングランドで未だかつて行われていないほどの大きな変更を受け、フランスではスコットランドでも例を見ないほどの変更を経ているが、この両国では古い賃賃料は、もともとはかなりの価値を持っていたのに、このような形でほとんどないも同然まで価値が引き下げられてしまった。

同じ量の労働は、時間が離れた時であっても、同じ量の黄金や銀、あるいはその他どんな商品と比べても、同じ量的小麦、つまりその労働者の生存を支えるものでだいたい買える。だから同じ量的小麦は、時間を隔てても、同じ実質価値に近く、あるいはその所有者が他人の同じ量の労働を購入したり左右したりしやすいということになる。わたしに言わせれば、小麦はこれを他のほとんどあらゆる商品の等量よりも近似的に行う。というのも、同じ量的小麦ですら、厳密にはこれができないからだ。労働者の養育、あるいは労働の実質価格は、これから示してみるが、場合によって大にちがってくる。豊穰へと進歩しつつある社会では、停滞している社会よりも気前がよくなる。そして停滞している社会では、後退している社会よりは気前がいい。だがその他あらゆる商品は、どの時点においても、その時代において購入できる生命維持の量に比例した量の労働を大なり小なり購入できる。したがって、小麦で決められた地代は、一定量的小麦が購入できる労働量の変化だけに左右される。だが他のあらゆる商品で決められた地代は、ある一定量的小麦が購入できる労働の量の変化にとどまらず、その商品の一定量で変える小麦量の変動にも左右されることになる。

だが小麦地代の実質価値は、金銭地代に比べて世紀毎の変動がずっと小さいとはいえ、年ごとの変動はずっと大きい。労働の金銭価値は、これから示してみるが、小麦の金銭価格にともなう年ごとに変動したりはせず、むしろどこであっても生活に必要とされる小麦が、ときどき一時的に示す価格ではなく、通常または平均の価格に応じて変動するようだ。さらに小麦の通常または平均の価格は、これまたこれから示してみるけれど、銀の価値、市場にその金属を供給する鉱山の生産量の豊富さまたは乏しさ、あるいは一定量の銀を鉱山から市場にもたらすために雇用されねばならない労働の量、あるいはそのために消費されねばならない小麦量により左右されるようだ。でも銀の価値は、ときには世紀ごとに次第に変化したりはするが、年ごとにはめったに大きく変動せず、しばしば同じ、あるいはほとんど同じ価値を、半世紀か一世紀にわたり保つ。したがって、小麦の通常また

は平均の金銭価格は、これに相当する長期にわたり、やはり同じかほとんど同じに保たれるし、それに伴い労働の金銭価格も、少なくとも社会がその他の面で同じまたはそれに近い同じ条件で継続する限り、保たれる。その間に小麦がときどき見せる一時的な価格は。ある年にはその前の年の二倍になったりすることもしばしばあるし、あるいはたとえば1クォーターあたり25シリングから50シリングへと変動したりする。でも小麦が後者の価格のときには、小麦レントの名目価値だけでなく実質価値も、前者の価格の場合の二倍となる。つまり、労働や他の商品の大部分について二倍の量を購入できるようになる。労働の金銭価格と、それに伴いほとんどあらゆるものの価格は、こうした変動の間も同じであり続ける。

だからここから考えて明らかに、労働こそは価値の唯一の普遍的な、そして唯一の正確な尺度であり、つまりあらゆる時点であらゆる場所の各種商品の価値を比較するのに使える唯一の尺度となるようだ。確かに、各世紀ごとのちがう商品の実質価値を、それに対して支払われる銀の量で推計することはできない。年ごとには、それを小麦の量で推計することはできない。労働の量でならそれが可能であり、しかも最大限の制度を持って、世紀ごとにも、年ごとにも推計できるのだ。世紀ごとに比べるなら、小麦のほうが銀よりもよい尺度だ。なぜなら世紀毎に、同じ量の小麦は同じ量の労働を、同じ量の銀よりもうまく近似するからだ。これとは逆に年ごとの比較なら、銀のほうが小麦よりもよい尺度だ。というのも同じ量の銀は、ほぼ同じ量の労働を購入できるからだ*21。

でも永代地代を決めたり、あるいはきわめて長期のリースで賃貸を行ったりする場合ですら、実質価格と名目価格を区別すると役にたつだろう。これは人間の暮らしにおけるもっと通常の普通の取引である売買においては、これはまったく役にたたない。

同じ時代と場所にあつては、あらゆる商品の実質価格と名目価格は完全に相互に比例する。たとえばロンドン市場で、何かの商品から得るお金の多少により、それでその時代と場所において買えたり左右できたりする労働の多少も決まる。だから同じ時代と場所においては、お金はあらゆる商品の実質交換可能価値の厳密な尺度だ。でもそれは、同じ時代と場所においてだけの話だ。

遠くのところでは、商品の実質価格と金銭価格との間に決まった比率はないけれど、それでも財のある場所から別の場所へと輸送する商人は、金銭価格、つまりそれを買ったときの銀の量と、売るときにおそらくは得られるはずの銀の量との差しか考えない。中国の広東での銀半オンスは、その銀をかので所有する人物にとってのほうが、ロンドンで1オンスで売れる商品を*22 ロンドンで保有する人物よりも実質的な重要性は大きいかもしれない。だがロンドンの商人が、広東で銀半オンスで買える商品を、後でロンドンで1オンスで売れるなら、この人はこの取引で百パーセントの儲けを得られるので、半オンスの銀がロンドンにおいて広東とまったく同じ価値だった場合の儲けと同じになる。広東での銀1オンスが、ロンドンでの1オンスよりも、大量の労働と多くの必需品と生活上の利便品を買えるようにするという事実も、この人にとっては重要ではない。ロンドンでの1オンスは常に彼の地で半オンスが実現したはずの生活上のすべての二倍の量を支配させてくれるのだ。そしてこれこそまさに彼の求めていたものだ。

だから財の名目価格または金銭価格は、あらゆる購入や販売の分別や無分別ぶりを最終的に決めるものであり、したがって価格の関係してくる一般生活のほとんどあらゆる側面を統制するものなので、それが実質価格よりもはるかに注目されてきたことは不思議でもなんでもない。

でも本書のような研究では、ときには各時点や場所における個別商品の、様々な実質価値を比較するのが有用となるだろう。あるいは、それを所有する人々にそのお金が、様々な場合に他の人々の労働に対して与える力の度合いの差と言ってもいい。この場合には、その財の対価として一般に求められる各種の銀の量ではなく、そうした銀が買えたはずの、各種の労働量を比較しなくてはならない。だがはるか昔や遠くの場所での労働の価格は、多少なりとも精度をもっては知りようがない場合がほとんどだ。小麦価格は、定期的に記録されている少数の場所では、一般によく知られているし、歴史家などの著述家たちによって考察されることも多かった。だからわれわれも、それで我慢するしかない。これはその時点での労働価格と必ずしも厳密に同じ比率とは限らないが、それに一般的に相当すると考えられる最も近い近似となる。今後、この種の比較をいくつか行うことにしよう。

産業の進歩において、商業国はいくつがちがった金属をお金へと鑄造するのが便利だと考えた。巨額の支払いには黄金、中くらいの価値の購入には銀、そしてさらに少額の買い物には銅などの卑金属だ。だがみんな常に、こうした金属のどれか1つを、他の2つに比べて最も明確な価値尺度と考えてきた。そして一般に、商業の道具としてたまたま初めて使った金属がその基準として選ばれるのが通例のようだ。いったんそれを基準として使い始めると(それ以外にお金がないときは、絶対にそうしたはずだ)、以前ほどそれが必須でなくなった場合でも一般にその基準を使い続けた。

ローマ人たちは、第一次ポエニ戦争の五年前になるまで銅通貨しか持っていなかったと言われ、その戦争で初めて銀貨鑄造を開始した。だから同化は、ローマ共和国ではその後も常に価値尺度であり続けたらしい。ローマではあらゆる帳簿や、あらゆる財産価値は、アスカセステルティウスで計算されていたらしい。アスは常に銅貨の単位だった。セステルティウスという言葉は2アス半を意味する。セステルティウスは元々は*25銀貨だったけれど、その価値は銅で計算された。ローマでは、大金持ちは、人民の銅を大量に持っていると言われた。

ローマ帝国の廃墟の上に国を築いた北部諸国は、入植し始めた頃には銀貨を持っていたらしく、その後当分の間、金貨や銅貨は持っていなかったらしい。サクソン時代のイングランドには銀貨があったが、エドワード三世の時代まで黄金が硬貨になることはほぼなかったし、銅貨はグレートブリテンのジェイムズ一世の時代までなかった。だからイングランドと、そして同じ理由からおそらくヨーロッパの他のあらゆる国では、あらゆる帳簿や、あらゆる財や財産の価値は、一般に銀で計算されている。そしてある人物の富の量を表現したいときには、ギニー数を使うことはほとんどなく、それに対して与えられるスターリング銀のポンド数を述べる。

もともとあらゆる国では、支払いの法定通貨は、価値の基準または尺度と考えられていたその金属の硬貨でしか行えなかったはずだ。イングランドでは、金貨が作られるようになって、かなり後まで黄金は法定通貨とは見なされなかった。黄金と銀のお金の価値の比率は、公法や勅命により固定されることはまったくなく、市場が決めるに任された。もし借り手が黄金での返済を申し出たら、債権者はそうした支払いを完全に拒否するか、借り手との間で合意できる黄金価値の評価に基づいてそれを受け入れることもできる。現在では銅は、少額銀貨のお釣りとして以外は法定通貨ではない。こうした物事の常態では、基準となる金属と、基準でない金属との区別は、名目上の違い以上のものとなった。

時間が経過して、人々がだんだん交換のいろいろな金属が使われるのに慣れてきて、それぞれの価値の間の比率にもなじんできたら、この比率を確立して、公法により、たとえ

ばこれこれの重さと純度の一ギニーは、21 シリングと交換されるとか、その金額の債務を返済する法定通貨になるとか宣言されるのが便利だとほとんどの国では定めてきたと思う。こうした状態で、こうした統制比率が1 つでも継続している間は、基準となる金属と、基準でない金属とのちがいは名目以上のものとはならない。

でもこの統制された比率が変更されたりすると、各種金属のちがいは、再び名目にとどまるものではなくなるか、少なくともそのように思えてくる。たとえば一ギニーの統制価値が、20 シリングに減ったり、22 シリングに増えていたら、あらゆる帳簿やほとんどの債務は銀のお金で表現されているので、支払いの相当部分はいずれの場合も、以前と同じ銀のお金で行われるが、金貨だとまったくちがう量が必要になる。前者だとその量は増え、後者だと減る。銀は黄金と比べてその価値が変動しないように見える。銀が黄金の価値を計測するものに思え、黄金が銀の価値を計っているのではないように見える。黄金の価値は、それがどれだけの銀と交換されるかに左右されるように見え、銀の価値は、それがどれだけの黄金と交換されるかには依存していないように思える。だがこのちがいは、帳簿をつける習慣によるものでしかなく、大小の金額すべてを金貨ではなく銀のお金で表現するからそう思えるだけだ。ドラモンド氏の 25 ギニーや 50 ギニー紙幣は、この種の変更があった後でも、相変わらず以前とまったく同じに 25 ギニーや 50 ギニー支払える。そうした変更があった後でも、以前と同じ量の黄金を得られるが、銀だとまったくちがう量になる。こうした紙幣の支払いで見れば、黄金のほうが銀よりも価値が変わりにくいように見える。帳簿をつけ、借入金や他のお金の支払い義務を表現する慣習としてこちらのほうが一般的になれば、価値の基準として突出した金属は、銀ではなく黄金だと考えられるようになるだろう。

現実には、硬貨に含まれる各種の金属の価値の比率について何か統制が継続していれば、最も貴重な金属の価値があらゆる硬貨の価値を統制することになる。12 銅ペンスは銅を 0.5 常衡ポンド含み、しかも最高の品質とはいえない銅なので、それが硬貨に鑄造される前には、銀で 7 ペンスにも満たない価値しかない。だが規定によって、こうしたペンスの 12 個がシリングと交換されるよう命じられているから、市場ではシリングの価値があると見なされ、そしていつでもそれは一シリングと交換される。グレートブリテンにおける先の金貨改革以前ですら、黄金は少なくともロンドンやその近郊で流通している部分は、衣パンに銀の大半よりは、標準重量以下に劣化している度合いが低かった。だが 21 枚のすり減って顔の削られたシリングは、ギニーと等価と見なされていた。そのギニーのほうも、やはりすり減って顔が削られているかもしれないが、シリング銀貨ほどひどいことはほとんどなかった。最近の規定は、どんな国であれ現在の金貨を基準の重量に近づけるといってこれ以上はないところまで近づけた。そして役所においては、どんな黄金であろうと重量だけを基準に受けとるという命令は、その命令が施行されている限り、金貨の重量遵守を維持するはずだ。銀貨は金貨改革以前と同じ、すり減って劣化した状態が続いている。だが市場では、この劣化した銀貨 21 枚が、いまだにこの優れた金貨一ギニーに等しいとされている。

金貨の改革は明らかに、それと交換される銀貨の価値を引き上げた。

イングランド造幣局で、黄金一ポンドは 44 ギニー半の金貨に鑄造され、一ギニーあたり 21 シリングだから、46 ポンド 14 シリング 6 ペンスに等しい。したがって、そうした金貨一オンスは、銀で 3 ポンド 17 シリング 10.5 ペンスの価値を持つ。イングランドでは貨幣鑄造に何ら税やシニョレッジは支払われず、標準黄金塊の重量一ポンドや一オンスを造

幣局に持ち込む人は、金貨の重量1ポンドまたは1オンス分を受けとり、そこから何も差し引かれない。だから1オンスあたり3ポンド17シリング10.5ペンスは、イングランドにおける黄金の造幣局価格と言われ、標準金塊と交換で造幣局が与える金貨の量となる。

金貨の改革毅然は、標準金塊の市場価格は長年にわたり、1オンスあたり3ポンド18シリング以上、ときには3ポンド19シリングにもなり、4ポンドになることもしばしばだった。この金額は、すり減って劣化した金貨においては、標準黄金1オンス以上を含むことはめったになかったことも考えられる。金貨の改革依頼、標準金塊の市場価格は1オンスあたり3ポンド17シリング7ペンスを超えることはめったにない。金貨改革以前は、市場価格は常に造幣局価格より多少は上だった。改革以後、市場価格は一貫して造幣局価格より低い。だがその市場価格は、それが金貨で支払われようと銀貨で支払われようと同じだ。つまり最近の金貨改革は、金貨の価値を上げただけでなく、金塊に対する銀貨の価値も上げ、そしておそらく他のあらゆる商品との比率においても価値を上げることになった。他の商品の価格は相当部分が他の実に様々な要因に影響を受けるが、それに対する金貨や銀貨の価値上昇は、それほど明確で見分けられるものではないかもしれない。

イングランドの造幣局では、標準銀塊の重量1ポンドは62シリング硬貨に鑄造され、それが同じ形で標準銀の重量1ポンドを含んでいる。したがってイングランドにおいては、銀の造幣局価格は1オンスあたり5シリング2ペンスと言われる。つまりは標準銀塊と交換に造幣局が渡してくれる銀貨の量だ。金貨改革以前は、標準銀塊の市場価格は、場合に応じて5シリング4ペンス、5シリング5ペンス、5シリング6ペンス、5シリング7ペンス、そしてかなりしばしば5シリング8ペンスだったりした。だが5シリング7ペンスが最もありがちな価格だったようだ。金貨の改革以来、標準銀塊の市場価格は、1オンスあたりときどき5シリング3ペンス、5シリング4ペンス、5シリング5ペンスにまで下がり、この最後の価格を超えたことはほとんどない。金貨改革以来、銀塊価格は大きく下がったが、造幣局価格ほど低くなったことはない。

イングランドの硬貨におけるちがう金属の比率において、銅は実勢価格よりずっと高く設定されていて、銀は少し低く設定されている。ヨーロッパの市場では、フランスの硬貨とオランダの硬貨では、純度の高い黄金1オンスは、純度の高い銀14オンスほどと交換される。イングランドの硬貨では、15オンスほどと交換される。つまりヨーロッパで一般的な推計による価値よりも多くの銀と交換されるわけだ*36。だが銅の延べ棒の価格はイングランドにおいてすら、イングランド硬貨の高い同価格により押し上げられたりはいないし、銀塊価格はイギリス硬貨における銀の比率の低さにより押し下げられることはない。銀塊は黄金に対して適正な比率を相変わらず維持している。同様に、銅の延べ棒は銀に対する適正な比率を維持している。

ウィリアム三世の統治下における銀貨改革でも、銀塊価格はやはり、造幣局価格より少し高くなった。ロック氏はこの高い価格を、銀塊輸出許可と、銀貨輸出禁止によるものとした。彼によるとこの輸出許可は、銀塊需要を銀貨の需要よりも大きくしたのだと言う。だが、自国で売買のために銀貨をもとめる人々の数は、輸出その他各種用とで銀塊を求める人数より、まちがいなくずっと多いはずだ。現在でも、同様の金塊輸出の容認と金貨輸出の禁止は存在している。だが金塊価格は造幣局価格より下がってしまった。だがイングランドの硬貨で見ると、当時も現在と同じく、銀は黄金との比率で見ると過小評価されていた。そして金貨は(当時もやはり、改革が必要とは考えられていなかった)当時もいまと同様に、あらゆる硬貨の実質価値を統制していた。当時銀貨の改革は銀塊価格を造

幣局価格ほどは引き下げなかったから、似たような改革を現在行ってもそれが起こる可能性はあまり高くない。

銀貨が黄金と同じくらい、基準重量近くまで引き戻されたなら、ギニーは現在の比率に従って、銀塊で買うよりも銀貨で得るほうが多くの銀と交換されることは考えられる。銀貨は基準重量を完全に含んでいるから、この場合にはそれを溶かして、それによる銀塊を売ってまずは金貨を手に入れ、その後この金貨を銀貨に交換して、それを同じく溶かしてしまうことで利益が出ることになる。この不都合を阻止するための唯一の手法は、現在の比率をある程度変えることのようなのだ。

もし銀貨の中の銀が、黄金に対しての正しい比率より今ほど低いのではなく、同じ割合で高く評価されていたとしたら、不都合は減るかもしれない。ただしそれは、銀がギニーのお釣りとして以外では法定通貨になってはいけなと規定された場合のこととなる。銅がシリングのお釣りとして以外では法定通貨にならないのと同じだ。この場合は、どんな債権者も、銀貨の銀の高い価値評価の結果としてごまかされることはない。それは現在、どんな債権者も銅の高い価値評価のせいでごまかされることがないのと同様だ。この規制で苦しむのは銀行家だけだ。取り付け騒ぎが起きたら、銀行は6ペンス硬貨で支払って時間稼ぎをしようとすることもあるが、この規制により即座支払いを回避するためのこの不名誉な手口は禁止される。結果として彼らは、常に現在よりも多くの現金を金庫に保有しておかざるを得なくなる。そしてこれはまちがいに銀行にとってはかなりの不都合ではあるが、同時にその債権者にとってはかなりの安心要因となる。

3ポンド 17シリング 10.5ペンス (黄金の造幣局価格) は、現在の我が国の優秀な金貨においてすら、標準黄金 1オンス以上は含んでいないし、したがってそれが1オンス以上の標準金塊を買えるべきではないと考えられるかもしれない。だが金貨となった黄金は金塊の黄金よりも便利だし、イングランドでは貨幣鑄造は無料だとはいえ、金塊として造幣局に持ち込まれた黄金は数週間後にならないと金貨として持ち主の手元には戻らない。現在の造幣局はとても混んでいるから、おそらく戻ってくるのは数ヶ月後だ。この後れは少額の手数料に相当するものとなり、金貨となった黄金は同じ重量の金塊よりも少し価値が高くなる。イングランドの銀貨が、黄金に対する正しい比率で価値評価されたら、銀塊の価格はおそらく、銀貨改革が何もなくても造幣局価格よりも下がるだろう。現在のすり減って顔の削られた銀貨ですら、それが交換できる優れた金貨の価値によって左右されているのだ。

黄金と銀の両方について硬貨鑄造に少額のシニョレッジまたは手数料を課すようにすれば、おそらくどちらの場合にも、貨幣に含まれる金属が、金塊や銀塊としてのそうした金属の価値よりもさらに高くなる結果をもたらすはずだ。この場合、硬貨鑄造はこの少額の手数料の範囲に比例して、その硬貨となった金属の価値を高めることになる。それは、お皿の価値がそこにつけられた模様の価格に応じて、お皿の価値を高めるのと同じ理由だ。硬貨の価値が金塊より高くなれば、硬貨を溶かしてしまう活動は阻止され、その輸出も抑えられる。何か公共的な緊急事態で硬貨輸出が必要となったら、その相当部分はひとりでに元に戻る。外国では、それは金塊重量でしか売れない。自国ではそれは、重さ以上のものを買える。したがって、それを再び自国に戻すと利潤が生じるのだ。フランスではシニョレッジ 8% ほどが、硬貨鑄造において課され*41、そしてフランスの硬貨は輸出されると、ひとりでに自国に戻ってくる*42。

金塊と銀塊がときどき見せる変動は、その他あらゆる商品の変動と同じ原因で生じる。

こうした金属がしばしば、海上や陸上での様々な事故で失われたり、それがメッキや金銀の刺繍などで絶えず摩耗したり、硬貨の摩耗損傷*43などで、自国に金鉱や銀鉱を持たないあらゆる国では、この損傷や摩耗を修復するために絶え間ない輸入が必要となる。商品輸入業者は、他のあらゆる商人と同じく、自分の時々に応じた輸入を、目先の需要があると判断されるものに適合させようとするはずだと思ってよかろう。だがどんなに慎重を期しても、ときには勇み足をしてしまい、ときには必要以上に及び腰になる。必要とされている以上の金塊や銀塊を輸入してしまったら、再輸出するだけのリスクや手間をかけるよりは、ときにはその一部を通常または平均の科アックより低めに販売したがる。逆に、求められているよりも輸入量が少なければ、その価格より高めのものを得られる。だがそうした時々の変動すべての下で、黄金や銀の市場価格が数年にわたり、造幣局価格より多少は上、または多少は下の価格で安定して定常的に続くとしよう。その場合には、この安定した定常的な価格の高さまたは低さは、何か貨幣の状態にある何かの影響であって、その何かとはその時点において、硬貨のある量が、そこに含まれているはずの厳密な金属塊の量よりも、価値が高くなったり低くなったりするものなのだ。その影響の定常性や安定性は、その原因が持つそれに応じた定常性や安定性を想定させるものとなる。

どこであれ、ある国のお金は、そのある時点と場所において、おおむねその時点での硬貨がおおむねその基準と厳密に一致しているかどうか、あるいはそれが含んでいるはずの純金や純銀の厳密な量をおおむね正確に含んでいるかに基づく、おおむね正確な価値尺度となる。たとえばもしイングランドにおいて 44.5 ギニーが正確に、標準黄金の 1 ポンド重量、あるいは純金 11 オンスに合金 1 オンスを含んでいたら、イングランドの金貨は、あらゆる任意の時点における財の実際の価値について、物事の性質が認める限り最大の精度を持つことになる。だが、摩擦、摩耗により 44.5 ギニーが一般に、標準黄金 1 ポンド重量より少ない量しか含んでいなかったとする。だがこの減少は、金貨によって程度の差がある。すると価値尺度は、他の重量や尺度が一般にさらされているのと同じ種類の不確実性に直面することとなる。これらが標準と厳密に同じだということはめったに起こらないから、商人たちは財の価格を、そうした重量や尺度がどうあるべきかではなく、経験からして平均で実際にどのくらいかにもとづいて、できるだけ調整する。硬貨に同じような無秩序が起こった場合、財の価格は、その硬貨に含まれるべき純金や純銀の量に基づくのではなく、平均的にそれらの硬貨が、実際にどれだけ含んでいるかという経験に基づいて調整されるようになる。

財の金銭価格という場合、わたしは常にそれが販売されている純金や純銀の量に基づくものとして述べられると考えており、硬貨の額面はまったく関係ない考える。たとえばエドワード一世の時代にあって、6 シリング 8 ペンスというのは、現代における 1 ポンドスターリングと同じと考える。なぜならそれは、われわれが判断できる限り最も近いところで、同じ量の純銀を含んでいるからだ。

第 6 章

商品価格の構成要素について

在庫の蓄積と土地の収容に先立つ初期の野蛮な社会状態では、各種のモノを獲得するために必要な労働量こそが、それを相互に交換するための規則を得られる唯一の状況のように思える。たとえばもし猟師の国の中で、ビーバーを殺すのに鹿を殺す 2 倍の労働がかかるのであれば、ビーバー 1 匹は当然ながら鹿 2 匹と交換される、つまりはその両者が同じ価値を持つはずだ。通常は 2 日、または 2 時間の労働の産物は、1 一日または 1 時間の産物の 2 倍の価値を持つのは自然なことだ。

もしある種類の労働が他のものよりもキツいのであれば、当然ながらこのキツさの増分についての調整が行われ、キツい労働 1 時間の産物は、そうでない労働 2 時間分の産物と交換されることもよくある。

あるいは、ある種の労働が珍しいほどの器用さや創意を必要とするのであれば、人がそうした才能に対して抱く敬意は自然にその産物に価値を与え、それが使われた労働時間相当よりも価値は高くなるだろう。そうした技能は、長い適用の結果として以外で習得するのはなかなかむずかしく、その産物の価値が高いのは、しばしばその技能習得に費やされた時間と労働に対する適切な補償でしかない。社会の先進状態においては、こうした高い労苦や高い技能についての補正がしばしば労働報酬について行われている。そして似たようなものが、社会の最も初期の粗野な状態でもおそらく生じたにちがいない。

こうした状態だと、労働の産物のすべては労働者に帰属する。そしてあらゆる財の獲得や生産に通常使われる労働の量は、それを購入、使用、交換するために必要となる労働量を統制できる唯一の条件となる。

特定の人々の手中で在庫が蓄積すると、その一部の人々は当然それを、生産的な人々に仕事をさせるために使う。彼らはその人々のために材料と生計を提供して、その人々の成果や、その人々の労働が材料に加える価値を販売することで利益を得ようとする。完全な製造物を、原材料費と作業員の報酬の価格を支払うのに十分な以上のお金、労働やその他の財と取引することで、自分の在庫をこの冒険のために危険に曝して仕事を行う人々の利潤として何かを与える必要が生じる。だから作業員が材料に加える価値は、この場合には二つに分かれる。一つは自分の報酬を支払う部分で、もう一つは雇用者が、材料と報酬の在庫すべてを先払いしたことにに対して提供される利益だ。雇用者は、労働者の仕事結果の販売により、自分の在庫を回収する以上の何かを得られると期待していない限り、労働者を雇うことに関心など持てない。そして、自分の利益が自分の在庫量に対してある程度の比率にならない限り、少量の在庫ではなく大量の在庫を使うことに関心など持てない。

在庫に対する利潤は、ある特定種類の労働に対する報酬の別名でしかないのでは、と考

えられるかもしれない。それは検査と監督の労働だ。だがその利潤は、その検査と監督の労働と称するものの量、つらさ、創意工夫とは何ら比例関係を持たず、まったくちがうし、まったくちがう原理で統制されている。それは全面的に、利用される在庫の価値により統制されているのであり、その在庫の量に比例して増えたり減ったりする。たとえば、どこかの場所では、製造業在庫で一般的な年間利益が10%だったとしよう。そこに二つのちがう製造業者があって、どちらも作業員20人を雇っており、それぞれ年15ポンドの報酬が支払われ、つまりその工場一つで年間300ポンドの経費がかかる。さらに、片方の工場では年に使われる材料は粗くてたった700ポンドだが、もう片方の工場では年に使われる材料は高品質で7000ポンドだとして。片方で年に雇用される資本は、この場合にはたった1000ポンドだが、もう片方では7300ポンドになる。だから10%の比率だと、片方の実施者は年に期待する利潤はおよそ100ポンドとなる。これに対し、もう片方は730ポンドの利潤を期待する。だが利潤がこれほどちがっても、その検査と監督の労働は、ほぼ同じかきわめて似たようなものとなる。きわめて多くの職場では、この種の労働はほとんどすべて、ある主任事務員に任されている。検査と監督の労働の価値をきちんと表現しているのは、この事務員の報酬となる。その報酬を設定するにあたっては、通常はその労働や技能だけでなく、その事務員に与えられた信頼も考慮されるが、管理運営を監督している資本に対しては、一定の比率などはまったく示されることがない。そしてこの資本の所有者は、ほとんど何の労働もしないのに、それでも自分の利潤が自分の資本に対して一定の比率を持つものと予想している。したがって商品の価格では、在庫の利潤が労働報酬とはまったくちがう部分を構成するのであり、それはまったくちがう原理によって統括されているのだ。

この物事の状態においては、労働の産物すべてが常に労働者に帰属するとは限らない。労働者はほとんどの場合、自分を雇用している在庫の持ち主とそれを分かち合わねばならない。また、この状態においては、何か商品を買ったり生産したりするのに一般的に使われる労働の量も、その購入や使用、交換のために一般に提供されるものを左右する唯一のものにもならない。追加の量が、報酬を先払いしてその労働のための原材料を提供した在庫の利潤のために生じる必要がある。

ある国の土地がすべて私有財産になったらすぐに、地主たちは他のあらゆる人と同じく、自分が蒔きもしなかった産物を収穫したが、そこからの天然の産物に対しても地代を要求する。森林の材木、草原の草、地中の天然の果実すべては、土地が共有地だったときには、労働者にとってはそれを収穫する手間しかかからなかったのに、その人たちにすら、追加の価格がつけられるものとなる。そして労働者はそうしたものを集めるための免許代を支払わねばならず、地主に対して自分の労働が集めたり生産したりしたものの一部を渡さねばならない。この一部、あるいは同じことだがその一部の価格は、土地の地代となり、商品の相当部分の価格においては三番目の構成部分となる。

価格の各種構成部分それぞれの本当の価値は、それぞれが購入したり使用したりできる労働の量で計測されねばならない。労働は、価格の中で労働に帰属される部分だけでなく、地代に帰属される部分や、利潤に帰属される部分についても価値を計測する。

あらゆる社会では、すべての商品の価格は最終的に、この三つの部分のどれか、あるいはそのすべてに帰属する。そして進歩したあらゆる社会では、商品のはるかに多くの部分について、その価格にこの三つすべてが構成部分として入り込む。

たとえば小麦の価格だと、一部は地主への地代を支払い、別の部分はその生産に雇用さ

れる労働者や家畜の報酬または食費を負担し、3番目は農夫の利潤となる。この三つの部分は、小麦の価格すべてを即座または最終的に構成するものとなるようだ。農夫の在庫を置きかえるためや、役牛および他の耕作動物の摩耗損傷を補うために四つ目の部分が必要だと思われるかもしれない。だが、耕作用の馬などあらゆる家畜の価格も、それ自体が同じ部分で構成されていることを考えねばならない。その動物を育てた土地の地代、その世話をして育てるための労働、そして土地の地代と労働の報酬を拠出する農夫の利潤だ。したがって小麦の価格は、馬の価格だけでなく食費も負担するが、価格全体はそれでも、即座または最終的には、地代、労働、利潤という同じ三つの部分に帰着されるのだ。

小麦粉や他の麦の粉の価格だと、小麦の価格に製粉業者の利潤と、その従業員の報酬も加えねばならない。パンの価格だと、パン屋との利潤にその従業員の報酬も加える必要がある。そしていずれの価格にも、小麦を農家の家から製粉所まで運ぶ労賃や、製粉所からパン屋に運ぶ輸送の労賃が必要であり、そうした労働の報酬を先払いした人々の利潤も含まれる。

亜麻の価格も小麦と同じ三つの部分に帰着する。亜麻布の価格には、この亜麻価格に加え、亜麻を削ぐ職人、紡ぎ人、織り人、漂白士などの報酬を加え、そこにそれぞれの雇用者の利益も加えねばならない。

どれかの商品の製造量が増えれば、報酬と利潤へと帰着する価格の部分は、地代に帰属する部分に比べて比率が大きくなる。製造の進歩に伴い、利潤の数字が増えるだけでなく、一つごとにその前のものよりも利潤が高くなる。というのもそれを生み出した資本が常に大きくなるからだ。織り人を雇用する資本は、紡ぎ人を雇用する資本より小さくなくてはならない。なぜなら、それはその資本を自分の利潤で置きかえるだけでなく、それにくわえて織り人の報酬も支払うからだ。そして利潤は常に、資本に対して一定の比率を維持しなくてはならない。

だが進んだ社会のほとんどでは、価格が二つの部分だけ、つまり労働報酬と在庫利潤だけに気属する商品が常にいくつか存在する。そしてそれよりさらに少数の商品では、労働報酬だけで構成される。たとえば海の魚の価格では、一部は漁師の労働の対価となり、もう一つは漁業に使われる資本の利潤となる。地代はめったにその構成要素にはならない。が、以下で説明するように入ってくる場合もある。川魚だと、少なくともヨーロッパの大半では話がちがう。シャケ漁には地代が必要だ。そして地代といっても土地の賃料とは呼べないものだが、報酬や利潤と同様にシャケの価格の一部を構成する。スコットランドの一部では、貧困者の一部は海岸に沿って、スコッチ小石と一般に呼ばれる、小さなまだら模様の石を集める商売をしている。石切屋が彼らに支払う価格は、すべてその労働報酬だ。地代や利潤はそこにまったく含まれない。

だがどんな商品の総価格であれ、やはり最終的にはこの三つの構成部分のどれかに帰属することになる。地代を支払い、それを育て、製造し、市場に出すのに使われた全労働の価格を支払った後に残った部分はなんであれ、必然的にだれかの利潤にならざるを得ないからだ。

あらゆる商品の価格または交換価値は、別々に考えれば、この三つの部分のどれか、あるいはそのすべてに帰属する。だからあらゆる国の年間労働産物のすべてを構成する商品総体は、全体として考えれば、同じ三つの部分に帰着されねばならず、そして国内のそれぞれの居住者に、その労働報酬、在庫の利潤、土地の地代のいずれかとして仕分けされて届けられることになる。あらゆる社会の労働で、年間に集められたり生産されたりしたも

の全体、あるいは同じことだがその総価格は、このような形で当初はその各種構成員の間で分配される。報酬、利潤、地代は、あらゆる収入の元々の源泉であり、またあらゆる交換価値の源泉でもある。その他のあらゆる収入は最終的には、このどれかから派生している。

自分自身のものである元手から自分の収入を得る人物は、それを自分の労働、在庫、土地のどれかから引き出さねばならない。労働から引き出される収入は報酬と呼ばれる。在庫から、それを管理したり使用したりする人が引き出す収入は利潤だ。それを自分では使わず、他人に貸す人物が引き出す収入は、利子またはお金の使用料と呼ばれる。これは借り手が貸し手に支払う補償であり、そのお金を使うことで獲得する機会のある利潤の対価だ。この利潤の一分は当然借り手に帰属する。その人はリスクを負って、それを使う手間をかけるからだ。そして一部は貸し手のものになる。それは借り手にその利潤を得る機会を与えたためだ。お金の利子は常に派生収入であり、お金の利用で得た利潤から支払われない場合は、何か別の収入源から支払わねばならない。ただし、もし借り手が倹約家で、最初のもの利子を払うために別の借金を契約する場合はちがうかも知れない。完全に土地だけから引き出される収入は地代と呼ばれ、地主のものだ。農夫の収入の一部は自分の労働からくるもので、一部は在庫からくる。彼にとっては、土地は自分が労働報酬を稼げるようにして、在庫の利潤を実現させてくれる道具でしかない。あらゆる税金や、それを元にしたあらゆる収入、給与、年金、年次払い金すべては、最終的にこの収入の三つの源泉のどれかから派生しているのであり、直接的にせよ間接的にせよ、労働報酬、在庫の利潤、土地の地代から支払われている。

この三種類のちがう収入が別々の人に帰属するなら、区別は簡単だ。だがそれが同じ人に帰属する場合、ときにはそれらが少なくとも一般の会話ではごっちゃにされてしまう。

自分の所領の一部を畑にする紳士は、耕作の経費を支払った後では、地主の地代と農夫としての利潤を得られるはずだ。だが彼はその利得のすべてを利潤として計上し、したがって地代と利潤を少なくとも一般用語の上ではごっちゃにする。我が国の北米や西インド諸島入植者たちの相当部分はこうした状況になっている。彼らは自分の所領の相当部分を耕作する。そしてそのため、プランテーションの地代という話はめったに聞かず、その利潤のことばかり耳にするわけだ。

普通の農民は、農場の一般的な運営を指示するための監督を雇うことはほとんどない。彼らもまた一般に、自分の手を使って、耕作者、まぐわ使いなどとして働く。地代支払い後に残る産物は、したがって通常の利潤に加え、耕作で使った在庫を置きかえるだけでなく、労働者および監督としてのその農夫の報酬も支払うものとなるはずだ。だが地代を払って在庫を補填した後で残るものは、利潤と呼ばれる。だが明らかに報酬もその一部だ。農民は、その報酬を節約したので、必然的にそれを自分で獲得しなければならない。したがってこの場合には報酬が利潤とごっちゃになっている。

独立した製造業者で、材料を購入し、市場に製品を出荷できるまで食いつなげるだけの十分な在庫を持った人は、親方の下で働く流し職人の報酬と、流し職人の仕事の販売でその親方が得る利潤の両方を手に入れるはずだ。だがその利得はすべて一般に利潤と呼ばれており、この場合でもやはり報酬は利潤とごっちゃになっている。

自分の手で自分自身の庭を手入れする庭師は、自分の中に三つのちがう人格を統合している。地主、農夫、労働者だ。したがってその産物は、最初の部分の地代、二番目の利潤、三番目の報酬をもたらさねばならない。だがこの全体が一般的には、その労働の稼ぎだと

考えられている。地代と利潤のどちらも、この場合には報酬とごっちゃになっている。

文明国においては、交換価値が労働だけから生じる商品はないも同然であり、交換価値のはるかに大きな部分は、地代と利潤が貢献しているので、その労働の年間生産物は常に、その製品を育て、用意し、市場に出すのに使われた労働量よりずっと多いものを購入し、使用するのに常に十分となる。もし社会が毎年、年間に購入できる労働をすべて来ようするなら、労働量は毎年大きく増え、したがって一年毎の産物はその前の年の産物よりはるかに大きな価値を持つものとなる。だが年間の産物すべてが生産的な人々の維持だけに使われる国はない。どこにも働かない人はいて、それが相当部分を消費している。そしてこの二種類の人々の間にそれが毎年分割される様々な比率に応じて、その通常または平均の価値は毎年増減したり、前年と同じ水準を続けたりすることになる。

第 7 章

商品の自然な価格と市場価格について

あらゆる社会やご近所には、各種の労働や在庫の雇用すべてについて、報酬でも利潤でも、普通または平均的な金額がある。この金額はこれから示す通り、一部はその社会の一般的な状況、その豊かさや貧しさ、その進歩または停滞または衰退の状況により自然に統制されており、また一部はそれぞれの雇用が持つ固有の性質によって統制されている。

同様にあらゆる社会やご近所には、普通または平均的な地代水準があって、これまたこれから示す通り、一部はその土地が置かれている社会やご近所の全般的な状況で統制され、また一部はその土地の自然な、あるいは土地改良による肥沃さで統制されている。

こうした普通または平均の金額は、それが一般に見られる時と場所における、報酬、利潤、地代の自然な金額と呼べる。

ある商品の価格が、それを育て、用意し、市場に運ぶために必要となる土地の地代、労働の報酬、在庫の利潤の自然な金額を支払うのに過不足ない十分な金額であるとき、その商品は、その自然価格と呼べるもので販売されていることになる。

その場合に、その商品はまさにその価値ちょうどで販売されていることになる。つまりは、それを市場にもたらす人々にとって本当にかかる費用で販売されているということだ。というのも、普通の用語で何か商品の原価と呼ばれているものは、それを再販しようとする人物の利潤は考慮していないが、もしそれを、自分のご近所で通常の利潤率を不可能とするような価格で販売するなら、その人は明らかにその取引で損をしたことになる。というのも、自分の在庫を何か別の形で雇用すれば、その通常の利潤を実現できたかもしれないからだ。さらにその人の利潤は、その人が生存するための適正な元手となる収入だ。彼がその財を用意して市場に運んでいるとき、彼は自分の作業員に報酬や生活手段を先払いしている。同様に彼は、自分の生活手段を先払いしている。これは財の販売によりその人が正当に期待できる利潤に見合ったものだ。だからこの利潤が与えられない限り、取引はこの人物二にとって本当にかかった費用と文句なしに言えるものを返済していないと言える。

だから、この人物にそれだけの利潤を残してくれる価格は、必ずしも取引人がときに財を販売する最低価格ではないにしても、それはそれなりの期間にわたってこの人がそれを販売するであろう最低の価格になる。これは少なくとも完全な自由があったり、その人が自分の商売を好きなだけ変えられるときにはそうなる。

各種の商品が一般に売られている実際の価格は、市場価格と呼ばれる。それは自然価格

より多かったり少なかったり、まったく同じだったりする。

あらゆる個別商品の市場価格は、実際に市場に持ち込まれるものの量と、その商品の自然価格（つまりはそれをそこに運んで来るために支払われねばならない地代、労働、利潤の総額）を支払う意思のある人々の需要との比率で統制される。こうした人々は実施需要者と呼べる。そしてその需要は実施需要と呼べる。なぜなら、それはその商品の市場持ち込みを実施させるのに十分だからだ。これは絶対需要とはちがう。とても貧乏な人でも、ある意味では六頭立ての馬車の需要を持っているとは言える。それを欲しいと思う、ということだ。だがこの需要は実施需要ではない。というのもそれを満たすためにその商品が市場にもたらされることは決してないからだ。

どの財でも、市場にもたらされる量が実施需要より少なければ、それを市場にもたらすために支払われるべき地代、報酬、利潤の総額を支払う意思を持つ人々は、求めるだけの量を供給されないことになる。そのまま欲しがるとどまらず、一部の人はもっと支払う意思を持つ。その人々の間ですぐに競争が始まり、市場価格は多少なりとも自然価格を上回るものとなる。その度合いは、財の不足量の大きさや、競争する人々の富や無意味な奢侈がもたらす、競争の激しさで決まる。

同じ財産と奢侈の競争者たちの間では、不足の度合いは同じでも、一般にはその財の獲得が彼らにとってどの程度重要かに応じて、競争の激しさも変わる。だからこそ、町が封鎖されたり、飢餓が起きたりすると、生活必需品がとんでもない価格になったりする。

市場にもたらされた量が実施需要を上回っていたら、それを市場にもたらすために支払われるべき地代、報酬、利潤の総額を支払う意思を持つ人々に、そのすべてを売りさばくことはできない。一部は、もっと低い金額しか支払う気のない人々に販売されねばならない。そしてその人々が支払う低価格は、全体としての平均価格を引き下げることになる。市場価格は、過剰分の多さが、売り手の間の競争をどれだけ高めるか、あるいはたまたま彼らにとって、その財をすぐに処分するのがどれほど重要かによって、市場価格から見た下がり具合も変わってくる。過剰分の量は同じでも、それがすぐにダメになってしまうものだったら、耐久財よりはずっと激しい競争を引き起こす。たとえばくず鉄輸入よりは、オレンジ輸入の場合に競争は激しくなる。

市場にもたらされた量が、実施需要を満たすのにぴったりで、それ以上ではない場合、市場価格は自然に、自然価格とまったく同じになるか、あるいは判断できる限り近づくことになる。手持ちの全量がこの価格で処分できるし、それ以上の価格では処分できない。様々な売り手の間の競争で、全員がその価格を受け入れざるを得なくしてしまうが、それ以下の値段を受け入れるよう強制はしない。

市場にもたらされるあらゆる商品の量は、自然に実施需要に沿ったものとなる。どんな商品であれ、それを市場に出すために土地、労働、在庫を雇用する万人にとって、その量が実施需要を決して上回らないのが利益となる。そしてその他の人々にとっては、それが決して需要を下回らないことが利益となる。

いつの時点だろうと、それが実施需要を超えたら、その価格の構成部分のどれかは、自然水準以下しか支払われないことになる。それが地代なら、地主は自分の利益のため、すぐに自分の土地の一部を提供しなくなる。そしてそれが報酬や利潤なら、前者なら労働者、後者なら雇用者の利益のせいで、彼らは自分の労働や在庫の一部を、この雇用から引き上げるようになる。市場にもたらされる量はやがて、実施需要を供給するのに十分な量を上回らないようになる。その価格の各種部分はすべて自然率まで上がり、財の総価格も

自然価格まで上がる。

逆に、市場にもたらされる量がどこかの時点で実施需要より少なくなったら、その価格の構成部分のどれかは自然の水準より高くなる。それが地代なら、他の地主たちみんなの利潤のため、自然に彼らがその商品の育成にもっと多くの土地を供するよう促す。それが報酬や利潤なら、他の労働者や事業者の利益は、彼らをしてもっと労働や在庫を製造や市場輸送に雇用するよう促す。そうやってもたらされた量は、やがて実施需要を供給するのに十分なだけとなる。価格のそれぞれの部分は、やがて自然水準にまで下がり、財の総価格も自然価格まで下がる。

つまり自然価格は、あらゆる商品の価格が絶えず引き寄せられる中心となる価格のようなものだ。様々な偶然で、ときにはそれが自然価格よりかなり高いところに吊り上げられることもあるし、ときには低めに保つことさえある。だが価格がこの落ち着き場所と継続性の中心におさまるのを邪魔しているのがなんであっても、絶えずそちらのほうに向かってはいるのだ。

どんな商品でもそれを市場に出すために毎年雇用される産業の総量は、このような形で自然に実施需要にあわせたものとなる。それは自然に、その需要を供給するのに十分だがそれを超えない、正確な量を常にもたらそうとするのだ。

だが一部の雇用では、同じだけの生産活動をして、年ごとに得られる商品はまったくちがってくる。一部の産業だと、それはまったく同じか、きわめて近い量になる。耕作で同じ量の労働者を雇っても、年ごとにできる小麦やワイン、油、ホップなどの量はまったくちがってくる。だが紡ぎ手や織り手が同じ人数いれば、毎年同じ、あるいはかなり近い亜麻布やウールの布ができる。どんな面であれ、実施需要に対応できるのは、この片方の種類の生産による平均産物でしかない。そしてその実際の生産量はずっと多くなったり少なくなったりすることもあるので、その平均生産、つまり市場にもたらされる商品の量は、ときには実施需要を大幅に上回ったり、大幅に下回ったりする。したがってその需要が常に同じ水準で続いても、その市場価格は大きく変動せざるを得ず、ときには自然価格を大きく下回り、ときには大きく上回る。もう一つの種類の産業だと、同じ量の労働での生産物は常に同じか、ほとんど同じなので、もっと実施需要にぴったり適応できる。つまりその需要が同じなら、その商品の市場価格もおそらく同じ水準で続き、自然価格と完全に同じか、あるいは見たところそれと区別がつかないくらい近いものになるはずだ。亜麻布やウールの布価格が、小麦の価格のように頻繁な、あるいは大規模な変動を起こしたりしないというのは、万人の体験が物語るところだ。ある種類の商品価格は、需要の変動だけにより変わる。もう一種類の商品価格は、需要の変動だけでなく、その需要に対して供給するための、もっと大規模でもっと頻繁な、市場にもたらされる量の変動によって変わる。

あらゆる商品がときどき見せる、一時的な市場価格の変動は、重荷価格の中で報酬と利潤に帰属する部分に影響する。地代に帰属する部分は、それほど影響を受けない。金額の決まっている地代は、その率も金額もまったく影響を受けない。粗生産量の歩合または一定量で支払うことになっている地代は、まちががなくその粗生産物の市場価格がときどき見せる一時的な変動により、年次価値が影響を受ける。賃貸契約の条件を決めるにあたり、地主と農夫はそれぞれの最高の判断に基づき、その率を生産物の一時的でときどき生じる価格ではなく、平均の通常価格にあわせようとする。

こうした変動は、報酬と利潤のいずれについても、その価値や比率に影響することになる。それは、市場がたまたま商品や労働の在庫が課題だったり過小だったり、すでに終

わった仕事や、これからやらねばならない仕事の多少に応じて変わるものだ。公的な喪があれば、黒布の価格は上がる（市場はそうした場合にはほぼ必ず、黒布は過小在庫となる）。そして、それはそれなりの量の黒布を保有している商人の利潤を高めることになる。織り手たちの報酬にはまったく影響しない。市場の在庫過少なのは商品であって労働ではなく、すでに終わった仕事が不足しているのであって、今後行うべき仕事がないのではない。それは流しの仕立て屋の報酬を上げる。ここでの市場は、労働の在庫が過少だ。もっと多くの労働について実施需要があり、もっと多く行うべき、得られる仕事が存在している。それは色つきの絹や布の価格を引き下げ、そうしたものをそれなりの量だけ保有している商人の利潤を引き下げる。それはそうした商品の調製を行う作業員の報酬も引き下げる。そうしたものに対する需要はすべて、六ヵ月または十二ヶ月にわたって停まってしまうからだ。ここでの市場は、商品と労働の両方について在庫過剰だ。

でもあらゆる個別商品の市場価格はこのようにして絶えず、言わば自然価格に向けて惹きつけられてはいるが、時には何らかの偶然や、ときに自然要因、ときに政策による規制のせいで、多くの商品について市場価格が自然価格よりかなり高い水準で、ずいぶん長い間吊り上げられることがある。

実施需要の増加により、何か特定商品の市場価格がたまたま自然価格よりかなり上がると、その市場に供給するため在庫を利用する人々は、いっばんにこの変化を慎重に隠そうとする。それが一般に知れ渡ってしまえば、その大きな利潤のために実に多くの新しいライバルたちが、同じように自分の在庫を活用したくなってしまうため、実施需要は完全に供給されてしまい、市場はすぐに自然価格へと下がり、それどころか一時はそれを下回らかねない。もし市場が、それを供給する人々の暮らすところからとても遠ければ、ときにはその秘密を数年にもわたり隠し続け、それだけの期間にわたって超過利潤を享受し、新しいライバルに直面する必要もない。だが認識すべきこととして、この種の秘密が長続きすることはほとんどない。そして超過利潤は、その秘密が漏れたらその後わずかしかならない。

製造における秘密は、取引における秘密よりは長く維持できる。通常使われるものの半分の価格しかかからない材料で、ある色を生産する手段を見つけた染色屋は、よく管理すればその発見の優位性を生涯にわたり享受できるし、それを後継者への遺産として残すことさえできる。その超過利得は、彼の指摘労働に対して支払われる高い価格から生じる。それは適切に、その労働の高い報酬に含まれる。だがそれがその人物の在庫すべてに対して繰り返され、そしてその総量は、その点について決まった比率を含んでいるために、それは通常は在庫の過剰利潤と考えられている。

こうした市場価格の引き上げは明らかに、ある特定の偶然の影響だが、その作用はときには何年にもわたりずっと続くこともある。

一部の自然による生産は、あるきわめて特殊な土壌や条件を必要とするため、大国のあらゆる土地の中で、その生産に適すすべての土地ですら、実施需要を供給するのに不十分かもしれない。だから市場にもたらされる総量は、それを生産する土地の地代を支払うのに十分な金額に、それを調製して市場にもたらすために必要だった自然水準の労働の報酬と在庫の利潤を加えた金額よりも多くの金額を支払う意思を持つ人々の手にわたることになるだろう。こうした商品は、何世紀にもわたりこの高価格で販売され続けることもある。そしてそのうち土地の地代に帰属する部分こそが、この場合には一般に自然水準を上回る支払いを受けることになる部分だ。これほど特殊で重要視される生産物を作る土地

は、たとえば特に優れた土壌や条件を持つフランスのブドウ園などの地代のように、その近所にある同じくらい肥沃で同じくらいきちんと耕作された他の地代とは、通常の関係を持っていない。

そうした商品を市場にもたらす労働の報酬や在庫の利潤は、これに対して、そのご近所での労働や在庫の雇用と比べて自然な比率から外れることはほとんどない。

こうした市場価格の増大は明らかに自然要因の影響であり、そのために実施需要が決して完全には供給されないようにしてしまい、したがって永遠にそれが続くかもしれない。

個人や貿易会社に与えられた独占権は、取引や製造における秘密と同じ硬貨を持つ。独占者たちは、決して実施需要を完全に供給せず、市場を絶えず在庫不足にしておくことで、自分たちの商品を自然価格よりずっと高く販売し、自分たちが手にする金額を上げる。その内訳が報酬だろうと利潤だろうと、その自然の水準より大幅に高いものにするのだ。

独占価格は、あらゆる場合において、手に入る中で最も高いものとなる。自然価格または自由競争の価格はこれに対して、最低のものとなる。これはあらゆる時点でそうなるというわけではないが、ある程度の時間を通して考えればどこでも最低になる。前者はあらゆる時点において買い手からしぼり取れる、あるいは彼らが支払いに同意する最高の価格となり、後者は売り手が一般につけられて、しかも同時に事業を継続できるような最低の価格となる。

企業の独占的な特権、見習い制度の規定、その他特定の雇用について制約を加える各種の法は、競争を普通なら生じるよりも低い数に抑えるものであり、程度は劣るが同じ傾向を持つ。これはある種の拡大した独占であり、しばしば、長年にわたり、雇用の区分丸ごとにおいて、特定商品の市場価格を自然価格より高く保ち、そしてそこで雇用される労働の報酬と在庫に対する利潤を、自然な水準より高めにしておく。

こうした市場価格のつり上げは、それを可能にした政策の規制と同じだけ続く。

何か特定商品の市場価格は、長い間自然価格より高い状態を続けることはできても、低い状態はめったに長続きしない。その中のどの部分が自然水準より低い支払いを得ていたにしても、その利益が影響を受けた人々は即座に自分の損失を痛感し、すぐにそれだけの土地やそれだけの労働や、それだけの在庫をその事業での雇用から引き揚げるので、市場にもたらされる量はやがて、実施需要を供給するのに十分な水準を上回らないものとなる。だからその市場価格は、やがて自然価格まで上がる。これは少なくとも完全な自由があるところでの状況となる。

見習い規定やその他企業法は、その製造業が繁栄しているときには、作業員が報酬を自然率よりかなり高く設定できるようにするが、それが衰退するときには、報酬をかなり低く引き下げかねない。前者の場合には、その法制度は多くの人をその雇用から排除するが、後者の場合にはその人物を他の多くの雇用から排除してしまう。だがこうした規制の影響は、作業員の報酬を低く抑える場合には、自然水準よりも高くする場合に比べるとまったく長続きしない。前者の場合にはその活動は何世紀も続くかもしれないが、後者の場合には繁栄時にその事業に生まれついた一部作業員の生涯以上は続かない。その人々が消えれば、後にその事業の教育を受けた人々の数は、自然に実施需要にあわせたものとなる。その政策は、インドスタンやエジプトでのものと同じくらい暴力的となる（これらの地では、あらゆる人は宗教原理に基づき父親の職業を引き継がねばならず、それを別のものに変えるのは最も悪質な冒涇行為と見なされる）。これはあらゆる個別雇用について、何世代にもわたり、労働報酬や在庫利潤を自然水準より低く抑えてしまう。

商品の市場価格が自然価格から、一時的にせよ永続的にせよ逸脱することについては、現時点で言及すべきなのはこれですべてだと思う。

自然価格自体は、その構成部分である報酬、利潤、地代の自然水準とともに変化する。そしてあらゆる社会でこの水準は、その状況、その豊かさや貧困、その進歩、停滞、衰退状態に応じて変わってくる。以下の四つの章では、こうしたものの各種の変異について、できるだけ十分かつ明確に説明してみよう。

まず、報酬水準を自然に定めるのがどのような条件か、そしてそうした条件がどのように豊かさや貧困、および社会の進歩、停滞、衰退状況に応じて変わるのかを説明してみよう。

第二に、利潤率を自然に決めるのがどんな条件かを示してみよう。そして、そうした状況が上と同じような社会状況の変異にどう影響されるかを説明しよう。

労働や在庫のちがった雇用においては、金銭的な報酬や利潤はまったくちがってくる。だが各種のちがう労働雇用における金銭報酬と、各種の在庫雇用に対する金銭利益では、ある決まった比率が一般的に生じるようだ。この比率は、今後また触れるが、部分的には各種雇用の性質の差に左右されている。そして部分的には、それが実施される社会の法や政策のちがいに左右される。だが多くの点で法や政策に依存しているとはいえ、この比率はその社会の豊かさや貧困、その進歩、停滞、衰退条件にはほとんど影響を受けず、そうした各種のちがう条件すべてにおいて、まったく同じかきわめて近い状態を維持する。三つ目の章では、この比率を統制する各種のちがう条件をすべて説明してみよう。

四つ目、最後の章では、土地の地代を統制する状況が何か、そしてそれが生み出す各種のものの本当の価格が上がるか下がるかについて占めそう。

第 8 章

労働の報酬について

労働の産物が、労働の自然な補償あるいは労働報酬を構成する。

土地の収容と在庫蓄積以前の原初的な物事の常態では、労働の全生産物は労働者に帰属した。それを共有すべき地主も親方もいない。

この状態が続いていたら、労働の報酬は分業がもたらすような各種の労働生産力改善により上がっていっただろう。あらゆるものは次第に安くなっていったはずだ。それらは少ない労働量で生産できるようになる。そして同じ労働量で生産される商品が、この状態ではお互いに交換されることになるから、それはやはり、もっと少ない労働量の産物で購入されることになる。

だが現実においてはあらゆるものがだんだん安くなるが、見かけ上は多くのものは以前より高くなったり、もっと多くの他の商品と交換されたりしているように見える。たとえば、雇用の相当分において、労働生産力は 10 倍、あるいは一日の労働が、以前に比べると 10 倍の成果量を生み出せるようになったとしよう。だがある特定の雇用においては、その改善は 2 倍にとどまり、つまり一日の労働は、以前に比べて 2 倍の仕事量しかできないとする。大半の雇用における一日の労働産物を、この特定の雇用における一日の労働産物と交換する場合、大半の雇用の産物 10 倍が、こちらの産業では 2 倍の産物しか変えない。したがってその具体的な量、たとえば重量一ポンドは、以前より 5 倍も高くなったように見える。だが現実には、それは 2 倍も安い。購入には他の財が 5 倍の量を必要としても、それを買うにも生産するにも、半分の労働量しか必要ない。この購入は、以前に比べると 2 倍も安くなっているのだ。

だがこの物事の当初の状態、つまり労働者が自分の労働産物すべてを享受するという状態は、土地収用と在庫蓄積が最初に導入されて以降は、続くはずがない。したがって、労働の生産力における最も重要な改善が行われるはるか以前に、そんな状況は終わっていた。そして、それが労働報酬の補償においてどんな影響を持ち得たかをこれ以上考えても無駄だ。土地が私有財産になると同時に、地主は労働者がそこから収穫したり集めたりできる産物のほぼすべてについて、その歩合を要求する。彼の地代は、土地に対して雇用される労働の産物から最初に差し引かれるものとなる。

地面を耕す人物が、収穫を得るまでに食いつなぐだけの資力を持っていることはめったにない。彼の生計は、主人の在庫から一般に先払いされる。これはその人物を雇用する農夫だ。そして、もしその人物が労働の産物を分け与えることになっていなければ、農夫はその人物を雇う気などまったく起こさないはずだ。この利潤は、土地に対して雇用される労働から二番目に差し引かれるものとなる。

他のほぼあらゆる労働の産物もまた、このような利潤差し引きを受ける。あらゆる技芸や製造では、作業員の相当部分は材料を提供し、製品が完成するまで報酬や寝食を提供してくれる親方が必要だ。労働者たちは労働の産物や、それが与えられた材料に対して付加する価値の一部を分かち合い、その分けられた部分が親方にとっての利潤となる。

確かにときには、一人の独立作業員が自分の仕事に必要な在庫と、それが完成するまでに食いつなぐための在庫を十分に保っていることはある。その人物は親方でもあり作業員でもあり、自分の労働の全産物、あるいは与えられた材料に付加する価値のすべてを、自分で享受する。それは通常は別々の人物に帰属する、別々の収入、つまり在庫の利潤と労働の報酬を含んでいる。

だがこうした場合は、それほどひんぱんには起きない。そしてヨーロッパのあらゆる部分では、独立作業員1人に対して、親方の下で働く作業員は20人いるし、労働の報酬というのはどこでも、作業員と、それを雇用する在庫の所有者とが別々である場合のものとして理解されている。

労働の一般的な報酬が何かというのは、どこでも通常は、この二つの集団の間で交わされる契約に依存する。この両者の利害は、どう見ても同じではない。作業員はできるだけたくさん欲しいし、親方はできるだけ少なく渡したい。前者は労働報酬を上げるように力をあわせ、後者はそれを下げようとする。

だがあらゆる通常の状態においては、この両者のうちどちらがこの紛争で優位性を持ち、相手に自分の条件を受け入れるよう強制できるかは、すぐに予想がつく。親方たちは人数が少ないから、ずっと結託しやすい。さらに法律は、親方たちの結託は認めるか、少なくとも禁止はしないが、労働者たちの団結は禁止する。議会の立法で、仕事の価格を引き下げのために結託するのを禁止するものはないが、それを引き上げるために結託するのを禁止する法律はたくさんある。こうした紛争のすべてでは、親方たちのほうがずっと長く辛抱できる。地主、農夫、製造の親方、商人は、作業員を一人も雇わなくても、一般に一、二年は彼らがすでに獲得した在庫だけで生活できる。多くの作業員たちは、雇用なしには1週間も食いつなげないし、一ヵ月耐えられる人は少数で、まして一年も持ちこたえられる人はほとんどいない。長期的には、親方が作業員に欠かせないのと同じくらい、作業員も親方にとって不可欠となる。だが目先では必ずしもそうはならない。

作業員の結託についてはよく耳にするが、親方たちの結託はめったに聞かれないと言われる。だがそれを効いて、親方たちはめったに結託しないのだと思ひ込む人物は、この問題についてと同じく、世知の面でも無知なのだ。親方たちは常に、どこでも一種の暗黙の、だが定常的で均一な結託状態にあり、労働報酬を実効水準より上げないように目論んでいる。この結託を破るのはどこでもきわめて嫌われる行動であり、その親方はご近所や仲間から一種のつまはじきを受ける。確かにその結託について耳にすることはあまりない。だがそれは、その結託が通例であり、言わば物事の自然な状態だからだ。自然なことはだれも話したりしないのだ。親方たちもときには、結託して報酬をこの水準よりさらに引き下げようとする。これは常に、実施のその瞬間までは極度の沈黙と秘密の中で計画される。そして作業員たちが、その損失を痛感しつつもそれを受け入れると（ときには抵抗なしに受け入れることもあるのだ）それは他の人々には決して伝えられない。だがこうした結託は、それに反対する作業員たちの防衛的な結託により抵抗を受けることが多い。労働者たちは、ときには、こうした挑発がなくても自分たちの意思で結託し、自分の労働価格を引き上げようとする。その通常の口実は、ときには食品が高価であること、あるいは自分た

ちの仕事から親方たちが過大な利潤を得ていることだ。だがその結託が攻撃的だろうと防衛的だろうと、それは常に大いに喧伝される。この争いを早急に妥結するため、彼らは常に最大級の騒ぎに頼り、時にはきわめて衝撃的な暴力や怒りに訴える。彼らは必死であり、必死の人物が見せる愚行と華々しさをもって行動する。彼らは親方たちを脅して、即座に要求を受け入れさせない限り、飢え死にするのだ。こうしたときに親方たちは、相手方と同じくらい声高となり、民事判事の支援を要請して、従僕や労働者、流し職人たちの結託に対してきわめて厳しく定められた法律の厳格な適用を求める。作業員たちはそのため、こうした騒乱的な結託の暴力から多少なりとも利益を受けることはほとんどない。民事判事の介入もあり、親方たちの立場保持力の高さもあり、目先の食事のために折れざるを得ないという作業員の相当部分が抱える必要性のためもある。そうした結託は通常は、首謀者たちの処罰や破滅に終わるしかない。

だが作業員との紛争において、親方たちのほうが必ず優位に立てるとはいえ、通常の報酬を労働の最下層の部分についてすら、それ以上は一時的にしても引き下げられないと思われるある水準が存在する。

人は常に仕事で生計を立てねばならず、その報酬は少なくとも暮らすのに十分でなければならない。それはほとんどの場合には、暮らすだけの水準より少し高くなくてはならない。そうでないとその人は家族を養えず、そうした作業員の種族は数世代で絶えてしまうからだ。この点についてカンティリョン氏は、平民労働者の最低の種族はどこでも、自分が生き延びるだけの所得の最低でも2倍は稼がねばならないと想定しているようだ。そうすれば、世帯を持って子供を二人育てられるからだ。妻の労働は、育児の必要性のため、自分自身を養うだけの金額に想定される。だが生まれた子供のうち半分は成人前に死亡すると計算されている。最貧の労働者たちはつまり、この計算によれば、夫婦として少なくとも子供を四人育て、うち二人が成年に達するだけの可能性を確保しなくてはならない。だが子供四人の養育に必要なものは、成人一人とだいたい同じだろう。カンティリョン氏はさらに、身体頑健な奴隷の労働は、その寝食の二倍と計算されると述べる。そして最も弱い労働者の労働ですら、頑健な奴隷より価値が低いことはあり得ないという。ここから少なくとも確実に思えるのは、家族を養うためには、夫と妻の労働をあわせたものは、一般労働者の最低の種類ですら、夫婦自身の存続に厳密に必要な量以上でなければならないということだ。だがどのくらい多くなくてはならないのか、上で述べた場合やその他のいろいろな場合の比率については、見極めようとは思わない。

だが、ときには労働者たちに優位性を与える状況もいくつかあり、その場合に彼らはこの水準よりも報酬をかなり上げられる。その水準のうち最低のものは、一般的な人間の生活を支えられるものとなる。

どの国でも、報酬で暮らす人々、つまり労働者、流し職人、各種従僕の需要が絶えず高まっている場合、毎年前年よりも多くの人に対する雇用が容易されるとき、作業員たちは報酬を上げるのに結託する必要はない。働き手の希少性は親方間の競争を引き起こし、相互に競り合って作業員を確保しようとして、報酬を上げないようにする親方たちの自然な結託が自発的に破られる。報酬で生計を立てる人々の需要は、当然ながら、報酬を支払うための資金の増加に比例してしか増加しようがない。そうした資金は二種類ある。一つは、生存に必要な水準を超えた収入、そして第二には親方たちの雇用に必要なものを上回るだけの在庫だ。

地主、年金生活者、金持ちが、自分で家族を養うのに十分以上の収入を得ていると思っ

たら、その余剰分の全額または一部を使って、使用人を一人か数人養う。この余剰を増やせば、当然ながらその使用人の数も増える。

編み手や靴職人などの独立作業員が、自分の仕事材料を購入するのに十分以上の在庫を持っているときには、その余りで自然に一人かそれ以上の流し職人を雇い、彼らの仕事から利潤を得ようと思う。この余剰を増やせば、当然ながら流し職人の数も増える。

報酬で生活する人々への需要はつまり、必然的に各国の収入と在庫が増えれば増加するし、それなしには増加しようがない。収入と在庫の増加は国富の増加だ。したがって報酬で生活する人々の需要は、自然に国富の増加と共に増えるし、それなしには増加しようがない。

報酬労働の増加を引き起こすのは、国富の実際の大きさではなく、その継続的な増加だ。つまり労働報酬が最も高いのは、最も豊かな国ではなく、最も繁栄している国、あるいは最も急速に豊かになっている国だ。現在のイングランドはまちがいなく、北米のどの部分よりもずっと豊かだ。だが労働報酬は、イングランドのどこよりも、北米でのほうがずっと高い。ニューヨーク地方では、最近の紛争前の1773年に一般労働者たちは、一日あたり現地通貨3シリング6ペンス、2銀シリング相当を稼いだ。船大工は現地通貨10シリング6ペンスに、6銀ペンス相当のラム酒1パイント、総額銀で6シリング6ペンス、家大工やレンガ職人は現地通貨8シリング、銀では4シリング6ペンスを稼いでいた。流しの仕立て屋は現地通貨5シリング、銀でおおよそ2シリング10ペンスを稼いだ。こうした価格はすべてロンドン価格を上回っている。そして報酬は他の植民地でもニューヨークと同じくらい高いとされる。食品価格は北米のどこでもイングランドよりずっと低い。食料不足も起きたことがない。最悪の時期でも、輸出は減っても自分たちは十分に食べられるだけのものがあつた、だから労働の金銭価格が母国のどこよりも高いのであれば、その本当の価格、つまりそれが労働者にもたらす生活必需品や便利品に対する本当の支配力は、その分だけイギリスでの場合よりさらに高いはずだ。

だが北米はまだイングランドほど豊かではなくても、ずっと繁栄しているし、豊かさのさらなる獲得に向けて、ずっと急速に進んでいる。あらゆる国でも繁栄の最も決定的なしるしは、住民の数の増加だ。グレートブリテンやその他ほとんどのヨーロッパ諸国では、人口が二倍になるには500年以上はかかるはずだ。北米のイギリス植民地では、20年か25年で倍増することがわかっている。また現在では、この増加は新規住民の継続的な輸入で生じているのではなく、人々が大幅に子孫を作っているからだ。高齢まで生きる人々は、しばしば自分自身の身体からの子孫が50人から100人、ときにはそれ以上になるのを自分の目で見られるという。そこでの労働は実に見返りが大きいので、家族に大量の子供がいても、両親にとっては負担になるどころか、豊かさと繁栄の源になる。それぞれの子供の労働は、巣立ちする以前の段階で、彼らにとっての純益100ポンドの価値があるとされる。幼い子供4、5人の若い未亡人は、ヨーロッパの中流やそれ以下の階級の人々の間なら再婚の見込みはきわめて少ないとされるが、アメリカではしばしば富の源泉として頻繁に求婚される。子供の価値は、結婚を促進する最大の要因だ。したがって、北米の人々が一般にきわめて若い時期に結婚するのも、不思議に思うべきではない。こうした早婚でもたらされる大幅な人口増にもかかわらず、北米では人手の希少性について絶えず苦情がきかれる。労働者の需要、彼らの増加を維持するための資金は、雇用する労働者を見つけられる速度よりも急速に増えているようだ。

報酬の支払いに使われるはずの資金はある国の富がとて多くても、それが長いこと停

滞していれば、そこでの労働報酬はあまり高くはないはずだ。労働報酬の支払いに供されるはずの資金、その住民の収入と在庫は、極度に高い水準かもしれない。だがそれが数世紀にわたり同じ水準で続いていたら、あるいはそれにかなり近い水準で続いていたら、毎年雇用される労働者の数は翌年に求められる数を優に供給できるし、それを上回る供給すらできる。人手の希少性が起こることはほぼまったくあり得ず、親方たちがお互いに反目しあって、労働力を確保するために競り上げる必要もないはずだ。これに対して労働力は、この場合には、自然に自分の雇用を超える形で増大する。雇用の希少性が絶え間なく存続し、労働者たちはそれを獲得するため相互に競り上げねばならない。そうした国で労働呻吟が労働者を維持するより高い水準で、その労働者たちが家族を養うのに十分だったとすれば、労働者と親方たちの利益の競合は、やがてそれを一般的な人間性を維持できるだけの最低限の水準にまで引き下げる。中国は長いこと、世界で最も豊かな国の一つだった。つまり最も肥沃で、もっとも耕作され、最も生産的で、最も人口の多く国の一つだった。だが、そこは長いこと停滞していたようだ。500年も前に中国を訪れたマルコ・ポーロは、その耕作、産業、人口について、現在の旅行者が描くのとはほとんど同じ表現で描いている。おそらく中国はマルコ・ポーロよりはるか以前の時代にすら、その法や制度の性質が可能にする豊かさの一揃いをすべて、手に入れてしまったのかもしれない。各種旅行者の記録は、多くの点で不一致が見られるが、中国での労働報酬の低さと、家族を養う労働者の苦労については記述が一致している。一日中地面を掘り起こして、晩に少量の米が買えるだけの稼ぎが得られたら、それで満足している。職人たちの状況は、どうやらさらにひどいようだ。ヨーロッパのように工房に入り浸ってお客から声がかかるのを怠惰に待つかわりに、彼らは絶えず自分の商売の道具をかついで、街路を走り回り、サービス提供の呼び声をあげ、まるで雇用を懇願するかのようだ。中国の下層民たちの貧困は、ヨーロッパで最も貧しい国の貧困層よりはるかにひどい。広東の付近では、何百世帯、何千世帯もが土地の上に住まいを持たず、川や運河の小さな漁船で定住しているのだと一般に言われている。そこで得られる生計は実に乏しいものなので、どんなヨーロッパ船から投棄される最悪のゴミですら、喜んで拾い上げる。たとえばどんな死肉でも、たとえば死んだ犬やネコの死骸でも、半分腐って腐臭を放っているのに、他の国の人々にとってももっとも立派な食べ物と同じくらい彼らには大歓迎なのだ。中国での結婚というのは、子供たちが利益になるから奨励されるのではなく、子供たちを好き勝手に破壊していいから奨励される。あらゆる大都市では、子供数人の死体が毎晩道端に投棄されたり、小犬のように水の中で溺れさせられる。この恐ろしい活動の実施は、一部の人が生計をたてるための正当な仕事になっているとさえ言われている。

だが中国は、停滞はしているかもしれないが、衰退はしていないようだ。その町はどこでも住民に放棄されたりはしていない。いちど耕作された土地はどこでも捨てられたりはしていない。したがって、同じ、あるいはかなり近いだけの年間労働が実施され続け、よってそれを維持するために意図された資金は、目に見えて減ってはいないはずだ。したがって最下層の労働者でも、その生活はきわめて乏しいとはいえ、何らかの形でやりくりして自分たちの種族を継続し、人数を維持しているはずだ。

だが労働維持に向けられる資金が目に見えて減りつつある国では話がちがう。各種の雇用の区分において、使用人や労働者の年次需要は、前の年よりも減る。高い階級で生まれ育った多くの人は、自分の事業で雇用を見つけられずに、最低の仕事でも喜んで行うようになる。最低の階級は自分たちの作業員が在庫過剰だけでなく、他の階級からあふれ出

た人々まで入ってくるので、そこでの雇用競争はあまりに大きくなり、労働報酬は労働者の最も悲惨で乏しい生存ギリギリにまで下がってしまう。この厳しい条件ですら雇用を見つけれない人も多いので、餓死するか、あるいは乞食やすすまじい悪事などにより食いつなぐしかなくなる。この階級には欠乏、飢餓、死亡がすぐに蔓延し、そこから上の階級にも広がって、その国の住民数が、残された収入と在庫で容易に維持できる水準に減り、他の人々を破壊した圧政や災厄を逃れた人々だけになるまで続く。これは、おそらくはベンガルの現在の状況に近いものであり、また東インドのいくつかのイギリス入植地も同様の状態だったようだ。肥沃な国で、以前はずっと人口も少なく、したがって生存はそんなに婚案ではなかったはずで、それなのに一年で三十万人から四十万人が餓死するところでは、労働貧困者の維持に使われる資金は急速に減っているのはほぼ確実だ。北米を統治して保護するイギリス憲法のすばらしさと、東インドを抑圧して圧迫する重商的な企業の原則の差を表すのに、こうした両国の状態の差ほど明確なものはないだろう。

したがって労働の自由な報酬は、国富の増大の自然な影響であるからして、国富増大の自然な症状なのだ。労働する貧困者が乏しくしか維持されていないというのは、物事が停滞していることからくる自然な症状であり、彼が飢えている状況は、物事が急速に衰退しつつあるという自然な症状なのだ。

グレートブリテンでは、労働の報酬は現時点で、明らかに労働者が家族を養うのに厳密に必要な水準よりも多い。この状態について納得するためには、それを行うための最低の金額というのが何か、などという面倒で怪しげな計算を行う必要はない。我が国の労働報酬が、どこであれこの一般的な人間性を実現できる最低の水準などによって支配されていないという多くの明白な症状が見られるからだ。

まず、グレートブリテンのほとんどあらゆる場所では、最低の種類の労働においてすら、夏の報酬と冬の報酬との間に差がある。夏の報酬が常に最大だ。だが燃料の費用が多いため、家族を養うのが最も高くつくのは冬だ。したがって、この費用が最も少ないときに報酬が最も高いということから、報酬はこの費用として必要なものに統制されているのではなく、労働の量と想定価値により統制されているのは明らかに思える。実際労働者は、夏の報酬の一部を貯蓄して、冬の費用をまかなうべきなのだとと言える。そして一年を通じて、家族を年間にわたり養うために必要な金額を超えないことになる。だが奴隷や、目先の生存のために絶对的に我々に依存している人物なら、こんなふうな扱いは受けない。日々の生存資金は、その人物の日々の必要物に比例することとなる。

第二に、労働の報酬はグレートブリテンでは、食品価格にあわせて変動はしない。食品価格は毎年、いやしばしば毎月のようにどこでも変動する。だが多くの場所では、労働の金銭価格はずっと同じで、ときには半世紀にわたって同じままだ。したがってこうした場所で、労働する貧困者が不作の年にも家族を養えるのであれば、食品が穏当なくらい十分にある時期には余裕があって、食品がきわめて安い年にはかなり安楽であるはずだ。ここ十年ほどの食品価格の高さは、王国の相当部分でそれに伴うような労働の金銭価格の目に見える上昇を引き起こしていない。一部の地域では確かに上昇はしているが、おそらくは食品価格増大よりは、労働需要増加のせいによる部分が大きいだろう。

第三に食品価格は労働報酬よりも年ごとの変動が大きいと同様、労働の報酬は場所がちがえば食本の価格より大きく変動する。パンや肉屋の肉はイギリスのだいたいの地域で一般に同じか、だいたい同じだ。これや、小売りで販売される他のほとんどのものは、一般に国の地方部と比べて、大都市でのほうが同じくらいか、あるいはもっと安い。その理

由は後でまた説明しよう。だが大都市とその近郊での労働報酬は、しばしばほんの数キロ離れたところと比べても、四分の一か五分の一、20 か 25% 高くなっている。ロンドンとその近郊では一日の一般的な労賃は 18 ペンスくらいだ。数キロ離れたところでは、14 ペンスや 15 ペンスまで下がる。エジンバラとその近郊での価格は 10 ペンスだ。数キロ離れるとそれが 8 ペンスに下がる。これはスコットランド低地の相当部分に見られる一般労働の通常価格で、イングランドよりは変動がずっと小さい。こうした価格差は教区の間を人間を輸送するのに必ずしも十分ではないが、必然的に最もかさばる商品を教区の間どころか、王国の端から、いや世界の端から運んで、やがてその価格をもっと同水準近くまで持ってくることになる。人間性の持つ軽薄さは首尾一貫の欠如についてはあれこれ言われているものの、明らかに体験から、あらゆる貨物の中で人間こそは輸送が最もむずかしいらしい。したがって、労働する貧困者が王国の中で労働価格最低の地域でも家族を維持できるなら、それが最も高い地域では、彼らは豊かな暮らしをしているはずなのだ。

第四に、労働価格の変動は、時間的にも場所的にも、食品価格の変動とは対応しておらず、しばしば正反対の方向に動いている。

平民の食べ物である小麦は、スコットランドよりイングランドのほうで高い。スコットランドはほぼ毎年、とても大量の供給を得られるからだ。だがイングランドの小麦はスコットランドでは、発地であるイングランドより運ばれる先なので、高く販売されねばならない。そしてそして品質に応じて、同じ市場にやってきて競争するスコットランドの小麦よりも高く販売することはできない。小麦の価格は、主にそれが製粉所でもたらず小麦粉またはミールの量に主に依存する。そしてその点では、イングランドの小麦はスコットランドのものよりはるかに優れている。スコットランドの小麦はしばしば、外見は優れているが、容積の計量との比例で見れば現実には一般に安いし、品質見合いでも、あるいは重量見合いですら安いのだ。これに対して労働の価格は、イングランドよりスコットランドでのほうが高い。したがってもし貧困労働者がイギリスのある部分で家族を養えるなら、他の部分では豊かな暮らしをしているはずだ。実際、スコットランドの平民たちの食べ物のうち最大で最高の部分はオートミールが供給するものだが、それは一般にイングランドの同じ階級のご同輩たちに比べてずっと質が劣るものだ。この生活手段のちがいは、報酬の差の原因ではなく結果なのだ。だが奇妙な誤解のせいで、それがしばしば原因なのだとされるのを耳にしている。ある人が金持ちで、そのご近所が貧乏なのは、前者が馬車を持ち、そのご近所が徒歩だからではない。むしろ金持ちだから馬車が持てるのであり、貧乏だから徒歩なのだ。

過去一世紀にわたり、一年毎に見ると、小麦はイギリスのどちらの地域でも、現在よりも高価だった。これは事実問題であって、いまやまともな疑問を認めることはできない。そしてその証明は、イングランドよりはスコットランドの場合のほうが、そう言えるのであればさらに決定的だ。スコットランドでは、それはスコットランドのあらゆる郡の各種小麦すべてについて、市場の実勢に基づき宣誓の上で行われた年次価値評価に基づく、公共の封土権という裏付けに支えられているのだ。こんな直接的な証拠に対して、さらに追加の裏付けが必要であるなら、これがフランスでも同様の状況であり、おそらくヨーロッパの他のほとんどの地域でもそうだったと述べよう。フランスについては、最も明確な証拠がある。だがイギリス王国の両方の部分において、小麦は前世紀のほうが今世紀より少し高かったのは確実だが、同じく確実なこととして、労働はずっと安かった。貧困労働者たちが当時家族を養えたなら、現在ではずっと楽に家族が養えるはずだ。前世紀には、ス

スコットランドの大半における一般労働のもっとも普通の一日报酬は、夏には6ペンス、冬には5ペンスだった。同じ価格に相当する週給3シリングが、いまだに高地や西部諸島の一部ではかなり支払われ続けている。低地の相当部分では、一般労働の最も通常の報酬は現在では一日8ペンスだ。エジンバラや、イングランドに接している郡では10ペンス、ときには1シリングになる。これはおそらく、その地域の事情のせいだろう。グラスゴー、キャロン、エアシャーなど労働需要が最近になって大幅に高まった数カ所でも報酬はそのくらいだ。イングランドでは、農業、製造業、商業の改良はスコットランドよりずっと早く始まった。労働の需要、ひいてはその価格は、そうした改良とともに必然的に増えたはずだ。前世紀ではそれに伴い、現在と同様に、労働の報酬はスコットランドよりイングランドでのほうが高かった。それはまた、その後かなり上がったのだが、各地で支払われている報酬がずっとばらつきが多いため、どれだけ上がったかを見極めるのはもっとむずかしい。1614年に、歩兵の給料は現在と同じく、一日8ペンスだった。それが最初に確立したときには、当然ながら一般労働者の普通の報酬に左右されていただろう。というのも歩兵は一般にその階級の人々から徴兵されるからだ。チャールズ二世の御代に執筆したヘイルズ主任判事卿によると、父母に手伝いのできる子供二人、手伝いのできない子供二人の六人で構成される労働者一家の必要経費は、週に10シリング、あるいは年26ポンドと計算されるそう。これを労働で稼げなければ、乞食か泥棒により帳尻を合わせねばならない、と彼は考える。彼はこの問題をとても注意深く検討したようだ(バーンの『貧困法の歴史』における彼の貧困者維持の方式を参照)。1688年に、ダヴェナント博士により政治的計算の技能を大いに賞賛されているグレゴリー・キング氏は、労働者や屋外使用人の通常の収入を一世帯あたり年15ポンドとしている。これは彼は、三人半で構成されるとしている。従って彼の計算は、見かけはちがっていても、基本的にはヘイルズ判事のものときわめて類似している。どちらも、そうした世帯の週間経費を1人当たり20ペンスとしているのだ。王国の大半では、そうした家族の金銭収入と経費は大幅に増え、その度合いは場所によって多かったり少なかったりするが、最近になって世間に提示された、現在の労働報酬の誇張された記述ほど上がっているところはほとんどないのかもしれない。念頭におくべき点として、労働の価格はどこでもあまり正確には見極められず、同じ場所でも同じ種類の労働についてちがった価格がしばしば支払われ、それは作業員の能力の差によるだけでなく、親方の甘さや厳しさにもよるのだ。報酬が法律で規定されていないところでは、見極められるふりができるのは、最も一般的なものだけだ。そして経験の示すところでは、法律はしばしば労働報酬を規制するふりはしてみるものの、決してそれをまともに統制できたりしないようだ。

労働の本当の補償、労働者にそれが提供できる必需品や便利品の本当の量は、今世紀の間に、その金銭価格よりさらに大きな割合で増えただろう。小麦が少し安くなっただけでなく、生産的な貧困者が優れたおいしい各種の食べ物を導き出す他の多くのものが、ずっと安くなった。たとえばジャガイモは、現在では30年か40年前に比べて、半分の価格にも満たない。同じ事がカブ、ニンジン、キャベツについてもいえる。こうしたものは、かつては踏鋤を使わないと育てられなかったが、現在は普通の鋤で育てられるのが普通だ。各種の菜園作物も安くなった。グレートブリテンで消費されていたリンゴの相当部分やタマネギのかなりですら、かつてはフランダースから輸入されていた。亜麻布やウール布のもっと粗野な製造における大いなる改良で、労働者の衣服は安くて品質も高まった。そして卑金属製造の工房の人々は、その商売で使う道具を安く改善しただけでなく、家計用品

も優れた便利なものが提供できるようになった。せっけん、塩、ロウソク、皮革、醸造酒は、確かにずっと高くなったが、それは主に税金がかけられたからだ。だが貧困労働者がどんな必要性だろうとこれらのものを消費する量はあまりに小さく、それらの価格が上がったからといって、その他の多くのものの量の減少をもたらしたりはしない。奢侈がいまや人々の最下層にまで広がり、貧困労働者はもはや、かつて満足していたのと同じ食べ物や衣服、住宅では満足しないというありがちな苦情は、向上したのは労働の金銭価格だけでなく、その本当の補償なのだと納得させてくれるものだ。

この下層階級の人々の状況改善は、社会にとってよいことと考えるべきか、不都合とみるべきか？ 答はすぐに、文句なしに単純明快となる。各種の使用人、労働者、作業員たちは、あらゆる大政治社会のはるかに大きな部分を構成する。だがその相当部分の状況を改善するものは、決して社会全体にとって不都合と受けとられたりはできない。大半の構成員が貧しく惨めなら、どんな社会だろうと繁栄して幸福ではあり得ない。さらに人々の大半を喰わせ、衣服を作り、住まわせる人々が、自分自身の労働の産物を共有して、自分自身をも十分に食べさせ、着せ、住まわせるのは、公平以外の何ものでもない。

貧困は、結婚をまちがいなくしづらいものにはするが、でも必ずそれを阻止するわけではない。それはむしろ、子作りに有利のようにさえ見える。飢えかけた高地女性はしばしば20人以上も子供を産むが、世話をきちんと受けた上流レディはしばしば子供がまったく産めず、一般に2人か3人生んだら疲弊してしまう。華やかな女性たちの間でしばしば見られる不妊は、劣った状況の女性の間ではきわめて稀だ。か弱き性にとっての豪奢は、楽しみへの情熱を燃え立たせることとはるかもしれないが、常に子作りの力を弱め、しばしばそれを完全に破壊してしまうようだ。

だが貧困は、子作りを阻止はしないが、子育てには極度に望ましくないものだ。か弱い植物は生み出される。だがこんなに冷たい土壌と、こんなに厳しい気候では、まもなくしおれて枯れてしまう。しばしば聞かされたことだが、スコットランドの高地では、二十人の子供を産んだ母親でも、生き延びた子は二人しかいないのもよくあることだという。大いに経験を積んだ軍人数名が保証してくれたことだが、連隊を徴兵はできても、兵士の子供たちが実に大量に生まれるために、笛や太鼓を供給できたことは一度もないという。だが立派な子供の相当部分は、兵士たちの弊社以外のところではめったにお目にかかることはない。どうやらその中で、13歳や14歳にまで達する子供はきわめて少ないようだ。場所によっては子供の半分は4歳になるまでに死亡し、多くのところでは7歳になるまでに半分が死亡し、ほとんどの場所でも9歳か10歳になるまでには半数が死亡する。だがこの高い死亡率は、子供たちによい身分の人々が提供できるような配慮を持って子供を育てる余裕のない平民の間で主にあらゆる場所で見られるものだ。彼らの結婚は華やかな人々よりは一般に子だくさんではあるが、成人する子供の比率は小さい。捨て子病院や教会の慈善に育てられた子供では、死亡率が平民よりさらに高いのだ。

どんな動物種ですら、自分の生存手段に比例する形で数を増やすし、どんな生物種もそれを超えて数を増やすことはできない。だが文明社会では、人類のさらなる増加に生計手段の乏しさが制限を設けられるのは、劣った階級の人々に限られる。そしてそれを行う方法は、彼らの実り多い結婚が生み出す子供の相当部分を破壊するしかないのだ。

労働の自由な報酬は、彼らが子供をもっとしっかり世話できるようにして、もっと多数の子供を育て上げられるようにすることで、自然にそうした限界を広げ、拡大することになる。これが必ず、労働需要の増加が求めるものとできる限り近い比率で行われること

も、特筆に値する。この需要が絶えず増えているなら、労働の報酬は結婚と労働者の増加を奨励するものとなり、彼らがその絶えず増え続ける需要を絶えず増加し続ける人口により供給できるようにする。もし報酬がどこかの時点でこの目的に必須の水準を下回ったら、人手不足が間もなくそれを引き上げる。そしてそれがどこかでその水準を上回ったら、彼らの過剰な増殖がやがてそれをこの必然的な水準に引き下げる。前者では市場は労働の在庫があまりに過少になり、後者ではあまりに課題になるので、すぐにその価格を社会の状況が必要とする適正水準に引き戻すことになる。このような形で人間に対する需要は、他のどんな商品への需要とも同様に、必然的に人間の生産を統制し、遅すぎればそれを加速し、進み方が早すぎるときには、それを止める。世界中のあらゆる国において人口拡大の状態を統制して決定するのは、この需要だ。北米でもヨーロッパでも中国でも同じだ。北米ではそれを急速に進歩させ、二番目では遅く遅々としたものにして、中国では完全に停滞させているのがその需要なのだ。

一般には、奴隷の摩耗損傷はその持ち主にとっての損失とされる。だが自由な使用人の摩耗損傷は、その使用人の損失でしかないのだ、と。だが後者の摩耗損傷は、実は現実には使用人自身に負けず劣らず主人の損失でもあるのだ。あらゆる種類の流し職人や使用人に支払われる報酬は、社会の増加/停滞/衰退する需要が求めるものに依拠して、そのそれぞれが流し職人や使用人の種族を継続できるだけの水準でなければならない。だが自由な使用人の摩耗損傷は、同じくその主人にとっても損失であるとはいえ、一般に奴隷よりはずっと支出は少ない。奴隷の摩耗損傷を、交換したり修理したりとでも言うべき目的のために使われる資金は、怠惰な主人や気の利かない監督が管理しているのが通例だ。同じ仕事を自由人に対して行うための資金を管理しているのは、その自由人自身だ。金持ちの経済で一般に見られる無秩序は、自然に奴隷の管理にも入り込む。だが貧困者の厳格な儉約と節約的な関心は、自由人の管理にも適用される。こうした管理のちがいの下で、同じ目的のためであっても、その実施にはまったくちがう水準の支出が必要になるはずだ。したがって、あらゆる時代や国の経験から、自由人の行う仕事のほうが、最終的には奴隷が行う仕事よりも安上がりになるらしい。一般労働の報酬がきわめて高いボストン、ニューヨーク、フィラデルフィアですらそうなることがわかっている。

したがって労働の自由な報酬は、富の増大の影響であると共に、人口増加の原因でもある。それについて文句を言うのは、最大の公的な繁栄の必然的な原因と結果について嘆くということなのだ。

指摘しておくべき点として、貧困労働者、あるいは国民の相当部分の状態が、最も幸福で快適に思えるのは、社会がその豊かさの品物をすべて獲得したときよりは、むしろ社会がさらなる獲得に向けて進んでいる、進歩的な状態にあるときなのだ。停滞状態ではそれはつらいものとなり、衰退状態では悲惨になる。進歩的な状態は、現実には社会のあらゆる階級にとって、楽しく喜ばしい状態なのだ。停滞は退屈だ。衰退は憂鬱だ。

労働の自由な報酬は、それが繁殖を奨励するので、一般人の生産性を高める。労働の報酬は生産の奨励であり、その他あらゆる人間の性質と同じく、受けとる奨励に比例して改善される。食べ物が大量ならば、労働者の身体の頑強さが高まり、自分の条件を改善するという快適な期待と、自分の生涯を安楽と豊かさの中で終えられるかもしれないという期待は、自分の強さを最大限に発揮するように動かす。つまり報酬が高いと、そうでない場合に比べて常に作業員はもっと活発で、まめで、頑張る。たとえばイングランドでは、スコットランドよりもそうになっている。辺境の田舎よりは、大都市の近郊のほうがそうなっ

ている。確かに一部の作業員は、1週間の食い扶持を四日で稼げたら、残り三日は怠惰に暮らすだろう。だがこれは、大半の労働者には決してあてはまらない。逆に作業員は、仕事量に応じて自由に支払いを受けると、働き過ぎる傾向がとて強く、数年で自分の健康と身体を壊してしまいかねない。ロンドンやその他地域の大工は、最大限の元気が八年は続かないとされている。似たようなことが、出来高制の他の多くの職で生じる。多くの製造業ではそういう仕組みだし、田舎の労働でも、報酬が通常より高いとそうなる。ほとんどあらゆる職人階級は、自分たちの独得の仕事を過剰に行うことで生じる、独得の障害を引き起こし兼ねない。有力なイタリア人医師ラムツィーニは、そうした職業病だけを扱った本を書いている。兵士たちは、この社会で最も生産的な人々だとは思われていない。だが兵士たちがある個別の仕事に狩り出され、出来高制で自由な支払いを受けると、その上官たちはしばしばその事業主と交渉して、支払われる報酬水準から見て一日に一定金額以上を稼ぐことが認められないようにしなければならぬことがしばしば起こる。こうした取り決めが行われるまで、お互いの模倣と、利得を増やしたいという欲求のため、彼らはしばしば働き過ぎることとなり、過剰な労働で健康を害するのだった。週の四日にわたり働き過ぎることこそが、実にしばしば声高に非難される、残り三日の怠惰さの真の原因であることも多い。頭だろうと身体だろうと大量の労働を数日続けて行くと、ほとんどの人にあっては自然に休息の大きな欲望が続くものであり、無理に抑えたり何か強い必要性がない限り、その欲望はほとんど抗いがたい。それは自然からの呼びかけであり、何らかの耽溺によりそれを軽減させる必要がある。ときには休むだけでもいいが、ときには何か解消手段や気晴らしが必要となる。それが満たされないと、結果はしばしば危険で時に致命的なものとなり、そしてそれがほぼ必ず、遅かれ早かれ、その商売の固有の障害を引き起こすのだ。もし親方たちが常に理性と人間性の訴えに耳を貸すのであれば、彼らはしばしばその作業員の多くの起用を活発化するよりはむしろ抑えた方がいい場合が多い。あらゆる商売で、絶えず働けるようほどほどの働く人は、自分の健康を最長に保つだけでなく、一年を通じて見れば、最大の仕事量をこなせることがわかるはずだと思う。

食物が安い年には、作業員は一般に怠惰であり、高い年には通常よりも生産的だと思われる。したがって、食べ物が増えたと彼らの生産性は下がり、不足していると生産性は上がるのだ、と結論されている。通常より少し豊作だと一部の作業員が怠惰になるということは、疑問の余地がない。だがそれが大半の作業員にそういう影響を与えると、人間が一般に食べ物が増えたとより不足しているほうがよく働くとか、元気なときより意気消沈しているほうがよく働くとか、全般に健康なときよりしばしば病気のときのほうがよく働くというのは、いささか考えにくい。長年にわたる凶作は、一般に平民たちの間で病気と死亡の多い時期となり、これは彼らの生産性の産物を減らさずにはおかない。

豊作の年には、使用人はしばしば主人から暇をもらい、食い扶持は自分の生産性で獲得できるものに任せる。だが同じ食品のやすさは、使用人の維持に使われる資金を増やすので、主人、特に農夫たちにもっと多くの人を雇うよう促す。そうした機会に農夫は、それを市場で低価格販売するよりは、それを使って住み込み労働従僕を何人か増やすことで、小麦からの利潤を増やそうとする。使用人の需要は増え、そうした需要を供給しようと名乗りを上げる人の数は減る。したがって食物の安い年には労働価格はしばしば上がる。

不作の年には、食いつなぐ困難と不確実性のため、そうした人々はみんな住み込みの使役に戻りたがる。だが食品の高価格は、使用人を養うための資金減少により、主人はむしろ

ろ手持ちの使用人を増やすよりは減らしたがる。食品が高価な年には、貧困な独立作業員はしばしば、自分が仕事の材料供給に使ってきたわずかな蓄えを消費し尽くしてしまい、食いつなぐために流し職人になるしかない。雇用を求める人は増えるが簡単には手に入らない。そして使用人と流し職人の報酬は、食品が高価な年にはしばしば下落する。

各種の親方は、このためしばしば食品が安い年より高い年に、使用人たちからよい条件を得るし、高い年のほうが使用人たちは謙虚で依存性が高いのを見ている。だからかれらは当然ながら、食品が高い年のほうが安い年より生産的だと賞賛する。さらに地主や農夫という親方の最も大きな階級は、食品が高い年のほうが気に入るべき別の理由を持っている。地主の地代と、農夫の利潤は、食品価格に大きく依存しているのだ。だが全般に、人が一般的に自分のために働くときのほうが、他人のために働くより働きが少ないなどと想像するほどバカげたことはない。貧しい独立作業員は、出来高制で働く流し職人と比べてすら一般に生産性は高い。前者は自分の生産性の産物すべてを自分で享受し、後者はそれを親方と分け合う。前者は、その別個の独立状態において、悪い仲間の誘惑にあいにくい。これは大工場ではきわめてしばしば他の作業員の士気を台無しにしてしまうのだ。そうした月次、年次雇いで、仕事の多少にかかわらず報酬や職住提供が固定されている使用人に比べた独立作業員の優位性は、もっと大きなものになる見込みが高い。食品が安い年は、独立作業員が各種の流し職人や使用人の数に対して持つ比率を高める傾向にあり、食品が高価な年にはそれが下がりがちだ。

知識と創意に富むフランスの著述家メッサンス氏は、サントエチエンヌの選挙得票数を受けとる人物だが、食品が安い年のほうが高い年より貧乏人はたくさん働くというのを示そうとして、そうしたちがう機会に三つの製造業で製造された財の量と価値を比較しようとした。一つはエルベウフで製造されている粗紡毛糸、一つはルーアン地方全般に広がって行われる亜麻布製造と絹製造だ。公的役所の記録局から転写された彼の記述によると、この三つの製造業のどれについても、作られた財の量や価値は、食品の高い年寄り低い年のほうが一般に大きく、それは常にそうだったという。最も安かった年に最大であり、最も高かった年に最低だった。この三つはすべて安定した製造業者、つまりその産物は年ごとにある程度は変化するものの、全体として見れば増えも減りもししていない。

スコットランドの亜麻布製造業者と、ヨークシャーのウェストライディングの粗紡毛意図製造業者は成長中の製造業者であり、その産物は、ある程度の変動は見られるが、量的にも価値の面でも一般に増え続けている。だが彼らの年次生産について公表されている記述を検討してみると、その変動がその季節の食品の高さ、安さに対して目に見えるつながりを見出すことはできなかった。1740年はきわめて不作の年だったが、どちらの製造業者も大幅に生産を減らしたようだった。だがこれまた大いに不作の1756年には、このスコットランドの製造業者は通常の売上を上回っている。ヨークシャーの製造業者は確かに生産が減り、その産物が1755年の水準まで回復したのは、アメリカ印紙法廃止の1766年以降になってからだった。その1766年とその翌年には、以前の水準を大幅に上回るようになり、それ以来ずっと成長が続いている。

あらゆる大製造業者で、遠い場所に向けた産物は、必然的に生産される国の季節における食品の高さや安さよりはむしろ、消費される国の需要に影響する状況に依存するはずだ。戦争か平和か、他の競合製造業者の繁栄や衰退具合、またその主要顧客の気分の良し悪しなどだ。またおそらくは食品の安い年に行われる過大な仕事の相当部分は、決して製造業者の公開記録には載らない。男性使用人は親方の元を離れ、独立労働者となる。女性

は親元に帰り、自分や家族のための服を作るため、しばしば糸を紡ぐ。独立作業員ですら、必ずしも一般への販売のために働くわけではなく、ご近所の製造業に雇われて、家族利用のものを作る。彼らの労働の産物つまり、しばしばこうした公的な記録には数字として残らない。そうした記録はときどき、えらく華々しく公開され、ときに商人や製造業者たちは、最大級の帝国の繁栄や衰退をそれらに基づいて発表するふりをしてみせるのだ。

労働価格の変動は、食品価格の変動と必ずしも一致しないどころか、しばしば正反対の動きを見せるからといって、この話から食品価格が労働価格に何も影響がないと想像してはいけない。労働の金銭価格は必然的に二つの状況に左右される。労働需要と、生活するための必需品や便利品の価格だ。労働の需要は、それがたまたま増えているか、停滞か、衰退しているか次第で、つまりは人口の増加、停滞、減少を必要としているかによって、労働者に与えられねばならない生活必需品や便利品の量を決定する。そして労働の金銭価格は、この量を購入するために必要な金額で決まる。だから労働の金銭価格はときに、食品価格が低いのに高いことがあっても、需要が同じであれば、食品価格が高ければその労働の金銭価格はもっと高かっただろう。

労働需要は、突然の極端な豊作の年に高まり、突然の極端な不作の年に下がるので、労働の金銭価格はときには前者で上がり、後者で下がる。

突然の極端な豊作の地史には、産業の雇用者の多くは資金を手にしており、前年に雇用されていた大量の生産的な人々を喰わせ、雇用する余裕がある。そしてこの大量の数は常に維持できるわけではない。だからこうした親方たちは、作業員をもっと欲しがるので、お互いに競り合って作業員を獲得しようとして、これがときに労働の本当の価格と金銭価格をつり上げる。

この反対のことが、突然の極端な不作の年に生じる。生産を雇うための資金は前年よりも減る。かなりの人々が雇用から追い出され、それがお互いに雇用を得ようとして競り下げあい、おかげで労働の本当の費用と金銭価格の両方を引き下げる。極端な不作だった1740年には、多くの人々はぎりぎり喰っていきけるだけの支払いで働こうとした。豊作の年には、労働者や使用人を獲得するのはもっと困難だった。食品が高価な年の希少性は、労働の需要を引き下げることで、その価格も引き下げるが、食品価格の高さはそれを上げる方向に作用する。安い年の豊富さは、それとは反対に需要を上げ、労働価格を引き下げるが、食品価格の安さはそれを引き下げようとする。食品価格の通常の変動では、この二つの相反する動きが相互に相殺し合うようだ。おそらくはそれもあって、労働報酬はどこでも、食品価格よりずっと安定して永続的なのだ。

労働報酬の増加は、報酬に帰属する部分を増やすことで、必然的に多くの商品価格を引き上げ、その分だけ自国でも外国でもその消費を減らす傾向がある。だが労働報酬を上げるのと同じ原因である在庫の増大は、その生産力を高め、したがって少量の労働で作れる製品の量は増える傾向がある。大量の労働者を雇用する在庫の所有者は必然的に、自分の利益のために、雇用の適正な分割と分配を行って、製品を最大量作れるように頑張る。同じ理由で彼は、作業員たちに自分や彼らが思いつく最高の機械を供給しようと頑張る。ある工場での労働者の間で起こることは、大きな社会の中でも同じ理由で起こる。労働者の数が多くなれば、それだけ彼らは自然にちがう階級と雇用の細かい区分へと分かれていく。それぞれの仕事を実施するために最も適した機械を発明するのに費やされる頭脳も増える、したがってそれが発明される可能性も高まる。だから、こうした改善の結果として、以前よりずっと少ない労働で生産できるようになる商品がたくさん生じ、そうした価格上

昇は、それが大量の製品に分散されることで十分以上に相殺されることになるのだ。

第 9 章

在庫の利潤について

在庫の利潤の増減は、労働報酬の上下と同じ原因、つまり社会の富が増加しつつあるか減りつつあるかで決まってくる。だがその原因は、そのそれぞれにまったくちがう形で作用する。

在庫の増加は、賃金を上げるが、利潤は低下させがちだ。多くの金持ち商人の在庫が同じ商売に投じられると、その相互の競争で利潤は自然に減りがちとなる。そして同じ社会の中で行われる各種の商売で似たような在庫の増加があると、それと同じ競争がすべてで同じ影響をつくり出すことになる。

すでに述べたように、労働の平均報酬を見極めるのは、ある特定の時と場所についてすらむずかしい。この場合ですら、最も一般的な報酬以上のものはなかなか確定できない。だが在庫の利潤については、これさえもほとんどできない。利潤は常にきわめて変動しているので、ある商売を実施している人物ですら、自分の年間利潤の平均がどのくらいか、自分で必ずしも説明できないのだ。それはその人が扱う各種の商品の変動すべてに影響を受けるだけでなく、自分の競合や顧客の幸運や不運にもよるし、財が海路や陸路で運ばれたり、倉庫の中に保管されている場合にすら受ける、何千もの事故に左右されるのだ。だからそれは、毎年ちがうだけでなく、毎日ちがってくるし、ヘタをすると毎時間ごとに変わる。大きな王国で行われる各種の商売の平均利潤が何かを見極めるのは、それよりはるかにむずかしいはずだ。そして、その人が以前はどのくらい利潤を得たか、あるいは遠い昔の利潤がどれだけかを、多少なりとも正確に判断するのは、ほぼ不可能なはずだ。

だが現在や過去における在庫の平均利潤がどのくらいかを、少しでも正確に見極めるのは不可能にしても、お金の利子からそれについて何らかの目安を得ることはできる。お金の利用によって大金を得られるのであれば、その利用に大金が提供されるはずだという公理は成り立つはずだ。そしてそこで得られるお金が少なければ、そこに提供されるお金も少なくなるはずだ。だからここから、金利の市場利率は各国でちがうので、在庫の普通の利潤もそれと共に変動し、金利が下がれば利潤も下がり、金利が上がれば利潤も上がるというのは確実だろう。だから金利の推移は、利潤の推移のある程度の目安になるはずだ。

ヘンリー八世の勅令 37 号により、10% を超える利息はすべて違法とされた。どうやらそれ以前は、10% を超える利息がときに課されていたようだ。エドワード六世の御代には、宗教的な情熱があらゆる利子を禁じた。だがこの禁止は、他の同種のものすべてと同様に何ら実効性がなく、おそらくは高利貸しの邪悪を減らすどころか増やしたはずだ。ヘンリー八世の法令は、13th of Elizabeth, cap. 8 により復活し、金利は 10% で続いたが、ジェームズ一世の法令 21 号でそれが 8% になった。王政復古後間もなく、それが 6% に

下げられ、アン女王の法令 21 号でそれが 5% になった。こうした各種の法的規制は、きわめてまっとうな形で施行されたようだ。それは市場金利、つまりよい信用を持つ人々が通常借りる金利に先行するのではなく、その後追いで定められた。アン女王の御代以来、5% というのは市場金利より低いよりはむしろ高めのようだ。先の戦争以前に、政府は 3% で借入れをしていた。そして首都や王国の他の場所でよい信用を持つ人々は 3.5% とか 4%、4.5% で借りていた。

ヘンリー八世の御代依頼、国の富と収入は絶えず増えており、その増加も、勢いは衰えるどころか次第に加速しているようだ。継続しているだけでなく、ますます速度を増しているようなのだ。労働賃金はその同じ時期に絶えず増え続けており、各種の商売や製造業の相当部分では、在庫利潤が減っているようだ。

一般に、田舎村よりは大都市でのほうが、どんな商売を行うにしても在庫はたくさん必要になる。あらゆる商売の部門で使われる大量の在庫と、豊かな競合の数のせいで、大都市での利潤率は田舎村よりも低いものになる。だが労働報酬は、田舎町よりは大都市でのほうが高い。繁栄する町で、利用できる大量の在庫を持つ人々は、しばしば求めるだけの作業員を確保できず、このためお互いに競り合っただけ多くを確保しようとして、おかげで労働報酬も上がり、在庫利潤は下がる。国の僻地では、しばしば全員を雇用するのに十分な在庫がないので、そうした人々が競り下げあって雇用を得ようとするため、労働報酬は下がり、在庫利潤は上がる。

スコットランドでは、法的金利はイングランドと同じだが、市場金利はいささか高めだ。そこでは再考の信用を持つ人々でも、5% 以下で借りられることはめったにない。エジンバラのプライベートバンカーたちですら、任意の時点で一部ないし全部の支払いを要求される手形に対して 4% を出す。ロンドンのプライベートバンカーたちは、自分たちへの預金は無利子だ。イングランドでよりもスコットランドでのほうが在庫が少なくてやっていけないような商売はほぼない。だから一般的な利潤率は、少し高めなはずだ。すでに述べたように、労働報酬はイングランドよりスコットランドのほうが低い。スコットランドはずっと貧しいだけでなく、それが明らかに進歩しているとはいえ、よい条件へと進歩する速度はずっと遅くて鈍いようだ。フランスの法的金利は今世紀の間、常に市場金利で決まっていたわけではない (Denisart, *Article Taux des Interests*, tom. iii, p.13 参照)。1720 年には、金利は 20 分の 1 ペニーから 50 分の 1 ペニーへと引き下げられた。つまりは 5% から 2% に引き下げられたわけだ。1724 年にはそれが 30 分の 1 ペニー、つまり $3\frac{1}{3}\%$ に引き揚げられた。1725 年には、また 20 分の 1 ペニー、つまり 5% に上がった。1766 年ラヴェルディ氏統治下で、25 分の一ペニー、つまり 4% に下げられた。The Abbé Terray はその後、それを昔の 5% に引き揚げた。こうした激しい金利削減の多くは、公債金利を減らす方策だったとされる。この目的は、ときには果たされることもあった。フランスは、現時点ではイングランドほど豊かな国ではないかもしれない。そしてフランスの法的な金利はしばしばイングランドより低かったが、市場金利は一般にイングランドより高い。というのもそこでは、他の国々と同様に、法を逃れるきわめて安全で簡単な方法がいくつかあるからだ。両方の国で取引をしたイギリス商人たちが断言していたことだが、商売の利益はイングランドよりフランスのほうが高い。そしてまちがいなくこのせいで、多くのイギリス臣民たちは自分たちの資本を、商売が高く尊重されるところよりも、見下される国で活用しようとするのだ。労働報酬はイングランドよりフランスのほうが安い。スコットランドからイングランドに行けば、それぞれの国における平民たちの服装や

顔つきのちがいは、彼らの条件の差を十分に示すものとなっている。この対比は、フランスから戻るとなおさら大きい。フランスは、まちがいなくスコットランドよりは豊かな国だが、どうもスコットランドほど急速に進歩していないようだ。同国にいけばよく聞かれる、一般的とすら言える見解は、フランスは衰退しつつある、というものだ。この意見は私見では、フランスについてすらあまり妥当とは言えないが、いまのスコットランドと、その 20-30 年前とを見た人であればスコットランドについてはだれもそんな考えを思い浮かべることさえない。

これに対してオランダ地方は、その領土の広さと人口からすると、イングランドより豊かな国だ。同国の政府は 2% で借り入れを行うし、信用の高い民間人は 3% で借りられる。労働報酬はイングランドよりオランダのほうが高いとされ、オランダ人は、ヨーロッパのどこの人よりも低い利潤で取引を行うので有名だ。一部の人は、オランダの商売が衰退しつつあるなどと述べるし、確かにその一部の商売ではその通りかもしれない。だがこうした症状は十分に、全般的な衰退などないことを示しているようだ。利潤が減れば商人たちはすぐに商売が衰退していると文句を言うが、利潤低減はその繁栄の自然な結果、つまり以前より大量の在庫が活用されるようになった結果なのだ。先の戦争の間に、オランダはフランスの貿易輸送事業をすべて獲得し、いまだにその相当部分を維持している。彼らがフランスとイングランド両方で保有する莫大な財産、イングランドでは 4 千万ほどと言われているが（だがこれは、かなり誇張だろうとわたしはにらんでいる）、これは金利が自国よりも高い諸国でオランダ人たちが民間人に貸している巨額の資金であり、まちがいなく彼らの在庫が過大であること、あるいはそれが自国内で普通の商売に容認でいいだけの利潤をもって活用できる水準を超えて増えてしまったことを実証しているのだ。だがそれは、事業が減ったことを実証するものではない。民間人の資本が、ある事業を通じて獲得され、自分がその事業で活用できる以上に増え、それでもその事業も増え続けるなら、大国の資本も同様に増え続けるだろう。

我が国の北米と西インドの植民地では、労働砲手だけでなく金利も、ひいては在庫の利潤もイングランドより高い。どちらの植民地でも、法的金利と市場金利はどちらも 6-8% だ。だが高い労働報酬と高い在庫利潤は、めったに両立しないもので、この新植民地の特異な条件があるから成立しているだけかもしれない。新植民地は常にしばらくの間、本土と比べて在庫が少ないし、他の国の相当部分と比べても、在庫に対する比率で見ても人間が足りない。耕作のための在庫があるより土地がたくさんある。だから彼らが持っているものは、最も肥沃で最も条件のよい土地の耕作に向けられる。海岸近くの土地や、航行可能な河川岸に沿った土地などだ。こうした土地もまた、ときにはその自然産物の価値よりも低い価格で購入されることも多い。こうした土地の購入と改良に使われる在庫は、かなり大きな利潤を出すはずで、したがってとても高い金利も払える。これほど利潤の大きなものに在庫が急速に蓄積すれば、入植者は新しい入植地で見つけられるよりたくさん作業員を増やせるようにする。だから、実際に雇える作業員に対しては、非常に鷹揚な報酬が与えられる。植民地が増えれば、在庫の利潤はだんだん減る。最も肥沃で条件のよい土地がすべて占拠されたら、土壌も条件も劣る土地の耕作から得られる利潤は減るので、そこで雇用される在庫に対して払える金利も下がる。だから植民地の相当部分では、今世紀に入ってから法定金利も市場金利もかなり下がってきた。富、改良、人口が増えると、金利は下がった。労働報酬は在庫利潤といっしょには下がらない。在庫が増えると、その利潤はどうあれ労働需要は高まるからだ。そしてそれがだんだん減ると、在庫は増え続けるだ

けでなく、その増加速度も以前よりずっと高まる。これは生産的な個人だけでなく、富の獲得を進めている生産的な国についても言える。大量の在庫は、利潤は少なくとも、通常は利潤の高い少量の在庫よりも急速に増える。故事にも言う通り、お金はお金を産む。少ししかなければ、もっと得るのは感嘆だ。最大の困難は、その「少し」を得るところだ。在庫の増加と生産性の増加、あるいは有用な労働需要の増加とのつながりは、すでに部分的には説明したが、これからもっと完全な形で、在庫蓄積を扱うときに説明しよう。

新しい領土や、新しい商売の分野を獲得すると、ときには在庫の利潤が上がるし、それとともに富の獲得を急速に進めている国ですら金利が上がる。その国の在庫は、そうした獲得が様々な人々に提示する事業の工場すべてをまかなうには不十分なので、最大の利潤を提供擦る特定分野にだけ適用さえる。他の事業に雇用されていた在庫の一部は、もちろんそこから引き揚げられて、新しくもっと利潤の高い事業に振り向けられる。だからそうした古い事業すべてでは、競争は前より少なくなる。市場は多くのちがった種類の財の供給が前ほど十分ではなくなる。その価格は必然的に多少なりとも上がり、それを取引する人々にもたらす利益は増えるから、そうした人々は高い金利で借りられるようになる。先の戦争が終わってしばらくは、最高の信用を持つ民間人だけでなく、ロンドンの最大級の会社も、5%で借入れをするのが普通だったが、そうした人々や会社はかつては4%とか4.5%以上を払ったことはなかった。北米と西インド獲得による領土と商売の大躍進は、これで十分に説明がつくし、社会の資本ストック減少はまったく想定する必要がない。古い在庫により実施される新しい事業がこれほど多大に追加されると、必然的に個別事業部門の多くで雇用される量は減り、そこでの競争は減り、利潤は高まったはずだ。先の戦争のすさまじい費用によっても、グレートブリテンの資本ストックは減っていないとわたしが思う理由については、また後述しよう。

だが社会の資本ストックの低減、あるいは産業の維持に使われる資金の低減は労働報酬を引き下げると同時に、在庫の利潤を増やし、結果として金利も上げる。労働報酬が下がると、社会に残った在庫の所有者は、以前より低い費用で財を市場に出せる。そして市場への供給に使われる在庫が減るので、もっと高い値段で売れる。財は彼らにとって安上がりとなり、高く売れるのだ。だから彼らの利潤は、両方の面で押し上げられるから、高い金利も十分に負担できるベンガルなどの東インドの入植地で実に即座かつ容易に手に入る巨額の財産は、こうした荒廃した国においては労働報酬がとても低く、在庫利潤がとても高いのだ、と納得させてくれる。お金の利子もそれに比例して高くなる。ベンガルでは、お金はしばしば農民に40、50、60%で貸し付けられ、その返済のために次期の作物が担保となる。これだけの利子を払える利潤は、地主の地代のほとんどすべてを吸い上げるはずだから、こんなすさまじい高利はこんどは、そうした利潤の大半を吸い上げてしまうはずだ。ローマ共和国崩壊まで、この種の高利は各種地方で、その属州総督の破滅的な統治の下で一般的だったらしい。美德あふれるブルータスはキプロスで、84%の利子でお金を貸していたことが、キケロの手紙からわかる。

その土壌と気候、および他の諸国との関係が獲得を可能にする富をすべて獲得した国は、それ以上は発展できず、一方で退行することもない場合には、労働報酬と在庫利潤もおそらくとても低いはずだ。その領土が養えるか、在庫が雇用できるだけの数に応じた人口を完全に持つ国では、雇用をめぐる競争が必然的にきわめて大きくなり、労働報酬は労働者の数を維持するのにギリギリの水準にまで下がり、そして国の人数がすでに上限なので、その数は決して増えない。取引すべきあらゆる事業に対応するだけの十分な在庫を持

つ国では、自然や商売の規模が許す限り、あらゆる事業分野で可能な限りの在庫が雇用されることになる。だから競争はどこでも激しくなり、結果として普通の利潤はきわめて低くなる。

だが、どんな国もまだここまでの豊かさには到達していないらしい。中国は長く停滞が続き、おそらくはずっと昔に、その法と制度の性質に見合った富のフルセットを獲得したのだろう。だがこのフルセットは、他の法や制度の下でその土壌、機構、国の状況が提供できたはずのものに比べてずっと劣っていたのだろう。外国との通商を怠り嫌う国、外国船舶をつか二つの港でしか受け容れない国は、別の法や制度の下で可能だったのと同じ量の事業取引はできない。また、金持ちや巨大資本の所有者が大いに安全を享受する一方で、貧困者や小資本しか持たない人々がほとんど何の安全も得られないどころか、正義の隠れ蓑の下で下級役人たちに好き勝手に収奪強奪されかねない国では、その国内で取引される各種の事業部門で雇用される在庫の量は、その事業の性質や規模が本来可能だったものに決して等しくはならない。異なるあらゆる分野で、貧困者の抑圧は商売をすべて自分の元を集めることで金持ちの独占を確立し、巨額の利益を得られる。このため、中国での通常の金利は12%と言われ、普通の在庫利潤はこの巨額の金利を払えるだけのものでなければならない。

法の欠陥はときに、豊かとか貧しいとかいう国の条件が必要とするよりも金利をずっと高くしてしまう。法が契約の実施を強制しないと、あらゆる借り手はもっときちんと規制された国における破産者や信用の怪しい人々と同じ立場になってしまう。自分のお金を回収出来ないかもしれないと思えば、貸し手は通常は破産者に要求するような高金利を求めるようになる。ローマ帝国の西部地域を蹂躪した野蛮国では、契約の履行は長年にわたり、契約を交わす人々の誠意に任されていた。彼らの王の法廷は、めったに介入しなかった。そうした古代に見られた高利は、一部はこの原因で説明がつくかもしれない。法が利息をすべて禁止しても、それを阻止することはできない、多くの人は借金せざるを得ず、自分のお金を使うことで何が得られるかを考えるだけでなく、法を逃れようとする危険まで考慮したうえでなければだれも貸そうとはしない。マホメット教諸国すべてで見られる高金利は、モンテスキュー氏の説明によれば、彼らの貧困から生じるものではなく、一部はこれが原因であり、一部はお金を回収する困難からきている。

最低限の通常の利潤率は、常にあらゆる在庫の雇用が曝される、たまの損失を補うに十分な水準を上回らねばならない。きれいな、あるいは明確な利潤はこの部分だけだ。総利潤と呼ばれるものは、しばしばこの余剰分だけでなく、こうした非常な損失を補うための補償準備金をも含んでいる。借り手が支払えるのは、この明確な利潤に対応する部分だけだ。最低の通常金利は、同様に、融資が容認できるだけの分別を持って実施される場合でも曝される、たまの損失を補償できる金額を上回るものでなければならない。そうでないと、融資の動機は単なる慈善や友情だけになってしまう。

富のフルセットを獲得してしまった国で、あらゆる事業部門にそこで使える最大級の在庫があるところでは、通常の明確な利潤の率はとても小さくなるので、そこから引き出せる通常の市場金利はあまりに低く、最も豊かな人々でなければ自分のお金の利息だけで暮らすのは不可能になる。財産の少ない人や中規模の人々はすべて、自分の在庫の活用を自分で監督しなければならなくなる。ほとんどあらゆる人が事業主になるか、何らかの商売を行わなければならなくなる。オランダ地方はこの状態に近づきつつあるようだ。かの地では事業主でないのは流行らない。必要性のためほとんどあらゆる人は事業主となり、ど

こでも慣習が流行を規定するのだ。服を着ないのが異様なと同じく、他の人々のように仕事についていないのは、ある意味で異様なこととなる。民間職業の人が野営地や兵舎では場違いで、ヘタをするとそこにいただけで軽蔑される危険さえあるように、働く人中で無為の人はそう見られかねないのだ。

最も高い通常の利潤率は、かなりの商品の価格で見られるように、土地の地代に行くべきもののほとんどすべてを占めてしまい、それを調製して市場に持ってくる労働費用を払う分しか残さないし、それもどこだろうと最低限の労働費用、つまり労働者がギリギリくっていけるだけの労賃でしかない。作業員は常に、仕事を行っているときは何らかの形で食べ物を得ねばならないが、地主は必ずしも支払いを受けるとは限らない。東インド会社の従僕たちがベンガルで実施する商売の利潤は、この水準に近いかもしれない。

通常の市場金利が、通常の明確な利潤に対して持つ比率は、当然ながら利潤の上限変動に応じて変わる。グレートブリテンでは、商人たちがよい、穏当でまともな利潤と呼ぶものは金利の二倍だ。そのよいとか穏当とかいう用語は、どうやら通常の普通の利潤というだけの意味らしい。通常の明確な利潤の率が8%や10%の国では、事業が借金に基づいて行われるようなら、その半分が適正かもしれない。在庫は借り手がリスクを負っており、借り手は言わば、それを貸し手に対して保証する。そしてこの保証のリスクに対する利潤として、および在庫を活用するという手間に対する十分な補償としては、大半の事業においては4、5%が十分な利潤だろう。だが金利と明確な利潤との比率は、普通の利潤がずっと低かったり、ずっと高かったりする国では、同じではないかもしれない。ずっと低ければ、半分では金利をまかなえないだろう。ずっと高ければ、もっと高い金利でもまかなえるだろう。

急速に豊かさへと向かっている国では、利潤率の低さは、多くの商品では高い労働報酬を補い、そうした国々がそれほど繁栄していない近隣国と同じくらい安く売るのを可能にするかもしれない。そういう国では労働報酬がずっと低いからだ。

現実には、高い利潤は高い労働報酬よりもずっと製品の価格を上げる傾向がある。たとえば亜麻布製造業において、各種の労働者、つまり亜麻梳き人、紡績人、編み手などの報酬がすべて、一日2ペンスで先払いしなければならず、それに雇用されている日数を掛けねばならないとしよう。その商品価格の中で賃金へと帰属する部分は、製造の各種段階すべてを通じて、賃金上昇の算術比でしか上がらない。だがそうした働く人々の各種雇用者の利潤が5%引き上げられたとしよう。すると商品価格のうち利潤に帰属する部分は、製造の各種段階すべてを経るうちに、この利潤上昇に対して幾何的比率で上がる。亜麻梳き人の雇用者は、亜麻を売るにあたり、自分が作業員に先払いした材料と報酬の価値に対し、追加で5%を要求する。紡績人の雇用者は、先払いした亜麻の価格と、紡績人の報酬を先払いしたので、その双方に対して追加で5%を求める。そして編み手の雇用者も同様に、亜麻糸の先払い価格と、編み手の報酬に対して5%を要求する。商品の価格を引き上げるにあたり、労働報酬の上昇は、負債の累積にあたって単利方式が効くのと同じやり方で作用する。利潤の上昇は複利のように作用する。我が国の商人や製造業親方たちは、高い労働報酬が価格を引き上げて、自国でも外国でも売上を減らすという悪影響についてやたらにグチる。だが高い利潤の悪影響については何も言わない。自分自身の利得が持つ有害な影響についてはダンマリだ。他人のことしか文句を言わないのだ。

第 10 章

様々な労働雇用と在庫における報酬と利潤

各種の労働や在庫の有利/不利さは、同じご近所では、完全に等しいか、あるいは絶えず等しくなる方向に向かっているはずだ。同じご近所で、明らかに他のものよりも有利だったり不利だったりする雇用があれば、前者の場合にはそこに多くの人が殺到するし、後者ではみんなそれを辞めてしまうから、その利点は他の雇用の水準にすぐ戻るはずだ。少なくともこれは、物事が自然の道筋をたどり、完全な自由があって、あらゆる人が完全に自分の適切と思う職業を選び、自分が適切と思うだけいくらかでも転職できる社会では成り立つはずのものだ。万人が自分の利益に基づいて有利な職業を求め、不利な雇用を離れるようになる。

実は金銭賃金と利潤は、各種の労働雇用と在庫活用に依じて、ヨーロッパのどこでも極度に差がある。だがこの差は、一部は雇用そのものの特定状況から生じるものであり、これは現実にはせよ少なくとも人々の想像の中でのことにせよ、ある職業では少額の金銭利得をもたらす、別の職業ではそれに対して巨額の金銭利得をもたらす。そして一部は、どこであれ物事を完全に自由に任せたりしないヨーロッパの政策からきている。

そうした状況の考察と、政策の考察により、本章は二つの部分に分かれる。

第 I 部 雇用そのものの性質のちがいで生じる格差

以下の五点は、わたしが観察できた限り、一部の雇用では少額の金銭利得が生じ、それに対して他の雇用では巨額の金銭利得が生じる原因となるものだ。まず、雇用そのものの快適さや不快さ。二番目に、それを習得する容易さ、安さ、あるいはむずかしさと費用。三番目に、その雇用が定常的か不定期か。四番目に、それを実施するものに付与される信用の低さや高さ。五番目に、その仕事での成功確立の高さや低さ。

まず、労働の報酬はその仕事の楽さやつらさ、きれいさや汚さ、名誉や不名誉で変わる。だからほとんどの場所では、一年を通じて、流しの仕立て屋は流しの編み手よりも稼ぎが少ない。その仕事はずっと楽だからだ。流しの編み手は流しの鍛冶屋よりも稼ぎが少ない。仕事は必ずしも楽ではないが、ずっときれいだからだ。流しの鍛冶屋は職人ながら、その 12 時間の報酬は、一般労働者である炭坑夫が 8 時間で稼ぐものより少ない。鍛冶屋の仕事は坑夫ほどは汚くないし、危険でもないし、日の光の中の地上で行われるからだ。名誉はあらゆる名誉ある職業報酬の相当部分にあたる。金銭的な利得で見ると、様々な条

件を考慮して、一般に名誉ある仕事の報酬は少ない。これについてはこれからだんだん占めそう。不名誉は逆の効果を持つ。肉屋の仕事は残酷だし面倒な商売だ。だがほとんどの場所では、一般商売の相当部分よりも儲かる。あらゆる職業の中で最も嫌われるのは死刑執行人だが、行う仕事の量に比べて、ほかのどんな一般商売よりも給料はよい。

狩猟と漁業は社会の野蛮な状態では最も重要な仕事だが、社会が発展してくると、最も楽しい娯楽になり、そしてかつては必要性から行われていたことが、楽しみの追求として行われるようになる。社会の発達した段階では、他の人々が娯楽として行うことを仕事として行うのは、すべてとても貧しい人々だ。漁師はテオクリトスの時代からそうだった(『小情景詩』xxi 参照)。密猟者はグレートブリテンのどこでも、極貧者だ。法が厳しく密猟者がいないところでも、免許を受けた猟師の状態も大してマシではない。こうした仕事に対する自然な嗜好のために、それで快適に暮らせるよりも多くの人々が、それを行おうとする。そしてその労働の産物は、その量に比べると、常に市場では安すぎて、労働者たちに最も乏しい食生活しか提供できない。

不快さと不名誉は、労働報酬と同じ形で在庫利潤にも影響する。旅籠や酒場の主人は、決して自分の家の主ではなれず、あらゆる酔っ払いどもの暴虐に曝されるので、その仕事はあまり快適でもないし、立派とも言いがたい。だがわずかな在庫がこれほど大きな利潤をもたらす一般の商売は他にほとんどない。

第二に、労働の報酬はその仕事を学ぶ容易さと安さ、あるいは困難と高費用によって変わる。

何か高価な機械が設置されたら、それが摩耗するまでに実施する驚異的な仕事は、それに対して支払われた資本を回収して、さらに少なくとも通常の利潤をもたらすものでなければならない。大量の費用と暇をかけて教育を受け、非凡な柔軟性と技能を必要とするこうした雇用のどれかに就く人物は、こうした高価な機械になぞらえられよう。この人物が実施を学んだ仕事は、一般労働の通常賃金を上回るものとなり、教育の費用すべてを回収して、さらに少なくとも同じく価値ある資本の通常利潤を上回るものでなくてはならない。しかもそのためにかかる時間は、人間の寿命の長さがきわめて不確実であることを考慮すれば、もっと確実な機械の耐用年数の場合と同様に、適切なものでなければならない。

技能労働と一般労働の報酬の差は、この原理に基づいている。

ヨーロッパの政策は、あらゆる機械工、職人、製造業者の労働を技能労働としている。そしてあらゆる地方労働者の労働は、一般労働としている。これは、前者のほうが後者に比べて、もっと素敵で繊細な性質のものだと想定しているようだ。そういう場合もあるだろう。だが大半の場合にはまったく正反対だ、というのをこれからだんだん示してみよう。だからヨーロッパの法や慣習は、だれかが片方の種類の労働を実施するにあたり、見習い期間を必要としている。ただしその厳しさは場所によってちがう。もう片方の労働は、まったく自由で万人に開かれたままだ。見習い期間の継続中に、その見習い人の労働すべては親方のものとなる。その間に見習い人は、親や親族により養われ、ほとんどあらゆる場合には衣服も親や親族の負担になる。商売を教えるために、ある程度のお金が親方に支払われるのも通例だ。お金が出せない人は、時間を提供する。つまり通常の必要年数よりも多く拘束されるのだ。見習い人の一般的な怠惰ぶりを考えれば、この条件は必ずしも親方に有利ではないが、見習い人のほうには必ず不利になる。これとは反対に、地方労働では、楽な仕事で雇用されている間に商売のもっとむずかしい部分を学び、そして自分の労働でこの雇用のちがった段階すべてで自分を養う。だからヨーロッパでは、機械工、

職人、製造業者の報酬は、一般労働者のものより少し高いのうなずける。それによって彼らは、人間として格上だとみなされており、その利得の多さが彼らを格上になっている。だがこの優位性は一般にごくわずかなものだ。もっと一般的な製造業での流しの職人、たとえば無地の亜麻布やウールの衣服の仕立て屋などは、一般労働者の日給よりも報酬の優位はごくわずかだ。確かに彼らの雇用は、もっと安定して均質だし、一年を通して見たときの彼らの稼ぎの優位性は、少し高いかもしれない。だがそれは明らかに、教育の余計な費用を補償するに十分な水準を上回るものではないようだ。もっと才覚の要る技芸や専門自由業の教育はさらに面倒で高価だ。したがって画家や彫刻家、弁護士、医師の金銭的な見返りもずっと気前が良いはずだし、実際にそうになっている。

在庫に対する利潤は、それが活用される商売を学ぶ難易度にはほとんど影響されないようだ。大都市で在庫が一般に活用される各種の方法は、現実には学習の難易度がほとんど同じようだ。外国の商売だろうと国内の商売だろうと、他のものよりも大して込み入った商売であることはほとんどない。

第三に、ちがった職業の労働報酬は、雇用の定常性または不定期性によって変わる。

雇用は、一部の商売では他のものよりずっと定常的だ。製造業の相当部分で、流し工員は働けるほとんどすべての日に確実に雇用されると期待できる。これに対して、石工やレンガ職人は、霜の厳しい日や悪天候では働けず、その他あらゆる時にも雇用は顧客からたまに声がかかるかどうかにかかっている。結果として、しばしばまったく仕事なしになりかねない。だからその人が雇用されている間に稼ぐものは、仕事がないときにも食いつなげるだけの水準にとどまらず、これほど不安定な状況について考えると必ず生じるであろう、不安や絶望の瞬間についても多少の補償をしてくれる水準でなければならない。だから製造業者の相当部分の稼ぎとして計算されるものが、一般労働者の日次報酬とだいたい同じくらいなら、石工やレンガ職人の日給は一般に、その報酬の0.5倍増しから2倍になっている。一般労働者が週に4、5シリング稼ぐところ、石工やレンガ職人は7、8シリング稼ぐ。前者が6稼ぐところでは、後者は9、10稼ぐ。そして前者がロンドンのように9、10稼ぐところでは、後者は一般に15とか18とか稼ぐ。だが技能労働の中で、石工やレンガ職人ほど簡単に学べるものはないようだ。ロンドンの椅子担ぎ人は、夏の間はときにレンガ職人として雇われていると言われる。したがってこうした労働者の高い賃金は、その技能に対する報酬ではなく、雇用の不定期性に対する補償なのだ。家の大工は石工よりは快適で立派な商売を行っているように見える。だがほとんどの場合には、というのあらゆる場合にというわけではないからだが、家大工の日次報酬は少し低い。家大工の仕事も顧客からの声がかかるかどうかにかかなり左右されるが、石工ほど全面的に左右されるわけではない。そして、天候による中断に左右されることはない。

一般に定常的な雇用を提供する商売が、それが定常ではない特殊な場所で起こると、その作業員の報酬は常に、一般労働者の報酬との通常の比率より相当高くなる。ロンドンでは、ほとんどの流し職人は毎日のように、親方に呼び出されたり暇を出されたりするし、あるいは週ごとにそういう目にあう。他の場所の日雇い労働者と同じだ。職人の中でも最も地位の低い流しの仕立て屋は、同様に一日半クラウン（訳注：2.5シリング）稼ぐが、一般労働者の通常の日次報酬は18ペンス（訳注：1.5シリング）くらいだ。小さな町や田舎の村だと、流しの仕立て屋の報酬は、しばしば一般労働の報酬とほとんど変わらない。だがロンドンでは彼らはしばしば何週間も、特に夏の間は雇用がないのだ。

雇用の不定期性が仕事のつらさ、不快さ、汚さと組み合わせると、ごく一般的な労働

の報酬が、きわめて高技能の職人を上回ることもある。出来高制で働く炭坑夫は一般に、ニューキャッスルでは一般労働の2倍、スコットランドの多くの部分では3倍を稼いでいるとされる。その高賃金はすべて、仕事のつらさ、不快さ、汚さから生じたものだ。その雇用は、ほとんどの場合には、好きなだけ定常的になれる。ロンドンの石炭荷揚げ人は、ほとんど炭坑夫と同じつらさ、不快さ、汚さの仕事をしている。そして石炭船到着の避けがたい不定期さのため、彼らの相当部分では雇用は必然的にとても不定期なものとなる。だから炭坑夫が普通に一般労働報酬の2倍や3倍稼ぐなら、石炭荷揚げ人がときにそうした報酬の4, 5倍稼ぐのも、別に不思議には思えないはずだ。数年前に彼らの条件について調査が行われたところ、当時彼らが支払われている金額だと、一日6-10 シリングを稼げたことがわかった。6 シリングといえば、ロンドンの一般労働報酬の4倍ほどだ。そして、あらゆる個別の商売において、最低の一般的な稼ぎは常に、最も人数が多い稼ぎなのだと考えられる。こうした稼ぎがどんなに過大に思えようとも、それが商売の不快な条件すべてを補うに十分以上であれば、やがて大量の競争相手があらわれ、特別な特権を持たないこうした仕事では、すぐに報酬はもっと低く引き下げられる。

雇用の定常性または不定期性は、どんな商売においても在庫の普通の利潤には影響しない。在庫が定常的に雇用されるかどうかは、その事業ではなく事業者による。

第四に、労働の報酬はその働き手に与えられるべき信頼が小さいか大きいかで変わってくる。

金細工士や宝石商の報酬はどこでも、他の多くの働き手に比べて高い。これは同じくらいの技能の他の職との比較でも、ずっと高い技能を求められる職業との比較でもそうだ。その理由は、彼らが貴重な材料を任されるからだ。われわれは健康を医師に、そして財産や、ときには命と評判も法律家や弁護士に預ける。こうした信頼は、条件がきわめて劣悪だったり低かったりする人々に安全に付与できるものではない。だからかれらの報酬は、これほど重要な信頼が必要とするだけの社会的地位を与えるものでなければならない。彼らの教育にかかるべき長い時間と多額の費用は、こうした状況と組み合わせると、彼らの労働の価格をさらに高めるのは必定なのである。

ある人物が自分の在庫だけを商売に活用するときには、信頼はいらない。そしてその人が他人から得る融資は、その商売の性質ではなく、他の人々がその人物の財産、能力、実直さについて持つ意見に依存する。だから各種商売分野における利潤率のちがいは、商売人に与えられる信頼水準のちがいから生じるものであるはずはない。

第五に、各種の雇用に見られる労働の報酬は、そこでの成功可能性の高低により変わってくる。

ある人物が、教育を受けた職業での雇用資格を確実に得られるかという可能性は、職業ごとにまったくちがってくる。機械工の仕事の最大級の部分では、成功はほぼ確実だ。だが専門自由業では非常に不確実だ。息子を靴職人の見習いに出せば、そいつが靴の作り方を覚えるのはほぼまちがいない。だが法律の勉強に送り出しても、その仕事で生活できるようになるだけの技能を得られる可能性はせいぜい二十に一つだ。完全に公平なくじびきでは、商品を得る人物は、はずれを引いた人が失ったものすべてを獲得できるはずだ。成功者一人に対して二十人が失敗する職業では、その一人は成功しなかった二十人が得るはずだったものすべてを得られるはずだ。法律弁護士は、四十歳近くになってやっと自分の仕事で生計をたてられるようになるかもしれないが、その場合には自分の実に長々とした高価な教育だけでなく、他の二十人以上の、まったくそこから見返りを得られそうにない教

育についても、見返りを得られるべきだ。弁護士の料金がときにいかにとんでもないものに思えようとも、彼らの真の見返りは、決してこれほどの金額にはならない。どんな場所であれ、靴屋や織り手などあらゆる一般職業における各種労働者が年間に得そうな金額と、年間に支出するはずの金額とを計算すれば、前者の総計が通常は後者を上回るのがわかるだろう。だが同じ計算を、あらゆる弁護士とあらゆる法学院の法律学生について行えば、彼らの年間の利得は、年間の支出額に比べてほんのわずかしこ上回らないことがわかるはずだ。それでも人は、前者を高いと考え、後者を低いと思うことだろう。法学のくじびきは、したがって完全に公平なくじびきにはほど遠い。そして、法学だけでなくその他多くの専門自由で栄誉ある職業では、金銭的な利得の点で、明らかに見返りは過少なのだ。

だがこうした職業は、他の職業と遜色ないものであり、こうした欠点にもかかわらず、きわめて鷹揚かつ自由な精神が熱心にそこに押し寄せる。彼らが希望をかける理由は二つある。一つは、そのどれかについても優れた傑出性を持つと得られる評判を求めてのことだ。そして二つ目は、あらゆる人が概ね、自分自身の能力だけでなく、自分自身の幸運についても自信を自然に持っているせいだ。

どんな職業においても、凡庸な水準に到達する者すらわずかな職業において傑出するというのは、天才あるいは優れた才能と呼ばれるものの、最も決定的なしるしだ。こうした傑出した能力に対して投げかけられる世間の崇拝は、常に彼らの報酬の一部となる。それが占める部分が大きい小さいかは、その崇拝の大小に比例する。それは医術という職業における報酬のかなりの部分だ。法律では、それがもっと大きいかもしれない。詩や哲学においては、それがほとんどすべてとすら言える。

一部のとても好かれる美しい才能があり、それを保有しているとある種の崇拝が得られるが、それを利得のために行使するのは、正当な理由にせよ、偏見によるにせよ、一種の公開売春と思われている。したがって、それをこの形で行使する人々への金銭的な補償は、そうした才能の獲得のための時間、労働、費用を回収できるととどまらず、それを生計手段として使うことに伴う侮蔑を埋め合わせるだけのものでなければならない。演奏家、オペラ歌手、オペラ踊り手などのとんでもない報酬は、この二つの原理に基づいている。才能の珍しさと美しさ、およびそれをこのような形で活用することからくる侮蔑だ。こうした人々を軽蔑しつつ、それなのにすさまじく鷹揚な気前よさをもってその才能に報いるというのは、一見するとバカげて思える。だが一方をやるなら、必然的にもう片方もやらざるを得ない。こうした職業についての世論や偏見が変われば、その金銭報酬はすぐに下がるだろう。その仕事に乗り出す人は増え、競争は急激にその労働価格を引き下げる。そうした才能は、どこにでもあるというにはほど遠いが、思われているほど珍しいものでは決してない。多くの人はいそれを高い完成度で保有しているが、それを利用するのを軽侮しているのだ。そしてその才能で栄誉をもって何かを稼げるのであれば、その才能を獲得できる人もさらにたくさんいる。

人類の相当部分が持っている、自分の能力についての自信過剰のうぬぼれは、あらゆる時代の哲学者や道徳学者が指摘する古代からの邪悪だ。自分の幸運に関するバカげた思いこみは、それほど認識されていない。だが、それはヘタをするともっと普遍的なものだ。まともな健康と精神を持つ生きる人の中で、それを多少なりとも持たない人はいない。利得の可能性はあらゆる人によって、大なり小なり過大に見積もられているし、損失の可能性はほとんどの人に過少評価されているし、ほとんどどんな人も、まともな健康と精神を持つ人でそれを過大に見積もったりしない。

利得の可能性が自然に過大に見積もられるということは、宝くじの普遍的な成功を見ればわかる。世界は、完全に公平な宝くじなどこれまで見たことがないし、今後もお目にかかることはない。つまり利得すべてが損失すべてを補うようなものは見たことがない。というのもそんなことをしたら主催者はまったく儲からないからだ。国の宝くじでは、くじの価値は実は、元の購入車が支払った価格に見合うものではない。それなのに市場では、20、30、ときには 40 パーセントの上積み金で売られているのが普通だ。大賞のどれかを獲得するという空しい希望だけが、この需要の唯一の原因だ。まったく素面の人々が、1-2 万ポンドを得る可能性のために少額を支払うのを愚行とみたりすることはほとんどないが、その少額ですら、その可能性が持つ価値より 2、30 パーセント割高なのをみんな知っている。どの賞も 20 ポンドを超えない宝くじでは、他の点では一般的な国の宝くじよりずっと公平なものに近づいていたとしても、そのくじの需要は同じではないだろう。何か大きな賞の可能性を挙げるため、一部の人はくじを何枚も買う。あるいは人によっては、ずっと大きな数の小さな割合を買う。だが買う宝くじの数が増えれば、損をする可能性も高まるというくらい、数学の命題として確実なものはない。宝くじを全部買ったなら、まちがいなく損をする。そしてクジの数が多くなれば、この確実性にそれだけ近づくわけだ。

損失の可能性がしばしば過小評価され、本来の可能性以上に見積もられることはほとんどないのは、保険業社のきわめて穏健な利潤からも学べる。火事だろうと海難だろうと、保険をまともな商売にするためには、一般の賭け金は、一般の損失を補い、経営の費用を支払い、他の一般的な商売に雇用される同額の資本から得られるのと同じくらいの利潤を獲得しなければならない。これ以上の金額を払わない人物は、明らかにリスクの本当の価値以上のもの、つまりそれを保険できるはずの最低価格だけしか支払わない。だが保険で少し設けた人はたくさんいるが、大儲けした人はほとんどいない。そしてこれを考えただけでも、この事業での通常の利潤と損失のバランスは、他の多くの人が財産を築く一般事業より特に有利なわけではないのがわかる。だが保険の掛け金は一般に慎ましいものだが、多くの人はそのリスクをあまりに嫌って保険を掛けない。王国全体の平均で言えば、20 軒のうち 19 軒、あるいは百軒のうち 99 軒は火災保険に入っていない。海難はもっと多くの人にとって、もっと恐ろしいものとなっている。だから保険のかかった船がかかっていない船に対して持つ割合はずっと大きい。だがあらゆる季節に、戦争中ですら、多くの船が保険なしで航海する。これはときに、軽率のせいではないこともある。巨大な会社、あるいは大商人が、20 隻や 30 隻を海に出しているとき、それは言わば相互に保険をかけあっているようなものだ。そのすべての船に対する保険金の節約をあわせると、一般的な確率の過程において遭遇しそうな損失を十分に埋め合わせられるものになるかもしれない。だが船舶に対する保険を怠るのは、家屋への保険を怠るのと同じで、ほとんどの場合には、そんな立派な計算の結果ではなく、単に考えなしの拙速性と、リスクの思い上がった軽視の結果でしかないのだ。

リスク軽視と、思い上がった成功の希望は、人生の時期の中で、若者が職業を選ぶ年齢の頃ほど高まることはない。その時期には、不運の恐れが幸運の希望とつり合うことがほとんどないのは、恵まれた人がいわゆる自由稼業に入る時の熱意に比べて一般人が兵士に志願したり、水夫になったりするときに来るで平気な様子に実に明らかに見られる。

普通の兵士が失いかねないものは明らかだ。だが危険を顧みることもなく、若き志願兵たちは、新しい戦争の開始時期に、これ以上ないほどの熱意で軍に入る。そして昇進の可能性などまったくなくとも同然なのに、その若き空想の中で、栄誉と賞賛を得る千もの機会

を空想してみるのだが、そんなものは絶対に起こらない。こうしたロマンチックな希望が、彼らの血の代償すべてなのだ。彼らの報酬は一般労働者より低く、実際の従軍にあたり、その疲労はずっと大きい。

海のくじびきは、全体として見れば海ほど不利なものではない。立派な労働者や職人の息子は、父親の承認を得て海に出ることも多い。だが陸軍兵士として従軍するときには、それを承認する父親はいない。片方の商売では、その息子が何かを得る可能性が多少はあるのを他の人も理解する。もう一つの稼業では、何かを得る可能性を見るのは、当人以外はだれもない。大提督は、大將軍よりは世間の崇拝度は低い。そして海での従事における最高の成功はが約束してくれるものは、陸での同等の成功に比べ、財産も評判もそれほどではない。同じちがいが、双方におけるもっとつまらない事項の優劣すべてに伴う。先例の規則に基づき、海軍の大佐は陸軍の大佐と同じ位とされる。だが世間の評価では同じではない。宝くじの大賞が小さい分だけ、少額の賞はたくさん存在することになる。普通の水兵は、普通の兵士よりは財産や昇進を得やすい。そして、そうした賞の希望が、この稼業の推奨をもたらすものとなる。彼らの技能や柔軟性は、ほとんどどんな職人よりも高い。そして彼らの賞が右派すべて、連続した苦労と危険の場面でしかない。だが、それだけの柔軟性と技能をもってしても、それだけの困難や危険を持ってしても、一般水兵の条件におかれる限りは、前者の技能などを行使して後者を克服する以外の喜びをのぞけば他に報酬はない。彼らの報酬は、船乗りの報酬水準を統制する港湾の一般労働者より高いわけではない。彼らは常に港から港へと移動しているので、グレートブリテンの様々な港すべてから航海する人々の月額報酬は、そうした各地の他のどんな作業員よりも高い水準に近い。そして最大の船が往き来る港はロンドン港であり、そこがその他すべてを統制する。ロンドンでは、各種の作業員の相当部分がもらう報酬は、エジンバラでの同等階級の作業員の倍ほどだ。だがロンドン港から航海する水夫たちは、リース港から船出す水夫たちに比べ、月に3、4シリングほど高い稼ぎしかない場合がほとんどだし、これほどの差さえもない場合すら多い。平和時の商船では、ロンドン価格はカレンダー月あたりギニーから27シリングだ。ロンドンの一般労働者は、週に9、10シリングの率だから40-45シリングを稼ぐ。水夫は確かに、金銭支払いに加えて糧食も得られる。だがその価値は、必ずしも一般労働者との賃金差を超えるものとは言えない。そして超える場合はあるが、その超過分は水夫にとって明確な利得とは言えない。それを妻子と分け合うこともできないからだ。妻子を喰わせるには、故郷で得る報酬の中からまかなうしかない。

冒険だらけの人生が持つ危険と危機一髪の脱出は、若者を尻込みさせるどころか、ときにはそのためにその稼業につきたいという者も出てくる。下層民の優しい母親は、しばしば息子を港町の学校にやりたがらない。船の光景や、水夫たちの会話や冒険が、息子を海に出たい気分になせかねないと思うからだ。勇気と技能があれば脱出できるような危険の遠い見通しは、決して望ましからぬものではないし、それでどんな職業であれ労働報酬が上がることもない。勇気や技能があってもどうしようもない稼業では話がちがう。きわめて不健康なのが知られている稼業では、労働報酬は常に驚くほど高い。不健康さは、望ましくなさの一種であり、それが労働報酬に与える影響もその一般的な見だしの下に並べるべきだ。

在庫のあらゆる雇用において、普通の利潤率は、その収益の確実性または不確実性によって変わる。これは一般に、外国貿易に比べ国内取引のほうが不確実性は低いし、外国貿易の中でも部門により差がある。たとえば、北米との貿易のほうが、ジャマイカとの貿

易より不確実性は低い。普通の利潤率は常にリスクと共に上がる。だが、リスクに比例して上がるわけではないようだし、それを完全に補うほどは上がらないようだ。倒産が最も多いのは、最も危険の多い商売だ。あらゆる商売の中で最も危険が多いのは密貿易だが、この冒険が成功すればやはり最も利潤が大きいとはいえ、まちがいに破産への道となる。ここでも他のあらゆる場合と同じく、思い上がった成功の希望が作用して、実に多くの冒険家をこの危険な商売に誘い込み、これによる競争のため、利潤はリスクを補償するのに十分な水準より下がってしまう。完全に補償するためには、通常の利潤は、在庫のフル通の利潤より高くなり、あらゆるたまさかの損失を補うだけでなく、保険やの利潤と同じような性質のものとして、冒険家にも余剰の利潤を提供できなくてはならない。だが通常の収益がこれすべてをまかなうに十分なら、こうした商売での破産が他よりも多いことはないはずだ。

だから労働の報酬を変える五つの条件のうち、二つは在庫の利潤にだけ影響する。それは仕事の好ましさまたは望ましくなさ、それが行われるときのリスクまたは安全だ。望ましさや望ましくなさについては、在庫の各種雇用のはるかに大きな部分についてはほとんどまったく差がないが、労働の雇用についてははるかに大きな部分で差をもたらす。そして在庫の普通の利潤は、リスクと共に上がるが、リ必ずしもリスクに比例しては上がらない。こうしたすべてから、同じ社会や近所においては、各種在庫の雇用の平均的で普通の利潤率は、各種の労働の金銭賃金の水準に比べて、もっと開きが少ないはずだ。

そして実際そうになっている。一般労働者の稼ぎと、立派に雇用された弁護士や医師の稼ぎとの差は、各種の二つの産業分野における通常の利潤の差よりも明らかにずっと大きい。各種産業の利潤の一見した差は、通常は人々が報酬として考えるべきものと、利潤として考えるべきものを必ずしもきちんと区別しないことからくる、錯誤なのだ。

薬剤師の利潤というのは慣用語になり、何か異様なまでにとんでもないものを指す。だがこの見かけ上の大きな利潤は、しばしば労働の正当な報酬以上のものではない。薬剤師の技能は、どんな職人と比べてもずっと細やかで繊細なものだ。そして与えられる信頼もずっと重要度が高い。彼はあらゆる場合に貧困者の石となり、また災厄や危険があまり大きくなければ、金持ちにとっても医師役を果たす。したがってその報酬は、その技能と信頼にふさわしいものであるべきだ。そしてそれは一般に、彼が薬を販売する価格から支払われる。だが大きな市場町で最も利用される薬屋が年に販売する薬を全部あわせても、原価は30-40ポンド程度にしかないかもしれない。だから薬屋がそれを300パーセントや400パーセント、あるいは1,000パーセントの利潤で売っても、これはしばしば労働の正当な賃金を、課せられる唯一の形で、薬の値段に上乗せして課しただけの場合が多い。見かけ上の利潤の相当部分は、利潤という衣装をまとった本当の賃金なのだ。

小さな港湾町では、小さい雑貨屋は数百ポンドほどの在庫に対し、40-50パーセントの利潤をかけるし、同じ場所の大規模な卸売商人は、一万ポンドの在庫に対して、8-10%稼ぐのがやっとな。雑貨屋の商売は、住民の便宜のためには必要であり、市場の小ささのため、事業で雇用できる資本は増やせないかもしれない。しかし雑貨屋は、自分の商売で喰っていくだけでなく、それが要求する資格に応じて適切に暮らせねばならない。少額の資本を持つだけでなく、読み書き会計もできなくてはならず、まあ五十種類から六十種類の財について、その価格、品質、それが最も安い市場について、そこそこの判断が下せねばならない。要するに、大商人に必要なすべての知識が必要だということだ。彼が大商人になれないのは、単に十分な資本がないからというだけだ。年に30-40ポンドは、それほ

どの能力を持つ人物の労働の見返りとして多すぎるとは言えない。これを一見すると大きく見える在庫の利潤から差し引けば、残った金額は在庫の通常の利潤と似たり寄ったりになりそうだ。見かけ上の利潤の相当部分は、この場合でも本当の賃金なのだ。

小売りと卸の見かけ上の利潤の差は、小さな町や田舎の村に比べて、首都ではずっと小さい。雑貨商売に一万ポンドを使えるところでは、雑貨屋の労働の報酬は、それだけ大きな在庫の本当の利潤について、ほんおわずかな追加分にしかないだろう。したがって、豊かな小売商の見かけの利潤は、卸商人の利潤とかなり近い水準になるのだ。これが原因で、小売りされる商品は首都のほうが、小さな町や田舎の村に比べて同じかずっと安いことになる。パンや肉屋の肉は、だいたい同じくらいの安さだ。雑貨商品を大都市に持ってくるのも田舎村に運ぶのも輸送費は大差ない。でも小麦や牛を運んで来るにはずっと輸送費がかかる。というのもその大部分はずっと遠くから運んでこなくてはならないからだ。雑貨商品の原価は、どちらでも同じなので、それに対して最小の利潤が上乘せされているところで最も安くなる。パンや肉の原価は、田舎村よりは大都市のほうが高い。だから利潤は少なくとも、常にそちらのほうが安いとは限らないが、同じくらいの安さであることも多い。パンや肉といった商品では、さっきと同じ見かけの利潤を引き下げる原因が、原価を引き上げる。市場の規模が、大きな在庫の雇用をもたらすことで、見かけの利潤を引き下げる。だが長距離からの供給を必要とすることで、原価が上がってしまう。この一方の減少と他方の増加は、ほとんどの場合には、おおむね相殺し合う。おそらくこの理由で、小麦と牛の価格は一般に、王国の各地で価格がまったくちがうのに対し、パンや肉の価格は国の大半でほとんど同じくらいの値段なのだ。

在庫の利潤は、卸でも小売りでも一般に、小さな町や田舎村でのほうが首都よりも低い。が、首都でのほうが乏しい元手から大儲けできることが多く、田舎村ではそんなことはほとんど起きない。小さな町や田舎村では、市場の小ささのせいで、商売は在庫が増えてもそれに応じて増えない。だからこうした場所では、ある個人の利潤率はかなり高くても、その絶対額は決して大きくならず、その結果として年間の蓄積もたいしたものにはならない。これに対して大都市では、在庫が増えるのにあわせて取引が増えるし、儉約して繁栄する人物の信用は、在庫よりもずっと急速に増える。その人の商売は、両方の量に比例して増える。そして利潤の絶対額または量は、その商売の量に比例して増えるし、年間の蓄積は彼の利潤の額に比例して増える。だが大きな町においてすら、どれか一つの確立した有名な商売の店舗が大きな財産を築く場合には、その商売が長続きして、儉約し、慎重に行われる結果としてそうなるのだ。確かにそうした場所では、投機的な商売と呼ばれるものにより、大儲けが実現することはある。投機的な商人は、何か一つ決まった、確立した、有名な事業部門を行使するわけではない。今年は小麦商人で、来年はワイン商人、その後は砂糖、タバコ、紅茶商人という具合だ。何か通常よりも儲かりそうだったあらゆる商売に手を出して、その利潤が他の商売の水準に戻りそうだったらさっさと辞める。だからその利潤や損失は、確率した有名な事業部門のどれかと一定の比率を持つはずがない。大胆な冒険家はときに、二つか三つの成功した投機で大儲けをすることもあるが、一つ、二つ、三つの投機失敗で大損をすることもある。この商売は大都市以外ではできない。投機に必要な情報が得られるのは、商業と通信が最も大量に行われる場所だけなのだ。

上で述べた5つの条件は、労働の報酬や在庫の利潤にかなりの格差をもたらすものだが、どちらについても各種の雇用の有利さ、不利さの全体に対しては、本当だろうと架空のものだろうと、何も格差をもたらさない。こうした状況の性質は、一部ではちょっとし

た金銭的利得を生み出し、別のところでの巨額の利得と釣り合いを取る。だが利得や損失の総額においてこの平等性が実現するには、きわめて完全な自由があるときですら、三つの前提が必要となる。まず、その雇用はそこ近所では十分に知られていて、長く確立されたものでなくてはならない。第二に、それは通常あるいは自然状態とも呼ぶべきものでなくてはならない。そして第三に、それはそれに従事する者たちの唯一または主要な雇用でなくてはならない。

まずこの平等は、そこ近所では十分に知られていて、長く確立された雇用でしか起こり得ない。

他の条件がすべて等しければ、賃金は一般に、古い商売よりは新しい商売でのほうが高い。起業家が新しい工場を設立しようとするときには、まず自分の作業員を他の雇用から惹きつけねばならない。そのためには、彼らが自分の商売で得られる賃金より高い賃金を出すか、彼の仕事の性質が通常は必要とするよりも高い賃金を出さねばならない。そして、彼がそれを敢えて通常の水準まで引き下げるには、かなりの時間が経たねばならない。需要が流行や気まぐれでだけ生じるような製造業は常に変わっており、古い確立した製造業者として考慮されるほど長続きする場合は少ない。これに対し、需要が必要性から主に生じるような産業は、あまり変化せず、同じ形態や布がまる一世紀にもわたり需要され続けることもある。したがって労働賃金は、前者の製造業では後者より高いことが多い。バーミンガムは主に前者の製造業を扱う。シェフィールドは後者だ。そしてこの二地域での労働賃金は、その製造物の性質のこのちがいに見合ったものだという。

どんな新しい工場でも、新しい商業部門でも、農業の新しい手法でも、それは起業家にとっては常に投機であり、起業家はそれについて自分に大きな利潤を約束する。こうした利潤はときにとても大きく、ときには、もっと多いことだが、まるでそんなことはなかったりする。だが一般に、それは近所の他の古い商売に比べて、何か一定の比率を持ったりはしていない。プロジェクトが成功したら、一般に最初は利潤がかなり高い。商売や手法がずっと確立されて知られるようになったら、競争によってその利潤は他の商売の水準にまで引き下げられる。

第二に、この労働や在庫の各種雇用の有利さと不利さ総額の平等は、こうした雇用の通常の状態、または自然な状態でしか起こり得ない。

ほとんどあらゆる各種の労働の需要は、通常より大きいこともあれば、小さいこともある。需要が大きければ、雇用の有利さは一般の水準より上がるし、小さければ、雇用の有利さは一般より下がる。田舎の労働の需要は干し草を作るときと収穫期には年の大半の時期よりも大きい。そして需要とともに賃金が上がる。戦争中に、水夫 4-5 万人が商船で働くより王のために働かねばなくなると、商船への水夫需要は当然ながらその希少性とともに増える。そしてそうした場合には、賃金も 1 ギニーと 27 シリングから、40 シリングや月額 3 ポンドに上がる。その反対に衰退製造業だと、多くの作業員は自分の商売を辞めるよりは、自分の雇用の性質に本来ならふさわしい水準より低い報酬で満足する。

在庫の利潤は、それが雇用されている商品の価格とともに変動する。どんな商品でもその価格が普通または平均の水準より上がると、それを市場にもたらすために活用される在庫の少なくとも一部に関する利潤は、適正水準以上に上がり、価格が平均水準より下がれば、利潤も低下する。どんな商品も大なり小なり価格変動はするものだが、商品によっては他よりずっと変動しやすい。人間の生産性により生産されるあらゆる商品において、年間に雇用される生産性の量は、年間需要に必然的に左右され、平均の年間生産が、できる

限り平均の年間消費に近くなるように調整される。一部の雇用では、すでに述べたように、同じ生産性の量が常に同じか、ほとんど同じ量の商品を作る。たとえば亜麻布やウールの製造業では、同じ数の手は年間でほとんど同じ量の亜麻布やウール布を作り出す。こうした商品の市場価格変動は、需要の偶発的な変動からしか起こり得ない。公的な喪は黒い布の価格を引き上げる。だがほとんどその種類の無地の亜麻布やウール布の需要はだいたい均等だから、価格もだいたい同じだ。だが、同じ量の生産性が必ずしも同じ量の商品を作り出さない雇用も存在する。たとえば、同じ量の生産性でも、年ごとに生産される小麦、ワイン、ホップ、砂糖、タバコなどの量はまったくちがう。だからこうした商品の価格は、需要の変動で変わるだけでなく、量のはるかに大きくひんぱんな変動により変わるし、きわめて変動性が高い。だが一部の取引者の利潤は必然的に商品価格に伴って変わるしかない。投機的な商人の活動は、主にこうした商品について実施されている。そうした商人は、価格が上がりそうだと思えばそれを買ひ占め、下がりそうだと思えば売り払う。

第三に、労働と在庫の各種雇用における、この利点と不利の全体的に見た等しさは、それを実施する人々にとってそれが唯一または主要な雇用である場合にのみ起こる。

人がある雇用で生計を立てるとき、それが時間の大半を占めない場合には、合間の暇なときに、別の仕事を雇用の性質から見て適正なものよりも低い賃金で行おうとすることが多い。

スコットランドの多くの部分では、しばらく前より人数は減っているが、コッターまたは小屋人と呼ばれる人々がいる。彼らは地主や農民の外部使用人のようなものだ。彼らが主人からもらう通常の報酬は、家と、煮込み野菜の取れる小さな庭、牛を喰わせるだけの草、そして質の悪い耕作地一、二エーカーほどだ。主人が彼らの労働を使役することになった場合には、これに加えてオートミールを週に2ペック（訳注：一ペックは一リットルほど）、お金にして16スターリングペンスほどを与える。1年の大半を通じて、彼らの労働が求められることはほとんどなく、自分の小さな所有地の耕作は、彼らが好きに仕える暇を満たすほどの時間はかからない。そうした占有者たちが、現在よりもたくさんいた頃には、だれにでもほんの小銭で自分の余暇を切り売りして、他のどんな労働者より低賃金で働いたという。古代には、これがヨーロッパ全域で一般的だったらしい。あまり開墾が進まず住民の少ない国々では、地主や農夫は繁忙期に田舎労働が必要とする莫大な人手を、それ以外の方法ではまかなえなかった。こうした労働者たちがたまに主人たちから受けとる、日次または週次のお手当は、明らかに労働のフル価格ではなかった。その小さな住居が、報酬のかかなりの部分を占めていた。だがこの日次または週次のお手当は、古代の労働価格や報酬を集めてきた多くの著者たちによって、それだけが労働報酬のすべてであるかのように考えられており、そうした著者は嬉々として、それがいかに低いかを示して見せる。

こうした労働の産物はしばしば、その性質から本来なら適切とされる水準より安く市場に出る。スコットランドの多くの地域では、ストッキングは他のどんな場所で紡績機により編まれるよりもずっと安く編まれている。それは、主要な生計を他の雇用に頼っている使用人や労働者たちの作業による。シェトランド・ストッキング千足以上が毎年リースに輸入され、その価格は一足5-7ペンスだ。シェトランド諸島の小さな首都ラーウィックでは、一般労働の通常価格は一日10ペンスだと私は断言された。その同じ島で編まれるウーステッドストッキングは、一足一ギニー以上となる。

亜麻糸の紡績はスコットランドでは、ストッキング編みとほぼ同じやり方で実施され

る。つまり主に他の目的で雇われている使用人たちが紡いでいるのだ。彼らはきわめてわずかな報酬しかもらっていないので、自分たちの生計をこうした他の仕事で稼ごうとするのだ。スコットランドのほとんどの部分では、週に20ペンス稼げるのは優秀な紡ぎ女だ。

豊かな国では、市場は一般にきわめて大きいので、どの商売でも、単独でそれに従事する人々のすべての労働と在庫を雇用するに十分だ。ある雇用で生計をたてながら、同時に別の商売でちょっとした収入を得ている人は、もっぱら貧困国で見られる。だが似たような種類の以下の例は、とても豊かな国の首都で見られるものだ。思うに、家賃がロンドンより高い都市はヨーロッパに他にないはずだ。それなのに、家具つきアパートがこれほど安く借りられる首都も他に知らない。部屋貸しはロンドンのほうがパリよりずっと安いだけではない。ロンドンのほうが同じような水準の部屋でもエジンバラより安い。そして驚くべきことだが、家賃の高さこそが部屋貸しの安さの原因なのだ。ロンドンの家賃の高さは、それをあらゆる大都市で高くしている各種原因、つまり労働の高さ、一般に遠くから運んでこなければならない建材すべての高さ、そして何より地代の高さからきている。すべての地主は独占者の役を果たし、しばしば田舎の最高の土地百エーカーで得られるよりも高い地代を、町中の1エーカーのひどい土地に対して課している。だが家賃の高さはまた、あらゆる家主に家を丸ごと一軒借りるよう義務づける特異な行動や習慣からくる面もある。イングランドにおける住宅というのは、一つ屋根の下にあるすべてという意味なのだ。フランス、スコットランド、その他ヨーロッパの多くでは、住宅というのは、建物の一つの階という意味でしかないことが多い。ロンドンでの商人は、顧客が住んでいる町の部分で、家を丸ごと一軒借りるしかない。一階は店で、彼と家族は最上階で眠る。そして、家賃の一部を、真ん中の二つの階を下宿人に貸すことでまかなおうとする。家族を喰わせるのは自分の商売であって、下宿料ではない。これに対してパリやエジンバラでは、下宿を貸す人々は一般に、それ以外の生計手段を持たない。そして下宿の価格は家賃だけでなく、家族の費用をすべてまかなわねばならないのだ。

第II部：ヨーロッパの政策で生じた格差

労働と在庫の各種雇用における利益と不利益の全体の格差は実に大きいもので、これは上述の三つの前提が成り立たない場合には、完全な自由がある場合にすらどうしても生じる。だがヨーロッパの政策は、事態を完全な自由任せではおかないので、ずっと重要度の高い他の格差を引き起こす。

それは主に、次の3つのやり方で生じる。まず、一部の雇用において、通常ならその業界に参入したがるよりも少ない人数に競争を限定する。二番目に、他の雇用では、自然な規模よりもずっと広くその参入者を増やしてしまうこと。第三に、ある雇用から別の雇用へ、ある場所から別の場所へと労働や在庫が自由に流通するのを阻害すること。まず、ヨーロッパの政策は、労働と在庫の各種雇用における利益と不利益の全体について、一部の雇用では通常ならその業界に参入したがるよりも少ない人数に競争を限定することで、きわめて大きな格差を引き起こす。

この目的で使われる主要な手段は、組合の独占特権だ。

組合化された商売の独占特権は、必然的にその組合が確立された町では、競争をその商売を自由にしてよい者たちだけに制限する。その町で、適切な資格をもった親方の下で見習いを務めるというのが、通常はこの自由を獲得するための必要な前提だ。その組合の内

規はときに、親方が持てる見習いの数を制限するし、ほぼ必ずその見習いが奉仕すべき年数も決めている。この規制はいずれも、競争の数を、本来ならその商売に入りたがる人数よりずっと小さな人数に抑えることだ。見習いの数の制限はそれを直接制限する。長期の見習い期間は、教育の費用を増すことで、それを間接的ながら同じくらい効果的に抑える。シェフィールドでは、組合の内規により刃物屋の親方は一度に見習いを一人しか持てない。ノーフォークとノーウィッチでは、どんな布織り親方も、見習いを二人以上は持てず、罰則は王への罰金月額5ポンドだ。イングランド中やイングランドの植民地あらゆるところで帽子屋の親方は、見習いを二人以上は持てず、違反したら罰金は月五ポンド、うち半分は王様に行き、の頃半分は記録の残る法廷でその人物を訴えた人にだれであれ渡る。この規制はいずれも、王国の公的な法律で認められているが、明らかにシェフィールドの内規を定めたのと同じ組合精神に基づくものだ。ロンドンの絹織り人たちは、組合を結成して一年もたたないうちに、どんな親方も二人以上の見習いを一度に持てないような内規を定めた。この内規を廃止させるために議会は特別な法を定めねばならなかった。

ヨーロッパ中どこでも組合化された商売の相当部分において、見習い期間の通例ははるか昔から7年間と定められているようだ。こうした組合はすべて昔はユニバーシティと呼ばれており、これは実際、あらゆる組合組織すべての正しいラテン語名称なのだ。鍛冶屋のユニバーシティ、仕立て屋のユニバーシティ等々というのは、古い都市の古い憲章でしょっちゅうお目にかかる表現だ。現在、はっきりユニバーシティと呼ばれている組合が最初に設立されたときには、マスター・オブ・アーツ(修士号)の学位を獲得するために必要な勉学年数は、明らかに一般の商売における見習い期間から持ってきたようだ。一般商売の組合のほうがずっと古くから存在しているからだ。適切な資格を持つ親方の下で7年にわたり働くことが、一般商売において親方になって自分も見習いを取れるようになるためには必要だ。だから、自由業において親方、教師、医師(古にはこれらの用語は同じ意味だった)の肩書きを得て、自分の下で学ぶ学者や見習い(これまたもともとは同義だった)を持つためには、適切な資格を持つ親方の下で7年にわたり勉強が必要だった。

エリザベス女王の第五勅令、通常は見習い法と呼ばれるものの下では、それまで少なくとも7年にわたり見習い期間を経ない限り、どんな商売、工芸、職業であろうと、今後は何人たりとも実施してはならないということになった。そしてそれまでは多くの個別組合の内規だったものが、イングランドでは、市場町で実施されるあらゆる商売の一般的な公法となった。というのも、この勅令の文言はきわめて一般的で、はっきり全王国を含んでいるように見えるが、解釈によりその作用は市場町だけに限られたからだ。これは、田舎の村では、ある人物は複数の仕事を実施することもあるって、そのそれぞれについてその人が7年ずつ見習い期間を経なくてもいいことにしないと、住民たちに不便だし、人口が少ないからそのそれぞれの職業について別々の人を割り振ることもできないことから生じている。文言の厳密な解釈によって、この規定の運用はエリザベス女王第五勅令以前にイングランドで確立していた商売だけに限られ、それ以降に導入されたものを含む妖に拡張されたことはない。この制約は、いくつかの区別をつくり出したが、それを警察のための規則として考えると、これ以上は想像もできないくらいバカげたものになる。たとえば、馬車製造業者は、自分の馬車の車輪を自分でつくってもダメだし、流し職人を雇ってつくらせるのもダメで、それを車輪製造親方から買わねばならない。この後者の仕事はエリザベス女王第五勅令以前からイングランドで実施されていたからだ。だが車輪製造業者は、馬車製造の見習いなど一度もやったことがなくても、自分で馬車もつくれるし流し

職人を雇って馬車をつくらせてもいい。馬車作りという商売はこの規定がつけられたときにはイングランドで行われていなかったから、この規定の対象にはならないのだ。この点で言うとマンチェスター、バーミンガム、ウルバーハンプトンの製造業者の多くは、エリザベス女王第五勅令以前には実施されていなかったもので、この規定の対象にはならないのだ。

フランスでは、見習い期間は町や商売ごとにちがう。パリでは、多くの商売で求められる期間は5年間だ。だがその商売を親方として実施する資格ができる前に、その人物は多くの商売で、さらに流し職人として5年働かねばならない。この後者の期間に、彼は親方の相棒と呼ばれ、この期間自体も相棒修行と呼ばれる。

スコットランドでは、見習い期間を普遍的に統制する一般法はない。期間は組合ごとにちがう。長いところでは、その一部は小さな料金を払えば免除される。またほとんどの町でも、かなり少額の料金を払えば、どんな組合からの自由でも買える。亜麻布や大麻布の編み手、つまり同国の主要製造業者たちも、その下にいる他のあらゆる職人である車輪製造者や糸巻き製造者は、どんな町行政区でも何も料金なしに自分の商売を実施できる。あらゆる町行政区でも、あらゆる人は合法的な週のどの日でも肉を売れる。スコットランドでは、かなりすてきな商売でも見習いは三年が一般的だ。そして一般に、ヨーロッパでこれほど組合法が抑圧的でないところは一つも知らない。

あらゆる人が自分の労働の中に持つ性質は、その他あらゆる性質の源泉なので、最も神聖不可侵なものだ。貧乏人の資産は、自分の手の強さと器用さにある。そしてこの強さと器用さを、近隣に対する被害もないのに本人が適切と思う形で活用できなくするのは、その人物の持つこの最も神聖な性質のあからさまな侵害となる。それはその作業員にとっても、それを雇おうとするかもしれない人々にとっても、公正な自由に対する露骨な侵犯だ。それは前者を、自分が適切と思う仕事で働くのを阻害するし、後者が適切と思う人物を雇うのも阻害することになる。雇用されるにふさわしいかどうかの審査は、まちがいなく雇用者の判断に任せられるはずだ。それは彼らの利害に大きく関わるものだからだ。立法者による、彼らが不適切な人物を雇いかねないというこれに影響した不安は、明らかに抑圧的であると同時に不適切だ。長い見習い期間という制度は、不十分な職人能力がしばしば世間に売りに出されないという保証にはまったくならない。これが行われるのは、通常は詐欺の影響であって、無能の影響ではない。こうした濫用を避けるにはまったくちがう規制が必要だ。お皿の純銀の印や、亜麻布やウール布のスタンプは、購入車に対してどんな見習い規定よりも大きな安心を与えてくれる。買い手はそういう印は一般に見るが、作業員が7年の見習い期間を終えたかどうかなど、調べる価値があるとは決して思わない。

長い見習い期間という制度は、若者をその業界に習熟させる傾向もない。出来高制で働く流し職人は、自分の生産性を行使するたびに便益を得るから生産的になる可能性が高い。だが見習いはサボりがちだし、そのほうが常態となっている。というのもサボらない目先の利益が何もないからだ。劣った雇用においては、労働の果実はすべて、労働に対する報酬だ。ある状態をの果実を最もすばやく実現できる者は、最もすばやくそれに味をしめて、生産性の習慣を早めに身につける可能性が高い。若者が労働から何も便益を長いこと得られなければ、労働に嫌気がさすのは当然だ。公的慈善施設から見習いに出される少年たちは、通常は見習い拘束年数も普通より長く、一般にきわめて怠惰で役立たずになる。

見習い制度は古代にはそもそも存在しなかった。親方と見習いの互恵的な責務は、現代ではあらゆる法規でかなりの条文を占める。ローマ法は、そうしたものにまったく触れて

いない。現在我々が見習いという言葉に付与する概念を表明するギリシャ語やラテン語を私は知らない(敢えていうなら、そんな用語はないと主張してもいいほどだ)。つまり、ある仕事で親方のために、ある一定の年数にわたり働くように拘束され、その条件として親方がその商売を教えるというような概念だ。

長い見習い期間はまったく不要だ。一般の商売にくらべてずっと優れた技芸、たとえば時計や懐中時計を作る技能は、長い指導期間が必要だという点について、何も不思議はない。そうした美しい機械の初の発明と、それを作るために使われる道具の一部の発明ですら、まちがいなく深い思索と長い時間にわたる作業であったはずで、人間の創意工夫の最も幸せな努力の一つだと正当に考えられる。だがその両方がきちんと発明され、十分に理解されれば、それをどんな若者にでも、きわめて完全な形で、道具をどのように適用し、どうやって機械を作るか説明するのは、数週間以上の教育を必要とするはずがない。いや数日で十分かもしれない。普通の機械商売では、数日の指導で確かに十分だろう。確かに手の器用さは、一般の商売ですらかなりの練習と経験なしには獲得できない。だが若者は最初から流し職人として、自分が実施するわずかな仕事に比例して支払いを受け、自分がときに不器用さと未経験によりダメにする材料を自分で弁償したほうが、ずっと多くの律儀さと集中力で練習するはずだ。このやり方のほうが彼の教育はずっと有効となり、常に面倒さもなく、安上がりになる。これで損をするのは親方だ。彼は見習いの賃金をすべて失い、それが7年にわたり積み重なるからだ。だが最終的には、見習い自身が損をするかもしれない。こんなに簡単に学べる商売では、競争相手も多くなり、賃金は完全な仕事人になったときには、現在よりずっと低くなるからだ。同じ競争の激化で作業員だけでなく親方たちの利潤も下がる。商売、技芸、技能みんなが損をする。だが世間はその分得をする。あらゆる職人たちの仕事がこのようになればずっと安く市場に出てくるからだ。

あらゆる組合と、組合規定の相当部分は、この価格低下と、その結果としての賃金と利潤低下を、それをほぼまちがいなくもたらしそうな自由競争の制約によって防ぐためにできたものだ。組合を設立するときには、昔はそれが設立される町の自治体の許可以外は何もいらなかった。確かにイングランドでは、王様からの憲章も必要だった。だが王室の特権は、むしろこうした抑圧的な独占から一般の自由を守るためというよりは、臣下たちからお金を巻き上げるためにしか使われないようだ。王に料金を払えば、憲章はあっさり認められるのが通例らしい。そして何か特定の種類の職人や商人たちが、憲章なしの組合として活動するのが適切と考えた場合、そうした不法ギルドと呼ばれたものは、別により必ずしも禁じられるわけではなく、その不当な特権を行使する許可のために、王に毎年料金を支払わねばならない(Madox *Firma Burgi* p. 26などを参照)。あらゆる組合の即座の検分と、それが自分たちの統治のために行使が適切と考える規定の検分は、それが設立された町組合の役割となる。そしてそれに対してどんな規律が行使されるにしても、それは王からくるのではなく、そのもっと大きい組合から、その一部でしかない下位の組合に対して行使されることとなる。

町組合の統治はすべて、商人や職人たちの手中にあり、彼らの使う表現を借りれば、それぞれの個別の生産物について市場に過剰在庫があふれないようにするのが、こうした個別階級の人びとにとっては明らかに利益となる。というのは現実には、常に在庫を過小にしておくということだ。各階級はこの目的に資する規制を設立したが、それが許されると、他の階級もすべて同じ事をやるのに同意した。こうした規制の結果として、各階級は自分が他のあらゆる人から購入する機会を持つ財を、本来よりも少し高く買わざるを得な

くなったのだった。だがその代償として、彼らは自分の財を同じくらい高めに売ってよいことになったので、それが広範で長期にわたる限り、お互いに同じ町の中にいる階級の取引であれば、そのいずれもこうした規制により敗者とならずにすんだ。そして田舎との取引においてはみんな大いに得をした。そしてこの後者の取引こそが、あらゆる町を支えて豊かにする取引すべてを含むのである。

あらゆる町はその生存物資と、その産業の原材料を田舎から得ている。それに対する支払いは主に二つの方法で行われる。まずは田舎に、そうした原材料の一部を、加工され製造された形で送り返すこと。この場合、その価格には作業員の賃金と、そのご主人や直接の雇用者の利益が上乘せされる。第二に、他の地方や、同じ地方の遠い部分から町に輸入された未加工品や製造品の一部を送って支払いすることもできる。この場合にも、そうした財の原価に輸送人や水夫たちの賃金と、それを雇用する商人たちの利益が上乘せされることになる。こうした商業の最初のもので得られるのは、町がその製造業者によりつくり出す利益である。2つ目のもので得られるのは、その国内および外国貿易の利益である。いずれの場合も労働者の賃金と、各種雇用者の利益が、得られたものの総額を構成する。したがって、どんな規制であれ、そうした賃金や利益を本来よりも増やすものは、その町が以前より少なめの労働により、地方の労働の産物をもっと変えるようにする傾向を持つ。それは町の商人や職人たちに、地方の地主、農民、労働者に対する優位性を与え、両者の間の商業で通常は生じるような自然の均衡を崩すのである。社会の労働による年間総生産は、毎年この二種類のちがった人々の間で分けられる。こうした規制により、そのうち町の住民に与えられる割合は、本来なら手に入る量よりも多いものとなり、田舎の者たちの取り分は少なくなるのである。

町が毎年輸入される食料や原材料に対して本当に支払う価格は、毎年その町から輸出される製造物などの財の量である。そうした製造物などが高く売れるほど、前者は安く買えることになる。町の生産性はますます高まり、田舎の生産性は下がる。町で行われる産業が、ヨーロッパのどこでも田舎でのものより生産性が高いということは、細かい計算をするまでもなく、きわめて単純で自明な観察により納得できるはずだ。ヨーロッパのあらゆる国では、貧しい出発点から取引や製造業、つまり普通は町に属する産業によって大きな財を成した人物が、土地の改良と工作を通じて粗産物の生産により大きな財をなした人物の少なくとも百倍は見つかるのである。したがって、田舎に比べて町でのほうが、産業の報いは大きく、労働賃金や在庫の利潤は大きいことが明らかなのである。だが在庫や労働は自然に、最も有利な雇用を見つけようとする。したがってそれらは、できるだけ町に頼ろうとして、田舎を離れるのである。

町の住民は一ヶ所に集められているので、協力も容易である。このため、町で行われるきわめてつまらない職業も、あちこちで組合化されている。そして組合化されたことがないところでも組合根性、つまり知らない者に対する警戒、弟子を取ったり商売の秘密を伝えたりすることへの忌避が一般にそこでは見られる、おかげで条例により禁止できない自由な競争を防ぐための、自発的な提携や合意がその根性から生じている。ごく少数の人間しか雇用しない商売が、最も容易にこうした提携を行う。千人の糸紡ぎ人や織り手の仕事を確保するために必要な羊毛の梳き手は、6人もいれば十分かもしれない。弟子を取らないよう結託することで、彼らは雇用を独占できるばかりか、この製造業全体を自分たちに言わば隷属させてしまい、自分の労働価格を、その仕事の性質によるものよりもはるかに高い水準にしてしまえるのである。

田舎の住民は、遠い場所に散在しているので、そう簡単には結託できない。決して組合を作ったことはないし、組合根性も普及したことがない。田舎の大いなる商売である農業耕作の資格を得るために見習いが必要だなどと思われたことはない。だが実際には、芸術やリベラル職業と呼ばれるものを除けば、これほど多様な知識と経験を必要とする仕事はないのである。あらゆる言語でそれについて書かれた無数の書籍を見れば、最も賢く最も学習を積んだ国民の間ですら、農業はそう簡単に理解できる仕事とは思われていないのがわかる。そして、そうした本の一部の著者たちは、農民についてずいぶんと見下した物言いをするが、それらの大量の本を読んでも、ごく普通の農民ですら普通に持っているような、多様で複雑な操作の知識は決して得られないのである。これに対して、普通の機械業では、あらゆる操作がほんの数ページのパンフレットで完全かつきちんと説明できないようなものはないに等しいし、また図で補った言葉で説明できないものもほぼない。フランス科学アカデミーがいま刊行中の「工芸の歴史」においては、そうした技芸のいくつかがそうした形で実際に記述されている。また天候の変化やその他多くの偶発時に応じて操作の方向性を変えねばならない仕事では、そうしたものが常に同じか、それにきわめて近いものに比べ、ずっと多くの判断と裁量が必要とされるのである。

農民の技芸や、農作業の一般的な方向性のみならず、田舎労働でそれよりつまらないものですら、機械業の相当部分よりずっと多くの技能や経験を必要とするのである。青銅や鉄の加工をする人々は、道具を使い、性質が常に、あるいはほとんど常に同じ材料を扱う。だが馬や牛の集団と地面を耕す者は、状況がちがえばきわめて異なる健康状態、強さ、気性の道具で仕事をするのである。また作業を加える材料の状態も、その道具の状態と同じくらい変わり安く、どちらもかなりの判断と裁量を持って対応しなくてはならない。普通の耕作人は、一般医はバカで無知なのが常だという扱いを受けているが、そうした判断や裁量において失敗することはほとんどない。確かに社会的な交流には、町で暮らす機械工よりは慣れていない。その声や言語はずっと粗野で、慣れていない者にはわかりにくい。だがその理解は、多様なものの検討に慣れているために、一般に朝から晩まで一つか二つのきわめて単純な操作実施にかかりきりなのが普通の人物に比べると、ずっと優れているのが通例なのだ。田舎の下層な人々が、町の同様な人々に比べて本当にどれだけ優れているかは、商売や好奇心によりその両方と話をしてみたあらゆる人にはよく知られている。中国やインドスタンではこのために、田舎労働者の身分も賃金も、職人や製造業者の相当部分より高いと追われている。組合法や組合根性に邪魔されなければ、おそらくあらゆるところでそうになっているはずだ。

町の産業がヨーロッパ中どこでも田舎の産業に比べて優位にあるのは、すべてが組合や組合法のせいというわけではない。他にも多くの規制によって支えられているのだ。外国の製造物や、外国人商人が輸入したあらゆる財に対する高い関税は、すべて同じ目的を果たす。組合法は、自国民からの自由競争により低い価格をつけられる恐れなしに町の住民が価格をつり上げるのを可能にしている。他の規制は同様に外国人による競争から彼らを守る。いずれの場合にももたらされる価格の上昇は、最終的にはそうした独占の確立にほとんど反対したことのない自国の地主、農民、労働者によって支払われる。彼らは一般に、そうした結託を行う意図も決意もない。そして商人や製造業者の団結と知恵がすぐに、社会のある部分、しかも従属的な部分の私的利益が、社会全体にとっての利益になるのだと彼らを説得してしまうのだ。

グレートブリテンでは、田舎に比べた町の産業の優位性は、現在に比べれば以前のほう

が大きかったようだ。前世紀や今世紀の初めに言われていた水準に比べると、いなか労働の賃金は製造業労働の賃金に近づいているし、農業で雇用されている在庫の利潤は、貿易や製造業の在庫の利潤に近づいているようだ。この変化は、町の産業に与えられた驚異的なまでの奨励の、必然的ながらかなり遅ればせの結果とみることができる。貿易や製造業で蓄積された在庫はときにあまりに大きくなってしまい、町固有の産業種類においてかつての利潤をもって雇用できなくなってしまうのだ。そうした産業も、他のあらゆる産業と同じく限界がある。そして在庫の増大は、競争を増やすことで、必然的に利潤を引き下げる。町での利潤が下がれば在庫は田舎に流れるしかなく、そこで田舎の労働に対する新たな需要をつくり出すため、必然的に田舎の賃金を引き上げる。そしてそれが、言わば地表面に広がり、農業に雇用されることで、部分的に田舎に取り戻され、もともと町に蓄積されていたものがその分だけかなり犠牲になるわけだ。ヨーロッパのいたるところで、田舎の最大の改善はそうように、もともと町に蓄積された在庫があふれ出ることから生じているということを、これから示そうと思う。そして同時に、一部の国がこの道筋により、かなりの豊かさを実現したとはいえ、それはそれ自体としては必然的に緩慢で、不確実で、無数の偶発時により邪魔され中断されかねないものであることを実証しよう。そしてあらゆる自然の秩序と理性に反してそれを引き起こした利害、偏見、法、習俗について、本書の第3巻と第4巻で可能な限り十分かつ明確に説明してみよう。

同じ業種の人々は、世間に対する陰謀や、価格を上げる手管で会話を終えることなしには、娯楽や気晴らしのためですらめったに顔をあわせない。実際、執行可能で、自由や正義とせいごうするような形で、そうした会合を法律で禁じることは不可能である。だが同業者のたまの集まりを法が禁じることはできないにしても、そうした集まりを奨励するようなことは一切してはならず、ましてそれを義務づけるようなことはしてはならない。ある町の同業者すべてに対し、名前と住所を公開登録簿に記録させるよう義務づける規制は、そうした集まりを支援することになる。それがなければお互いに存在を知ることさえなかったはずの個人を結びつけ、その業界のあらゆる人物に、他の同業者全員を見つけるための手がかりを与えることになる。同業者たちが自らに課税して、仲間の貧困者、病人、寡婦、孤児を養えるようにするのは、管理すべき共通の利害を提供するので、そうした集まりを必要なものとする。

組合は、そうしたものを必要とするにとどまらず、多数派の行動が全員を拘束することになる。自由業においては、有効な連合を確立するためには、あらゆる業者一人残らずの全員一致の合意がなければならないし、あらゆる業者一人残らず同じ考えを維持している限りしかそれは続かない。組合の多数派は、しかるべき罰則をとまなう条例を定めることができるので、それはいかなる自発的な合意よりも効果的かつ持続的に競争を制約できることになる。

組合がその業界の統治改善のために必要だという口実は、まったく根拠がない。ある職人に対して行使される本当の有効な規律は組合によるものではなく、顧客からのものなのだ。雇用を失う恐れこそが、詐欺を抑えて手抜きを矯正する。独占的な組合は必然的にこの規律の力を弱めてしまう。その組合があると、その行動の良し悪しにかかわらず、ある決まった職人たちを雇うしかなくなる。多くの組合化された大きな町では、最も不可欠な業種の一部においてすら、まともな職人が見つからないのはまさにこのせいである。仕事をまともにやってもらおうと思えば、郊外でやってもらわねばならない。その職人は、独占特権がないので、自分の人格以外にあてにするものがないのだ。そこで仕事をして

らったら、なるべくうまくそれを隠して町にこっそり持ち込まねばならない。

このような形でヨーロッパの政策は、一部の雇用において競争を、本来ならその雇用に参加したくなかったはずの数よりも小さい数に制約することで、労働や在庫の各種個用における利点や欠点の全体に、きわめて重要な不均衡をもたらすのである。

第二に、ヨーロッパの政策は一部の雇用における競争を、自然な状態でのものよりも高めてしまうため、労働や在庫の各種個用における利点や欠点の全体に、別の逆の種類の不均衡をもたらしてしまう。

一部の職業については適切な数の若者が訓練を受けることがきわめて重要だと最近では考えられており、このためときには公共が、そしてときには民間創建者の篤志が、多くの基金、奨学金、奨励金、給費基金などをこの目的のために設け、おかげでそうした職業には、そうでなければそれを指向するとはとても思えないほど多くの人々を惹きつけている。あらゆるキリスト教国で、聖職者たちの教育の相当部分はこれで賄われているはずだ。自費だけですべての教育を受けた人物はきわめて少数である。したがって、そうした人々は、必ずしも適切な報酬を獲得できるとは限らない。というのもこのために教会は大量の人が押し寄せ、雇用を得るために、本来なら得られるべきものよりもずっと少額の報酬を受け入れようとするからである。そしてこの形で、貧困者の競争は富裕社の報酬を奪うのである。助任牧師や司祭を、卑俗な職業の流し職人と比べるのは、不謹慎にはちがいない。だが助任牧師や司祭の報酬は、流し職人の賃金と同じ性質を持つと考えてもまったく適切なものである。この三つの職業はどれも、それぞれの上司と交わすことになる契約に基づいて、仕事に対する支払いを受けるのだから。14世紀以降まで、イングランドにおいては司祭や有給の教区牧師の通常賃金は、5メルクだった。これは今日のお金で10ポンドと同じくらいの銀を含んでいる。この金額は、いくつかの国内地方議会での条例により定められていたものである。同じ頃に、石工親方の報酬は一日4ペンス、現在のお金で1シリングと同じ量の銀を含むものであり、流し石工の報酬は一日3ペンス、つまり現在のお金で9ペンスと等しい金額であった(Statute of Labourers, 25, Ed. III 参照.)。したがって、こうした労働者の賃金はどちらも、ずっと雇用され続けていたと仮定すれば、助任牧師よりずっと高いのである。石工親方の賃金は、一年の三分の一は仕事がなかったとすれば、まったく同じ金額となる。

アン女王の御代12年目のc. 12では次のように布告された。「一部の地域において、助任牧師が不十分にしか供給されていない場所において、助任牧師の十分な維持と奨励が必要であるために、司教はよって、その署名と印璽をもって、年額50ポンドを超えず、20ポンドを下回らない、十分に足る報酬や手当を指定する権限を持つものとする」。現在では年額40ポンドは助任牧師にはきわめて厚遇と認められている。そしてこの議会の法があるにもかかわらず、年額20ポンドに満たない助任牧師は数多く存在するのである。ロンドンには流しの靴職人ですら年額40ポンド稼ぐ者がおり、大都市圏では頑張って働く職人で年額20ポンド以上稼がない者などいないのも同然である。この年額20ポンドという金額は、多くの田舎教区で普通の労働者がしばしば稼ぐ金額すら超えるものではない。法が職人の賃金を規制しようとするのは、常にそれを引き上げるよりも引き下げるときだ。だが法は多くの場合に、助任牧師の賃金を引き上げようとして、教会の尊厳のために教区の司祭たちに、当人たちが喜んで受け取るやっと思いつなげるだけの金額以上のものを渡すように強制しようとしてきた。そしていずれの場合にも法は同じくらい効果がなく、助任牧師の賃金を上げることもできなければ、労働者の賃金を意図する水準に引き下げるこ

ともできなかった。なぜなら、片方が己の状況の貧窮ぶりのために法定の報酬以下のものを受け入れるのを防ぐことはできないし、またもう片方が彼らを雇用することで利潤や喜びを得ようという期待に基づく逆の競争のために、法定以上の金額を受け取るのを防ぐこともできないからである。

大いなる聖職者や教会高位の人々は、その下位の聖職者たちの窮状などはどうあれ教会の栄誉を支えている。またこの職業に対して向けられる経緯も、その金銭的な報酬の乏しさを、彼ら自身にとってすら多少は補うものとなっている。イングランドと、ローマ・カトリック諸国すべてでは、教会の待遇は実際のところ必要をはるかにうまわるほどよい。スコットランド、ジュネーブなどのプロテスタント教会いくつかの例を見ると、これほど立派な職業で、教育が実に容易に得られるところの例を見ると、報酬がずっと慎ましいものであっても、十分な数の学のある、まともで、敬意に値する人々が聖職に惹かれるのだと納得できる。

法や医術といった定額禄のない職業で、同じ割合の人々が公共の費用を使って教育を受けたら、競争はじきにあまりにも激しくなり、その金銭報酬は大幅に下がる。そうなれば、自腹を切って息子をそうした職業に向けて教育するだけの価値はなくなりかねない。そうした職業は、そうした公的な慈善により教育された者たちに完全に明け渡され、そうした人々の人数と糊口をしのぐ必要性のため、彼らはきわめて乏しい報酬で満足せざるを得なくなり、現在は敬意を集める法曹や医術といった職業すべてが卑しいものになってしまう。

一般に著述者と呼ばれるあのみすばらしい人種も、いまの想定のもとで法曹家や医師がおそらくは陥ったであろう状況におおむね置かれているのである。ヨーロッパのあらゆる地域で、彼らの大半は教会のために教育を受けたのだが、各種の理由で聖職に入れなかったのである。このため彼らは公共の費用で教育を受けている。そしてどこでもその数はきわめて多いので、その労働の価格はきわめて貧相な報酬にまで減っているのである。

印刷術の発明以前は、著述者が少しでもその能力によって稼げる唯一の雇用は、公共または私的な教師か、あるいは自分自身が得たおもしろい有用な知識を他の人々に伝えることであった。そしてこれですら、印刷術が可能にした書籍販売業社のために書くという仕事よりは、まちがいなく名誉ある、有用で、一般にはもっと儲かる仕事なのである。学問の立派な教師という資格を得るために必要な時間と勉強、才覚、知識、その応用は、法曹や医術の最高の実務家にも決してひけをとらないものである。だが立派な教師の通常の報酬は、法曹家や医師の報酬の足下にも及ばない。これは教師業界が、公共の費用で教育を受けた貧窮者にあふれているからで、これに対して他の二つは、自腹で教育を受けていない者に脚を引っ張られることがほとんどないからである。だが公共あるいは私的な教師の通常の報酬は、少額に見えても、喰うために書いているさらに貧窮した著述者たちが、市場から除去されていなければ、まちがいなく今よりさらに低くなっていただろう。印刷術の発明以前は、学者と乞食はほとんど同義と言ってもいいほどの用語だった。印刷術発明以前の各種大学の学長たちは、どうやらしばしば自分の学者たちが物乞いをする許諾を与えていたらしい。

この種の貧窮者が学問を修めた職業に向けて教育を行う慈善ができる前の古代には、立派な教師の報酬はずっと高かったようだ。イソクラテスは、ソフィストに対する対話と呼ばれるもので、同時代の教師たちの一貫性のなさを叱責している。「彼らはその学生たちに実に壮大な約束を行い、賢明で、幸福で、公正になるように教える作業に乗り出す。そ

してこれほど重要なサービスに対して、たった 4、5 ミナエという貧相な報酬しか課さないのである」。そして彼は続ける。「叡智を教える者は、当人たちも当然ながら叡智を持っていなくてはならない。だがこれほどのお買い得物をこんな価格で売る者がいれば、それは最も露骨な愚行として糾弾されるであろう」。彼はまちがいにここで報酬を誇張するつもりはないはずで、それが彼の述べた金額より低かったのはまちがいない。4 ミナエは 13 ポンド 6 シリング 8 ペンスに等しい。5 ミナエは 16 ポンド 13 シリング 4 ペンスである。したがってこの二つの金額のうち大きい金額よりも低くはない報酬が、当時はアテナイの最も高名な教師たちには普通に支払われていたはずである。イソクラテス自身は各学生から 10 ミナエ、つまり $\text{£} 33:6:8$ を求めていた。アテナイで教えていたときには、学生が 100 人いたとされる。これは一時にまとめて教えた者の数、つまり我々が講義一課程と呼ぶものに参加した者たちだと理解する。これほどの大都市で、これほど有名な教師で、当時はあらゆる学問で最もファッショナブルとされた学問、詭弁術を教えていた教師であれば、そんなに過大な数字とは思えない。したがって彼は、講義一課程ごとに 1,000 ミナエ、つまり $\text{£} 3335:6:8$ を得ていたはずだ。同様に、別の場所でプルタルコスも、ディタクトロンつまり通常の講義料として 1,000 ミナエと述べている。当時の多くの高名な教師たちは、どうやら大儲けをしていたようだ。ゲオルギアスは、デルファイ神殿に純金製の自分の彫像を献呈している。おそらく等身大ではなかったのだろうと思う。彼の生き方は、当時の高名な教師ヒッピアスやプロタゴラスと同様に、プラトンによって豪華で虚飾なほどだとさえ描かれている。プラトン自身も、かなり壮大な生活をしていたようだ。アリストテレスは、アレクサンドロス大王の教師となり、当人も父親フィリップも認めるようにすさまじい報酬を得たが、それでも学校での教職を再開するためアテナイに戻るほうを選んだ。学問の教師はおそらく当時は、一、二時代後ほどは一般的ではなかったのだろう。その頃になると、競争がおそらくは彼らの労働の価格とその人格への崇拝を多少は引き下げたはずだ。だがその中で最も高名な者は、常に現代における類似職業のどんなものよりも優れた認識を得ていたようだ。アテナイ人は、アカデメイアのカルネアデスとストア派のディオゲネスを、ローマへの重要な大使として派遣した。そして当時は彼らの都市は、かつての栄光からは衰退していたものの、まだ独立した侮れない共和国であった。

カルネアデスもまた、生まれはバビロニアだった。そしてアテナイ人ほど外国人を公職に迎えるのを警戒する人々もいなかったから、彼はきわめて高い評価を得ていたにちがいない。

この不均衡は、全体としては世間にとっては有害というよりはいささか有利なものだったかもしれない。公的教師という仕事を少し貶めるものではある。だが文芸教育の安さはまちがいに利点であり、このちょっとした不都合を大いに上回る。世間もまた、もし教育が実施されるそうした学校や大学の作りが、現在ヨーロッパの大半で見られるものよりももともとだったなら、そこからもっと大きな便益を得られるかもしれない。

第三に、ヨーロッパの政策は、労働と在庫の、雇用から雇用へ、また場所から場所への自由な流通を妨害することで、ときにはその各種個用の利点と欠点の相対に、きわめて不都合な不均衡をもたらす。

見習い制度の規定は、同じ場所においてすら、一つの雇用から別の雇用への労働流通を阻害する。組合の独占特権は、同じ雇用の中ですら、それが場所から場所へと流通するのを阻害する。

しばしば起こるのは、高い賃金がある製造業の職人には与えられるのに、別の製造業の

職人たちは、ギリギリ食っていけるだけの報酬で我慢しなければならないということである。この前者の産業は発展途上にあり、したがって絶えず新しい働き手の需要がある。もう一つの産業は衰退状態にあるので、働き手の超過がますます増えているのだ。この二つの製造業は、ときには同じ町にあり、ときには同じ近隣に所在することもあるのに、お互いにわずかなりとも手を貸すことさえできない。前者の場合には見習い制度がそれを阻害し、もう一つの場合には、見習い制度と独占組合がそれを阻害する。だが多くの製造業者においては、活動は実に似通っているので、そうしたバカげた法に邪魔されなければ、職人たちはすぐにその稼業を取り替えられるのである。たとえば普通の亜麻布を織る技術と普通の絹を織る技術とは、ほとんどまったく同じである。普通のウールを織る技術は少しちがう。だがそのちがいはあまりに些末であり、亜麻布や絹の織り手であれば、そこそこの職人にものの数日でなれる。だからそうした主要な製造業三つのうちどれかが衰退すれば、その職人たちはもっと繁栄した状態にある二つのどれかで働き口を見つけられるだろう。そして彼らの賃金は、繁栄する業種ではあまり高騰することはないし、衰退製造業であまり下がることもない。実際、亜麻布製造は、イングランドにおいてはある既定により、万人に開かれている。だがイングランドの大半ではあまり育てられていないので、他の衰退製造業の職人たちに一般的な働き口を提供はできない。そうした職人たちは、見習い制度が実施されているところでは、教区の施しを受けるか、一般労働者として働くしかない。そうした一般労働だと、彼らの技能は自分たち自身の仕事と多少なりとも似た産業と比べて、ずっと技能の適合性が低い。したがって彼らは一般的に、教区の施しを受けるほうを選ぶのである。

労働がある雇用から別の雇用へと流通するのを阻害するものはすべて、在庫の流通も阻害する。どんな事業部門であれ使える在庫の量は、その産業で使える労働の量に大きく依存する。だが組合法は、場所から場所への労働の流通を阻害するほどは、在庫の自由な流通は阻害しない。どこであれ、豊かな承認が町の組合で取引する特権を得るほうが、貧しい職人がその組合で働く許可を得るよりはずっと容易なのである。

組合法が労働の自由な流通に対して及ぼす妨害は、ヨーロッパのあらゆる部分で共通だと思う。救貧法がもたらす妨害は、私の知る限り、イングランド独特のものである。これは貧困者が、自分の所属する教区以外では住まいを見つけられず、自分の産業を実行することさえ許されないという困難で構成される。組合法で阻害されるのは、職人や製造業者の労働の自由な流通だけである。住処の獲得困難は、一般労働の流通さえも阻害してしまう。いまやイングランドの公安において他の何処よりも大きなものとなっている混乱の発生、展開、現状について、少し記述しておく価値はあるだろう。修道院の破壊により、貧困者はこうした宗教施設の慈善を奪われ、その後それを救おうといういくつかの試みが効果をあげられず、エリザベス女王の御代 43 年目の C.2 において、あらゆる教区が自区の貧困者を養う義務を負い、貧困者監督を毎年定め、それが教区委員と共に、教区税によってこの目的に見合う額を調達せよと定められた。

この定めにより、自区の貧困者を養う必要性が、あらゆる教区に逃れがたく課された。したがって、だれをそれぞれの教区の貧困者として考慮すべきかという問題がかなり重要となった。この問題は、多少の変化を経て、最終的にチャールズ二世王の御代 13 年目と 14 年目に最終的に決定された。どんな教区でも、どんな人物であれ 40 日にわたり中断せずに住み続ければ、そこはその人物の定住地とされるということである。だがその期間中は、教区委員や貧困監督からの苦情により治安判事二人が、最後に合法的に定住した教区

からあらゆる新居住者を排除するのが合法とされた。ただしその人物が年額 10 ポンドの住宅を借りるか、あるいは当時住んでいた教区に対して、そうした治安判事が十分と判断しただけの担保を排除に対して提供できる場合は除くものとされた。

この既定の結果としてある程度の不正が行われたと言われている。教区の担当者たちはときに、自分たちの貧困者にいろいろを渡してこっそり別の教区に行かせ、40 日にわたり身を隠しておくことで、そこに定住地を得て、本来所属していた教区からは除去されるようにするのだ。したがってジェームズ二世の御代一年目には、ある人物が定住地を得るために必要な、中断なしの居住 40 日は、自分が住みにやってきた教区委員や教区監督のだれかに、文書で住所と世帯人数を通知した時点から数えるものという規定が施行された。

だが教区の係官たちはどうやら、他の教区の貧困者に比べて自分の教区の貧困者たちに対して正直とは必ずしも限らなかったようで、ときにはそうした到来に対して策謀をめぐらし、通知を受け取りながら、それを発効させるための適切な手だてを講じなかった。したがって、教区のあらゆる人物はそうした侵入者により負担をかけられるのを阻止する利害を持っているはずなのでウィリアム三世の御代 3 年目には、40 日の居住は、そうした通知が文書として教会で日曜日に、ミサの直後に公表されてからのみ発効することが定められた。

バーンズ博士によれば「結局のところ、文書による通達の公表から 40 日継続することで得られるこの種の居住地は、ほとんど獲得されることがない。そしてこうした規定の設計は、居住地を得るためというよりは、こっそり教区にやってきた人々の居住地獲得を回避することである。というのも通達を行うというのは教区にそれを除外せよという圧力をかけることだからなのである。だがその人物の状況が、本当に排除可能かどうか怪しいようなものであれば、その人物は通達を行うことで、教区にその人物を 40 日居続けさせて黙って居住地を認めさせるか、そんな権利を試させずに排除するかのどちらかを選ぶよう強いるのである」

したがってこの規定は、貧困者が古いやり方、つまり 40 日にわたり住み続けることで新しい居住地を得るのをほぼ不可能にしてしまった。だが、ある教区の一般人が他の教区に安全に定着することが決してできないようにしていると思われないうに、この規定は通達を行ったり公開したりしなくても、居住地を獲得できる方法を他に四つ明記している。最初の方法は、教区の税率で課税されてそれを支払うこと。二番目は、年次教区委員に選ばれ、一年にわたりそれを務めること、三番目はその教区で見習いとして務めること、四番目はそこで行う仕事に一年にわたって雇われ、その期間にずっと同じ仕事を継続することである。教区全体の公式証文なしに最初の二つのやり方で定住地を得ることができる者などいない。教区は、自分の労働以外に生計を立てる方法がないあらゆる新参者を、教区の税率で課税するか、教区委員に選出することで受け入れる結果について熟知しているのだ。

既婚男性は最後の二つのやり方のどちらでも居住地を得ることなど不可能である。見習いはほとんど結婚などしていない。そして既婚召使いは一年雇われることで居住地を得ることはないと明記されているのである。奉仕により居住地を得るという規定の主要な影響は、一年にわたり雇うという古い雇用のやり方を大がかりにつぶしてしまうことであった。このやり方は以前はイングランドできわめて通例だったので、今日においてすら、何か雇用期間が合意されていなければ、法はあらゆる召使いが一年雇われるものと想定している。だがご主人たちは必ずしも召し使いたちをこのような形で雇うことで居住地を与え

たいとは思っていない。そして召使いたちもこのように雇われるのを必ずしも喜ばない。というのも、新しい定住地はそれ以前の定住地をすべて無効にしてしまうので、生まれ故郷の場所にある元の居住地、両親や親戚の住む場所を失いかねないからだ。

労働者であれ職人であれ、独立労働者が見習いを通じてでも奉仕を通じてでも新しい居住地を得る可能性がほぼないのは明らかである。したがってそうした人物が己の産業を新しい教区に持ち込むと、いかに健康で生産的であろうとも、教区委員や統括者の気まぐれで排除されかない。年額十ポンドの借家を借りれば別だが、生計をたてるために労働しない人物にはそんなことは不可能であり、また治安判事二人が十分と判断しただけの担保を排除に対して提供するなどということも無理だ。

実際、彼らがどんな担保を要求するかは、まったく彼らの裁量に任されている。だがどう見ても必要額を 30 ポンド以下ですませるわけにはいかないだろう。なぜなら 30 ポンドに満たない自由保有不動産を購入しても、それは教区の支出にとって十分ではないから、何人たりとも居住地が与えられることはないと定められているからである。だがこれは、労働で働く人物にはほぼまかなえない担保となるし、しばしばずっと多額の担保が要求されることもある。こうした各種の規定がほぼ完全に潰してしまった労働の自由な流通を、ある程度は回復させるために行き着いたのが、証明書の発明だった。ウィリアム三世の御代 8 年目と 9 年目に、最後に合法的に定住した教区からの証明書を持参し、それに教区委員や貧困者監督の署名があり、治安判事二人に認められていれば、他の教区はすべてその人物を受け入れる義務がある。そして単に犯罪を犯しそうだというだけでは排除できず、実際に犯罪を犯さなければ排除できない。そして排除された場合には、その証明書を発行した教区がその人物の維持と排除の費用を負担しなければならない。そしてそうした証明書を持った人物が居住にやってくる教区に最も完全な安全保障を与えるために、同じ条例によりその人物は年額 10 ポンドの賃貸住宅を借りるか、あるいは丸一年にわたり年次教区委員を自腹で務める以外のいかなるやり方でも、その教区に居住地を得ることはできないと定められている。つまりは通達や奉仕や見習いや教区の税金を支払うことでは居住地を得られないということだ。またアン女王の御代 12 年目の条例 1c.18 によれば、そうした証明書を持つ人物の召使いや見習いたちも、そうした証明書のもとにその人物が住む教区ではまったく居住地を得られないと定められている。この発明が、それまでの規定によりほぼ完全に奪われた労働の自由な流通をどこまで回復したかについては、バーン博士による以下のきわめて賢明なる観察から分かるというものだ。「どこかに人が居住しにやってくるときには、証明書を求めることにはいくつかよい理由がある。つまりそれを持って居住していれば、見習いや召使い勤務や通知や教区税支払いなどがあっても定住地は与えなくていい。見習いや召使いをいっしょに定住させなくていい。追放することになったら、どこに追い出せばいいかははっきりわかるし、その排除とその人物の滞在維持費について教区は支払いを受けられる。そして彼らが病気になり排除できなくなれば、証明書を発行した教区がそれを養ってくれる。こうしたすべては証明書なしでは行えない。こうした理由は、それとまったく同じだけ、教区が証明書を与えない理由にもなる。というのも、その証明書を出した人物がまた舞い戻ってきて、しかも以前より悪い状態になっている可能性が五分五分以上にあるからである」。この指摘の教訓はどうか、貧困者が住みにやってくる教区は常に証明書を要求するはずで、その人物が離れたと思っている教区はそれをなるべく出さないようにするはずだ、というものとなる。この同じきわめて知的な著者は著書『救貧法の歴史』で次のように述べる。「この証明書の問題にはいささ

かの困難がある。教区委員はまさにある人物を、いかにその人物にその教区で不都合があらうとも、あるいは他の場所に居住することでいかに利益が得られようとも、不幸にも定住権というものを獲得してしまった場所で、終身投獄する権利を持つことになってしまうのである」

証明書は、よい行いの証言などともなうものではないし、その人物が本当に所属する教区に所属しているという以上の何も証明はしないのがだ、それを与えるか拒絶するかは、教区委員の完全な裁量下にある。バーン博士によれば、教区委員や監督に証明書署名を強制するような勅書発行の動議が出た。だが王座裁判所はその動議を、きわめて奇妙な試みであるとして却下した。イングランドできわめてしばしば見られる、対して離れていないところでも生じるきわめて不均一な労働価格は、おそらくある教区から別の教区へ証明書なしに自分の生産力を移動させようとする貧困者に対して定住地法が課す妨害のせいだろう。独身男性なら、健康で生産的であれば、ときには証明書がなくても黙許で居住することはできる。だが妻や家族がいてそれを試みる男性は、ほとんどの教区では、まちがいなく排除される。そして独身男性でもその後結婚したら、一般には同様に排除される。したがってある教区で働き手が足りなくても、別のところで大いに余っている働き手により必ずしも不足が解消されることはない。スコットランドや、おそらく他の定住に困難が何も無い諸国ではそうした不均衡はすぐに解消されるのだ。そうした国々では、賃金は大都市近郊や労働需要がきわめて高いところでは少し賃金が高くなり、そうした場所から遠ざかるにつれて少しずつ下がり、田舎の通常の水準に戻る。だがイングランドでときどき見かけられるような、隣接した場所で賃金にいきなり不可思議にも差が生じるようなことはない。イングランドでは、貧困者が教区という不自然な教会を越えるのは、海を越えたり、高い山の峰を越えたりするよりもむずかしいのだ。他の国でも、そうした自然の境界が大幅にちがう賃金率を区切ることはある。

何ら違法行為をしていない人物を、住むのに選んだ教区から排除するのは、明らかに自然な自由と正義の侵害である。だがイングランドの一般人は、自分の自由はやたらに大事にする区政に、他のほとんどの国の一般人と同様に、その自由がどこに存在しているかをまともに理解できて織らず、いまやあわせて一世紀以上にわたり、この抑圧により自らを苦しみつつ、それに対処できずにいる。思索家たちもまた、ときには居住地法について公式の懸念事項として苦情を申し立ててきた。だが一般令状に反対するような世間全般の抗議の対象には一度もなっていない。一般令状は確かに濫用される慣行ではあるが、社会全体の抑圧をもたらすようなものではなかった。40歳のイングランドの貧困者で、人生のどこかでこのひどい作られ方の居住地法により、きわめて残酷な形で抑圧された経験のない人物は一人もいないだろうと私は敢えて言おう。

この長い章を終えるにあたり、以下の指摘をしておこう。昔は賃金水準を決めるのに、まず王国全体に広がる一般法則を見て、その後に個別郡の治安判事が出す個別の命令を見るのが普通だったが、こうした慣行はいまやすべて完全に使われなくなってしまった。バーン博士によれば「上記の400年の経験により、その独自の性質により細かい制約をかけるのが不可能に思えるものを、厳しい規制下に置こうとするあらゆる試みを捨て去るときがきたようである。というのも、同じ種類の仕事のあらゆる人物が等しい賃金を受け取るのであれば、模倣もなく、興産性や工夫の余地はなくなってしまうからである」

だが議会の個別法は、いまだにときどき個別産業の賃金や個別地域の賃金を規制しようとする。このためジョージ三世の第八法制では、ロンドンとその周辺五マイルのあらゆる

仕立て屋の親方が、大喪の場合を除いて、その職人たちに対して一日二シリングと 7.5 ペンス以上を支払ってはならず、また職人たちもそれ以上を受け取ってはならないという禁令を、思い罰則とともに定めた。立法者たちが、親方と職人との差を規制しようとするとき、相談を受けるのは必ず親方がのほうだけである。したがって規制が職人に有利な場合には常に公正で平等なものである。だが親方有利の場合には、そうでないこともある。したがって、いくつかちがった業界において、親方が職人に現物支給ではなく金銭支払いを義務づける法律は、きわめて公正で平等なものだ。親方たちに特に困難を課すわけではない。その価値を金銭で払うように命じただけである。現物払いでは、それだけの価値を支払っているふりをしつつ、いつも必ずしもそれだけのものを支払っているとは限らなかったのだ。この法律は職人が有利である。だがジョージ三世の第八法制は親方が有利となっている。親方たちが結託して職人たちの賃金を引き下げようとするとき、いっばんに私的な提携や合意を行い、不利益となる一定の賃金以上は払わないようにする。職人たちが逆に同種の団結を行って、ある水準の不利益となる賃金は受け取らないようにすると、法はそれを厳罰に処する。だが分け隔てなく扱っていれば親方たちのほうも同じように扱われるはずだ。だがジョージ三世の第八法制では、親方たちがそうした提携を行って確立しようとするのと同じことを法律で施行する。これでは最も有能で生産的な職人が普通の職人と同じ立場に置かれてしまうという職人たちの苦情は、まったく理にかなったものに思える。

古代には食料その他の財の価格を規制することで、商人たちなどの取引人の利益を規制しようとするのがよくあった。この古いやり方の唯一の名残は、私の知る限りでは、パンの法定価格だけである。もし独占的な組合が存在するのであれば、生きるにあたって一義的に必要となるものの価格を規制するのは適切かもしれない。だがそんな組合がないなら、競争のほうが進んだ法定価格よりもそれをうまく規制してくれる。パンの法定価格固定は、ジョージ二世の 31st により制定されたが、法の欠陥によりスコットランドでは施行できなかった。その執行は市場の経理事務所に依存していたが、スコットランドにはそれがなかったからである。この欠陥は、ジョージ三世 third まで改められなかった。法定価格がなくても、何もまともな不都合は生じなかった。そしてそれがまだ実施されていなかった数カ所で、それが確立されたところで、まともな利益は何も生まれていない。だがスコットランドの町の多くでは、独占特権を主張するパン屋の組合がある。とはいえそれらはあまり厳密に遵守されていないのだが。賃金と利潤の双方の水準の差は、労働と在庫のちがった雇用において、すでに述べた通り、その社会が豊かか貧しいか、進歩しているか停滞しているか、衰退しているかによってはあまり影響を受けていないようだ。こうした公共の福祉の変動は、賃金や利潤の全体的な水準には影響するが、最終的にはあらゆるちがった雇用すべてに平等に影響する。したがって、それらの間の比率は同じのままであるはずで、そうしたどんな変動によっても、少なくともそれほどの長期にわたっては、変えられたりはしないのである。

第 11 章

地代について

地代は、土地の利用に対して支払われる価格であり、当然ながら借り手がその土地の実情に対して支払える最高の金額となる。借地の条件を調整するとき、地主は借り手に対し、種子の購入や労働者への賃金、耕作のためのウシやその他道具を購入して維持するための費用を賄い、さらにその近隣における農業在庫の通常の利潤をあわせた金額以上の産物の取り分を残そうなどとは思わない。これは明らかに、借り手自身が損をせずに満足できる最小限の割合であり、地主は借り手にそれ以上のものを残そうなどすることはほばない。この割合を超える分の産物、あるいは同じことだが、その価格の部分について、地主は当然ながら地代として自分の懐に入れようとする。これは明らかに、土地の実際の状況において借り手が支払える最大のものとなる。確かにときには、地主の鷹揚さ、あるいはもっと多いのが無知により、この割合よりも少し少なめの地代を容認してしまうこともある。そしてときには、こちらはもっと珍しいことだが、借り手の無知により地代を多めに支払ってしまう、あるいはその近所における農業在庫の普通の利潤より少し少ない金額しか手元に残らなくても満足してしまうこともある。それでも、この割合はやはり、自然な地代、あるいはその土地がおおむね貸し出されるべき自然な地代であると考えられる。

地代は、しばしばその改良のために地主が支出した在庫に対する適切な利潤または利子にすぎないことが多い、とも言える。まちがいなく、一部の場合にはそうしたケースも部分的にある。とはいえそれは、部分的なケース以上のものではない。地主は未改良の土地に対してすら地代を要求するし、その改良費用に対する利子や利益なるものは、一般に元の地代に上乗せされるものだからだ。さらにそうした改良は必ずしも地主の在庫を使って行われるわけではなく、借り手の在庫により行われることもあるのだ。だがその場合でも賃貸契約を更新するときには、地主はその改良が自分の支出で行われたかのように、同じだけ賃料をうわの性して要求するのが普通である。

地主はときに、人間による改良がそもそも不可能なものにまで地代を要求する。ケルプは一種の海藻で、燃やすとアルカリ塩がとれて、これはガラス、石けんなどいくつかの製造に有用となる。グレートブリテンでは何カ所か生えているが、特にスコットランドに多く、高潮線の下にあって一日2回海に覆われる岩の部分にだけ生えるのであり、その産物はしたがって、人間の生産性により補われたことは一度もない。だがこうしたケルプの生える岸辺に囲まれた所領を持つ地主は、小麦畑と同じくらいそれらについても地代を求めるのである。

シェトランド諸島の近くの海は、普通よりも魚が豊富であり、それがその島の居住者たちの食料の大きな部分を占める。だが水の産物で利益を得るためには、隣接する土地に住

居を持たねばならない。地主の課す地代は、農民がその土地で作れるものに比例するのではなく、土地と水の両方から得られるものに比例する。その一部は海の魚で支払われる。そして、その商品価格の一部を地代が構成するというきわめて珍しい事例の一つが、この地方で見られるのである。

したがって地代は、土地の使用への対価として支払われるものと考えられるが、自然と独占価格になる。それは地主が土地改良に支出したものや、地主が得られるものにはまったく比例せず、農民が提供できるものに比例するのである。

こうした土地だけの産物の部分は普通に市場に出され、その通常価格だけでそれを、普通の利潤込みで販売するための在庫を補充するには十分なのである。通常価格がそれ以上であれば、その余剰部分は当然ながら地代にまわされる。それ以上でなければ、商品は市場に出されても、地主には地代を提供できない。その価格が通常価格より高いか低いかは、需要次第となる。

土地の産物の一部は、需要が常にそれを市場にもたらすよりも高い価格をつけられるようなものもある。そして、その高い価格を必ずしもつけられるとは限らないものもある。前者は常に地主に地代を支払える。後者は状況に応じてときどきは払えるし、ときどきは払えない。

ここからわかる通り、地代は賃金や利潤とはちがった形で商品の価格構成に入ってくる。賃金や利潤が高かったり低かったりすれば、それに応じて価格も高かったり低かったりする。地代の高低はその結果なのである。ある商品を市場にもたらすためには、高い/低い賃金や利潤が支払われねばならず、それが価格の高低を引き起こす。だが、それが高い地代か低い地代か、あるいはまったく地代が払えないかは、その価格がそうした賃金や利潤を支払うのに十分な水準よりも高いか低いかで決まる。すごく高ければ地代も高いし、低めならば低い地代になるし、ほとんど高くなければまったく地代は払えないのだ。

土地の産物のうち、必ず地代を払えるもの、第二にときどきは地代が払えるがときどきは払えないもの、第三に土地改良のさまざまな段階で、そうした2種類の粗産物のうち、お互いに、あるいは製造した商品と比べたときの相対的な価値の変動について考えよう。これらを別々に考えるので、本章は三つに分かれる。

第1部: 常に地代を支払える土地の産物

人間は、他の動物すべてと同様に、得られる食べ物に比例して自然に子どもを増やすので、食べ物は大自然より小なり需要されている。食べ物は常に、大自然より小なりの量の労働を買えるし、それを得るために何かをしようという人間は常に見つかる。食品が買える労働の量は、確かに最も経済的な形で管理しても、その食品で維持できる労働の量と等しいとは限らないこれはときどき労働にきわめて高い賃金が与えられることもあるからだ。だが食品は常に、その種の労働がその近隣で一般に維持されているような賃金水準に応じて、それが維持できるだけの労働量を購入できるのである。

だが土地は、ほとんどどんな状況でも、そこで作った食物を市場にもたらすのに必要なすべての労働を維持するのに十分な量を上回る食物を生産できる。これは、その労働を最も好き勝手な形で維持する場合ですら言えることだ。またその余剰は、常にその労働を雇用した在庫を補充し、その利潤を出すのにも十分である。したがって、常に何かしらは地主への地代として残るのである。

ノルウェーとスコットランドの無人の荒れ地は、牛の一種の放牧地となり、その牛乳と牛の増加は常に、その世話をするのに必要な労働を維持し、その牛の群れの所有者や農民に普通の利益をもたらしのに十分なだけでなく、地主にも少し地代を払える。地代はその牧草地のよさに比例して高くなる同じ広さの父が養える牛も多くなるし、しかももっと狭い面積だけで養えるから、その面倒を見て産物を集めるのに必要な労働も少なくなる。地主は二つの形で利益を得る。産物が増えるのと、その収益から維持しなくてはならない労働の減少である。

土地の地代は、産物がなんであれその肥沃さと、その肥沃さがどうあれ立地によっても変動する。町の近くの土地は、同じくらい肥沃でも田舎のもっと遠くにある土地よりも地代が高い。どちらを耕作するにも必要な労働は変わらないが、その産物を遠くの土地から市場に運ぶのは常にもっと費用がかかる。したがって、その収益からまかなうべき労働は多くなるし、農夫の利潤と地主の地代を捻出すべき余剰分はそれだけ減る。だが国の遠隔地では、利潤率はすでに示した通り、大都市近辺よりも高いのが普通である。したがって、この少なくなった余剰分のうち、地主に行く分はさらに減ることになる。

よい道路、運河、航行可能な河川は、輸送費を減らすことで、国の遠隔地をもっと町の近隣にある地域と同じ水準に近づける。これらはそうした意味で土地改良の中でも最高のものとなる。それは遠隔地の耕作を奨励することになるが、そうした遠隔地は常に、国の中で最も広大な輪となっているのだ。町にとっても、その近隣地域の独占を打破できるという意味で、利益をもたらす。そしてその町の近隣地域にとってさえ有利となる。古い市場に競合商品がある程度はもたすが、その産物に対する新しい市場をたくさん開くからだ。さらに独占は、よい経営の大いなる敵である。よい経営は、万人が自衛のためにそれに頼るしかないよう強制する、あの自由で普遍的な競争なくしては、決して普遍的に確立されないからである。ロンドン近郊の郡が議会に対し、ターンパイク道をもっと遠隔の郡に延伸するのに反対する陳情を行ってから、50年もたっていない。こうした遠隔の郡は、労働の安さのために、草や小麦を自分たちよりロンドン市場に安く売れるので、自分たちの地代が下がり、自分たちの耕作が台無しになるのだ、と彼らは思い込んでしまったのである。だが実際にはかれらの地代は上がり、耕作はそれ以来改善した。

中程度の肥沃さを持つ小麦畑は、同じ面積の最高の放牧地よりもずっと多量の食物を生産する。その耕作に必要な労働はずっと多いが、種子を補充してそれだけの労働を維持した後に残る余剰もまた、やはりずっと多い。したがって、肉屋の肉一ポンドが、一ポンドのパンよりも決して高値になってはいけけないのであれば、この余剰の多さはどこでも価値の多さをもたらす、農民の利潤と地主の地代の双方にとって、大きな原資となるのである。これは農業の粗雑な始まりにおいて、あらゆるところで見られたらしい。

だがこのちがった2種類の食品、パンと肉の相対価値は、農業の時期が違えば大いに変わってくる。その粗雑な始まりでは、当時国の大半を占めていた土地改良されない原生地は、ほとんどは手つかずで牛用になっていた。パンよりも肉のほうが多かったので、このためパンが最大の競争を持つ食品となり、結果として最大の価格をもたらすものとなった。ウロアの話では、ブエノスアイレスだと4レアル、つまりイギリス通貨だと21.5ペンスが、2、300頭の群れから選んだ牛一頭の通常価格だったという。パンについては何も語っていないが、それはそこにことさら驚くべきことがなかったからだろう。彼によると、そこでの牛の価格は、その牛を捕まえる労働の費用とほとんど大差ない。だが小麦はどこでも大量の労働なしには育成できない。そして当時はポトシ銀山からヨーロッパにまっす

ぐつながら道であるラプラタ川沿いにあるこの国では、労働の金銭価格はきわめて安い。耕作が国の相当部分に拡大すると話は変わってくる。そうすると肉よりもパンのほうがたくさんある。競争の向きが変わり、肉の価格のほうがパンの価格より高くなるのだ。

さらに耕作を拡張することで、土地改良なしの原野は、肉の需要を満たすのに不十分となる。耕作地の相当部分が牛の育成と肥育に使われねばならない。すると牛肉価格は、その牛の飼育に必要な労働だけでなく、そうした土地を耕作に使った場合に地主が受け取る利潤や、農夫が受け取る利潤の分を支払えねばならない。まるで耕作されていない原野で育った牛は、同じ市場につれてこられれば、その重量や肉質に応じて、最もしっかり土地改良された土地で育った牛と同じ価格で販売される。そうした原野の所有者はそれで儲かるし、その牛の価格に比例して自分たちの土地の地代を上げる。スコットランドのハイランドでは、肉がオートミール製のパンと比べてすら、同じくらいかそれ以下の値段だった時代から、まだ一世紀もたっていない。イングランドとスコットランドの合併により、イングランド市場がハイランド産の牛に開かれた。その通常価格は現在では、今世紀初頭より三倍も高く、多くのハイランド所領の地代は同時に三倍、四倍にもなった。グレートブリテンのほとんどあらゆる場所では、最高の肉一ポンドは現在、最高の白パン二ポンド以上の価値を持つ。そして方策の都市には、三ポンド、四ポンド分の値段にもなるのだ。

このようにして、土地改良の進捗とともに、未改良の放牧地の賃料や利潤も、改良された土地の賃料や利潤と同じ形で左右されるようになるし、その変動は小麦の賃料や利潤にも左右される。小麦は年次作物である。肉は飼育に4、5年かかる。したがって、土地一エーカーは、前者よりも後者の食物をずっと少なく生産する。その量の少なさは、高い価格で補わねばならない。それが補われる以上の水準となれば、小麦畑はもっと放牧地に帰られるし、補われなければ、放牧地だった部分の一部は小麦耕作に戻る。

だが、草と小麦の地代や利潤の等価性、直接の産物が牛の食物である土地と、人間の食物である土地との等価性は、大きな国で改良済みの土地が多いところでのみ起こることは理解しなくてはならない。一部の局所的な状況では、話がまったくちがいで、草の地代や利潤のほうが、小麦で生み出せるものよりもずっと高い。だから大きな町の近隣では、牛乳の需要や、馬の飼料の需要が、肉の高い価格と相まって、草の価値を小麦に対する自然な比率とも言うべきものより高くしてしまうことも多い。当然ながら、この局所的な有利性は、遠くの土地には伝わるものではない。

特殊な状況により、一部の国はあまりに人口が増えすぎて、その領土全体が、大きな町の近隣地のように、その住民が生きるための草と小麦の両方を生産するには不十分なことがある。このため彼らの土地は主に、草の生産に使われている。この財のほうがかさばるし、遠くからそう簡単に運んではこれないからだ。そして住民の大半の食物となる小麦は、主に外国から輸入される。現在のオランダはこのような状況にある。そして古代イタリアのかなりの部分も、ローマ帝国繁栄の時代には同じ状況にあったようだ。キケロによると、私有所領の経営において何より優先されて儲かったのは、飼料を十分作ることであり、二番目に優先されたのは、そこそこ飼料を作る事、三番目はあまり飼料を作らないことだ、と大カトーは言ったとか。彼は耕作を、利潤と優位性の面で第四位にしか置いていない。実際、ローマ近郊の地域にあった古代イタリアの地方では、無料またはきわめて低価格で人々のしばしば提供された小麦の頒布により、耕作はきわめて奨励されなかったはずである。そうした小麦は征服地からもたらされた。そうした地方の一部は、税金のかわりに、生産物の十分の一を決まった価格で共和国に提供するよう義務づけられていた。そ

の決まった価格は、1 ペック (訳注：9 リットルくらい) あたり 6 ペンスだった。この小麦が人民に頒布された低価格のおかげで、必然的にラティウム、つまり古代ローマ領からローマの市場にもたらされた小麦の価格は引き下げられ、同国での小麦耕作はそのため敬遠されたはずだ。

また主な生産物が小麦である開放国でも、しっかり囲われた草地はしばしば、その近隣にある小麦畑よりも高い賃料となっている。小麦耕作に使われる牛の飼育に便利だからで、その高い地代は、この場合にはそれ自体の産物の価値に対してのみ支払われるのではなく、それを手段として耕作される小麦畑の産物の価値から支払われている。近隣の土地が完全に囲われた放牧地になれば、その地代はおそらく下がる。スコットランドにおける囲われた草地の高い賃料は、どうやら囲われた放牧地が希少なために生じているらしい。その希少性がなくなれば賃料も下がるだろう。囲われた草地の利点は、小麦よりも放牧地としてのほうが高いのである。牛を警備する労働が節約できるし、牛も牛飼いやそのイヌに邪魔されないほうが、よく草を食べるのである。

だがこの種の地元の利点がない場合、小麦またはその他人々の一般的な植物性食物がなんであれ、自然にその生産に適した土地に対しては、放牧地の地代と利潤が影響するのである。

人工的な草、蕪やニンジン、キャベツなど、同じだけの土地が天然の草よりも多くの牛を養えるようにする各種の便宜手段は、土地改良の済んだ国において、肉の価格が自然にパンに対して持つべき優位性を、ある程度は引き下げるはずだと思えるかもしれない。確かにその通りらしい。そして少なくともロンドン市場では、肉の価格は、パンの価格との比率で、前世紀初頭よりは現在のほうがずっと低いと信じるべき理由はそれなりにある。

『ヘンリー王子の生涯』補遺で、バーチ博士はその王子が普通に支払った肉の価格について記述している。それによると重さ 600 ポンドの雄牛の 1/4 が 4 個で、普通は 9 ポンド 10 シリングくらいの値段になったという。つまりは重さ 100 ポンドあたり、31 シリング 8 ペンスということだ。ヘンリー王子は 1612 年 11 月 6 日に、19 歳で死亡した。

1764 年 3 月、当時の高い食品価格の原因について議会の調査が行われた。そのとき、他の同じ目的のための証言に混じって、ヴァージニアの商人による証言があった。それによると 1763 年 3 月に、かれは自分の船のために 100 ポンドの牛肉に対して 24、25 シリングを支払い、それが普通の価格だと考えたという。これに大使、その同じ都市に同じ重量と質の肉に対してかれは 27 シリングを支払っている。この 1764 年の高い価格は、ヘンリー王子が支払った普通の価格よりも 4 シリング 8 ペンス安い。そしてそうした遠洋航海のために塩漬けにできるのは、最高の牛肉だけなのだという点は考慮しなくてはならない。

ヘンリー王子が支払った価格は肉の塊すべて、つまり高級な部位も低級な部位もあわせたもので、それが 1 ポンドあたり 3d. 4/5 の価格となる。そしてそれがこの値段ということは、高級な部位は 1 ポンドあたり 4.5d. あるいは 5d. 以下で売れたはずはないということである。

1764 年議会調査で、証人たちは消費者にとっての最高の牛肉の高級部位の価格は 4d. および 4.5d. だと述べている。そして低級部位は一般に、7 フェージングから 2.5 d. および 2.75d. 程度とのことである。そしてこれは、3 月に通常売られていた同種の肉よりもおおむね 0.5 ペニー高いとのことである。だがこの高い価格ですら、ヘンリー王子の時代における通常の小売価格と考えられるものよりもずいぶん安い。前世紀の最初の 12 年

で、ウィンザー市場における最高の小麦の平均価格は、9 ウィンチェスターブッシェルのクォーターで £ 1:18:3½d. であった。

だが 1764 年を含みそれ以前の 12 年で、同じ市場における同じ指標の小麦の平均価格は £ 2:1:9½d. であった。

つまり前世紀最初の 12 年には、小麦は 1764 年を含みそれに先立つ 12 年よりも、小麦はずっと安く、肉はかなり高かったようだ。

あらゆる大国では、耕作地の相当部分は、人間の食物か家畜の食物の生産に使われている。そうしたものの賃料と利潤は他のあらゆる耕作地の賃料と利潤を j 左右する。何かある産物がそれをまかなえなければ、その土地はやがて小麦畑か牧草地に変えられる。そして何かがそれ以上をまかなえるなら、小麦畑や牧草地の一部はやがてその産物に向けられる。

作物の中で、土地を適合させるために最初に土地改良に必要な費用が多いか、あるいは耕作のための年次費用が高いようなものは、一般に前者は高めの地代、後者は高めの利潤を小麦畑や牧草地に比べてもたらすようだ。だがこの優位性は、その費用が多い分の適切な金利または補償を上回ることとはほとんどない。

ホップ畑、果樹園、野菜畑では、地主の地代と農夫の利潤は、一般にドングリ畑や草地よりも高い。だが土地をそうした畑にするために必要な費用はずっと多い。したがって、地主に帰属する地代もその分だけ多くなる。またそうした作物は、運営にもっと手がかかるし技能も必要となる。したがって、農夫に帰属する利潤も高くなる。また作物は、少なくともホップと果樹園では不安定となる。したがってその価格も、たまの損失すべてを補うだけでなく、保険のような利潤を確保しなくてはならない。庭師たちの置かれた状況は、一般に乏しいし常に慎ましいものだから、その大いなる創意工夫が一般には過剰に補償されるようなことはないと思っていいだろう。彼らのすばらしい技芸は実に多くの金持ちが娯楽のために実践しているので、それを利益のために実践する人々も大した優位性を持っていない。本来なら最もよい顧客になるはずの人々が、その最も貴重な産物のすべてを自分で供給するからである。

こうした改良から地主が得る利点は、いつの時点でもそれを行うための元の費用を補うのに十分な金額より大きかったことは決してないようだ。古代の農業においては、ブドウ畑に続いて、十分に水をやった菜園は、畑の中で最も価値ある産物を作る部分だったらしい。だが二千年ほど前に農業について書いたデモクリトスは、古代人に農業の父と見なされていたが、野菜畑を囲うのは賢明な行為ではないと考えていた。その利潤は石壁の費用を補ってはくれない。そしてレンガ（たぶんこれは日干し煉瓦のことだろう）は雨と冬の嵐で崩れるので、絶え間ない修理が必要だ。このデモクリトスの判断を伝えているコルメラは、それを否定はしないが、それを野バラやイバラの生け垣で囲むというきわめて儉約的な手法を提案している。彼はこれが、永続性もあるし侵入不可能な柵となるのだと自らの経験により知ったと述べる。だがこれはデモクリトスの時代にはあまり知られていなかったらしい。パラディウスはコルメラの意見を採用し、これはまたウァッロもそれ以前に推奨している。こうした古代の工夫者たちの判断からすると、菜園の産物はどうやら、きわめて大きな工作の手間と水やりの費用以上にはまったくならないものらしい。というのも太陽にきわめて近い国では、当時も今も、小川を使えるようにして、庭園のあらゆる部分にそれを流すようにするのが適切とされていたからだ。ヨーロッパの大半においては、菜園は現在ではコルメラが推奨したもの以上のしっかりした囲いを必要とするものと

はされていない。そしてその他一部の北部の国では、もっと高級な果物は壁の支援なくしては熟すことはできない。したがってこうした国々でのその価格は、不可欠なものを作り維持する費用を捻出するのに十分でなければならない。果実壁がしばしば菜園を囲むことも多く、菜園は自分の産物だけでは決してまかなえない囲みの便益を享受するのである。

あらゆるワイン産地国では、適切に植樹されて完成されたブドウ畑こそが農場で最も価値ある部分だったというのは、現代でも古代でも疑問の余地なき金言だったらしい。だが新しいブドウ園を植樹するのが有利かどうかは、古代のイタリア農民にとって議論の種だったとコルメラは述べている。彼は、あらゆるおもしろい耕作の真の愛好者らしく、ブドウ園支持の判定を下した。そしてそれがきわめて有利な改良だったということを、利潤と費用の比較によって示そうとする。だがこうした新プロジェクトの利潤と経費との比較は、きわめてあてにならないのが通例である。そして農業ではこれが特に顕著だ。そうした農園が生み出す利得が、本当に彼の想像したほど一般に大きければ、そもそもそんなことが議論にはならなかったはずだ。同じことが今日でもワイン諸国では議論的となっている。そうそうた国々で農業について書く作家たち、実際、高地耕作の愛好者や推進者たちは一般に、コルメラと同様にブドウ畑支持の決定を下しがちである。フランスでは、古いブドウ園所有者たちが、新しいブドウ園の植樹をすべて防ごうとする懸念ぶりを見ると、ブドウ園支持の意見が正しいようであり、経験を有する人々の意識の中には、この栽培作物は同国では現在、他のどんなものよりも儲かるはずだという考えがあることを示唆している。だが同時にその一方でこれは、この高い利益は現在ではブドウの自由な耕作を制約している法律以上に長続きするはずはないという別の意見を示唆しているようだ。1713年に、彼らは新しいブドウ園の植樹と、耕作が二年中断した古いブドウ園の更新は、王からの特別な許可がなければ禁止する評議会命令を獲得した。そしてその特別な許可は、その地域の管理官によって、その土地を自ら検分し、それ以外の作物は作れないと証明する一報の結果としてのみ発行されるのである。この命令の口実というのは、小麦と牧草地が希少であり、ワインがあまりに過剰だというものであった。だがこの過剰なるものが本当なら、評議会命令などなくても、この耕作作物の利潤が小麦や牧草に帯する自然な比率よりも下がることで、しっかり新しいブドウ園の植樹などは止められたはずである。ブドウ園が増えすぎたために小麦が不足したと称する口実について言えば、小麦がフランスのどこよりも慎重に耕作されているのは、土地がそれを生産するに適しているワイン生産地方なのである。ブルゴーニュ、ギュイエンヌ、上部ラングドックなどである。ある耕作作物の雇用されている無数の労働者は、必然的にもう片方の産物の確実な市場を提供するので、もう片方の産物の生産も奨励される。それに対して支払える者の数を減らすのは、まちがいなく小麦耕作奨励の最もまずい手段であろう。それは製造業を阻害することで農業を促進しようとする政策のようなものだ。

したがってこのような、土地を適切なものにするために必要な当初の土地改良費用が高いか、あるいは毎年の耕作費用が高い生産物の地代と利潤は、小麦や牧草のものよりずっと高いとはいえ、そうした追加の経費を補う以上のものではないし、現実にはそうした通常の作物の地代と利潤に左右されているのである。実際、ときどきあることだが、ある特定作物向けに適応させられる土地の量は、実効需要を満たすには小さすぎることがある。するとその作物すべては、それを生産して市場にもたらすのに必要となる地代、賃金、利潤すべてを、その自然な水準か、あるいは他の耕作地の相当部分で支払われている水準にあわせて十分以上に負担してくれる者に提供されることになる。土地改良と耕作の費用す

べてを支出した後で残る、価格の余剰部分は、この場合は、そしてこの場合にのみ、一般的には小麦や牧草の同様の余剰と一定の比率を示すことはなく、それをいくらでも上回ることができるのである。そしてその上回った部分の大半は、当然ながら地主の地代となるのである。

たとえば、小麦と牧草の地代や利潤と、ワインの地代や利潤との間に見られる通常の自然な比率は、ほとんどどこでも、どんな軽い、砂利気味、砂がちの土壌でも育てられ、その強さと豊穡さ以外に何も取り柄がない、よい普通のワインしか生産できないブドウ園についてのみ生じるものだという事は理解しなくてはならない。その国の一般的な土地が競争下に置かれるのは、そうしたブドウ園の場合のみなのである。特殊な性質を持つ土地だと、それができないのは自明である。

ブドウの木は他のどんな果樹よりも土の種類に影響される。一部の土からは、どんな耕作や手入れでもほかの土では真似のできないとされる味わいを引き出す。この味わいは、本物にせよ思いこみにせよ、ときには少数のブドウ園の作物に特有である。その一部はある小さな地区の相当部分に広がっている。そしてときには、それは広い地域のかかなりの部分を占めていることもある。こうしたワインのうち市場に出る総量は、有効需要、あるいはそれを作って市場にもたらすのに必要な、一般的なブドウ園で支払われている通常の水準での地代、利潤、賃金の総額を支払う意志のある者の需要よりも少ない。したがってその総量は、それ以上に支払う意欲を持った人々の手に渡してしまえる。だから必然的にその価格は普通のワインよりも高くなってしまふ。その差は、そのワインのファッショナブルさや希少性が買い手の競争を激しくするか弱くするかによって、大きくも小さくもなる。それがどの程度であろうとも、その大半は地主の地代に行く。というのも、こうしたブドウ園は一般に他のブドウ園よりも慎重に耕作されているが、ワインの高価格はどうも、その慎重な耕作の結果というよりも、その原因のように思えるからだ。それほど価値の高い産物では、怠慢により生じる損失があまりに大きいので、どんな粗雑な人間でも注意を払うようになるのだ。したがってこの高価格のごく一部でも、その耕作に注がれる大量の労働の賃金と、その労働を動かす過剰在庫の利益を支払うのに十分なのである。

西インド諸島でヨーロッパ諸国が保有する砂糖植民地は、こうした貴重なブドウ園と似たものと言えるかもしれない。その産物すべては、ヨーロッパの実効需要に足りず、他の各種作物について通常支払われる、作って市場にもたらすための地代、利潤、賃金を支払うのに必要な金額を上回る支払いを行う意志のある者の手に渡る。コーチンシナ（訳注：ベトナム）では、最高級の白砂糖は一般に、クイントル当たり 3 ピアストルで売られている。これはイギリスのお金では 13 シリングと 6 ペンスほどになる、と同国の農業をきわめて緻密に観察しているポワヴル氏『哲学者の航海』は述べている。その地でクイントルと呼ばれているものは、150-200 パロポンドの重量、中間を取れば 175 パリポンドとなり、つまり百イギリスポンドの価格だと 8 シリングになる。我々の植民地から輸入された黒砂糖またはムスコヴァダ砂糖に一般に支払われる金額の四分の一にも満たず、最高の白砂糖に支払われる金額の六分の一にも満たない。ベトナムでの耕作地の大半は、その土地の大半の人々が食べる小麦と米の生産に使われている。小麦、米、砂糖のそれぞれの価格はおそらく自然な比率、つまりその地でおそらく、耕作地の大半で行われる各種作物で自然に生じ、地主と農民に対して、計算できる限りにおいて、通常土地改良の原価と毎年の耕作費用に応じた補償を行える比率になっているはずである。だが我々の砂糖植民地では、砂糖の価格はヨーロッパやアメリカにおける米や小麦の産物に対して、そんな比率は

まったく示していない。一般に、砂糖農園経営者はそこからできるラム酒と糖蜜だけで、耕作の全費用がまかなえるはずであり、砂糖はすべて純粋に利潤となるものと想定しているのだと言われている。私はこれを確認したとは言えないが、もしこれが本当であるなら、それは小麦農家はその耕作の費用をもみ穀とワラだけで賄い、穀物部分はすべて純粋な利益になるはずと述べているに等しい。しばしばロンドンなどの交易都市の商人協会などが、砂糖植民地の高地を購入するのを見かける。彼らはそれを、はるか遠い距離やそうした国々の欠陥ある司法執行による不確実な収益にもかかわらず、代理人や管理人を使うことで改良して耕作し、儲けるつもりなのである。だがスコットランドやアイルランド、あるいは北アメリカの小麦地域では、最も肥沃な土地であっても、そうした国々の司法執行はずっと厳密で規則性ある収益が予想されるというのに、同じ形で改良して耕作しようとする者などだれもない。

ヴァージニア州とメリーランド州では、小麦よりもタバコの耕作のほうがずっと儲かるとして好まれている。タバコは、ヨーロッパの相当部分でも優位性をもって耕作できそうだが、ヨーロッパのほとんどあらゆる部分では、タバコは主要な課税対象となっている。そしてこの作物がたまたま耕作されていそうな、国内のあらゆるちがった農場から徴税するのは、輸入の時点で関税所で課税するよりもむずかしいと考えられてきた。このためにタバコ栽培は、ヨーロッパの相当分でもとんでもなく厳しく禁止されてきたので、当然ながらそれが認められている国に一種の独占権を与えることになる。そしてヴァージニア州とメリーランド州はその生産量が最も多いので、この地域はおおむね、多少の競合はあるものの、この独占の利点を共有することになる。だがタバコの栽培は、砂糖ほどは有利ではないらしい。タバコの農園で、グレートブリテンに住む商人たちの資本により改良され栽培されたものは、聞いたことさえない。そしてタバコ植民地は、砂糖諸島からしばしばやってくるのを見かける金持ち入植者たちを故国に送り返すことはない。だがそうした植民地で、小麦よりもタバコの栽培が好まれているのを見れば、ヨーロッパにおけるタバコの実行需要は完全に満たされているわけではないようだとはいえ、砂糖ほどその不足分は大きくないようだ。そして現在のヨーロッパにおけるタバコ価格は、タバコを作って市場に出すのに必要な地代、賃金、利潤を、小麦畑で一般に支払われている水準で全額負担するのに十分以上なのだろうが、砂糖の現在価格よりは高くないはずだ。このためタバコ入植者たちは、フランスの古いブドウ畑所有者たちがワインの過剰に対して見せたのと同じ、タバコの過剰に対する恐れを示している。結託の力により、彼らは栽培を、16歳から60歳の黒人一人につき、六千株の植物栽培に制限している。これは葉たばこ千ポンド重量をもたらす量とされている。こうした黒人は、このタバコの量を超えて、インド小麦4エーカーも耕作できるとされている。また市場に在庫があふれるのを避けるため、かれらは豊作時にはときどき、黒人1人当たりにつき一定量のタバコを焼いてしまうのだとダグラス博士 *Douglas' s Summary*, vol. ii. p. 379, 373 は報じている（どうもかれの情報はまちがっているのではないかと私は思う）。これはオランダ人が香料について行ったとされるのと同じである。タバコの現在の価格を維持するのにこんな激しい手法が必要であるなら、小麦に比べたときのタバコ栽培の優位性は、まだ残っているにしても、おそらく長続きはしないだろう。

このような形で、人間の食べ物を生み出す耕作地の地代が、他の耕作地の大半の地代を左右するのである。何か特定の産物がそれ以下の地代で長続きすることはできない。その土地はすぐに別の用途に変えられてしまうからだ。そしてある産物が普通にそれ以上の地

代を払えるのであれば、それはその産物に適するものにできる土地の量が、実効需要を満たすには小さすぎるからである。

ヨーロッパでは、小麦が土地の主要な作物であり、すぐに人間の食物として使われる。したがって特殊な状況でない限り、小麦畑の地代がヨーロッパでは、その他あらゆる耕作地の地代を左右する。イギリスは、フランスのブドウ園や、イタリアのオリーブ農園をうらやむ必要はない。特別な条件を除けば、こうしたものの価値は小麦の価値に左右されるのであり、小麦については、イギリスの肥沃さはこのどちらの国に比べても、さほど劣るものではない。どの国でも、人々の一般的でお気に入りの植物性食品が、最も一般的な土地で作られる植物から得られるもので、それが最も肥沃な土地で生まれる小麦と同じかそれに近い耕作により、小麦よりもずっと大量に生産されるなら、地主への地代、あるいは労働の対価を支払って、農夫の在庫を補充し、さらに農夫の通常の利潤を支払ったあとで手元に残った余剰の食物も、必然的にずっと多くなる。その国で労働が一般に維持される賃金水準がなんであれ、この余剰の増えた分は必ずもっと多くの労働を維持できるのであり、結果的に地主は、もっと大量の労働を買ったり左右したりできるのである。するとその地代の本当の価値、本当の権力と権威、他人の労働が供給してくれる必需品や利便品の獲得は、必然的にずっと大きなものになる。

米の畑は、最も肥沃な小麦畑よりもずっと大量の食品を生み出す。一エーカーの標準的な収量は、それぞれ1年で30ブッシェルと60ブッシェルと言われる。米の栽培のほうが必要な労働は多いのだが、それだけの労働を賄ったあとでも、残る余剰はずっと多い。したがってそうした米作国では、米が人々の一般的でお気に入りの植物食品であり、耕作者も米により養われているため、この余剰の増分のうち小麦国に比べて多くの部分が地主に帰属するのである。入植者が、他のイギリス植民地と同様に農夫でもあり地主でもあるキャロライナ州では、このために地代と利潤がいっしょくたになっているので、米の栽培のほうが小麦よりも儲かるとされているのである。彼らの米の田んぼは年に一回しか作物をつけず、ヨーロッパで一般的な風習のため、人々の一般的でお気に入りの植物性食品が米ではないにも関わらず、そうなるのである。

よい米の畑はあらゆる季節に沼地であり、ある季節には水で覆われた沼地となる。小麦や牧草やブドウ園にも、その他人間に役に立つ他のどんな植物作物にも適さない土地なのである。そしてそうした作物に適した土地は、米には適さない。したがって米作国ですら、米畑の地代は、他の耕作地の賃料を左右することはない。米の畑をそうした作物用に転換することは不可能だからである。

ジャガイモ畑で生産された食物は、米の畑で生産されたものに比べ、量的には劣っていないし、小麦畑で生産できるものよりもずっと多い。一エーカーの土地から得られる12000ポンドのジャガイモは、2000ポンドの小麦よりも生産量として多くはない。この二種類の作物のそれぞれから引き出せる、食品またはしっかりした栄養は、決してその重量に比例するものではない。ジャガイモは水分が多い性質を持つからだ。だがこの根菜の重量の半分が水だとしても（これはかなり大目に見積である）、この一エーカーのジャガイモはやはり6000ポンドのしっかりした滋養を生み出し、これは1エーカーの小麦が生み出す量の三倍となる。1エーカーのジャガイモは1エーカーの小麦よりも少ない費用で育てられる。一般に小麦の種まきに先立つ休閑期は、ジャガイモ栽培に常にともなう鋤入れといった大変な耕作を常に補う以上のものとなる。この根菜がヨーロッパのどの部分であれ、一部の米作国における米のように、人々の一般的でお気に入りの植物性食品になった

ら、同じ量の小作地でずっと多くの人数が養えることになる。そして労働者が一般にジャガイモを食べるようになったら、あらゆる在庫を補充して、耕作に必要な労働を維持した後で、ずっと多くの余剰が残ることになる。この余剰の相当部分も、地主に帰属することになる。人口は増え、地代は現在よりもずっと高い水準に上がる。

ジャガイモに適した土地は、他のほとんどあらゆる有用な植物にも適している。もしそれが現在の小麦と同じ比率で耕作地を占めるようになったら、それは他の耕作地相当部分の地代を同様に左右するようになるだろう。ランカシャー地方の一部では、聞いた話だが、大麦製のパンのほうが小麦のパンよりも労働者にとっては滋養になるのだと見なされていて、同じ教義がスコットランドでも信じられているというのもしばしば聞かされた。だが私は、これが本当かどうかいささか懐疑的である。大麦を食べているスコットランドの一般人たちは、小麦のパンを食べているイングランドの同じ階級の人々と比べて、一般に強くもないしハンサムでもない。働きぶりも優れてはおらず、外見もよくはない。そしてこの両国においては、人種の差はそれほどないので、経験から見て、スコットランドの一般的な人々の食べ物、イングランドの同じ階級の隣人たちのものに比べ、人間づくりにそれほど適していないと示しているのではないか。だがジャガイモとなると、話は逆のようだ。ロンドンの輿担ぎ、荷運び人、石炭運び人や、売春で生計を立てる不幸な女性たちは、イギリス領のなかで最も頑強な男性と美しい女性たちかもしれないが、そのほとんどはアイルランドの最も低い階級出身と言われており、彼らは一般にこの根菜を食べているのである。これほど決定的な滋養品質の証明、あるいは人間づくりの健全性への得意な適合性についての証明を持つ食品は他にない。

ジャガイモを通年で保存するのは困難だし、それを小麦のように二、三年続けて保存するのは不可能である。腐る前に売りさばけないのではという恐れがその耕作を阻害し、それがいかなる大国でも、パンのように、各種階級の人々すべてにとっての主要な植物性食品となる主要な障害となっているのである。

第Ⅱ部：土地の産物のうち、ときには地代を払え、ときには払えないもの

人間の食物は、地主にある程度の地代を常に必然的にもたらす唯一の土地の産物のようだ。他の種類の産物は、状況のちがいに応じて、ときには地代をもたらすこともあれば、そうでないこともある。

食に次いで、衣と住が人類の二つの大きな必要物となる。土地は、もともとの荒地の状態だと、喰わせられるよりもずっと多くの人々の衣服の材料や居住地を提供できる。改良された土地は、そうした材料を提供できる人数より多くの人々を養えることもある——少なくとも彼らが必要とするような形で、しかも喜んで支払いを行うような形で。したがってある状態においては、常にそうした材料が十分以上に存在するし、それはしばしば、まさに十分以上にあるため、ほとんどあるいはまったく価値がない。別の状態では、しばしば希少性があり、おかげで必然的にその価値が上乗せされる。前者の状態では、その相当部分は使い物にならないとして捨てられ、使われる部分の価格は、それを使い物になるようにするための労働と経費だけに等しいとされ、したがって地主には地代をまったくもたらさない。後者の状態では、そのすべては利用され、したがってしばしば得られるもの

上の需要がある。そのあらゆる部分について、それを市場にもたらしための経費に相当するよりもっと多くの金額を支払おうという人が常に存在する。だからその価格は常に、地主にある程度の地代をもたせらる。

大型動物の皮膚が、元々の衣服の材料だった。したがって、狩猟民や牧畜民の国では、食べ物も主にそうした動物の肉であり、万人が自分に食事を提供する中で、自分が着られるよりも多くの衣服材料を手に入れられた。外国との商業がなければ、その相当部分はまったく価値がないものとして捨てられていただろう。おそらく北アメリカの狩猟民族の間では、その国がヨーロッパ人に発見され、いまや余った皮を毛布や火器やブランデーと交換するようになり、皮に価値が生じるまではそうになっていたはずだ。現在の既知の世界における商業状態では、土地財産が確立しているもっとも野蛮な国民ですら、この種の外国取引が何かしら存在し、もっと豊かな近隣国の間に、彼らの土地が生み出して、自国では加工も消費もできず、しかもそうした豊かな近隣国に輸送するのにかかる費用以上に価格を押し上げるだけの需要が生じると私は信じる。したがってそれは、地主に何らかの地代を支払えるものとなる。ハイランド地方の牛のほとんどがその丘陵地自体で消費されていたときには、その皮の輸出はその国の商業において最も重要な品目になっていたし、それが交換された対象は、そうしたハイランドの所領における地代を少し押し上げただろう。イングランドの羊毛は、かつては自国では消費したり加工したりできなかったが、当時はもっと豊かでもっと生産的だったフランダースの国に市場を見出し、その価格はそれを生み出す土地の地代を少し押し上げた。すると当時のイングランドほど耕作されていない国々や、現在のスコットランドのハイランド地方ほど耕作されていない国々で、外国取引のない国々では、衣服の材料は明らかにあまりに豊富であり、その大半は役に立たないものとして捨て去られ、そのどの部分も地主にまったく地代をもたせなかったのである。

住居の材料は、衣服の材料ほどの長距離を必ずしも輸送できないものだし、衣服材料ほどすぐに外国取引の対象とはならない。それが生産国であまりに豊富になると、現在の世界の商業状況においてすら、それが地主にとってまったく価値を持たないことがしばしば生じる。ロンドン近郊にあるよい石切り場は、かなりの地代を支払える。スコットランドやウェールズ地方の多くの部分では、それがまったく地代を支払えない。建築用の材木は、人口が多く、よく耕作された国では大きな価値を持つし、それを生産する土地はかなりの地代をもたせらる。だが北アメリカの多くの部分では、地主はその大木の相当部分を運び去ってくれる人には大いに感謝するだろう。スコットランドのハイランド地方の一部では、道路や水路がないために、木の中で市場に送れるのは木の皮だけとなる。材木は地面に放置されて腐るに負かされる。住居の材料がこれほど豊富すぎると、使われる部分の価値は、それをその用途のために下降する労働と費用だけとなる。地主には何の地代ももたらさないで、地主は申し出るだけの手間をかける人すべてに、それを好きに使う許可を与える。だが豊かな国々の需要は、ときにそれに対する地代を得られるようにする。ロンドンの街路の舗装により、スコットランド沿岸のむき出しの石を所有する人々が、以前は何も得られなかったものから地代を引き出すのを可能にした。ノルウェーやバルト海沿岸の樹木は大英帝国の多くの部分で、その国自身では見いだせない市場を見だし、それにより持ち主にある程度の地代をもたらしした。

国の人口は、生産物で衣服や住居を作れる人々の数に比例するのではなく、生産物で食わせられる人数に比例するのである。食べ物があれば、必要な衣服や住居を見つけるのは

簡単である。だがそうしたものが手元にあっても、食べ物を見つけるのはむずかしいことが多い。イギリス支配地の一部では、家と呼ばれるものは、たった一人が一日働くだけで建てられる。最も簡単な種類の衣服は、動物の革だが、なめして使えるようにするためには、もう少し労働が必要となる。そうはいっても、大した労働は必要としない。野蛮または野生の国民の間では、1年の労働の百分の一か、百分の一より少し多いくらいの労働だけで、大半の人々を満足させられるだけのそうした衣服や住居を提供するには十分となる。残りの百分の99は、しばしば彼らに食べ物を提供するのにギリギリなくらいでしかない。だが土地の改良と耕作により、一世帯の労働が二世帯の食べ物を提供できるようになると、社会の半分の労働で、社会全体の食べ物を提供するのに十分となる。したがって残り半分は他のものの提供や、人類の他の欲望や願望を満たすために雇用できるようになる。衣服や住居、家具、さらに装身具と呼ばれるものが、そうした欲望や願望の主要な対象の相当部分となる。金持ちが消費する食べ物の量は、貧しい隣人と同じくらいでしかない。品質面ではT、まったくちがうかもしれず、それを選んで調理するにはもっと多くの労働や技能が必要かもしれない。だが量的には、ほとんど同じくらいだ。だが片方の広々とした宮殿や莫大な衣装と、もう片方の掘っ立て小屋とわずかなボロ着を比べると、衣服、住居、家具は、その質の差と同じくらい量的にも差があることがわかる。食べ物への欲望は、あらゆる人の場合、人間の胃のわずかな容量により制約されている。だが建物や衣服、装身具、家具の利便性や装飾に対する欲望は、何の制約もはっきりした限界もないらしい。したがって、自分自身で消費できる以上の食べ物を左右できる者は常に、その余ったもの、あるいは同じことだがその価格を、こうした他の種類の満足と喜んで交換するのである。限られた欲望を満足する分を超えて上回るものは、満足させられずまったく果てしなく思えるような欲望の楽しみのために与えられるのである。貧困者は食べ物を得るために、金持ちのそうした願望を満たすために頑張る。そしてその食べ物をもっと確実に得るために、自分の仕事の安さと完成度をお互いに競い合うのである。働く者の数は、食べ物の量が増えるにつれて、あるいは土地の改良と耕作が進むにつれて増加する。そして事業の性質が極度の分業を可能にするなら、彼らが加工できる材料の量は、その働く者の人数に比例するよりずっと大きな割合で増える。したがって、人間の発明が雇用できるあらゆる種類の材料に対して、それが役にたつためであれ装飾のためであれ、建物、衣服、装身具、家具などのために需要が生じるし、地中深くに含まれる化石や鉱物や、貴金属や宝石類に対する需要も生じるのである。

このように、食べ物は地代の元々の源であるばかりか、後に地代をまかなう土地の産物すべては、その価値の分を、土地の改良と耕作を通じて行われる食物生産の労働力改良から得ているのである。

だが、後に地代をまかなうようになる、土地の生産物の他の部分は、常に地代をまかなえるとは限らない。土地が改良されて耕作されている国においてすら、そうしたものに対する需要は必ずしも、それらを史上にもたらすために雇用されねばならない労働と、その通常の利益をとともなう在庫補充に十分な水準を上回る価格をもたらすとは限らない。それがその水準に達するかどうかは、各種の状況次第なのである。

たとえば炭坑が、少しでも地代をまかなえるかどうかは、部分的にはその肥沃さと、部分的にはその状況による。どんな種類のものでも、鉱山は一定量の労働によってそこから得られる鉱物の量が、同じ量により同種類の他の鉱山の同等部分から得られるものよりも多いか少ないかにより、肥沃か枯れているかが判定できる。

一部の炭坑は、立地がよくても、枯れているために稼働できない。その産物は費用を支払えない。利潤も地代もまなかえない。一部は、その生産物が労働に対して支払い、その稼働のために雇用される在庫を補充して通常利潤を出すのにギリギリ十分なだけとなる。こうした炭坑は作業の実施者にはある程度の利潤をもたらすが、地主への利潤はもたらさない。それを儲かる形で稼働させられるのは地主だけである。地主が自分でその仕事の実施者となれば、自分がそこで雇用する資本に対する通常の利潤を得られるからである。スコットランドの多くの炭坑はこのような形で稼働しており、それ以外の方法では稼働できない。地主は、地代の支払いを受けない限り他のだれもその炭坑を稼働させるのを許さないし、誰も少しも地代をまかなうことはできないのである。

同じ国の他の炭坑は、十分に肥沃ではあるが、その立地のために稼働させることができない。稼働の費用を負担するのに十分な量の鉱物は、通常か、通常より少ない量の労働によってさえ、その鉱山から取り出すことはできる。だが内陸国で、人口も少なく、よい道路も水路もないところだと、その量を売りさばくことができないのである。

石炭は、木に比べるとあまり望ましい燃料ではない。また木ほど健全でもないと言われる。したがって石炭の費用は、その消費地においては、一般に薪より少し低めでなくてはならない。

木の価格も、やはりウシの価格とほとんど同じ形で、そしてまったく同じ理由から、農業の状態に応じて変動する。price of cattle. In its rude beginnings, the greater part of every country is covered with wood, which is then a mere incumbrance, of no value to the landlord, who would gladly give it to any body for the cutting. As agriculture advances, the woods are partly cleared by the progress of tillage, and partly go to decay in consequence of the increased number of cattle. These, though they do not increase in the same proportion as corn, which is altogether the acquisition of human industry, yet multiply under the care and protection of men, who store up in the season of plenty what may maintain them in that of scarcity; who, through the whole year, furnish them with a greater quantity of food than uncultivated nature provides for them; and who, by destroying and extirpating their enemies, secure them in the free enjoyment of all that she provides. Numerous herds of cattle, when allowed to wander through the woods, though they do not destroy the old trees, hinder any young ones from coming up; so that, in the course of a century or two, the whole forest goes to ruin. The scarcity of wood then raises its price. It affords a good rent; and the landlord sometimes finds that he can scarce employ his best lands more advantageously than in growing barren timber, of which the greatness of the profit often compensates the lateness of the returns. This seems, in the present times, to be nearly the state of things in several parts of Great Britain, where the profit of planting is found to be equal to that of either corn or pasture. The advantage which the landlord derives from planting can nowhere exceed, at least for any considerable time, the rent which these could afford him; and in an inland country, which is highly cultivated, it will frequently not fall much short of this rent. Upon the sea-coast of a wellimproved country, indeed, if coals can conveniently be had for fuel, it may sometimes be cheaper to bring barren timber for building from less cultivated foreign countries than to raise it at home. In the new town of Edinburgh, built within these

few years, there is not, perhaps, a single stick of Scotch timber. Whatever may be the price of wood, if that of coals is such that the expense of a coal fire is nearly equal to that of a wood one we may be assured, that at that place, and in these circumstances, the price of coals is as high as it can be. It seems to be so in some of the inland parts of England, particularly in Oxfordshire, where it is usual, even in the fires of the common people, to mix coals and wood together, and where the difference in the expense of those two sorts of fuel cannot, therefore, be very great. Coals, in the coal countries, are everywhere much below this highest price. If they were not, they could not bear the expense of a distant carriage, either by land or by water. A small quantity only could be sold; and the coal masters and the coal proprietors find it more for their interest to sell a great quantity at a price somewhat above the lowest, than a small quantity at the highest. The most fertile coal mine, too, regulates the price of coals at all the other mines in its neighbourhood. Both the proprietor and the undertaker of the work find, the one that he can get a greater rent, the other that he can get a greater profit, by somewhat underselling all their neighbours. Their neighbours are soon obliged to sell at the same price, though they cannot so well afford it, and though it always diminishes, and sometimes takes away altogether, both their rent and their profit. Some works are abandoned altogether; others can afford no rent, and can be wrought only by the proprietor. The lowest price at which coals can be sold for any considerable time, is, like that of all other commodities, the price which is barely sufficient to replace, together with its ordinary profits, the stock which must be employed in bringing them to market. At a coal mine for which the landlord can get no rent, but, which he must either work himself or let it alone altogether, the price of coals must generally be nearly about this price.

Rent, even where coals afford one, has generally a smaller share in their price than in that of most other parts of the rude produce of land. The rent of an estate above ground, commonly amounts to what is supposed to be a third of the gross produce; and it is generally a rent certain and independent of the occasional variations in the crop. In coal mines, a fifth of the gross produce is a very great rent, a tenth the common rent; and it is seldom a rent certain, but depends upon the occasional variations in the produce. These are so great, that in a country where thirty years purchase is considered as a moderate price for the property of a landed estate, ten years purchase is regarded as a good price for that of a coal mine.

The value of a coal mine to the proprietor, frequently depends as much upon its situation as upon its fertility. That of a metallic mine depends more upon its fertility, and less upon its situation. The coarse, and still more the precious metals, when separated from the ore, are so valuable, that they can generally bear the expense of a very long land, and of the most distant sea carriage. Their market is not confined to the countries in the neighbourhood of the mine, but extends to the whole world. The copper of Japan makes an article of commerce in Europe; the iron of Spain in that of Chili and Peru. The silver of Peru finds its way, not only to Europe, but from Europe to China.

The price of coals in Westmoreland or Shropshire can have little effect on their price at Newcastle; and their price in the Lionnois can have none at all. The productions of such distant coal mines can never be brought into competition with one another. But the productions of the most distant metallic mines frequently may, and in fact commonly are.

The price, therefore, of the coarse, and still more that of the precious metals, at the most fertile mines in the world, must necessarily more or less affect their price at every other in it. The price of copper in Japan must have some influence upon its price at the copper mines in Europe. The price of silver in Peru, or the quantity either of labour or of other goods which it will purchase there, must have some influence on its price, not only at the silver mines of Europe, but at those of China. After the discovery of the mines of Peru, the silver mines of Europe were, the greater part of them, abandoned. The value of silver was so much reduced, that their produce could no longer pay the expense of working them, or replace, with a profit, the food, clothes, lodging, and other necessities which were consumed in that operation. This was the case, too, with the mines of Cuba and St. Domingo, and even with the ancient mines of Peru, after the discovery of those of Potosi. The price of every metal, at every mine, therefore, being regulated in some measure by its price at the most fertile mine in the world that is actually wrought, it can, at the greater part of mines, do very little more than pay the expense of working, and can seldom afford a very high rent to the landlord. Rent accordingly, seems at the greater part of mines to have but a small share in the price of the coarse, and a still smaller in that of the precious metals. Labour and profit make up the greater part of both.

A sixth part of the gross produce may be reckoned the average rent of the tin mines of Cornwall, the most fertile that are known in the world, as we are told by the Rev. Mr. Borlace, vice-warden of the stannaries. Some, he says, afford more, and some do not afford so much. A sixth part of the gross produce is the rent, too, of several very fertile lead mines in Scotland.

In the silver mines of Peru, we are told by Frezier and Ulloa, the proprietor frequently exacts no other acknowledgment from the undertaker of the mine, but that he will grind the ore at his mill, paying him the ordinary multure or price of grinding. Till 1736, indeed, the tax of the king of Spain amounted to one fifth of the standard silver, which till then might be considered as the real rent of the greater part of the silver mines of Peru, the richest which have been known in the world. If there had been no tax, this fifth would naturally have belonged to the landlord, and many mines might have been wrought which could not then be wrought, because they could not afford this tax. The tax of the duke of Cornwall upon tin is supposed to amount to more than five per cent. or one twentieth part of the value; and whatever may be his proportion, it would naturally, too, belong to the proprietor of the mine, if tin was duty free. But if you add one twentieth to one sixth, you will find that the whole average rent of the tin mines of Cornwall, was to the whole average rent of the silver mines of Peru, as thirteen to twelve. But the silver mines of Peru are not now able

to pay even this low rent; and the tax upon silver was, in 1736, reduced from one fifth to one tenth. Even this tax upon silver, too, gives more temptation to smuggling than the tax of one twentieth upon tin; and smuggling must be much easier in the precious than in the bulky commodity. The tax of the king of Spain, accordingly, is said to be very ill paid, and that of the duke of Cornwall very well. Rent, therefore, it is probable, makes a greater part of the price of tin at the most fertile tin mines than it does of silver at the most fertile silver mines in the world. After replacing the stock employed in working those different mines, together with its ordinary profits, the residue which remains to the proprietor is greater, it seems, in the coarse, than in the precious metal. Neither are the profits of the undertakers of silver mines commonly very great in Peru. The same most respectable and wellinformed authors acquaint us, that when any person undertakes to work a new mine in Peru, he is universally looked upon as a man destined to bankruptcy and ruin, and is upon that account shunned and avoided by every body. Mining, it seems, is considered there in the same light as here, as a lottery, in which the prizes do not compensate the blanks, though the greatness of some tempts many adventurers to throw away their fortunes in such unprosperous projects.

As the sovereign, however, derives a considerable part of his revenue from the produce of silver mines, the law in Peru gives every possible encouragement to the discovery and working of new ones. Whoever discovers a new mine, is entitled to measure off two hundred and forty-six feet in length, according to what he supposes to be the direction of the vein, and half as much in breadth. He becomes proprietor of this portion of the mine, and can work it without paying any acknowledgment to the landlord. The interest of the duke of Cornwall has given occasion to a regulation nearly of the same kind in that ancient dutchy. In waste and unclosed lands, any person who discovers a tin mine may mark out its limits to a certain extent, which is called bounding a mine. The boulder becomes the real proprietor of the mine, and may either work it himself, or give it in lease to another, without the consent of the owner of the land, to whom, however, a very small acknowledgment must be paid upon working it. In both regulations, the sacred rights of private property are sacrificed to the supposed interests of public revenue.

The same encouragement is given in Peru to the discovery and working of new gold mines; and in gold the king's tax amounts only to a twentieth part of the standard rental. It was once a fifth, and afterwards a tenth, as in silver; but it was found that the work could not bear even the lowest of these two taxes. If it is rare, however, say the same authors, Frezier and Ulloa, to find a person who has made his fortune by a silver, it is still much rarer to find one who has done so by a gold mine. This twentieth part seems to be the whole rent which is paid by the greater part of the gold mines of Chili and Peru. Gold, too, is much more liable to be smuggled than even silver; not only on account of the superior value of the metal in proportion to its bulk, but on account of the peculiar way in which nature produces it. Silver is very seldom found virgin, but, like most other metals, is generally mineralized with

some other body, from which it is impossible to separate it in such quantities as will pay for the expense, but by a very laborious and tedious operation, which cannot well be carried on but in work-houses erected for the purpose, and, therefore, exposed to the inspection of the king's officers. Gold, on the contrary, is almost always found virgin. It is sometimes found in pieces of some bulk; and, even when mixed, in small and almost insensible particles, with sand, earth, and other extraneous bodies, it can be separated from them by a very short and simple operation, which can be carried on in any private house by any body who is possessed of a small quantity of mercury. If the king's tax, therefore, is but ill paid upon silver, it is likely to be much worse paid upon gold; and rent must make a much smaller part of the price of gold than that of silver.

The lowest price at which the precious metals can be sold, or the smallest quantity of other goods for which they can be exchanged, during any considerable time, is regulated by the same principles which fix the lowest ordinary price of all other goods. The stock which must commonly be employed, the food, clothes, and lodging, which must commonly be consumed in bringing them from the mine to the market, determine it. It must at least be sufficient to replace that stock, with the ordinary profits. Their highest price, however, seems not to be necessarily determined by any thing but the actual scarcity or plenty of these metals themselves. It is not determined by that of any other commodity, in the same manner as the price of coals is by that of wood, beyond which no scarcity can ever raise it. Increase the scarcity of gold to a certain degree, and the smallest bit of it may become more precious than a diamond, and exchange for a greater quantity of other goods.

The demand for those metals arises partly from their utility, and partly from their beauty. If you except iron, they are more useful than, perhaps, any other metal. As they are less liable to rust and impurity, they can more easily be kept clean; and the utensils, either of the table or the kitchen, are often, upon that account, more agreeable when made of them. A silver boiler is more cleanly than a lead, copper, or tin one; and the same quality would render a gold boiler still better than a silver one. Their principal merit, however, arises from their beauty, which renders them peculiarly fit for the ornaments of dress and furniture. No paint or dye can give so splendid a colour as gilding. The merit of their beauty is greatly enhanced by their scarcity. With the greater part of rich people, the chief enjoyment of riches consists in the parade of riches; which, in their eye, is never so complete as when they appear to possess those decisive marks of opulence which nobody can possess but themselves. In their eyes, the merit of an object, which is in any degree either useful or beautiful, is greatly enhanced by its scarcity, or by the great labour which it requires to collect any considerable quantity of it; a labour which nobody can afford to pay but themselves. Such objects they are willing to purchase at a higher price than things much more beautiful and useful, but more common. These qualities of utility, beauty, and scarcity, are the original foundation of the high price of those metals, or of the great quantity of other goods for which they can everywhere be exchanged. This

value was antecedent to, and independent of their being employed as coin, and was the quality which fitted them for that employment. That employment, however, by occasioning a new demand, and by diminishing the quantity which could be employed in any other way, may have afterwards contributed to keep up or increase their value.

The demand for the precious stones arises altogether from their beauty. They are of no use but as ornaments; and the merit of their beauty is greatly enhanced by their scarcity, or by the difficulty and expense of getting them from the mine. Wages and profit accordingly make up, upon most occasions, almost the whole of the high price. Rent comes in but for a very small share, frequently for no share; and the most fertile mines only afford any considerable rent. When Tavernier, a jeweller, visited the diamond mines of Golconda and Visiapour, he was informed that the sovereign of the country, for whose benefit they were wrought, had ordered all of them to be shut up except those which yielded the largest and finest stones. The other, it seems, were to the proprietor not worth the working.

As the prices, both of the precious metals and of the precious stones, is regulated all over the world by their price at the most fertile mine in it, the rent which a mine of either can afford to its proprietor is in proportion, not to its absolute, but to what may be called its relative fertility, or to its superiority over other mines of the same kind. If new mines were discovered, as much superior to those of Potosi, as they were superior to those of Europe, the value of silver might be so much degraded as to render even the mines of Potosi not worth the working. Before the discovery of the Spanish West Indies, the most fertile mines in Europe may have afforded as great a rent to their proprietors as the richest mines in Peru do at present. Though the quantity of silver was much less, it might have exchanged for an equal quantity of other goods, and the proprietor's share might have enabled him to purchase or command an equal quantity either of labour or of commodities. The value, both of the produce and of the rent, the real revenue which they afforded, both to the public and to the proprietor, might have been the same.

The most abundant mines, either of the precious metals, or of the precious stones, could add little to the wealth of the world. A produce, of which the value is principally derived from its scarcity, is necessarily degraded by its abundance. A service of plate, and the other frivolous ornaments of dress and furniture, could be purchased for a smaller quantity of commodities; and in this would consist the sole advantage which the world could derive from that abundance.

It is otherwise in estates above ground. The value, both of their produce and of their rent, is in proportion to their absolute, and not to their relative fertility. The land which produces a certain quantity of food, clothes, and lodging, can always feed, clothe, and lodge, a certain number of people; and whatever may be the proportion of the landlord, it will always give him a proportionable command of the labour of those people, and of the commodities with which that labour can supply him. The value of the most barren land is not diminished by the neighbourhood of the most fertile. On the contrary, it is generally increased by it. The great number of people maintained

by the fertile lands afford a market to many parts of the produce of the barren, which they could never have found among those whom their own produce could maintain.

Whatever increases the fertility of land in producing food, increases not only the value of the lands upon which the improvement is bestowed, but contributes likewise to increase that of many other lands, by creating a new demand for their produce. That abundance of food, of which, in consequence of the improvement of land, many people have the disposal beyond what they themselves can consume, is the great cause of the demand, both for the precious metals and the precious stones, as well as for every other conveniency and ornament of dress, lodging, household furniture, and equipage. Food not only constitutes the principal part of the riches of the world, but it is the abundance of food which gives the principal part of their value to many other sorts of riches. The poor inhabitants of Cuba and St. Domingo, when they were first discovered by the Spaniards, used to wear little bits of gold as ornaments in their hair and other parts of their dress. They seemed to value them as we would do any little pebbles of somewhat more than ordinary beauty, and to consider them as just worth the picking up, but not worth the refusing to any body who asked them, They gave them to their new guests at the first request, without seeming to think that they had made them any very valuable present. They were astonished to observe the rage of the Spaniards to obtain them; and had no notion that there could anywhere be a country in which many people had the disposal of so great a superfluity of food; so scanty always among themselves, that, for a very small quantity of those glittering baubles, they would willingly give as much as might maintain a whole family for many years. Could they have been made to understand this, the passion of the Spaniards would not have surprised them.

第 III 部: 常に地代を払える種類の産物と、地代を払えたり払えなかったりする種類の産物との価値の比率変動について

The increasing abundance of food, in consequence of the increasing improvement and cultivation, must necessarily increase the demand for every part of the produce of land which is not food, and which can be applied either to use or to ornament. In the whole progress of improvement, it might, therefore, be expected there should be only one variation in the comparative values of those two different sorts of produce. The value of that sort which sometimes does, and sometimes does not afford rent, should constantly rise in proportion to that which always affords some rent. As art and industry advance, the materials of clothing and lodging, the useful fossils and materials of the earth, the precious metals and the precious stones, should gradually come to be more and more in demand, should gradually exchange for a greater and a greater quantity of food; or, in other words, should gradually become dearer and dearer. This, accordingly, has been the case with most of these things upon most occasions, and would have been the case with all of them upon all occasions, if particular accidents

had not, upon some occasions, increased the supply of some of them in a still greater proportion than the demand. The value of a free-stone quarry, for example, will necessarily increase with the increasing improvement and population of the country round about it, especially if it should be the only one in the neighbourhood. But the value of a silver mine, even though there should not be another within a thousand miles of it, will not necessarily increase with the improvement of the country in which it is situated. The market for the produce of a free-stone quarry can seldom extend more than a few miles round about it, and the demand must generally be in proportion to the improvement and population of that small district; but the market for the produce of a silver mine may extend over the whole known world. Unless the world in general, therefore, be advancing in improvement and population, the demand for silver might not be at all increased by the improvement even of a large country in the neighbourhood of the mine. Even though the world in general were improving, yet if, in the course of its improvements, new mines should be discovered, much more fertile than any which had been known before, though the demand for silver would necessarily increase, yet the supply might increase in so much a greater proportion, that the real price of that metal might gradually fall; that is, any given quantity, a pound weight of it, for example, might gradually purchase or command a smaller and a smaller quantity of labour, or exchange for a smaller and a smaller quantity of corn, the principal part of the subsistence of the labourer.

The great market for silver is the commercial and civilized part of the world.

If, by the general progress of improvement, the demand of this market should increase, while, at the same time, the supply did not increase in the same proportion, the value of silver would gradually rise in proportion to that of corn. Any given quantity of silver would exchange for a greater and a greater quantity of corn; or, in other words, the average money price of corn would gradually become cheaper and cheaper.

If, on the contrary, the supply, by some accident, should increase, for many years together, in a greater proportion than the demand, that metal would gradually become cheaper and cheaper; or, in other words, the average money price of corn would, in spite of all improvements, gradually become dearer and dearer. But if, on the other hand, the supply of that metal should increase nearly in the same proportion as the demand, it would continue to purchase or exchange for nearly the same quantity of corn; and the average money price of corn would, in spite of all improvements, continue very nearly the same.

この三つで、土地改良の進行において起こり得るあらゆるできごとの組み合わせのすべての可能性は尽きているようだ。そして and during the course of the four centuries preceding the present, if we may judge by what has happened both in France and Great Britain, each of those three different combinations seems to have taken place in the European market, and nearly in the same order, too, in which I have here set them down.

過去 4 世紀にわたる銀の価値の変動についての余談

First Period. — In 1350, and for some time before, the average price of the quarter of wheat in England seems not to have been estimated lower than four ounces of silver, Tower weight, equal to about twenty shillings of our present money. From this price it seems to have fallen gradually to two ounces of silver, equal to about ten shillings of our present money, the price at which we find it estimated in the beginning of the sixteenth century, and at which it seems to have continued to be estimated till about 1570. In 1350, being the 25th of Edward III. was enacted what is called the Statute of Labourers. In the preamble, it complains much of the insolence of servants, who endeavoured to raise their wages upon their masters. It therefore ordains, that all servants and labourers should, for the future, be contented with the same wages and liveries (liveries in those times signified not only clothes, but provisions) which they had been accustomed to receive in the 20th year of the king, and the four preceding years; that, upon this account, their livery-wheat should nowhere be estimated higher than tenpence a-bushel, and that it should always be in the option of the master to deliver them either the wheat or the money. Tenpence: a-bushel, therefore, had, in the 25th of Edward III. been reckoned a very moderate price of wheat, since it required a particular statute to oblige servants to accept of it in exchange for their usual livery of provisions; and it had been reckoned a reasonable price ten years before that, or in the 16th year of the king, the term to which the statute refers. But in the 16th year of Edward III. tenpence contained about half an ounce of silver, Tower weight, and was nearly equal to half-a-crown of our present money. Four ounces of silver, Tower weight, therefore, equal to six shillings and eightpence of the money of those times, and to near twenty shillings of that of the present, must have been reckoned a moderate price for the quarter of eight bushels.

This statute is surely a better evidence of what was reckoned, in those times, a moderate price of grain, than the prices of some particular years, which have generally been recorded by historians and other writers, on account of their extraordinary dearness or cheapness, and from which, therefore, it is difficult to form any judgment concerning what may have been the ordinary price. There are, besides, other reasons for believing that, in the beginning of the fourteenth century, and for some time before, the common price of wheat was not less than four ounces of silver the quarter, and that of other grain in proportion.

In 1309, Ralph de Born, prior of St Augustine's, Canterbury, gave a feast upon his installation-day, of which William Thorn has preserved, not only the bill of fare, but the prices of many particulars. In that feast were consumed, 1st, fifty-three quarters of wheat, which cost nineteen pounds, or seven shillings, and twopence a-quarter, equal to about one-and-twenty shillings and sixpence of our present money; 2dly, fifty-eight quarters of malt, which cost seventeen pounds ten shillings, or six shillings a-quarter, equal to about eighteen shillings of our present money; 3dly, twenty quarters of oats,

which cost four pounds, or four shillings a-quarter, equal to about twelve shillings of our present money. The prices of malt and oats seem here to lie higher than their ordinary proportion to the price of wheat.

These prices are not recorded, on account of their extraordinary dearness or cheapness, but are mentioned accidentally, as the prices actually paid for large quantities of grain consumed at a feast, which was famous for its magnificence.

In 1262, being the 51st of Henry III. was revived an ancient statute, called the assize of bread and ale, which, the king says in the preamble, had been made in the times of his progenitors, some time kings of England. It is probably, therefore, as old at least as the time of his grandfather, Henry II. and may have been as old as the Conquest. It regulates the price of bread according as the prices of wheat may happen to be, from one shilling to twenty shillings the quarter of the money of those times. But statutes of this kind are generally presumed to provide with equal care for all deviations from the middle price, for those below it, as well as for those above it. Ten shillings, therefore, containing six ounces of silver, Tower weight, and equal to about thirty shillings of our present money, must, upon this supposition, have been reckoned the middle price of the quarter of wheat when this statute was first enacted, and must have continued to be so in the 51st of Henry III. We cannot, therefore, be very wrong in supposing that the middle price was not less than one-third of the highest price at which this statute regulates the price of bread, or than six shillings and eightpence of the money of those times, containing four ounces of silver, Tower weight.

From these different facts, therefore, we seem to have some reason to conclude that, about the middle of the fourteenth century, and for a considerable time before, the average or ordinary price of the quarter of wheat was not supposed to be less than four ounces of silver, Tower weight.

From about the middle of the fourteenth to the beginning of the sixteenth century, what was reckoned the reasonable and moderate, that is, the ordinary or average price of wheat, seems to have sunk gradually to about one half of this price; so as at last to have fallen to about two ounces of silver, Tower weight, equal to about ten shillings of our present money. It continued to be estimated at this price till about 1570.

In the household book of Henry, the fifth earl of Northumberland, drawn up in 1512 there are two different estimations of wheat. In one of them it is computed at six shilling and eightpence the quarter, in the other at five shillings and eightpence only. In 1512, six shillings and eightpence contained only two ounces of silver, Tower weight, and were equal to about ten shillings of our present money.

From the 25th of Edward III. to the beginning of the reign of Elizabeth, during the space of more than two hundred years, six shillings and eightpence, it appears from several different statutes, had continued to be considered as what is called the moderate and reasonable, that is, the ordinary or average price of wheat. The quantity of silver, however, contained in that nominal sum was, during the course of this period, continually diminishing in consequence of some alterations which were made

in the coin. But the increase of the value of silver had, it seems, so far compensated the diminution of the quantity of it contained in the same nominal sum, that the legislature did not think it worth while to attend to this circumstance.

Thus, in 1436, it was enacted, that wheat might be exported without a licence when the price was so low as six shillings and eightpence: and in 1463, it was enacted, that no wheat should be imported if the price was not above six shillings and eightpence the quarter: The legislature had imagined, that when the price was so low, there could be no inconveniency in exportation, but that when it rose higher, it became prudent to allow of importation. Six shillings and eightpence, therefore, containing about the same quantity of silver as thirteen shillings and fourpence of our present money (one-third part less than the same nominal sum contained in the time of Edward III), had, in those times, been considered as what is called the moderate and reasonable price of wheat. In 1554, by the 1st and 2nd of Philip and Mary, and in 1558, by the 1st of Elizabeth, the exportation of wheat was in the same manner prohibited, whenever the price of the quarter should exceed six shillings and eightpence, which did not then contain two penny worth more silver than the same nominal sum does at present. But it had soon been found, that to restrain the exportation of wheat till the price was so very low, was, in reality, to prohibit it altogether. In 1562, therefore, by the 5th of Elizabeth, the exportation of wheat was allowed from certain ports, whenever the price of the quarter should not exceed ten shillings, containing nearly the same quantity of silver as the like nominal sum does at present. This price had at this time, therefore, been considered as what is called the moderate and reasonable price of wheat. It agrees nearly with the estimation of the Northumberland book in 1512.

That in France the average price of grain was, in the same manner, much lower in the end of the fifteenth and beginning of the sixteenth century, than in the two centuries preceding, has been observed both by Mr Dupré de St Maur, and by the elegant author of the *Essay on the Policy of Grain*. Its price, during the same period, had probably sunk in the same manner through the greater part of Europe.

This rise in the value of silver, in proportion to that of corn, may either have been owing altogether to the increase of the demand for that metal, in consequence of increasing improvement and cultivation, the supply, in the mean time, continuing the same as before; or, the demand continuing the same as before, it may have been owing altogether to the gradual diminution of the supply: the greater part of the mines which were then known in the world being much exhausted, and, consequently, the expense of working them much increased; or it may have been owing partly to the one, and partly to the other of those two circumstances. In the end of the fifteenth and beginning of the sixteenth centuries, the greater part of Europe was approaching towards a more settled form of government than it had enjoyed for several ages before. The increase of security would naturally increase industry and improvement; and the demand for the precious metals, as well as for every other luxury and ornament, would naturally increase with the increase of riches. A greater annual produce would

require a greater quantity of coin to circulate it; and a greater number of rich people would require a greater quantity of plate and other ornaments of silver. It is natural to suppose, too, that the greater part of the mines which then supplied the European market with silver might be a good deal exhausted, and have become more expensive in the working. They had been wrought, many of them, from the time of the Romans.

It has been the opinion, however, of the greater part of those who have written upon the prices of commodities in ancient times, that, from the Conquest, perhaps from the invasion of Julius Caesar, till the discovery of the mines of America, the value of silver was continually diminishing. This opinion they seem to have been led into, partly by the observations which they had occasion to make upon the prices both of corn and of some other parts of the rude produce of land, and partly by the popular notion, that as the quantity of silver naturally increases in every country with the increase of wealth, so its value diminishes as its quantity increases. In their observations upon the prices of corn, three different circumstances seem frequently to have misled them.

First, in ancient times, almost all rents were paid in kind; in a certain quantity of corn, cattle, poultry, etc. It sometimes happened, however, that the landlord would stipulate, that he should be at liberty to demand of the tenant, either the annual payment in kind or a certain sum of money instead of it. The price at which the payment in kind was in this manner exchanged for a certain sum of money, is in Scotland called the conversion price. As the option is always in the landlord to take either the substance or the price, it is necessary, for the safety of the tenant, that the conversion price should rather be below than above the average market price. In many places, accordingly, it is not much above one half of this price. Through the greater part of Scotland this custom still continues with regard to poultry, and in some places with regard to cattle. It might probably have continued to take place, too, with regard to corn, had not the institution of the public fiars put an end to it. These are annual valuations, according to the judgment of an assize, of the average price of all the different sorts of grain, and of all the different qualities of each, according to the actual market price in every different county. This institution rendered it sufficiently safe for the tenant, and much more convenient for the landlord, to convert, as they call it, the corn rent, rather at what should happen to be the price of the fiars of each year, than at any certain fixed price. But the writers who have collected the prices of corn in ancient times seem frequently to have mistaken what is called in Scotland the conversion price for the actual market price. Fleetwood acknowledges, upon one occasion, that he had made this mistake. As he wrote his book, however, for a particular purpose, he does not think proper to make this acknowledgment till after transcribing this conversion price fifteen times. The price is eight shillings the quarter of wheat. This sum in 1423, the year at which he begins with it, contained the same quantity of silver as sixteen shillings of our present money. But in 1562, the year at which he ends with it, it contained no more than the same nominal sum does at present.

Secondly, they have been misled by the slovenly manner in which some ancient

statutes of assize had been sometimes transcribed by lazy copiers, and sometimes, perhaps, actually composed by the legislature.

The ancient statutes of assize seem to have begun always with determining what ought to be the price of bread and ale when the price of wheat and barley were at the lowest; and to have proceeded gradually to determine what it ought to be, according as the prices of those two sorts of grain should gradually rise above this lowest price. But the transcribers of those statutes seem frequently to have thought it sufficient to copy the regulation as far as the three or four first and lowest prices; saving in this manner their own labour, and judging, I suppose, that this was enough to show what proportion ought to be observed in all higher prices. Thus, in the assize of bread and ale, of the 51st of Henry III. the price of bread was regulated according to the different prices of wheat, from one shilling to twenty shillings the quarter of the money of those times. But in the manuscripts from which all the different editions of the statutes, preceding that of Mr Ruffhead, were printed, the copiers had never transcribed this regulation beyond the price of twelve shillings. Several writers, therefore, being misled by this faulty transcription, very naturally conclude that the middle price, or six shillings the quarter, equal to about eighteen shillings of our present money, was the ordinary or average price of wheat at that time.

In the statute of Tumbrel and Pillory, enacted nearly about the same time, the price of ale is regulated according to every sixpence rise in the price of barley, from two shillings, to four shillings the quarter. That four shillings, however, was not considered as the highest price to which barley might frequently rise in those times, and that these prices were only given as an example of the proportion which ought to be observed in all other prices, whether higher or lower, we may infer from the last words of the statute: “*Et sic deinceps crescetur vel diminuetur per sex denarios.*” The expression is very slovenly, but the meaning is plain enough, “that the price of ale is in this manner to be increased or diminished according to every sixpence rise or fall in the price of barley.” In the composition of this statute, the legislature itself seems to have been as negligent as the copiers were in the transcription of the other. In an ancient manuscript of the Regiam Majestatem, an old Scotch law book, there is a statute of assize, in which the price of bread is regulated according to all the different prices of wheat, from tenpence to three shillings the Scotch boll, equal to about half an English quarter. Three shillings Scotch, at the time when this assize is supposed to have been enacted, were equal to about nine shillings sterling of our present money. Mr Ruddiman seems to conclude from this, that three shillings was the highest price to which wheat ever rose in those times, and that tenpence, a shilling, or at most two shillings, were the ordinary prices. Upon consulting the manuscript, however, it appears evidently, that all these prices are only set down as examples of the proportion which ought to be observed between the respective prices of wheat and bread. The last words of the statute are “*reliqua judicabis secundum praescripta, habendo respectum ad pretium bladi.*” — “You shall judge of the remaining cases, according to what is above written, having respect to

the price of corn.”

Thirdly, they seem to have been misled too, by the very low price at which wheat was sometimes sold in very ancient times; and to have imagined, that as its lowest price was then much lower than in later times its ordinary price must likewise have been much lower. They might have found, however, that in those ancient times its highest price was fully as much above, as its lowest price was below any thing that had ever been known in later times. Thus, in 1270, Fleetwood gives us two prices of the quarter of wheat. The one is four pounds sixteen shillings of the money of those times, equal to fourteen pounds eight shillings of that of the present; the other is six pounds eight shillings, equal to nineteen pounds four shillings of our present money. No price can be found in the end of the fifteenth, or beginning of the sixteenth century, which approaches to the extravagance of these. The price of corn, though at all times liable to variation varies most in those turbulent and disorderly societies, in which the interruption of all commerce and communication hinders the plenty of one part of the country from relieving the scarcity of another. In the disorderly state of England under the Plantagenets, who governed it from about the middle of the twelfth till towards the end of the fifteenth century, one district might be in plenty, while another, at no great distance, by having its crop destroyed, either by some accident of the seasons, or by the incursion of some neighbouring baron, might be suffering all the horrors of a famine; and yet if the lands of some hostile lord were interposed between them, the one might not be able to give the least assistance to the other. Under the vigorous administration of the Tudors, who governed England during the latter part of the fifteenth, and through the whole of the sixteenth century, no baron was powerful enough to dare to disturb the public security.

The reader will find at the end of this chapter all the prices of wheat which have been collected by Fleetwood, from 1202 to 1597, both inclusive, reduced to the money of the present times, and digested, according to the order of time, into seven divisions of twelve years each. At the end of each division, too, he will find the average price of the twelve years of which it consists. In that long period of time, Fleetwood has been able to collect the prices of no more than eighty years; so that four years are wanting to make out the last twelve years. I have added, therefore, from the accounts of Eton college, the prices of 1598, 1599, 1600, and 1601. It is the only addition which I have made. The reader will see, that from the beginning of the thirteenth till after the middle of the sixteenth century, the average price of each twelve years grows gradually lower and lower; and that towards the end of the sixteenth century it begins to rise again. The prices, indeed, which Fleetwood has been able to collect, seem to have been those chiefly which were remarkable for extraordinary dearness or cheapness; and I do not pretend that any very certain conclusion can be drawn from them. So far, however, as they prove any thing at all, they confirm the account which I have been endeavouring to give. Fleetwood himself, however, seems, with most other writers, to have believed, that, during all this period, the value of silver, in consequence of its increasing abundance, was continually diminishing. The prices

of corn, which he himself has collected, certainly do not agree with this opinion. They agree perfectly with that of Mr Dupré de St Maur, and with that which I have been endeavouring to explain. Bishop Fleetwood and Mr Dupré de St Maur are the two authors who seem to have collected, with the greatest diligence and fidelity, the prices of things in ancient times. It is some what curious that, though their opinions are so very different, their facts, so far as they relate to the price of corn at least, should coincide so very exactly.

It is not, however, so much from the low price of corn, as from that of some other parts of the rude produce of land, that the most judicious writers have inferred the great value of silver in those very ancient times. Corn, it has been said, being a sort of manufacture, was, in those rude ages, much dearer in proportion than the greater part of other commodities; it is meant, I suppose, than the greater part of unmanufactured commodities, such as cattle, poultry, game of all kinds, etc. That in those times of poverty and barbarism these were proportionably much cheaper than corn, is undoubtedly true. But this cheapness was not the effect of the high value of silver, but of the low value of those commodities. It was not because silver would in such times purchase or represent a greater quantity of labour, but because such commodities would purchase or represent a much smaller quantity than in times of more opulence and improvement. Silver must certainly be cheaper in Spanish America than in Europe; in the country where it is produced, than in the country to which it is brought, at the expense of a long carriage both by land and by sea, of a freight, and an insurance. One-and-twenty pence halfpenny sterling, however, we are told by Ulloa, was, not many years ago, at Buenos Ayres, the price of an ox chosen from a herd of three or four hundred. Sixteen shillings sterling, we are told by Mr Byron, was the price of a good horse in the capital of Chili. In a country naturally fertile, but of which the far greater part is altogether uncultivated, cattle, poultry, game of all kinds, etc. as they can be acquired with a very small quantity of labour, so they will purchase or command but a very small quantity. The low money price for which they may be sold, is no proof that the real value of silver is there very high, but that the real value of those commodities is very low. Labour, it must always be remembered, and not any particular commodity, or set of commodities, is the real measure of the value both of silver and of all other commodities.

But in countries almost waste, or but thinly inhabited, cattle, poultry, game of all kinds, etc. as they are the spontaneous productions of Nature, so she frequently produces them in much greater quantities than the consumption of the inhabitants requires. In such a state of things, the supply commonly exceeds the demand. In different states of society, in different states of improvement, therefore, such commodities will represent, or be equivalent, to very different quantities of labour.

In every state of society, in every stage of improvement, corn is the production of human industry. But the average produce of every sort of industry is always suited, more or less exactly, to the average consumption; the average supply to the average demand. In every different stage of improvement, besides, the raising of equal

quantities of corn in the same soil and climate, will, at an average, require nearly equal quantities of labour; or, what comes to the same thing, the price of nearly equal quantities; the continual increase of the productive powers of labour, in an improved state of cultivation, being more or less counterbalanced by the continual increasing price of cattle, the principal instruments of agriculture. Upon all these accounts, therefore, we may rest assured, that equal quantities of corn will, in every state of society, in every stage of improvement, more nearly represent, or be equivalent to, equal quantities of labour, than equal quantities of any other part of the rude produce of land. Corn, accordingly, it has already been observed, is, in all the different stages of wealth and improvement, a more accurate measure of value than any other commodity or set of commodities. In all those different stages, therefore, we can judge better of the real value of silver, by comparing it with corn, than by comparing it with any other commodity or set of commodities.

Corn, besides, or whatever else is the common and favourite vegetable food of the people, constitutes, in every civilized country, the principal part of the subsistence of the labourer. In consequence of the extension of agriculture, the land of every country produces a much greater quantity of vegetable than of animal food, and the labourer everywhere lives chiefly upon the wholesome food that is cheapest and most abundant. Butcher's meat, except in the most thriving countries, or where labour is most highly rewarded, makes but an insignificant part of his subsistence; poultry makes a still smaller part of it, and game no part of it. In France, and even in Scotland, where labour is somewhat better rewarded than in France, the labouring poor seldom eat butcher's meat, except upon holidays, and other extraordinary occasions. The money price of labour, therefore, depends much more upon the average money price of corn, the subsistence of the labourer, than upon that of butcher's meat, or of any other part of the rude produce of land. The real value of gold and silver, therefore, the real quantity of labour which they can purchase or command, depends much more upon the quantity of corn which they can purchase or command, than upon that of butcher's meat, or any other part of the rude produce of land.

Such slight observations, however, upon the prices either of corn or of other commodities, would not probably have misled so many intelligent authors, had they not been influenced at the same time by the popular notion, that as the quantity of silver naturally increases in every country with the increase of wealth, so its value diminishes as its quantity increases. This notion, however, seems to be altogether groundless.

The quantity of the precious metals may increase in any country from two different causes; either, first, from the increased abundance of the mines which supply it; or, secondly, from the increased wealth of the people, from the increased produce of their annual labour. The first of these causes is no doubt necessarily connected with the diminution of the value of the precious metals; but the second is not.

When more abundant mines are discovered, a greater quantity of the precious metals is brought to market; and the quantity of the necessities and conveniences of life for which they must be exchanged being the same as before, equal quantities of the

metals must be exchanged for smaller quantities of commodities. So far, therefore, as the increase of the quantity of the precious metals in any country arises from the increased abundance of the mines, it is necessarily connected with some diminution of their value. When, on the contrary, the wealth of any country increases, when the annual produce of its labour becomes gradually greater and greater, a greater quantity of coin becomes necessary in order to circulate a greater quantity of commodities: and the people, as they can afford it, as they have more commodities to give for it, will naturally purchase a greater and a greater quantity of plate. The quantity of their coin will increase from necessity; the quantity of their plate from vanity and ostentation, or from the same reason that the quantity of fine statues, pictures, and of every other luxury and curiosity, is likely to increase among them. But as statuaries and painters are not likely to be worse rewarded in times of wealth and prosperity, than in times of poverty and depression, so gold and silver are not likely to be worse paid for.

The price of gold and silver, when the accidental discovery of more abundant mines does not keep it down, as it naturally rises with the wealth of every country; so, whatever be the state of the mines, it is at all times naturally higher in a rich than in a poor country. Gold and silver, like all other commodities, naturally seek the market where the best price is given for them, and the best price is commonly given for every thing in the country which can best afford it. Labour, it must be remembered, is the ultimate price which is paid for every thing; and in countries where labour is equally well rewarded, the money price of labour will be in proportion to that of the subsistence of the labourer. But gold and silver will naturally exchange for a greater quantity of subsistence in a rich than in a poor country; in a country which abounds with subsistence, than in one which is but indifferently supplied with it. If the two countries are at a great distance, the difference may be very great; because, though the metals naturally fly from the worse to the better market, yet it may be difficult to transport them in such quantities as to bring their price nearly to a level in both. If the countries are near, the difference will be smaller, and may sometimes be scarce perceptible; because in this case the transportation will be easy. China is a much richer country than any part of Europe, and the difference between the price of subsistence in China and in Europe is very great. Rice in China is much cheaper than wheat is any where in Europe. England is a much richer country than Scotland, but the difference between the money price of corn in those two countries is much smaller, and is but just perceptible. In proportion to the quantity or measure, Scotch corn generally appears to be a good deal cheaper than English; but, in proportion to its quality, it is certainly somewhat dearer. Scotland receives almost every year very large supplies from England, and every commodity must commonly be somewhat dearer in the country to which it is brought than in that from which it comes. English corn, therefore, must be dearer in Scotland than in England; and yet in proportion to its quality, or to the quantity and goodness of the flour or meal which can be made from it, it cannot commonly be sold higher there than the Scotch corn which comes to market in competition with it.

The difference between the money price of labour in China and in Europe, is still greater than that between the money price of subsistence; because the real recompence of labour is higher in Europe than in China, the greater part of Europe being in an improving state, while China seems to be standing still. The money price of labour is lower in Scotland than in England, because the real recompence of labour is much lower: Scotland, though advancing to greater wealth, advances much more slowly than England. The frequency of emigration from Scotland, and the rarity of it from England, sufficiently prove that the demand for labour is very different in the two countries. The proportion between the real recompence of labour in different countries, it must be remembered, is naturally regulated, not by their actual wealth or poverty, but by their advancing, stationary, or declining condition. Gold and silver, as they are naturally of the greatest value among the richest, so they are naturally of the least value among the poorest nations. Among savages, the poorest of all nations, they are scarce of any value.

In great towns, corn is always dearer than in remote parts of the country. This, however, is the effect, not of the real cheapness of silver, but of the real dearness of corn. It does not cost less labour to bring silver to the great town than to the remote parts of the country; but it costs a great deal more to bring corn. In some very rich and commercial countries, such as Holland and the territory of Genoa, corn is dear for the same reason that it is dear in great towns. They do not produce enough to maintain their inhabitants. They are rich in the industry and skill of their artificers and manufacturers, in every sort of machinery which can facilitate and abridge labour; in shipping, and in all the other instruments and means of carriage and commerce: but they are poor in corn, which, as it must be brought to them from distant countries, must, by an addition to its price, pay for the carriage from those countries. It does not cost less labour to bring silver to Amsterdam than to Dantzic; but it costs a great deal more to bring corn. The real cost of silver must be nearly the same in both places; but that of corn must be very different. Diminish the real opulence either of Holland or of the territory of Genoa, while the number of their inhabitants remains the same; diminish their power of supplying themselves from distant countries; and the price of corn, instead of sinking with that diminution in the quantity of their silver, which must necessarily accompany this declension, either as its cause or as its effect, will rise to the price of a famine. When we are in want of necessities, we must part with all superfluities, of which the value, as it rises in times of opulence and prosperity, so it sinks in times of poverty and distress. It is otherwise with necessities. Their real price, the quantity of labour which they can purchase or command, rises in times of poverty and distress, and sinks in times of opulence and prosperity, which are always times of great abundance; for they could not otherwise be times of opulence and prosperity. Corn is a necessary, silver is only a superfluity.

Whatever, therefore, may have been the increase in the quantity of the precious metals, which, during the period between the middle of the fourteenth and that of the sixteenth century, arose from the increase of wealth and improvement, it could

have no tendency to diminish their value, either in Great Britain, or in my other part of Europe. If those who have collected the prices of things in ancient times, therefore, had, during this period, no reason to infer the diminution of the value of silver from any observations which they had made upon the prices either of corn, or of other commodities, they had still less reason to infer it from any supposed increase of wealth and improvement.

Second Period. — But how various soever may have been the opinions of the learned concerning the progress of the value of silver during the first period, they are unanimous concerning it during the second.

From about 1570 to about 1640, during a period of about seventy years, the variation in the proportion between the value of silver and that of corn held a quite opposite course. Silver sunk in its real value, or would exchange for a smaller quantity of labour than before; and corn rose in its nominal price, and, instead of being commonly sold for about two ounces of silver the quarter, or about ten shillings of our present money, came to be sold for six and eight ounces of silver the quarter, or about thirty and forty shillings of our present money.

The discovery of the abundant mines of America seems to have been the sole cause of this diminution in the value of silver, in proportion to that of corn. It is accounted for, accordingly, in the same manner by every body; and there never has been any dispute, either about the fact, or about the cause of it. The greater part of Europe was, during this period, advancing in industry and improvement, and the demand for silver must consequently have been increasing; but the increase of the supply had, it seems, so far exceeded that of the demand, that the value of that metal sunk considerably. The discovery of the mines of America, it is to be observed, does not seem to have had any very sensible effect upon the prices of things in England till after 1570; though even the mines of Potosi had been discovered more than twenty years before. From 1595 to 1620, both inclusive, the average price of the quarter of nine bushels of the best wheat, at Windsor market, appears, from the accounts of Eton college, to have been £ 2:1:6 9/13. From which sum, neglecting the fraction, and deducting a ninth, or 4s. 7 1/3d., the price of the quarter of eight bushels comes out to have been £ 1:16:10 2/3. And from this sum, neglecting likewise the fraction, and deducting a ninth, or 4s. 1 1/9d., for the difference between the price of the best wheat and that of the middle wheat, the price of the middle wheat comes out to have been about £ 1:12:8 8/9, or about six ounces and one-third of an ounce of silver.

From 1621 to 1636, both inclusive, the average price of the same measure of the best wheat, at the same market, appears, from the same accounts, to have been £ 2:10s.; from which, making the like deductions as in the foregoing case, the average price of the quarter of eight bushels of middle wheat comes out to have been £ 1:19:6, or about seven ounces and two-thirds of an ounce of silver. Third Period. — Between 1630 and 1640, or about 1636, the effect of the discovery of the mines of America, in reducing the value of silver, appears to have been completed, and the value of that metal seems never to have sunk lower in proportion to that of corn than it was about

that time. It seems to have risen somewhat in the course of the present century, and it had probably begun to do so, even some time before the end of the last.

From 1637 to 1700, both inclusive, being the sixty-four last years of the last century the average price of the quarter of nine bushels of the best wheat, at Windsor market, appears, from the same accounts, to have been £ 2:11:0 $\frac{1}{3}$, which is only 1s. 0 $\frac{1}{3}$ d. dearer than it had been during the sixteen years before. But, in the course of these sixty-four years, there happened two events, which must have produced a much greater scarcity of corn than what the course of the season is would otherwise have occasioned, and which, therefore, without supposing any further reduction in the value of silver, will much more than account for this very small enhancement of price.

The first of these events was the civil war, which, by discouraging tillage and interrupting commerce, must have raised the price of corn much above what the course of the seasons would otherwise have occasioned. It must have had this effect, more or less, at all the different markets in the kingdom, but particularly at those in the neighbourhood of London, which require to be supplied from the greatest distance. In 1648, accordingly, the price of the best wheat, at Windsor market, appears, from the same accounts, to have been £ 4:5s., and, in 1649, to have been £ 4, the quarter of nine bushels. The excess of those two years above £ 2:10s. (the average price of the sixteen years preceding 1637 is £ 3:5s., which, divided among the sixty four last years of the last century, will alone very nearly account for that small enhancement of price which seems to have taken place in them.) These, however, though the highest, are by no means the only high prices which seem to have been occasioned by the civil wars.

The second event was the bounty upon the exportation of corn, granted in 1688. The bounty, it has been thought by many people, by encouraging tillage, may, in a long course of years, have occasioned a greater abundance, and, consequently, a greater cheapness of corn in the home market, than what would otherwise have taken place there. How far the bounty could produce this effect at any time I shall examine hereafter: I shall only observe at present, that between 1688 and 1700, it had not time to produce any such effect. During this short period, its only effect must have been, by encouraging the exportation of the surplus produce of every year, and thereby hindering the abundance of one year from compensating the scarcity of another, to raise the price in the home market. The scarcity which prevailed in England, from 1693 to 1699, both inclusive, though no doubt principally owing to the badness of the seasons, and, therefore, extending through a considerable part of Europe, must have been somewhat enhanced by the bounty. In 1699, accordingly, the further exportation of corn was prohibited for nine months.

There was a third event which occurred in the course of the same period, and which, though it could not occasion any scarcity of corn, nor, perhaps, any augmentation in the real quantity of silver which was usually paid for it, must necessarily have occasioned some augmentation in the nominal sum. This event was the great debasement

of the silver coin, by clipping and wearing. This evil had begun in the reign of Charles II. and had gone on continually increasing till 1695; at which time, as we may learn from Mr Lowndes, the current silver coin was, at an average, near five-and-twenty per cent. below its standard value. But the nominal sum which constitutes the market price of every commodity is necessarily regulated, not so much by the quantity of silver, which, according to the standard, ought to be contained in it, as by that which, it is found by experience, actually is contained in it. This nominal sum, therefore, is necessarily higher when the coin is much debased by clipping and wearing, than when near to its standard value.

In the course of the present century, the silver coin has not at any time been more below its standard weight than it is at present. But though very much defaced, its value has been kept up by that of the gold coin, for which it is exchanged. For though, before the late recoinage, the gold coin was a good deal defaced too, it was less so than the silver. In 1695, on the contrary, the value of the silver coin was not kept up by the gold coin; a guinea then commonly exchanging for thirty shillings of the worn and clipt silver.

Before the late recoinage of the gold, the price of silver bullion was seldom higher than five shillings and sevenpence an ounce, which is but fivepence above the mint price. But in 1695, the common price of silver bullion was six shillings and fivepence an ounce, Lowndes' s Essay on the Silver Coin, 68. which is fifteen pence above the mint price. Even before the late recoinage of the gold, therefore, the coin, gold and silver together, when compared with silver bullion, was not supposed to be more than eight per cent. below its standard value, In 1695, on the contrary, it had been supposed to be near five-and-twenty per cent. below that value. But in the beginning of the present century, that is, immediately after the great recoinage in King William' s time, the greater part of the current silver coin must have been still nearer to its standard weight than it is at present. In the course of the present century, too, there has been no great public calamity, such as a civil war, which could either discourage tillage, or interrupt the interior commerce of the country. And though the bounty which has taken place through the greater part of this century, must always raise the price of corn somewhat higher than it otherwise would be in the actual state of tillage; yet, as in the course of this century, the bounty has had full time to produce all the good effects commonly imputed to it to encourage tillage, and thereby to increase the quantity of corn in the home market, it may, upon the principles of a system which I shall explain and examine hereafter, be supposed to have done something to lower the price of that commodity the one way, as well as to raise it the other. It is by many people supposed to have done more. In the sixty-four years of the present century, accordingly, the average price of the quarter of nine bushels of the best wheat, at Windsor market, appears, by the accounts of Eton college, to have been £ 2:0:6 10/32, which is about ten shillings and sixpence, or more than five-and-twenty percent. cheaper than it had been during the sixty-four last years of the last century; and about nine shillings and sixpence cheaper than it had been during the

sixteen years preceding 1636, when the discovery of the abundant mines of America may be supposed to have produced its full effect; and about one shilling cheaper than it had been in the twenty-six years preceding 1620, before that discovery can well be supposed to have produced its full effect. According to this account, the average price of middle wheat, during these sixty-four first years of the present century, comes out to have been about thirty-two shillings the quarter of eight bushels.

The value of silver, therefore, seems to have risen somewhat in proportion to that of corn during the course of the present century, and it had probably begun to do so even some time before the end of the last.

In 1687, the price of the quarter of nine bushels of the best wheat, at Windsor market, was £ 1:5:2, the lowest price at which it had ever been from 1595.

In 1688, Mr Gregory King, a man famous for his knowledge in matters of this kind, estimated the average price of wheat, in years of moderate plenty, to be to the grower 3s. 6d. the bushel, or eight-and-twenty shillings the quarter. The grower's price I understand to be the same with what is sometimes called the contract price, or the price at which a farmer contracts for a certain number of years to deliver a certain quantity of corn to a dealer. As a contract of this kind saves the farmer the expense and trouble of marketing, the contract price is generally lower than what is supposed to be the average market price. Mr King had judged eight-and-twenty shillings the quarter to be at that time the ordinary contract price in years of moderate plenty. Before the scarcity occasioned by the late extraordinary course of bad seasons, it was, I have been assured, the ordinary contract price in all common years. In 1688 was granted the parliamentary bounty upon the exportation of corn. The country gentlemen, who then composed a still greater proportion of the legislature than they do at present, had felt that the money price of corn was falling. The bounty was an expedient to raise it artificially to the high price at which it had frequently been sold in the times of Charles I. and II. It was to take place, therefore, till wheat was so high as forty-eight shillings the quarter; that is, twenty shillings, or 5-7ths dearer than Mr King had, in that very year, estimated the grower's price to be in times of moderate plenty. If his calculations deserve any part of the reputation which they have obtained very universally, eight-and-forty shillings the quarter was a price which, without some such expedient as the bounty, could not at that time be expected, except in years of extraordinary scarcity. But the government of King William was not then fully settled. It was in no condition to refuse anything to the country gentlemen, from whom it was, at that very time, soliciting the first establishment of the annual landtax. The value of silver, therefore, in proportion to that of corn, had probably risen somewhat before the end of the last century; and it seems to have continued to do so during the course of the greater part of the present, though the necessary operation of the bounty must have hindered that rise from being so sensible as it otherwise would have been in the actual state of tillage.

In plentiful years, the bounty, by occasioning an extraordinary exportation, necessarily raises the price of corn above what it otherwise would be in those years. To

encourage tillage, by keeping up the price of corn, even in the most plentiful years, was the avowed end of the institution.

In years of great scarcity, indeed, the bounty has generally been suspended. It must, however, have had some effect upon the prices of many of those years. By the extraordinary exportation which it occasions in years of plenty, it must frequently hinder the plenty of one year from compensating the scarcity of another.

Both in years of plenty and in years of scarcity, therefore, the bounty raises the price of corn above what it naturally would be in the actual state of tillage. If during the sixty-four first years of the present century, therefore, the average price has been lower than during the sixty-four last years of the last century, it must, in the same state of tillage, have been much more so, had it not been for this operation of the bounty.

But, without the bounty, it may be said the state of tillage would not have been the same. What may have been the effects of this institution upon the agriculture of the country, I shall endeavour to explain hereafter, when I come to treat particularly of bounties. I shall only observe at present, that this rise in the value of silver, in proportion to that of corn, has not been peculiar to England. It has been observed to have taken place in France during the same period, and nearly in the same proportion, too, by three very faithful, diligent, and laborious collectors of the prices of corn, Mr Dupré de St Maur, Mr Messance, and the author of the *Essay on the Police of Grain*. But in France, till 1764, the exportation of grain was by law prohibited; and it is somewhat difficult to suppose, that nearly the same diminution of price which took place in one country, notwithstanding this prohibition, should, in another, be owing to the extraordinary encouragement given to exportation. It would be more proper, perhaps, to consider this variation in the average money price of corn as the effect rather of some gradual rise in the real value of silver in the European market, than of any fall in the real average value of corn. Corn, it has already been observed, is, at distant periods of time, a more accurate measure of value than either silver or, perhaps, any other commodity. When, after the discovery of the abundant mines of America, corn rose to three and four times its former money price, this change was universally ascribed, not to any rise in the real value of corn, but to a fall in the real value of silver. If, during the sixty-four first years of the present century, therefore, the average money price of corn has fallen somewhat below what it had been during the greater part of the last century, we should, in the same manner, impute this change, not to any fall in the real value of corn, but to some rise in the real value of silver in the European market.

The high price of corn during these ten or twelve years past, indeed, has occasioned a suspicion that the real value of silver still continues to fall in the European market. This high price of corn, however, seems evidently to have been the effect of the extraordinary unfavourableness of the seasons, and ought, therefore, to be regarded, not as a permanent, but as a transitory and occasional event. The seasons, for these ten or twelve years past, have been unfavourable through the greater part of

Europe; and the disorders of Poland have very much increased the scarcity in all those countries, which, in dear years, used to be supplied from that market. So long a course of bad seasons, though not a very common event, is by no means a singular one; and whoever has inquired much into the history of the prices of corn in former times, will be at no loss to recollect several other examples of the same kind. Ten years of extraordinary scarcity, besides, are not more wonderful than ten years of extraordinary plenty. The low price of corn, from 1741 to 1750, both inclusive, may very well be set in opposition to its high price during these last eight or ten years. From 1741 to 1750, the average price of the quarter of nine bushels of the best wheat, at Windsor market, it appears from the accounts of Eton college, was only £ 1:13:9 4/5, which is nearly 6s.3d. below the average price of the sixty-four first years of the present century. The average price of the quarter of eight bushels of middle wheat comes out, according to this account, to have been, during these ten years, only £ 1:6:8.

Between 1741 and 1750, however, the bounty must have hindered the price of corn from falling so low in the home market as it naturally would have done. During these ten years, the quantity of all sorts of grain exported, it appears from the custom-house books, amounted to no less than 8,029,156 quarters, one bushel. The bounty paid for this amounted to £ 1,514,962:17:4 1/2. In 1749, accordingly, Mr Pelham, at that time prime minister, observed to the house of commons, that, for the three years preceding, a very extraordinary sum had been paid as bounty for the exportation of corn. He had good reason to make this observation, and in the following year he might have had still better. In that single year, the bounty paid amounted to no less than £ 324,176:10:6. See *Tracts on the Corn Trade*, Tract 3, It is unnecessary to observe how much this forced exportation must have raised the price of corn above what it otherwise would have been in the home market.

At the end of the accounts annexed to this chapter the reader will find the particular account of those ten years separated from the rest. He will find there, too, the particular account of the preceding ten years, of which the average is likewise below, though not so much below, the general average of the sixty-four first years of the century. The year 1740, however, was a year of extraordinary scarcity. These twenty years preceding 1750 may very well be set in opposition to the twenty preceding 1770. As the former were a good deal below the general average of the century, notwithstanding the intervention of one or two dear years; so the latter have been a good deal above it, notwithstanding the intervention of one or two cheap ones, of 1759, for example. If the former have not been as much below the general average as the latter have been above it, we ought probably to impute it to the bounty. The change has evidently been too sudden to be ascribed to any change in the value of silver, which is always slow and gradual. The suddenness of the effect can be accounted for only by a cause which can operate suddenly, the accidental variations of the seasons.

The money price of labour in Great Britain has, indeed, risen during the course of the present century. This, however, seems to be the effect, not so much of any

diminution in the value of silver in the European market, as of an increase in the demand for labour in Great Britain, arising from the great, and almost universal prosperity of the country. In France, a country not altogether so prosperous, the money price of labour has, since the middle of the last century, been observed to sink gradually with the average money price of corn. Both in the last century and in the present, the day wages of common labour are there said to have been pretty uniformly about the twentieth part of the average price of the septier of wheat; a measure which contains a little more than four Winchester bushels. In Great Britain, the real recompence of labour, it has already been shewn, the real quantities of the necessaries and conveniencies of life which are given to the labourer, has increased considerably during the course of the present century. The rise in its money price seems to have been the effect, not of any diminution of the value of silver in the general market of Europe, but of a rise in the real price of labour, in the particular market of Great Britain, owing to the peculiarly happy circumstances of the country. For some time after the first discovery of America, silver would continue to sell at its former, or not much below its former price. The profits of mining would for some time be very great, and much above their natural rate. Those who imported that metal into Europe, however, would soon find that the whole annual importation could not be disposed of at this high price. Silver would gradually exchange for a smaller and a smaller quantity of goods. Its price would sink gradually lower and lower, till it fell to its natural price; or to what was just sufficient to pay, according to their natural rates, the wages of the labour, the profits of the stock, and the rent of the land, which must be paid in order to bring it from the mine to the market. In the greater part of the silver mines of Peru, the tax of the king of Spain, amounting to a tenth of the gross produce, eats up, it has already been observed, the whole rent of the land. This tax was originally a half; it soon afterwards fell to a third, then to a fifth, and at last to a tenth, at which late it still continues. In the greater part of the silver mines of Peru, this, it seems, is all that remains, after replacing the stock of the undertaker of the work, together with its ordinary profits; and it seems to be universally acknowledged that these profits, which were once very high, are now as low as they can well be, consistently with carrying on the works.

The tax of the king of Spain was reduced to a fifth of the registered silver in 1504 Solorzano, vol. ii., one-and-forty years before 1545, the date of the discovery of the mines of Potosi. In the course of ninety years, or before 1636, these mines, the most fertile in all America, had time sufficient to produce their full effect, or to reduce the value of silver in the European market as low as it could well fall, while it continued to pay this tax to the king of Spain. Ninety years is time sufficient to reduce any commodity, of which there is no monopoly, to its natural price, or to the lowest price at which, while it pays a particular tax, it can continue to be sold for any considerable time together.

The price of silver in the European market might, perhaps, have fallen still lower, and it might have become necessary either to reduce the tax upon it, not only to

one-tenth, as in 1736, but to one twentieth, in the same manner as that upon gold, or to give up working the greater part of the American mines which are now wrought. The gradual increase of the demand for silver, or the gradual enlargement of the market for the produce of the silver mines of America, is probably the cause which has prevented this from happening, and which has not only kept up the value of silver in the European market, but has perhaps even raised it somewhat higher than it was about the middle of the last century. Since the first discovery of America, the market for the produce of its silver mines has been growing gradually more and more extensive. First, the market of Europe has become gradually more and more extensive. Since the discovery of America, the greater part of Europe has been much improved. England, Holland, France, and Germany; even Sweden, Denmark, and Russia, have all advanced considerably, both in agriculture and in manufactures. Italy seems not to have gone backwards. The fall of Italy preceded the conquest of Peru. Since that time it seems rather to have recovered a little. Spain and Portugal, indeed, are supposed to have gone backwards. Portugal, however, is but a very small part of Europe, and the declension of Spain is not, perhaps, so great as is commonly imagined. In the beginning of the sixteenth century, Spain was a very poor country, even in comparison with France, which has been so much improved since that time. It was the well known remark of the emperor Charles V. who had travelled so frequently through both countries, that every thing abounded in France, but that every thing was wanting in Spain. The increasing produce of the agriculture and manufactures of Europe must necessarily have required a gradual increase in the quantity of silver coin to circulate it; and the increasing number of wealthy individuals must have required the like increase in the quantity of their plate and other ornaments of silver.

Secondly, America is itself a new market, for the produce of its own silver mines; and as its advances in agriculture, industry, and population, are much more rapid than those of the most thriving countries in Europe, its demand must increase much more rapidly. The English colonies are altogether a new market, which, partly for coin, and partly for plate, requires a continual augmenting supply of silver through a great continent where there never was any demand before. The greater part, too, of the Spanish and Portuguese colonies, are altogether new markets. New Granada, the Yucatan, Paraguay, and the Brazils, were, before discovered by the Europeans, inhabited by savage nations, who had neither arts nor agriculture. A considerable degree of both has now been introduced into all of them. Even Mexico and Peru, though they cannot be considered as altogether new markets, are certainly much more extensive ones than they ever were before. After all the wonderful tales which have been published concerning the splendid state of those countries in ancient times, whoever reads, with any degree of sober judgment, the history of their first discovery and conquest, will evidently discern that, in arts, agriculture, and commerce, their inhabitants were much more ignorant than the Tartars of the Ukraine are at present. Even the Peruvians, the more civilized nation of the two, though they made use of gold and silver as ornaments, had no coined money of any kind. Their whole

commerce was carried on by barter, and there was accordingly scarce any division of labour among them. Those who cultivated the ground, were obliged to build their own houses, to make their own household furniture, their own clothes, shoes, and instruments of agriculture. The few artificers among them are said to have been all maintained by the sovereign, the nobles, and the priests, and were probably their servants or slaves. All the ancient arts of Mexico and Peru have never furnished one single manufacture to Europe. The Spanish armies, though they scarce ever exceeded five hundred men, and frequently did not amount to half that number, found almost everywhere great difficulty in procuring subsistence. The famines which they are said to have occasioned almost wherever they went, in countries, too, which at the same time are represented as very populous and well cultivated, sufficiently demonstrate that the story of this populousness and high cultivation is in a great measure fabulous. The Spanish colonies are under a government in many respects less favourable to agriculture, improvement, and population, than that of the English colonies. They seem, however, to be advancing in all those much more rapidly than any country in Europe. In a fertile soil and happy climate, the great abundance and cheapness of land, a circumstance common to all new colonies, is, it seems, so great an advantage, as to compensate many defects in civil government. Frezier, who visited Peru in 1713, represents Lima as containing between twenty-five and twenty-eight thousand inhabitants. Ulloa, who resided in the same country between 1740 and 1746, represents it as containing more than fifty thousand. The difference in their accounts of the populousness of several other principal towns of Chili and Peru is nearly the same; and as there seems to be no reason to doubt of the good information of either, it marks an increase which is scarce inferior to that of the English colonies. America, therefore, is a new market for the produce of its own silver mines, of which the demand must increase much more rapidly than that of the most thriving country in Europe.

Thirdly, the East Indies is another market for the produce of the silver mines of America, and a market which, from the time of the first discovery of those mines, has been continually taking off a greater and a greater quantity of silver. Since that time, the direct trade between America and the East Indies, which is carried on by means of the Acapulco ships, has been continually augmenting, and the indirect intercourse by the way of Europe has been augmenting in a still greater proportion. During the sixteenth century, the Portuguese were the only European nation who carried on any regular trade to the East Indies. In the last years of that century, the Dutch began to encroach upon this monopoly, and in a few years expelled them from their principal settlements in India. During the greater part of the last century, those two nations divided the most considerable part of the East India trade between them; the trade of the Dutch continually augmenting in a still greater proportion than that of the Portuguese declined. The English and French carried on some trade with India in the last century, but it has been greatly augmented in the course of the present. The East India trade of the Swedes and Danes began in the course of the present century. Even

the Muscovites now trade regularly with China, by a sort of caravans which go over land through Siberia and Tartary to Pekin. The East India trade of all these nations, if we except that of the French, which the last war had well nigh annihilated, has been almost continually augmenting. The increasing consumptions of East India goods in Europe is, it seems, so great, as to afford a gradual increase of employment to them all. Tea, for example, was a drug very little used in Europe, before the middle of the last century. At present, the value of the tea annually imported by the English East India company, for the use of their own countrymen, amounts to more than a million and a half a year; and even this is not enough; a great deal more being constantly smuggled into the country from the ports of Holland, from Gottenburgh in Sweden, and from the coast of France, too, as long as the French East India company was in prosperity. The consumption of the porcelain of China, of the spiceries of the Moluccas, of the piece goods of Bengal, and of innumerable other articles, has increased very nearly in a like proportion. The tonnage, accordingly, of all the European shipping employed in the East India trade, at any one time during the last century, was not, perhaps, much greater than that of the English East India company before the late reduction of their shipping. But in the East Indies, particularly in China and Indostan, the value of the precious metals, when the Europeans first began to trade to those countries, was much higher than in Europe; and it still continues to be so. In rice countries, which generally yield two, sometimes three crops in the year, each of them more plentiful than any common crop of corn, the abundance of food must be much greater than in any corn country of equal extent. Such countries are accordingly much more populous. In them, too, the rich, having a greater superabundance of food to dispose of beyond what they themselves can consume, have the means of purchasing a much greater quantity of the labour of other people. The retinue of a grandee in China or Indostan accordingly is, by all accounts, much more numerous and splendid than that of the richest subjects in Europe. The same superabundance of food, of which they have the disposal, enables them to give a greater quantity of it for all those singular and rare productions which nature furnishes but in very small quantities; such as the precious metals and the precious stones, the great objects of the competition of the rich. Though the mines, therefore, which supplied the Indian market, had been as abundant as those which supplied the European, such commodities would naturally exchange for a greater quantity of food in India than in Europe. But the mines which supplied the Indian market with the precious metals seem to have been a good deal less abundant, and those which supplied it with the precious stones a good deal more so, than the mines which supplied the European. The precious metals, therefore, would naturally exchange in India for a somewhat greater quantity of the precious stones, and for a much greater quantity of food than in Europe. The money price of diamonds, the greatest of all superfluities, would be somewhat lower, and that of food, the first of all necessities, a great deal lower in the one country than in the other. But the real price of labour, the real quantity of the necessities of life which is given to the labourer, it has already been observed, is lower both in China and Indostan, the

two great markets of India, than it is through the greater part of Europe. The wages of the labourer will there purchase a smaller quantity of food: and as the money price of food is much lower in India than in Europe, the money price of labour is there lower upon a double account; upon account both of the small quantity of food which it will purchase, and of the low price of that food. But in countries of equal art and industry, the money price of the greater part of manufactures will be in proportion to the money price of labour; and in manufacturing art and industry, China and Indostan, though inferior, seem not to be much inferior to any part of Europe. The money price of the greater part of manufactures, therefore, will naturally be much lower in those great empires than it is anywhere in Europe. Through the greater part of Europe, too, the expense of landcarriage increases very much both the real and nominal price of most manufactures. It costs more labour, and therefore more money, to bring first the materials, and afterwards the complete manufacture to market. In China and Indostan, the extent and variety of inland navigations save the greater part of this labour, and consequently of this money, and thereby reduce still lower both the real and the nominal price of the greater part of their manufactures. Upon all these accounts, the precious metals are a commodity which it always has been, and still continues to be, extremely advantageous to carry from Europe to India. There is scarce any commodity which brings a better price there; or which, in proportion to the quantity of labour and commodities which it costs in Europe, will purchase or command a greater quantity of labour and commodities in India. It is more advantageous, too, to carry silver thither than gold; because in China, and the greater part of the other markets of India, the proportion between fine silver and fine gold is but as ten, or at most as twelve to one; whereas in Europe it is as fourteen or fifteen to one. In China, and the greater part of the other markets of India, ten, or at most twelve ounces of silver, will purchase an ounce of gold; in Europe, it requires from fourteen to fifteen ounces. In the cargoes, therefore, of the greater part of European ships which sail to India, silver has generally been one of the most valuable articles. It is the most valuable article in the Acapulco ships which sail to Manilla. The silver of the new continent seems, in this manner, to be one of the principal commodities by which the commerce between the two extremities of the old one is carried on; and it is by means of it, in a great measure, that those distant parts of the world are connected with one another.

In order to supply so very widely extended a market, the quantity of silver annually brought from the mines must not only be sufficient to support that continued increase, both of coin and of plate, which is required in all thriving countries; but to repair that continual waste and consumption of silver which takes place in all countries where that metal is used.

The continual consumption of the precious metals in coin by wearing, and in plate both by wearing and cleaning, is very sensible; and in commodities of which the use is so very widely extended, would alone require a very great annual supply. The consumption of those metals in some particular manufactures, though it may not

perhaps be greater upon the whole than this gradual consumption, is, however, much more sensible, as it is much more rapid. In the manufactures of Birmingham alone, the quantity of gold and silver annually employed in gilding and plating, and thereby disqualified from ever afterwards appearing in the shape of those metals, is said to amount to more than fifty thousand pounds sterling. We may from thence form some notion how great must be the annual consumption in all the different parts of the world, either in manufactures of the same kind with those of Birmingham, or in laces, embroideries, gold and silver stuffs, the gilding of books, furniture, etc. A considerable quantity, too, must be annually lost in transporting those metals from one place to another both by sea and by land. In the greater part of the governments of Asia, besides, the almost universal custom of concealing treasures in the bowels of the earth, of which the knowledge frequently dies with the person who makes the concealment, must occasion the loss of a still greater quantity.

The quantity of gold and silver imported at both Cadiz and Lisbon (including not only what comes under register, but what may be supposed to be smuggled) amounts, according to the best accounts, to about six millions sterling a-year.

According to Mr Meggens Postscript to the *Universal Merchant* p. 15 and 16. This postscript was not printed till 1756, three years after the publication of the book, which has never had a second edition. The postscript is, therefore, to be found in few copies; it corrects several errors in the book., the annual importation of the precious metals into Spain, at an average of six years, viz. from 1748 to 1753, both inclusive, and into Portugal, at an average of seven years, viz. from 1747 to 1753, both inclusive, amounted in silver to 1,101,107 pounds weight, and in gold to 49,940 pounds weight. The silver, at sixty two shillings the pound troy, amounts to £ 3,413,431:10s. sterling. The gold, at forty-four guineas and a half the pound troy, amounts to £ 2,333,446:14s. sterling. Both together amount to £ 5,746,878:4s. sterling. The account of what was imported under register, he assures us, is exact. He gives us the detail of the particular places from which the gold and silver were brought, and of the particular quantity of each metal, which, according to the register, each of them afforded. He makes an allowance, too, for the quantity of each metal which, he supposes, may have been smuggled. The great experience of this judicious merchant renders his opinion of considerable weight.

According to the eloquent, and sometimes well-informed, author of the *Philosophical and Political History of the Establishment of the Europeans in the two Indies*, the annual importation of registered gold and silver into Spain, at an average of eleven years, viz. from 1754 to 1764, both inclusive, amounted to 13,984,185 $\frac{3}{5}$ piastres of ten reals. On account of what may have been smuggled, however, the whole annual importation, he supposes, may have amounted to seventeen millions of piastres, which, at 4s. 6d. the piastre, is equal to £ 3,825,000 sterling. He gives the detail, too, of the particular places from which the gold and silver were brought, and of the particular quantities of each metal, which according to the register, each of them afforded. He informs us, too, that if we were to judge of the quantity of gold annually

imported from the Brazils to Lisbon, by the amount of the tax paid to the king of Portugal, which it seems, is one-fifth of the standard metal, we might value it at eighteen millions of cruzadoes, or forty-five millions of French livres, equal to about twenty millions sterling. On account of what may have been smuggled, however, we may safely, he says, add to this sum an eighth more, or £ 250,000 sterling, so that the whole will amount to £ 2,250,000 sterling. According to this account, therefore, the whole annual importation of the precious metals into both Spain and Portugal, mounts to about £ 6,075,000 sterling. Several other very well authenticated, though manuscript accounts, I have been assured, agree in making this whole annual importation amount, at an average, to about six millions sterling; sometimes a little more, sometimes a little less.

The annual importation of the precious metals into Cadiz and Lisbon, indeed, is not equal to the whole annual produce of the mines of America. Some part is sent annually by the Acapulco ships to Manilla; some part is employed in a contraband trade, which the Spanish colonies carry on with those of other European nations; and some part, no doubt, remains in the country. The mines of America, besides, are by no means the only gold and silver mines in the world. They, are, however, by far the most abundant. The produce of all the other mines which are known is insignificant, it is acknowledged, in comparison with their's; and the far greater part of their produce, it is likewise acknowledged, is annually imported into Cadiz and Lisbon. But the consumption of Birmingham alone, at the rate of fifty thousand pounds a-year, is equal to the hundred-and-twentieth part of this annual importation, at the rate of six millions a-year. The whole annual consumption of gold and silver, therefore, in all the different countries of the world where those metals are used, may, perhaps, be nearly equal to the whole annual produce. The remainder may be no more than sufficient to supply the increasing demand of all thriving countries. It may even have fallen so far short of this demand, as somewhat to raise the price of those metals in the European market.

The quantity of brass and iron annually brought from the mine to the market, is out of all proportion greater than that of gold and silver. We do not, however, upon this account, imagine that those coarse metals are likely to multiply beyond the demand, or to become gradually cheaper and cheaper. Why should we imagine that the precious metals are likely to do so? The coarse metals, indeed, though harder, are put to much harder uses, and, as they are of less value, less care is employed in their preservation. The precious metals, however, are not necessarily immortal any more than they, but are liable, too, to be lost, wasted, and consumed, in a great variety of ways.

The price of all metals, though liable to slow and gradual variations, varies less from year to year than that of almost any other part of the rude produce of land: and the price of the precious metals is even less liable to sudden variations than that of the coarse ones. The durability of metals is the foundation of this extraordinary steadiness of price. The corn which was brought to market last year will be all, or

almost all, consumed, long before the end of this year. But some part of the iron which was brought from: the mine two or three hundred years ago, may be still in use, and, perhaps, some part of the gold which was brought from it two or three thousand years ago. The different masses of corn, which, in different years, must supply the consumption of the world, will always be nearly in proportion to the respective produce of those different years. But the proportion between the different masses of iron which may be in use in two different years, will be very little affected by any accidental difference in the produce of the iron mines of those two years; and the proportion between the masses of gold will be still less affected by any such difference in the produce of the gold mines. Though the produce of the greater part of metallic mines, therefore, varies, perhaps, still more from year to year than that of the greater part of corn fields, those variations have not the same effect upon the price of the one species of commodities as upon that of the other.

11.1 Variations in the Proportion between the respective Values of Gold and Silver.

Before the discovery of the mines of America, the value of fine gold to fine silver was regulated in the different mines of Europe, between the proportions of one to ten and one to twelve; that is, an ounce of fine gold was supposed to be worth from ten to twelve ounces of fine silver. About the middle of the last century, it came to be regulated, between the proportions of one to fourteen and one to fifteen; that is, an ounce of fine gold came to be supposed worth between fourteen and fifteen ounces of fine silver. Gold rose in its nominal value, or in the quantity of silver which was given for it. Both metals sunk in their real value, or in the quantity of labour which they could purchase; but silver sunk more than gold. Though both the gold and silver mines of America exceeded in fertility all those which had ever been known before, the fertility of the silver mines had, it seems, been proportionally still greater than that of the gold ones.

The great quantities of silver carried annually from Europe to India, have, in some of the English settlements, gradually reduced the value of that metal in proportion to gold. In the mint of Calcutta, an ounce of fine gold is supposed to be worth fifteen ounces of fine silver, in the same manner as in Europe. It is in the mint, perhaps, rated too high for the value which it bears in the market of Bengal. In China, the proportion of gold to silver still continues as one to ten, or one to twelve. In Japan, it is said to be as one to eight.

The proportion between the quantities of gold and silver annually imported into Europe, according to Mr Meggens' account, is as one to twenty-two nearly; that is, for one ounce of gold there are imported a little more than twenty-two ounces of silver. The great quantity of silver sent annually to the East Indies reduces, he supposes, the quantities of those metals which remain in Europe to the proportion

of one to fourteen or fifteen, the proportion of their values. The proportion between their values, he seems to think, must necessarily be the same as that between their quantities, and would therefore be as one to twenty-two, were it not for this greater exportation of silver.

But the ordinary proportion between the respective values of two commodities is not necessarily the same as that between the quantities of them which are commonly in the market. The price of an ox, reckoned at ten guineas, is about three score times the price of a lamb, reckoned at 3s. 6d. It would be absurd, however, to infer from thence, that there are commonly in the market three score lambs for one ox; and it would be just as absurd to infer, because an ounce of gold will commonly purchase from fourteen or fifteen ounces of silver, that there are commonly in the market only fourteen or fifteen ounces of silver for one ounce of gold. The quantity of silver commonly in the market, it is probable, is much greater in proportion to that of gold, than the value of a certain quantity of gold is to that of an equal quantity of silver. The whole quantity of a cheap commodity brought to market is commonly not only greater, but of greater value, than the whole quantity of a dear one. The whole quantity of bread annually brought to market, is not only greater, but of greater value, than the whole quantity of butcher's meat; the whole quantity of butcher's meat, than the whole quantity of poultry; and the whole quantity of poultry, than the whole quantity of wild fowl. There are so many more purchasers for the cheap than for the dear commodity, that, not only a greater quantity of it, but a greater value can commonly be disposed of. The whole quantity, therefore, of the cheap commodity, must commonly be greater in proportion to the whole quantity of the dear one, than the value of a certain quantity of the dear one, is to the value of an equal quantity of the cheap one. When we compare the precious metals with one another, silver is a cheap, and gold a dear commodity. We ought naturally to expect, therefore, that there should always be in the market, not only a greater quantity, but a greater value of silver than of gold. Let any man, who has a little of both, compare his own silver with his gold plate, and he will probably find, that not only the quantity, but the value of the former, greatly exceeds that of the latter. Many people, besides, have a good deal of silver who have no gold plate, which, even with those who have it, is generally confined to watch-cases, snuff-boxes, and such like trinkets, of which the whole amount is seldom of great value. In the British coin, indeed, the value of the gold preponderates greatly, but it is not so in that of all countries. In the coin of some countries, the value of the two metals is nearly equal. In the Scotch coin, before the union with England, the gold preponderated very little, though it did somewhat See Ruddiman's Preface to Anderson's *Diplomata*, etc. *Scotiae*., as it appears by the accounts of the mint. In the coin of many countries the silver preponderates. In France, the largest sums are commonly paid in that metal, and it is there difficult to get more gold than what is necessary to carry about in your pocket. The superior value, however, of the silver plate above that of the gold, which takes place in all countries, will much more than compensate the preponderancy of the gold coin above

the silver, which takes place only in some countries.

Though, in one sense of the word, silver always has been, and probably always will be, much cheaper than gold; yet, in another sense, gold may perhaps, in the present state of the Spanish market, be said to be somewhat cheaper than silver. A commodity may be said to be dear or cheap not only according to the absolute greatness or smallness of its usual price, but according as that price is more or less above the lowest for which it is possible to bring it to market for any considerable time together. This lowest price is that which barely replaces, with a moderate profit, the stock which must be employed in bringing the commodity thither. It is the price which affords nothing to the landlord, of which rent makes not any component part, but which resolves itself altogether into wages and profit. But, in the present state of the Spanish market, gold is certainly somewhat nearer to this lowest price than silver. The tax of the king of Spain upon gold is only one-twentieth part of the standard metal, or five per cent.; whereas his tax upon silver amounts to one-tenth part of it, or to ten per cent. In these taxes, too, it has already been observed, consists the whole rent of the greater part of the gold and silver mines of Spanish America; and that upon gold is still worse paid than that upon silver. The profits of the undertakers of gold mines, too, as they more rarely make a fortune, must, in general, be still more moderate than those of the undertakers of silver mines. The price of Spanish gold, therefore, as it affords both less rent and less profit, must, in the Spanish market, be somewhat nearer to the lowest price for which it is possible to bring it thither, than the price of Spanish silver. When all expenses are computed, the whole quantity of the one metal, it would seem, cannot, in the Spanish market, be disposed of so advantageously as the whole quantity of the other. The tax, indeed, of the king of Portugal upon the gold of the Brazils, is the same with the ancient tax of the king of Spain upon the silver of Mexico and Peru; or one-fifth part of the standard metal. It may therefore be uncertain, whether, to the general market of Europe, the whole mass of American gold comes at a price nearer to the lowest for which it is possible to bring it thither, than the whole mass of American silver.

The price of diamonds and other precious stones may, perhaps, be still nearer to the lowest price at which it is possible to bring them to market, than even the price of gold.

Though it is not very probable that any part of a tax, which is not only imposed upon one of the most proper subjects of taxation, a mere luxury and superfluity, but which affords so very important a revenue as the tax upon silver, will ever be given up as long as it is possible to pay it; yet the same impossibility of paying it, which, in 1736. made it necessary to reduce it from one-fifth to one-tenth, may in time make it necessary to reduce it still further; in the same manner as it made it necessary to reduce the tax upon gold to one-twentieth. That the silver mines of Spanish America, like all other mines, become gradually more expensive in the working, on account of the greater depths at which it is necessary to carry on the works, and of the greater expense of drawing out the water, and of supplying them with fresh air at those

depths, is acknowledged by everybody who has inquired into the state of those mines.

These causes, which are equivalent to a growing scarcity of silver (for a commodity may be said to grow scarcer when it becomes more difficult and expensive to collect a certain quantity of it), must, in time, produce one or other of the three following events: The increase of the expense must either, first, be compensated altogether by a proportionable increase in the price of the metal; or, secondly, it must be compensated altogether by a proportionable diminution of the tax upon silver; or, thirdly, it must be compensated partly by the one and partly by the other of those two expedients. This third event is very possible. As gold rose in its price in proportion to silver, notwithstanding a great diminution of the tax upon gold, so silver might rise in its price in proportion to labour and commodities, notwithstanding an equal diminution of the tax upon silver.

Such successive reductions of the tax, however, though they may not prevent altogether, must certainly retard, more or less, the rise of the value of silver in the European market. In consequence of such reductions, many mines may be wrought which could not be wrought before, because they could not afford to pay the old tax; and the quantity of silver annually brought to market, must always be somewhat greater, and, therefore, the value of any given quantity somewhat less, than it otherwise would have been. In consequence of the reduction in 1736, the value of silver in the European market, though it may not at this day be lower than before that reduction, is, probably, at least ten per cent. lower than it would have been, had the court of Spain continued to exact the old tax.

That, notwithstanding this reduction, the value of silver has, during the course of the present century, begun to rise somewhat in the European market, the facts and arguments which have been alleged above, dispose me to believe, or more properly to suspect and conjecture; for the best opinion which I can form upon this subject, scarce, perhaps, deserves the name of belief. The rise, indeed, supposing there has been any, has hitherto been so very small, that after all that has been said, it may, perhaps, appear to many people uncertain, not only whether this event has actually taken place, but whether the contrary may not have taken place, or whether the value of silver may not still continue to fall in the European market.

It must be observed, however, that whatever may be the supposed annual importation of gold and silver, there must be a certain period at which the annual consumption of those metals will be equal to that annual importation. Their consumption must increase as their mass increases, or rather in a much greater proportion. As their mass increases, their value diminishes. They are more used, and less cared for, and their consumption consequently increases in a greater proportion than their mass. After a certain period, therefore, the annual consumption of those metals must, in this manner, become equal to their annual importation, provided that importation is not continually increasing; which, in the present times, is not supposed to be the case.

If, when the annual consumption has become equal to the annual importation,

the annual importation should gradually diminish, the annual consumption may, for some time, exceed the annual importation. The mass of those metals may gradually and insensibly diminish, and their value gradually and insensibly rise, till the annual importation becoming again stationary, the annual consumption will gradually and insensibly accommodate itself to what that annual importation can maintain.

銀の価値が今後も下がり続けるという疑念の根拠

The increase of the wealth of Europe, and the popular notion, that as the quantity of the precious metals naturally increases with the increase of wealth, so their value diminishes as their quantity increases, may, perhaps, dispose many people to believe that their value still continues to fall in the European market; and the still gradually increasing price of many parts of the rude produce of land may confirm them still farther in this opinion. That that increase in the quantity of the precious metals, which arises in any country from the increase of wealth, has no tendency to diminish their value, I have endeavoured to shew already. Gold and silver naturally resort to a rich country, for the same reason that all sorts of luxuries and curiosities resort to it; not because they are cheaper there than in poorer countries, but because they are dearer, or because a better price is given for them. It is the superiority of price which attracts them; and as soon as that superiority ceases, they necessarily cease to go thither.

If you except corn, and such other vegetables as are raised altogether by human industry, that all other sorts of rude produce, cattle, poultry, game of all kinds, the useful fossils and minerals of the earth, etc. naturally grow dearer, as the society advances in wealth and improvement, I have endeavoured to shew already. Though such commodities, therefore, come to exchange for a greater quantity of silver than before, it will not from thence follow that silver has become really cheaper, or will purchase less labour than before; but that such commodities have become really dearer, or will purchase more labour than before. It is not their nominal price only, but their real price, which rises in the progress of improvement. The rise of their nominal price is the effect, not of any degradation of the value of silver, but of the rise in their real price.

Different Effects of the Progress of Improvement upon three different sorts of rude Produce.

These different sorts of rude produce may be divided into three classes. The first comprehends those which it is scarce in the power of human industry to multiply at all. The second, those which it can multiply in proportion to the demand. The third, those in which the efficacy of industry is either limited or uncertain. In the progress of wealth and improvement, the real price of the first may rise to any degree of extravagance, and seems not to be limited by any certain boundary. That of the

second, though it may rise greatly, has, however, a certain boundary, beyond which it cannot well pass for any considerable time together. That of the third, though its natural tendency is to rise in the progress of improvement, yet in the same degree of improvement it may sometimes happen even to fall, sometimes to continue the same, and sometimes to rise more or less, according as different accidents render the efforts of human industry, in multiplying this sort of rude produce, more or less successful.

First Sort. — The first sort of rude produce, of which the price rises in the progress of improvement, is that which it is scarce in the power of human industry to multiply at all. It consists in those things which nature produces only in certain quantities, and which being of a very perishable nature, it is impossible to accumulate together the produce of many different seasons. Such are the greater part of rare and singular birds and fishes, many different sorts of game, almost all wild-fowl, all birds of passage in particular, as well as many other things. When wealth, and the luxury which accompanies it, increase, the demand for these is likely to increase with them, and no effort of human industry may be able to increase the supply much beyond what it was before this increase of the demand. The quantity of such commodities, therefore, remaining the same, or nearly the same, while the competition to purchase them is continually increasing, their price may rise to any degree of extravagance, and seems not to be limited by any certain boundary. If woodcocks should become so fashionable as to sell for twenty guineas a-piece, no effort of human industry could increase the number of those brought to market, much beyond what it is at present. The high price paid by the Romans, in the time of their greatest grandeur, for rare birds and fishes, may in this manner easily be accounted for. These prices were not the effects of the low value of silver in those times, but of the high value of such rarities and curiosities as human industry could not multiply at pleasure. The real value of silver was higher at Rome, for sometime before, and after the fall of the republic, than it is through the greater part of Europe at present. Three sesterii equal to about sixpence sterling, was the price which the republic paid for the modius or peck of the tithe wheat of Sicily. This price, however, was probably below the average market price, the obligation to deliver their wheat at this rate being considered as a tax upon the Sicilian farmers. When the Romans, therefore, had occasion to order more corn than the tithe of wheat amounted to, they were bound by capitulation to pay for the surplus at the rate of four sesterii, or eightpence sterling the peck; and this had probably been reckoned the moderate and reasonable, that is, the ordinary or average contract price of those times; it is equal to about one-and-twenty shillings the quarter. Eight-and-twenty shillings the quarter was, before the late years of scarcity, the ordinary contract price of English wheat, which in quality is inferior to the Sicilian, and generally sells for a lower price in the European market. The value of silver, therefore, in those ancient times, must have been to its value in the present, as three to four inversely; that is, three ounces of silver would then have purchased the same quantity of labour and commodities which four ounces will do at present. When we read in Pliny, therefore, that Seius Lib. X, c. 29. bought a white nightingale, as a present for the empress

Agrippina, at the price of six thousand sesterii, equal to about fifty pounds of our present money; and that Asinius Celer Lib. IX, c. 17. purchased a surmullet at the price of eight thousand sesterii, equal to about sixty-six pounds thirteen shillings and fourpence of our present money; the extravagance of those prices, how much soever it may surprise us, is apt, notwithstanding, to appear to us about one third less than it really was. Their real price, the quantity of labour and subsistence which was given away for them, was about one-third more than their nominal price is apt to express to us in the present times. Seius gave for the nightingale the command of a quantity of labour and subsistence, equal to what £ 66:13: 4d. would purchase in the present times; and Asinius Celer gave for a surmullet the command of a quantity equal to what £ 88:17: 9d. would purchase. What occasioned the extravagance of those high prices was, not so much the abundance of silver, as the abundance of labour and subsistence, of which those Romans had the disposal, beyond what was necessary for their own use. The quantity of silver, of which they had the disposal, was a good deal less than what the command of the same quantity of labour and subsistence would have procured to them in the present times.

Second sort. —The second sort of rude produce, of which the price rises in the progress of improvement, is that which human industry can multiply in proportion to the demand. It consists in those useful plants and animals, which, in uncultivated countries, nature produces with such profuse abundance, that they are of little or no value, and which, as cultivation advances, are therefore forced to give place to some more profitable produce. During a long period in the progress of improvement, the quantity of these is continually diminishing, while, at the same time, the demand for them is continually increasing. Their real value, therefore, the real quantity of labour which they will purchase or command, gradually rises, till at last it gets so high as to render them as profitable a produce as any thing else which human industry can raise upon the most fertile and best cultivated land. When it has got so high, it cannot well go higher. If it did, more land and more industry would soon be employed to increase their quantity.

When the price of cattle, for example, rises so high, that it is as profitable to cultivate land in order to raise food for them as in order to raise food for man, it cannot well go higher. If it did, more corn land would soon be turned into pasture. The extension of tillage, by diminishing the quantity of wild pasture, diminishes the quantity of butcher's meat, which the country naturally produces without labour or cultivation; and, by increasing the number of those who have either corn, or, what comes to the same thing, the price of corn, to give in exchange for it, increases the demand. The price of butcher's meat, therefore, and, consequently, of cattle, must gradually rise, till it gets so high, that it becomes as profitable to employ the most fertile and best cultivated lands in raising food for them as in raising corn. But it must always be late in the progress of improvement before tillage can be so far extended as to raise the price of cattle to this height; and, till it has got to this height, if the country is advancing at all, their price must be continually rising. There are,

perhaps, some parts of Europe in which the price of cattle has not yet got to this height. It had not got to this height in any part of Scotland before the Union. Had the Scotch cattle been always confined to the market of Scotland, in a country in which the quantity of land, which can be applied to no other purpose but the feeding of cattle, is so great in proportion to what can be applied to other purposes, it is scarce possible, perhaps, that their price could ever have risen so high as to render it profitable to cultivate land for the sake of feeding them. In England, the price of cattle, it has already been observed, seems, in the neighbourhood of London, to have got to this height about the beginning of the last century; but it was much later, probably, before it got through the greater part of the remoter counties, in some of which, perhaps, it may scarce yet have got to it. Of all the different substances, however, which compose this second sort of rude produce, cattle is, perhaps, that of which the price, in the progress of improvement, rises first to this height. Till the price of cattle, indeed, has got to this height, it seems scarce possible that the greater part, even of those lands which are capable of the highest cultivation, can be completely cultivated. In all farms too distant from any town to carry manure from it, that is, in the far greater part of those of every extensive country, the quantity of well cultivated land must be in proportion to the quantity of manure which the farm itself produces; and this, again, must be in proportion to the stock of cattle which are maintained upon it. The land is manured, either by pasturing the cattle upon it, or by feeding them in the stable, and from thence carrying out their dung to it. But unless the price of the cattle be sufficient to pay both the rent and profit of cultivated land, the farmer cannot afford to pasture them upon it; and he can still less afford to feed them in the stable. It is with the produce of improved and cultivated land only that cattle can be fed in the stable; because, to collect the scanty and scattered produce of waste and unimproved lands, would require too much labour, and be too expensive. If the price of the cattle, therefore, is not sufficient to pay for the produce of improved and cultivated land, when they are allowed to pasture it, that price will be still less sufficient to pay for that produce, when it must be collected with a good deal of additional labour, and brought into the stable to them. In these circumstances, therefore, no more cattle can with profit be fed in the stable than what are necessary for tillage. But these can never afford manure enough for keeping constantly in good condition all the lands which they are capable of cultivating. What they afford, being insufficient for the whole farm, will naturally be reserved for the lands to which it can be most advantageously or conveniently applied; the most fertile, or those, perhaps, in the neighbourhood of the farm-yard. These, therefore, will be kept constantly in good condition, and fit for tillage. The rest will, the greater part of them, be allowed to lie waste, producing scarce any thing but some miserable pasture, just sufficient to keep alive a few straggling, halfstarved cattle; the farm, though much overstocked in proportion to what would be necessary for its complete cultivation, being very frequently overstocked in proportion to its actual produce. A portion of this waste land, however, after having been pastured in this wretched manner for six or seven

years together, may be ploughed up, when it will yield, perhaps, a poor crop or two of bad oats, or of some other coarse grain; and then, being entirely exhausted, it must be rested and pastured again as before, and another portion ploughed up, to be in the same manner exhausted and rested again in its turn. Such, accordingly, was the general system of management all over the low country of Scotland before the Union. The lands which were kept constantly well manured and in good condition seldom exceeded a third or fourth part of the whole farm, and sometimes did not amount to a fifth or a sixth part of it. The rest were never manured, but a certain portion of them was in its turn, notwithstanding, regularly cultivated and exhausted. Under this system of management, it is evident, even that part of the lands of Scotland which is capable of good cultivation, could produce but little in comparison of what it may be capable of producing. But how disadvantageous soever this system may appear, yet, before the Union, the low price of cattle seems to have rendered it almost unavoidable. If, notwithstanding a great rise in the price, it still continues to prevail through a considerable part of the country, it is owing in many places, no doubt, to ignorance and attachment to old customs, but, in most places, to the unavoidable obstructions which the natural course of things opposes to the immediate or speedy establishment of a better system: first, to the poverty of the tenants, to their not having yet had time to acquire a stock of cattle sufficient to cultivate their lands more completely, the same rise of price, which would render it advantageous for them to maintain a greater stock, rendering it more difficult for them to acquire it; and, secondly, to their not having yet had time to put their lands in condition to maintain this greater stock properly, supposing they were capable of acquiring it. The increase of stock and the improvement of land are two events which must go hand in hand, and of which the one can nowhere much outrun the other. Without some increase of stock, there can be scarce any improvement of land, but there can be no considerable increase of stock, but in consequence of a considerable improvement of land; because otherwise the land could not maintain it. These natural obstructions to the establishment of a better system, cannot be removed but by a long course of frugality and industry; and half a century or a century more, perhaps, must pass away before the old system, which is wearing out gradually, can be completely abolished through all the different parts of the country. Of all the commercial advantages, however, which Scotland has derived from the Union with England, this rise in the price of cattle is, perhaps, the greatest. It has not only raised the value of all highland estates, but it has, perhaps, been the principal cause of the improvement of the low country.

In all new colonies, the great quantity of waste land, which can for many years be applied to no other purpose but the feeding of cattle, soon renders them extremely abundant; and in every thing great cheapness is the necessary consequence of great abundance. Though all the cattle of the European colonies in America were originally carried from Europe, they soon multiplied so much there, and became of so little value, that even horses were allowed to run wild in the woods, without any owner thinking it worth while to claim them. It must be a long time after the first establishment of such

colonies, before it can become profitable to feed cattle upon the produce of cultivated land. The same causes, therefore, the want of manure, and the disproportion between the stock employed in cultivation and the land which it is destined to cultivate, are likely to introduce there a system of husbandry, not unlike that which still continues to take place in so many parts of Scotland. Mr Kalm, the Swedish traveller, when he gives an account of the husbandry of some of the English colonies in North America, as he found it in 1749, observes, accordingly, that he can with difficulty discover there the character of the English nation, so well skilled in all the different branches of agriculture. They make scarce any manure for their corn fields, he says; but when one piece of ground has been exhausted by continual cropping, they clear and cultivate another piece of fresh land; and when that is exhausted, proceed to a third. Their cattle are allowed to wander through the woods and other uncultivated grounds, where they are half-starved; having long ago extirpated almost all the annual grasses, by cropping them too early in the spring, before they had time to form their flowers, or to shed their seeds. Kalm's Travels, vol 1, pp. 343, 344. The annual grasses were, it seems, the best natural grasses in that part of North America; and when the Europeans first settled there, they used to grow very thick, and to rise three or four feet high. A piece of ground which, when he wrote, could not maintain one cow, would in former times, he was assured, have maintained four, each of which would have given four times the quantity of milk which that one was capable of giving. The pooriness of the pasture had, in his opinion, occasioned the degradation of their cattle, which degenerated sensibly from one generation to another. They were probably not unlike that stunted breed which was common all over Scotland thirty or forty years ago, and which is now so much mended through the greater part of the low country, not so much by a change of the breed, though that expedient has been employed in some places, as by a more plentiful method of feeding them.

Though it is late, therefore, in the progress of improvement, before cattle can bring such a price as to render it profitable to cultivate land for the sake of feeding them; yet of all the different parts which compose this second sort of rude produce, they are perhaps the first which bring this price; because, till they bring it, it seems impossible that improvement can be brought near even to that degree of perfection to which it has arrived in many parts of Europe.

As cattle are among the first, so perhaps venison is among the last parts of this sort of rude produce which bring this price. The price of venison in Great Britain, how extravagant soever it may appear, is not near sufficient to compensate the expense of a deer park, as is well known to all those who have had any experience in the feeding of deer. If it was otherwise, the feeding of deer would soon become an article of common farming, in the same manner as the feeding of those small birds, called turdi, was among the ancient Romans. Varro and Columella assure us, that it was a most profitable article. The fattening of ortolans, birds of passage which arrive lean in the country, is said to be so in some parts of France. If venison continues in fashion, and the wealth and luxury of Great Britain increase as they have done

for some time past, its price may very probably rise still higher than it is at present. Between that period in the progress of improvement, which brings to its height the price of so necessary an article as cattle, and that which brings to it the price of such a superfluity as venison, there is a very long interval, in the course of which many other sorts of rude produce gradually arrive at their highest price, some sooner and some later, according to different circumstances. Thus, in every farm, the offals of the barn and stable will maintain a certain number of poultry. These, as they are fed with what would otherwise be lost, are a mere save-all; and as they cost the farmer scarce any thing, so he can afford to sell them for very little. Almost all that he gets is pure gain, and their price can scarce be so low as to discourage him from feeding this number. But in countries ill cultivated, and therefore but thinly inhabited, the poultry, which are thus raised without expense, are often fully sufficient to supply the whole demand. In this state of things, therefore, they are often as cheap as butcher's meat, or any other sort of animal food. But the whole quantity of poultry which the farm in this manner produces without expense, must always be much smaller than the whole quantity of butcher's meat which is reared upon it; and in times of wealth and luxury, what is rare, with only nearly equal merit, is always preferred to what is common. As wealth and luxury increase, therefore, in consequence of improvement and cultivation, the price of poultry gradually rises above that of butcher's meat, till at last it gets so high, that it becomes profitable to cultivate land for the sake of feeding them. When it has got to this height, it cannot well go higher. If it did, more land would soon be turned to this purpose. In several provinces of France, the feeding of poultry is considered as a very important article in rural economy, and sufficiently profitable to encourage the farmer to raise a considerable quantity of Indian corn and buckwheat for this purpose. A middling farmer will there sometimes have four hundred fowls in his yard. The feeding of poultry seems scarce yet to be generally considered as a matter of so much importance in England. They are certainly, however, dearer in England than in France, as England receives considerable supplies from France. In the progress of improvements, the period at which every particular sort of animal food is dearest, must naturally be that which immediately precedes the general practice of cultivating land for the sake of raising it. For some time before this practice becomes general, the scarcity must necessarily raise the price. After it has become general, new methods of feeding are commonly fallen upon, which enable the farmer to raise upon the same quantity of ground a much greater quantity of that particular sort of animal food. The plenty not only obliges him to sell cheaper, but, in consequence of these improvements, he can afford to sell cheaper; for if he could not afford it, the plenty would not be of long continuance. It has been probably in this manner that the introduction of clover, turnips, carrots, cabbages, etc. has contributed to sink the common price of butcher's meat in the London market, somewhat below what it was about the beginning of the last century.

The hog, that finds his food among ordure, and greedily devours many things rejected by every other useful animal, is, like poultry, originally kept as a save-all. As

long as the number of such animals, which can thus be reared at little or no expense, is fully sufficient to supply the demand, this sort of butcher's meat comes to market at a much lower price than any other. But when the demand rises beyond what this quantity can supply, when it becomes necessary to raise food on purpose for feeding and fattening hogs, in the same manner as for feeding and fattening other cattle, the price necessarily rises, and becomes proportionably either higher or lower than that of other butcher's meat, according as the nature of the country, and the state of its agriculture, happen to render the feeding of hogs more or less expensive than that of other cattle. In France, according to Mr Buffon, the price of pork is nearly equal to that of beef. In most parts of Great Britain it is at present somewhat higher.

The great rise in the price both of hogs and poultry, has, in Great Britain, been frequently imputed to the diminution of the number of cottagers and other small occupiers of land; an event which has in every part of Europe been the immediate forerunner of improvement and better cultivation, but which at the same time may have contributed to raise the price of those articles, both somewhat sooner and somewhat faster than it would otherwise have risen. As the poorest family can often maintain a cat or a dog without any expense, so the poorest occupiers of land can commonly maintain a few poultry, or a sow and a few pigs, at very little. The little offals of their own table, their whey, skimmed milk, and butter milk, supply those animals with a part of their food, and they find the rest in the neighbouring fields, without doing any sensible damage to any body. By diminishing the number of those small occupiers, therefore, the quantity of this sort of provisions, which is thus produced at little or no expense, must certainly have been a good deal diminished, and their price must consequently have been raised both sooner and faster than it would otherwise have risen. Sooner or later, however, in the progress of improvement, it must at any rate have risen to the utmost height to which it is capable of rising; or to the price which pays the labour and expense of cultivating the land which furnishes them with food, as well as these are paid upon the greater part of other cultivated land.

The business of the dairy, like the feeding of hogs and poultry, is originally carried on as a save-all. The cattle necessarily kept upon the farm produce more milk than either the rearing of their own young, or the consumption of the farmer's family requires; and they produce most at one particular season. But of all the productions of land, milk is perhaps the most perishable. In the warm season, when it is most abundant, it will scarce keep four and twenty hours. The farmer, by making it into fresh butter, stores a small part of it for a week; by making it into salt butter, for a year; and by making it into cheese, he stores a much greater part of it for several years. Part of all these is reserved for the use of his own family; the rest goes to market, in order to find the best price which is to be had, and which can scarce be so low as to discourage him from sending thither whatever is over and above the use of his own family. If it is very low indeed, he will be likely to manage his dairy in a very slovenly and dirty manner, and will scarce, perhaps, think it worth while to have a particular

room or building on purpose for it, but will suffer the business to be carried on amidst the smoke, filth, and nastiness of his own kitchen, as was the case of almost all the farmers' dairies in Scotland thirty or forty years ago, and as is the case of many of them still. The same causes which gradually raise the price of butcher's meat, the increase of the demand, and, in consequence of the improvement of the country, the diminution of the quantity which can be fed at little or no expense, raise, in the same manner, that of the produce of the dairy, of which the price naturally connects with that of butcher's meat, or with the expense of feeding cattle. The increase of price pays for more labour, care, and cleanliness. The dairy becomes more worthy of the farmer's attention, and the quality of its produce gradually improves. The price at last gets so high, that it becomes worth while to employ some of the most fertile and best cultivated lands in feeding cattle merely for the purpose of the dairy; and when it has got to this height, it cannot well go higher. If it did, more land would soon be turned to this purpose. It seems to have got to this height through the greater part of England, where much good land is commonly employed in this manner. If you except the neighbourhood of a few considerable towns, it seems not yet to have got to this height anywhere in Scotland, where common farmers seldom employ much good land in raising food for cattle, merely for the purpose of the dairy. The price of the produce, though it has risen very considerably within these few years, is probably still too low to admit of it. The inferiority of the quality, indeed, compared with that of the produce of English dairies, is fully equal to that of the price. But this inferiority of quality is, perhaps, rather the effect of this lowness of price, than the cause of it. Though the quality was much better, the greater part of what is brought to market could not, I apprehend, in the present circumstances of the country, be disposed of at a much better price; and the present price, it is probable, would not pay the expense of the land and labour necessary for producing a much better quality. Through the greater part of England, notwithstanding the superiority of price, the dairy is not reckoned a more profitable employment of land than the raising of corn, or the fattening of cattle, the two great objects of agriculture. Through the greater part of Scotland, therefore, it cannot yet be even so profitable.

The lands of no country, it is evident, can ever be completely cultivated and improved, till once the price of every produce, which human industry is obliged to raise upon them, has got so high as to pay for the expense of complete improvement and cultivation. In order to do this, the price of each particular produce must be sufficient, first, to pay the rent of good corn land, as it is that which regulates the rent of the greater part of other cultivated land; and, secondly, to pay the labour and expense of the farmer, as well as they are commonly paid upon good corn land; or, in other words, to replace with the ordinary profits the stock which he employs about it. This rise in the price of each particular produce; must evidently be previous to the improvement and cultivation of the land which is destined for raising it. Gain is the end of all improvement; and nothing could deserve that name, of which loss was to be the necessary consequence. But loss must be the necessary consequence of improving

land for the sake of a produce of which the price could never bring back the expense. If the complete improvement and cultivation of the country be, as it most certainly is, the greatest of all public advantages, this rise in the price of all those different sorts of rude produce, instead of being considered as a public calamity, ought to be regarded as the necessary forerunner and attendant of the greatest of all public advantages.

This rise, too, in the nominal or money price of all those different sorts of rude produce, has been the effect, not of any degradation in the value of silver, but of a rise in their real price. They have become worth, not only a greater quantity of silver, but a greater quantity of labour and subsistence than before. As it costs a greater quantity of labour and subsistence to bring them to market, so, when they are brought thither they represent, or are equivalent to a greater quantity.

Third Sort. — The third and last sort of rude produce, of which the price naturally rises in the progress of improvement, is that in which the efficacy of human industry, in augmenting the quantity, is either limited or uncertain. Though the real price of this sort of rude produce, therefore, naturally tends to rise in the progress of improvement, yet, according as different accidents happen to render the efforts of human industry more or less successful in augmenting the quantity, it may happen sometimes even to fall, sometimes to continue the same, in very different periods of improvement, and sometimes to rise more or less in the same period.

There are some sorts of rude produce which nature has rendered a kind of appendages to other sorts; so that the quantity of the one which any country can afford, is necessarily limited by that of the other. The quantity of wool or of raw hides, for example, which any country can afford, is necessarily limited by the number of great and small cattle that are kept in it. The state of its improvement, and the nature of its agriculture, again necessarily determine this number.

The same causes which, in the progress of improvement, gradually raise the price of butcher' s meat, should have the same effect, it may be thought, upon the prices of wool and raw hides, and raise them, too, nearly in the same proportion. It probably would be so, if, in the rude beginnings of improvement, the market for the latter commodities was confined within as narrow bounds as that for the former. But the extent of their respective markets is commonly extremely different.

The market for butcher' s meat is almost everywhere confined to the country which produces it. Ireland, and some part of British America, indeed, carry on a considerable trade in salt provisions; but they are, I believe, the only countries in the commercial world which do so, or which export to other countries any considerable part of their butcher' s meat.

The market for wool and raw hides, on the contrary, is, in the rude beginnings of improvement, very seldom confined to the country which produces them. They can easily be transported to distant countries; wool without any preparation, and raw hides with very little; and as they are the materials of many manufactures, the industry of other countries may occasion a demand for them, though that of the country which produces them might not occasion any.

In countries ill cultivated, and therefore but thinly inhabited, the price of the wool and the hide bears always a much greater proportion to that of the whole beast, than in countries where, improvement and population being further advanced, there is more demand for butcher' s meat. Mr Hume observes, that in the Saxon times, the fleece was estimated at two-fifths of the value of the whole sheep and that this was much above the proportion of its present estimation. In some provinces of Spain, I have been assured, the sheep is frequently killed merely for the sake of the fleece and the tallow. The carcase is often left to rot upon the ground, or to be devoured by beasts and birds of prey. If this sometimes happens even in Spain, it happens almost constantly in Chili, at Buenos Ayres, and in many other parts of Spanish America, where the horned cattle are almost constantly killed merely for the sake of the hide and the tallow. This, too, used to happen almost constantly in Hispaniola, while it was infested by the buccaneers, and before the settlement, improvement, and populousness of the French plantations (which now extend round the coast of almost the whole western half of the island) had given some value to the cattle of the Spaniards, who still continue to possess, not only the eastern part of the coast, but the whole inland mountainous part of the country.

Though, in the progress of improvement and population, the price of the whole beast necessarily rises, yet the price of the carcase is likely to be much more affected by this rise than that of the wool and the hide. The market for the carcase being in the rude state of society confined always to the country which produces it, must necessarily be extended in proportion to the improvement and population of that country. But the market for the wool and the hides, even of a barbarous country, often extending to the whole commercial world, it can very seldom be enlarged in the same proportion. The state of the whole commercial world can seldom be much affected by the improvement of any particular country; and the market for such commodities may remain the same, or very nearly the same, after such improvements, as before. It should, however, in the natural course of things, rather, upon the whole, be somewhat extended in consequence of them. If the manufactures, especially, of which those commodities are the materials, should ever come to flourish in the country, the market, though it might not be much enlarged, would at least be brought much nearer to the place of growth than before; and the price of those materials might at least be increased by what had usually been the expense of transporting them to distant countries. Though it might not rise, therefore, in the same proportion as that of butcher' s meat, it ought naturally to rise somewhat, and it ought certainly not to fall.

In England, however, notwithstanding the flourishing state of its woollen manufacture, the price of English wool has fallen very considerably since the time of Edward III. There are many authentic records which demonstrate that, during the reign of that prince (towards the middle of the fourteenth century, or about 1339), what was reckoned the moderate and reasonable price of the tod, or twenty-eight pounds of English wool, was not less than ten shillings of the money of those times See Smith' s *Memoirs of Wool*, vol. i c. 5, 6, 7. also vol. ii., containing, at the rate of twenty-pence

the ounce, six ounces of silver, Tower weight, equal to about thirty shillings of our present money. In the present times, one-and-twenty shillings the tod may be reckoned a good price for very good English wool. The money price of wool, therefore, in the time of Edward III. was to its money price in the present times as ten to seven. The superiority of its real price was still greater. At the rate of six shillings and eightpence the quarter, ten shillings was in those ancient times the price of twelve bushels of wheat. At the rate of twenty-eight shillings the quarter, one-and-twenty shillings is in the present times the price of six bushels only. The proportion between the real price of ancient and modern times, therefore, is as twelve to six, or as two to one. In those ancient times, a tod of wool would have purchased twice the quantity of subsistence which it will purchase at present, and consequently twice the quantity of labour, if the real recompence of labour had been the same in both periods.

This degradation, both in the real and nominal value of wool, could never have happened in consequence of the natural course of things. It has accordingly been the effect of violence and artifice. First, of the absolute prohibition of exporting wool from England: secondly, of the permission of importing it from Spain, duty free: thirdly, of the prohibition of exporting it from Ireland to another country but England. In consequence of these regulations, the market for English wool, instead of being somewhat extended, in consequence of the improvement of England, has been confined to the home market, where the wool of several other countries is allowed to come into competition with it, and where that of Ireland is forced into competition with it. As the woollen manufactures, too, of Ireland, are fully as much discouraged as is consistent with justice and fair dealing, the Irish can work up but a smaller part of their own wool at home, and are therefore obliged to send a greater proportion of it to Great Britain, the only market they are allowed.

I have not been able to find any such authentic records concerning the price of raw hides in ancient times. Wool was commonly paid as a subsidy to the king, and its valuation in that subsidy ascertains, at least in some degree, what was its ordinary price. But this seems not to have been the case with raw hides. Fleetwood, however, from an account in 1425, between the prior of Burcester Oxford and one of his canons, gives us their price, at least as it was stated upon that particular occasion, viz. five ox hides at twelve shillings; five cow hides at seven shillings and threepence; thirtysix sheep skins of two years old at nine shillings; sixteen calf skins at two shillings. In 1425, twelve shillings contained about the same quantity of silver as four-and-twenty shillings of our present money. An ox hide, therefore, was in this account valued at the same quantity of silver as 4s. $\frac{4}{5}$ ths of our present money. Its nominal price was a good deal lower than at present. But at the rate of six shillings and eightpence the quarter, twelve shillings would in those times have purchased fourteen bushels and four-fifths of a bushel of wheat, which, at three and sixpence the bushel, would in the present times cost 51s. 4d. An ox hide, therefore, would in those times have purchased as much corn as ten shillings and threepence would purchase at present. Its real value was equal to ten shillings and threepence of our present money. In those

ancient times, when the cattle were half starved during the greater part of the winter, we cannot suppose that they were of a very large size. An ox hide which weighs four stone of sixteen pounds of avoirdupois, is not in the present times reckoned a bad one; and in those ancient times would probably have been reckoned a very good one. But at half-a-crown the stone, which at this moment (February 1773) I understand to be the common price, such a hide would at present cost only ten shillings. Through its nominal price, therefore, is higher in the present than it was in those ancient times, its real price, the real quantity of subsistence which it will purchase or command, is rather somewhat lower. The price of cow hides, as stated in the above account, is nearly in the common proportion to that of ox hides. That of sheep skins is a good deal above it. They had probably been sold with the wool. That of calves skins, on the contrary, is greatly below it. In countries where the price of cattle is very low, the calves, which are not intended to be reared in order to keep up the stock, are generally killed very young, as was the case in Scotland twenty or thirty years ago. It saves the milk, which their price would not pay for. Their skins, therefore, are commonly good for little.

The price of raw hides is a good deal lower at present than it was a few years ago; owing probably to the taking off the duty upon seal skins, and to the allowing, for a limited time, the importation of raw hides from Ireland, and from the plantations, duty free, which was done in 1769. Take the whole of the present century at an average, their real price has probably been somewhat higher than it was in those ancient times. The nature of the commodity renders it not quite so proper for being transported to distant markets as wool. It suffers more by keeping. A salted hide is reckoned inferior to a fresh one, and sells for a lower price. This circumstance must necessarily have some tendency to sink the price of raw hides produced in a country which does not manufacture them, but is obliged to export them, and comparatively to raise that of those produced in a country which does manufacture them. It must have some tendency to sink their price in a barbarous, and to raise it in an improved and manufacturing country. It must have had some tendency, therefore, to sink it in ancient, and to raise it in modern times. Our tanners, besides, have not been quite so successful as our clothiers, in convincing the wisdom of the nation, that the safety of the commonwealth depends upon the prosperity of their particular manufacture. They have accordingly been much less favoured. The exportation of raw hides has, indeed, been prohibited, and declared a nuisance; but their importation from foreign countries has been subjected to a duty; and though this duty has been taken off from those of Ireland and the plantations (for the limited time of five years only), yet Ireland has not been confined to the market of Great Britain for the sale of its surplus hides, or of those which are not manufactured at home. The hides of common cattle have, but within these few years, been put among the enumerated commodities which the plantations can send nowhere but to the mother country; neither has the commerce of Ireland been in this case oppressed hitherto, in order to support the manufactures of Great Britain.

Whatever regulations tend to sink the price, either of wool or of raw hides, below what it naturally would be, must, in an improved and cultivated country, have some tendency to raise the price of butcher's meat. The price both of the great and small cattle, which are fed on improved and cultivated land, must be sufficient to pay the rent which the landlord, and the profit which the farmer, has reason to expect from improved and cultivated land. If it is not, they will soon cease to feed them. Whatever part of this price, therefore, is not paid by the wool and the hide, must be paid by the carcase. The less there is paid for the one, the more must be paid for the other. In what manner this price is to be divided upon the different parts of the beast, is indifferent to the landlords and farmers, provided it is all paid to them. In an improved and cultivated country, therefore, their interest as landlords and farmers cannot be much affected by such regulations, though their interest as consumers may, by the rise in the price of provisions. It would be quite otherwise, however, in an unimproved and uncultivated country, where the greater part of the lands could be applied to no other purpose but the feeding of cattle, and where the wool and the hide made the principal part of the value of those cattle. Their interest as landlords and farmers would in this case be very deeply affected by such regulations, and their interest as consumers very little. The fall in the price of the wool and the hide would not in this case raise the price of the carcase; because the greater part of the lands of the country being applicable to no other purpose but the feeding of cattle, the same number would still continue to be fed. The same quantity of butcher's meat would still come to market. The demand for it would be no greater than before. Its price, therefore, would be the same as before. The whole price of cattle would fall, and along with it both the rent and the profit of all those lands of which cattle was the principal produce, that is, of the greater part of the lands of the country. The perpetual prohibition of the exportation of wool, which is commonly, but very falsely, ascribed to Edward III., would, in the then circumstances of the country, have been the most destructive regulation which could well have been thought of. It would not only have reduced the actual value of the greater part of the lands in the kingdom, but by reducing the price of the most important species of small cattle, it would have retarded very much its subsequent improvement.

The wool of Scotland fell very considerably in its price in consequence of the union with England, by which it was excluded from the great market of Europe, and confined to the narrow one of Great Britain. The value of the greater part of the lands in the southern counties of Scotland, which are chiefly a sheep country, would have been very deeply affected by this event, had not the rise in the price of butcher's meat fully compensated the fall in the price of wool.

As the efficacy of human industry, in increasing the quantity either of wool or of raw hides, is limited, so far as it depends upon the produce of the country where it is exerted; so it is uncertain so far as it depends upon the produce of other countries. It so far depends not so much upon the quantity which they produce, as upon that which they do not manufacture; and upon the restraints which they may or may not

think proper to impose upon the exportation of this sort of rude produce. These circumstances, as they are altogether independent of domestic industry, so they necessarily render the efficacy of its efforts more or less uncertain. In multiplying this sort of rude produce, therefore, the efficacy of human industry is not only limited, but uncertain.

In multiplying another very important sort of rude produce, the quantity of fish that is brought to market, it is likewise both limited and uncertain. It is limited by the local situation of the country, by the proximity or distance of its different provinces from the sea, by the number of its lakes and rivers, and by what may be called the fertility or barrenness of those seas, lakes, and rivers, as to this sort of rude produce. As population increases, as the annual produce of the land and labour of the country grows greater and greater, there come to be more buyers of fish; and those buyers, too, have a greater quantity and variety of other goods, or, what is the same thing, the price of a greater quantity and variety of other goods, to buy with. But it will generally be impossible to supply the great and extended market, without employing a quantity of labour greater than in proportion to what had been requisite for supplying the narrow and confined one. A market which, from requiring only one thousand, comes to require annually ten thousand ton of fish, can seldom be supplied, without employing more than ten times the quantity of labour which had before been sufficient to supply it. The fish must generally be sought for at a greater distance, larger vessels must be employed, and more expensive machinery of every kind made use of. The real price of this commodity, therefore, naturally rises in the progress of improvement. It has accordingly done so, I believe, more or less in every country.

Though the success of a particular day's fishing maybe a very uncertain matter, yet the local situation of the country being supposed, the general efficacy of industry in bringing a certain quantity of fish to market, taking the course of a year, or of several years together, it may, perhaps, be thought is certain enough; and it, no doubt, is so. As it depends more, however, upon the local situation of the country, than upon the state of its wealth and industry; as upon this account it may in different countries be the same in very different periods of improvement, and very different in the same period; its connection with the state of improvement is uncertain; and it is of this sort of uncertainty that I am here speaking. In increasing the quantity of the different minerals and metals which are drawn from the bowels of the earth, that of the more precious ones particularly, the efficacy of human industry seems not to be limited, but to be altogether uncertain.

The quantity of the precious metals which is to be found in any country, is not limited by any thing in its local situation, such as the fertility or barrenness of its own mines. Those metals frequently abound in countries which possess no mines. Their quantity, in every particular country, seems to depend upon two different circumstances; first, upon its power of purchasing, upon the state of its industry, upon the annual produce of its land and labour, in consequence of which it can afford to employ a greater or a smaller quantity of labour and subsistence, in bringing or pur-

chasing such superfluities as gold and silver, either from its own mines, or from those of other countries; and, secondly, upon the fertility or barrenness of the mines which may happen at any particular time to supply the commercial world with those metals. The quantity of those metals in the countries most remote from the mines, must be more or less affected by this fertility or barrenness, on account of the easy and cheap transportation of those metals, of their small bulk and great value. Their quantity in China and Indostan must have been more or less affected by the abundance of the mines of America.

So far as their quantity in any particular country depends upon the former of those two circumstances (the power of purchasing), their real price, like that of all other luxuries and superfluities, is likely to rise with the wealth and improvement of the country, and to fall with its poverty and depression. Countries which have a great quantity of labour and subsistence to spare, can afford to purchase any particular quantity of those metals at the expense of a greater quantity of labour and subsistence, than countries which have less to spare.

So far as their quantity in any particular country depends upon the latter of those two circumstances (the fertility or barrenness of the mines which happen to supply the commercial world), their real price, the real quantity of labour and subsistence which they will purchase or exchange for, will, no doubt, sink more or less in proportion to the fertility, and rise in proportion to the barrenness of those mines.

The fertility or barrenness of the mines, however, which may happen at any particular time to supply the commercial world, is a circumstance which, it is evident, may have no sort of connection with the state of industry in a particular country. It seems even to have no very necessary connection with that of the world in general. As arts and commerce, indeed, gradually spread themselves over a greater and a greater part of the earth, the search for new mines, being extended over a wider surface, may have somewhat a better chance for being successful than when confined within narrower bounds. The discovery of new mines, however, as the old ones come to be gradually exhausted, is a matter of the greatest uncertainty, and such as no human skill or industry can insure. All indications, it is acknowledged, are doubtful; and the actual discovery and successful working of a new mine can alone ascertain the reality of its value, or even of its existence. In this search there seem to be no certain limits, either to the possible success, or to the possible disappointment of human industry. In the course of a century or two, it is possible that new mines may be discovered, more fertile than any that have ever yet been known; and it is just equally possible, that the most fertile mine then known may be more barren than any that was wrought before the discovery of the mines of America. Whether the one or the other of those two events may happen to take place, is of very little importance to the real wealth and prosperity of the world, to the real value of the annual produce of the land and labour of mankind. Its nominal value, the quantity of gold and silver by which this annual produce could be expressed or represented, would, no doubt, be very different; but its real value, the real quantity of labour which it could purchase or command,

would be precisely the same. A shilling might, in the one case, represent no more labour than a penny does at present; and a penny, in the other, might represent as much as a shilling does now. But in the one case, he who had a shilling in his pocket would be no richer than he who has a penny at present; and in the other, he who had a penny would be just as rich as he who has a shilling now. The cheapness and abundance of gold and silver plate would be the sole advantage which the world could derive from the one event; and the dearness and scarcity of those trifling superfluities, the only inconveniency it could suffer from the other.

11.2 Conclusion of the Digression concerning the Variations in the Value of Silver.

The greater part of the writers who have collected the money price of things in ancient times, seem to have considered the low money price of corn, and of goods in general, or, in other words, the high value of gold and silver, as a proof, not only of the scarcity of those metals, but of the poverty and barbarism of the country at the time when it took place. This notion is connected with the system of political economy, which represents national wealth as consisting in the abundance and national poverty in the scarcity, of gold and silver; a system which I shall endeavour to explain and examine at great length in the fourth book of this Inquiry. I shall only observe at present, that the high value of the precious metals can be no proof of the poverty or barbarism of any particular country at the time when it took place. It is a proof only of the barrenness of the mines which happened at that time to supply the commercial world. A poor country, as it cannot afford to buy more, so it can as little afford to pay dearer for gold and silver than a rich one; and the value of those metals, therefore, is not likely to be higher in the former than in the latter. In China, a country much richer than any part of Europe, the value of the precious metals is much higher than in any part of Europe. As the wealth of Europe, indeed, has increased greatly since the discovery of the mines of America, so the value of gold and silver has gradually diminished. This diminution of their value, however, has not been owing to the increase of the real wealth of Europe, of the annual produce of its land and labour, but to the accidental discovery of more abundant mines than any that were known before. The increase of the quantity of gold and silver in Europe, and the increase of its manufactures and agriculture, are two events which, though they have happened nearly about the same time, yet have arisen from very different causes, and have scarce any natural connection with one another. The one has arisen from a mere accident, in which neither prudence nor policy either had or could have any share; the other, from the fall of the feudal system, and from the establishment of a government which afforded to industry the only encouragement which it requires, some tolerable security that it shall enjoy the fruits of its own labour. Poland, where the feudal system still continues to take place, is at this day as beggarly a country

as it was before the discovery of America. The money price of corn, however, has risen; the real value of the precious metals has fallen in Poland, in the same manner as in other parts of Europe. Their quantity, therefore, must have increased there as in other places, and nearly in the same proportion to the annual produce of its land and labour. This increase of the quantity of those metals, however, has not, it seems, increased that annual produce, has neither improved the manufactures and agriculture of the country, nor mended the circumstances of its inhabitants. Spain and Portugal, the countries which possess the mines, are, after Poland, perhaps the two most beggarly countries in Europe. The value of the precious metals, however, must be lower in Spain and Portugal than in any other part of Europe, as they come from those countries to all other parts of Europe, loaded, not only with a freight and an insurance, but with the expense of smuggling, their exportation being either prohibited or subjected to a duty. In proportion to the annual produce of the land and labour, therefore, their quantity must be greater in those countries than in any other part of Europe; those countries, however, are poorer than the greater part of Europe. Though the feudal system has been abolished in Spain and Portugal, it has not been succeeded by a much better.

As the low value of gold and silver, therefore, is no proof of the wealth and flourishing state of the country where it takes place; so neither is their high value, or the low money price either of goods in general, or of corn in particular, any proof of its poverty and barbarism.

But though the low money price, either of goods in general, or of corn in particular, be no proof of the poverty or barbarism of the times, the low money price of some particular sorts of goods, such as cattle, poultry, game of all kinds, etc. in proportion to that of corn, is a most decisive one. It clearly demonstrates, first, their great abundance in proportion to that of corn, and, consequently, the great extent of the land which they occupied in proportion to what was occupied by corn; and, secondly, the low value of this land in proportion to that of corn land, and, consequently, the uncultivated and unimproved state of the far greater part of the lands of the country. It clearly demonstrates, that the stock and population of the country did not bear the same proportion to the extent of its territory, which they commonly do in civilized countries; and that society was at that time, and in that country, but in its infancy. From the high or low money price, either of goods in general, or of corn in particular, we can infer only, that the mines, which at that time happened to supply the commercial world with gold and silver, were fertile or barren, not that the country was rich or poor. But from the high or low money price of some sorts of goods in proportion to that of others, we can infer, with a degree of probability that approaches almost to certainty, that it was rich or poor, that the greater part of its lands were improved or unimproved, and that it was either in a more or less barbarous state, or in a more or less civilized one.

Any rise in the money price of goods which proceeded altogether from the degradation of the value of silver, would affect all sorts of goods equally, and raise their price

universally, a third, or a fourth, or a fifth part higher, according as silver happened to lose a third, or a fourth, or a fifth part of its former value. But the rise in the price of provisions, which has been the subject of so much reasoning and conversation, does not affect all sorts of provisions equally. Taking the course of the present century at an average, the price of corn, it is acknowledged, even by those who account for this rise by the degradation of the value of silver, has risen much less than that of some other sorts of provisions. The rise in the price of those other sorts of provisions, therefore, cannot be owing altogether to the degradation of the value of silver. Some other causes must be taken into the account; and those which have been above assigned, will, perhaps, without having recourse to the supposed degradation of the value of silver, sufficiently explain this rise in those particular sorts of provisions, of which the price has actually risen in proportion to that of corn.

As to the price of corn itself, it has, during the sixty-four first years of the present century, and before the late extraordinary course of bad seasons, been somewhat lower than it was during the sixtyfour last years of the preceding century. This fact is attested, not only by the accounts of Windsor market, but by the public fiars of all the different counties of Scotland, and by the accounts of several different markets in France, which have been collected with great diligence and fidelity by Mr Messance, and by Mr Dupré de St Maur. The evidence is more complete than could well have been expected in a matter which is naturally so very difficult to be ascertained.

As to the high price of corn during these last ten or twelve years, it can be sufficiently accounted for from the badness of the seasons, without supposing any degradation in the value of silver. The opinion, therefore, that silver is continually sinking in its value, seems not to be founded upon any good observations, either upon the prices of corn, or upon those of other provisions. The same quantity of silver, it may perhaps be said, will, in the present times, even according to the account which has been here given, purchase a much smaller quantity of several sorts of provisions than it would have done during some part of the last century; and to ascertain whether this change be owing to a rise in the value of those goods, or to a fall in the value of silver, is only to establish a vain and useless distinction, which can be of no sort of service to the man who has only a certain quantity of silver to go to market with, or a certain fixed revenue in money. I certainly do not pretend that the knowledge of this distinction will enable him to buy cheaper. It may not, however, upon that account be altogether useless.

It may be of some use to the public, by affording an easy proof of the prosperous condition of the country. If the rise in the price of some sorts of provisions be owing altogether to a fall in the value of silver, it is owing to a circumstance, from which nothing can be inferred but the fertility of the American mines. The real wealth of the country, the annual produce of its land and labour, may, notwithstanding this circumstance, be either gradually declining, as in Portugal and Poland; or gradually advancing, as in most other parts of Europe. But if this rise in the price of some sorts of provisions be owing to a rise in the real value of the land which produces

them, to its increased fertility, or, in consequence of more extended improvement and good cultivation, to its having been rendered fit for producing corn; it is owing to a circumstance which indicates, in the clearest manner, the prosperous and advancing state of the country. The land constitutes by far the greatest, the most important, and the most durable part of the wealth of every extensive country. It may surely be of some use, or, at least, it may give some satisfaction to the public, to have so decisive a proof of the increasing value of by far the greatest, the most important, and the most durable part of its wealth. It may, too, be of some use to the public, in regulating the pecuniary reward of some of its inferior servants. If this rise in the price of some sorts of provisions be owing to a fall in the value of silver, their pecuniary reward, provided it was not too large before, ought certainly to be augmented in proportion to the extent of this fall. If it is not augmented, their real recompence will evidently be so much diminished. But if this rise of price is owing to the increased value, in consequence of the improved fertility of the land which produces such provisions, it becomes a much nicer matter to judge, either in what proportion any pecuniary reward ought to be augmented, or whether it ought to be augmented at all. The extension of improvement and cultivation, as it necessarily raises more or less, in proportion to the price of corn, that of every sort of animal food, so it as necessarily lowers that of, I believe, every sort of vegetable food. It raises the price of animal food; because a great part of the land which produces it, being rendered fit for producing corn, must afford to the landlord anti farmer the rent and profit of corn land. It lowers the price of vegetable food; because, by increasing the fertility of the land, it increases its abundance. The improvements of agriculture, too, introduce many sorts of vegetable food, which requiring less land, and not more labour than corn, come much cheaper to market. Such are potatoes and maize, or what is called Indian corn, the two most important improvements which the agriculture of Europe, perhaps, which Europe itself, has received from the great extension of its commerce and navigation. Many sorts of vegetable food, besides, which in the rude state of agriculture are confined to the kitchen-garden, and raised only by the spade, come, in its improved state, to be introduced into common fields, and to be raised by the plough; such as turnips, carrots, cabbages, etc. If, in the progress of improvement, therefore, the real price of one species of food necessarily rises, that of another as necessarily falls; and it becomes a matter of more nicety to judge how far the rise in the one may be compensated by the fall in the other. When the real price of butcher' s meat has once got to its height (which, with regard to every sort, except perhaps that of hogs flesh, it seems to have done through a great part of England more than a century ago), any rise which can afterwards happen in that of any other sort of animal food, cannot much affect the circumstances of the inferior ranks of people. The circumstances of the poor, through a great part of England, cannot surely be so much distressed by any rise in the price of poultry, fish, wild-fowl, or venison, as they must be relieved by the fall in that of potatoes.

In the present season of scarcity, the high price of corn no doubt distresses the poor.

But in times of moderate plenty, when corn is at its ordinary or average price, the natural rise in the price of any other sort of rude produce cannot much affect them. They suffer more, perhaps, by the artificial rise which has been occasioned by taxes in the price of some manufactured commodities, as of salt, soap, leather, candles, malt, beer, ale, etc.

11.3 Effects of the Progress of Improvement upon the real Price of Manufactures.

It is the natural effect of improvement, however, to diminish gradually the real price of almost all manufactures. That of the manufacturing workmanship diminishes, perhaps, in all of them without exception. In consequence of better machinery, of greater dexterity, and of a more proper division and distribution of work, all of which are the natural effects of improvement, a much smaller quantity of labour becomes requisite for executing any particular piece of work; and though, in consequence of the flourishing circumstances of the society, the real price of labour should rise very considerably, yet the great diminution of the quantity will generally much more than compensate the greatest rise which can happen in the price.

There are, indeed, a few manufactures, in which the necessary rise in the real price of the rude materials will more than compensate all the advantages which improvement can introduce into the execution of the work. In carpenters' and joiners' work, and in the coarser sort of cabinet work, the necessary rise in the real price of barren timber, in consequence of the improvement of land, will more than compensate all the advantages which can be derived from the best machinery, the greatest dexterity, and the most proper division and distribution of work.

But in all cases in which the real price of the rude material either does not rise at all, or does not rise very much, that of the manufactured commodity sinks very considerably.

This diminution of price has, in the course of the present and preceding century, been most remarkable in those manufactures of which the materials are the coarser metals. A better movement of a watch, than about the middle of the last century could have been bought for twenty pounds, may now perhaps be had for twenty shillings. In the work of cutlers and locksmiths, in all the toys which are made of the coarser metals, and in all those goods which are commonly known by the name of Birmingham and Sheffield ware, there has been, during the same period, a very great reduction of price, though not altogether so great as in watchwork. It has, however, been sufficient to astonish the workmen of every other part of Europe, who in many cases acknowledge that they can produce no work of equal goodness for double or even for triple the price. There are perhaps no manufactures, in which the division of labour can be carried further, or in which the machinery employed admits of a greater variety of improvements, than those of which the materials are the coarser

metals. In the clothing manufacture there has, during the same period, been no such sensible reduction of price. The price of superfine cloth, I have been assured, on the contrary, has, within these five and-twenty or thirty years, risen somewhat in proportion to its quality, owing, it was said, to a considerable rise in the price of the material, which consists altogether of Spanish wool. That of the Yorkshire cloth, which is made altogether of English wool, is said, indeed, during the course of the present century, to have fallen a good deal in proportion to its quality. Quality, however, is so very disputable a matter, that I look upon all information of this kind as somewhat uncertain. In the clothing manufacture, the division of labour is nearly the same now as it was a century ago, and the machinery employed is not very different. There may, however, have been some small improvements in both, which may have occasioned some reduction of price.

But the reduction will appear much more sensible and undeniable, if we compare the price of this manufacture in the present times with what it was in a much remoter period, towards the end of the fifteenth century, when the labour was probably much less subdivided, and the machinery employed much more imperfect, than it is at present.

In 1487, being the 4th of Henry VII., it was enacted, that “whosoever shall sell by retail a broad yard of the finest scarlet grained, or of other grained cloth of the finest making, above sixteen shillings, shall forfeit forty shillings for every yard so sold.” Sixteen shillings, therefore, containing about the same quantity of silver as four-and-twenty shillings of our present money, was, at that time, reckoned not an unreasonable price for a yard of the finest cloth; and as this is a sumptuary law, such cloth, it is probable, had usually been sold somewhat dearer. A guinea may be reckoned the highest price in the present times. Even though the quality of the cloths, therefore, should be supposed equal, and that of the present times is most probably much superior, yet, even upon this supposition, the money price of the finest cloth appears to have been considerably reduced since the end of the fifteenth century. But its real price has been much more reduced. Six shillings and eightpence was then, and long afterwards, reckoned the average price of a quarter of wheat. Sixteen shillings, therefore, was the price of two quarters and more than three bushels of wheat. Valuing a quarter of wheat in the present times at eight-and-twenty shillings, the real price of a yard of fine cloth must, in those times, have been equal to at least three pounds six shillings and sixpence of our present money. The man who bought it must have parted with the command of a quantity of labour and subsistence equal to what that sum would purchase in the present times.

The reduction in the real price of the coarse manufacture, though considerable, has not been so great as in that of the fine. In 1463, being the 3rd of Edward IV. it was enacted, that “no servant in husbandry nor common labourer, nor servant to any artificer inhabiting out of a city or burgh, shall use or wear in their clothing any cloth above two shillings the broad yard.” In the 3rd of Edward IV., two shillings contained very nearly the same quantity of silver as four of our present money. But the Yorkshire

cloth which is now sold at four shillings the yard, is probably much superior to any that was then made for the wearing of the very poorest order of common servants. Even the money price of their clothing, therefore, may, in proportion to the quality, be somewhat cheaper in the present than it was in those ancient times. The real price is certainly a good deal cheaper. Tenpence was then reckoned what is called the moderate and reasonable price of a bushel of wheat. Two shillings, therefore, was the price of two bushels and near two pecks of wheat, which in the present times, at three shillings and sixpence the bushel, would be worth eight shillings and ninepence. For a yard of this cloth the poor servant must have parted with the power of purchasing a quantity of subsistence equal to what eight shillings and ninepence would purchase in the present times. This is a sumptuary law, too, restraining the luxury and extravagance of the poor. Their clothing, therefore, had commonly been much more expensive.

The same order of people are, by the same law, prohibited from wearing hose, of which the price should exceed fourteen-pence the pair, equal to about eight-and-twenty pence of our present money. But fourteen-pence was in those times the price of a bushel and near two pecks of wheat; which in the present times, at three and sixpence the bushel, would cost five shillings and threepence. We should in the present times consider this as a very high price for a pair of stockings to a servant of the poorest and lowest order. He must however, in those times, have paid what was really equivalent to this price for them.

In the time of Edward IV. the art of knitting stockings was probably not known in any part of Europe. Their hose were made of common cloth, which may have been one of the causes of their dearness. The first person that wore stockings in England is said to have been Queen Elizabeth. She received them as a present from the Spanish ambassador.

Both in the coarse and in the fine woollen manufacture, the machinery employed was much more imperfect in those ancient, than it is in the present times. It has since received three very capital improvements, besides, probably, many smaller ones, of which it may be difficult to ascertain either the number or the importance. The three capital improvements are, first, the exchange of the rock and spindle for the spinning-wheel, which, with the same quantity of labour, will perform more than double the quantity of work. Secondly, the use of several very ingenious machines, which facilitate and abridge, in a still greater proportion, the winding of the worsted and woollen yarn, or the proper arrangement of the warp and woof before they are put into the loom; an operation which, previous to the invention of those machines, must have been extremely tedious and troublesome. Thirdly, the employment of the fulling-mill for thickening the cloth, instead of treading it in water. Neither wind nor water mills of any kind were known in England so early as the beginning of the sixteenth century, nor, so far as I know, in any other part of Europe north of the Alps. They had been introduced into Italy some time before. The consideration of these circumstances may, perhaps, in some measure, explain to us why the real price

both of the coarse and of the fine manufacture was so much higher in those ancient than it is in the present times. It cost a greater quantity of labour to bring the goods to market. When they were brought thither, therefore, they must have purchased, or exchanged for the price of, a greater quantity.

The coarse manufacture probably was, in those ancient times, carried on in England in the same manner as it always has been in countries where arts and manufactures are in their infancy. It was probably a household manufacture, in which every different part of the work was occasionally performed by all the different members of almost every private family, but so as to be their work only when they had nothing else to do, and not to be the principal business from which any of them derived the greater part of their subsistence. The work which is performed in this manner, it has already been observed, comes always much cheaper to market than that which is the principal or sole fund of the workman's subsistence. The fine manufacture, on the other hand, was not, in those times, carried on in England, but in the rich and commercial country of Flanders; and it was probably conducted then, in the same manner as now, by people who derived the whole, or the principal part of their subsistence from it. It was, besides, a foreign manufacture, and must have paid some duty, the ancient custom of tonnage and poundage at least, to the king. This duty, indeed, would not probably be very great. It was not then the policy of Europe to restrain, by high duties, the importation of foreign manufactures, but rather to encourage it, in order that merchants might be enabled to supply, at as easy a rate as possible, the great men with the conveniencies and luxuries which they wanted, and which the industry of their own country could not afford them. The consideration of these circumstances may, perhaps, in some measure explain to us why, in those ancient times, the real price of the coarse manufacture was, in proportion to that of the fine, so much lower than in the present times.

11.4 Conclusion of the Chapter.

I shall conclude this very long chapter with observing, that every improvement in the circumstances of the society tends, either directly or indirectly, to raise the real rent of land to increase the real wealth of the landlord, his power of purchasing the labour, or the produce of the labour of other people.

The extension of improvement and cultivation tends to raise it directly. The landlord's share of the produce necessarily increases with the increase of the produce.

That rise in the real price of those parts of the rude produce of land, which is first the effect of the extended improvement and cultivation, and afterwards the cause of their being still further extended, the rise in the price of cattle, for example, tends, too, to raise the rent of land directly, and in a still greater proportion. The real value of the landlord's share, his real command of the labour of other people, not only rises with the real value of the produce, but the proportion of his share to the whole produce rises with it. That produce, after the rise in its real price, requires no more

labour to collect it than before. A smaller proportion of it will, therefore, be sufficient to replace, with the ordinary profit, the stock which employs that labour. A greater proportion of it must consequently belong to the landlord.

All those improvements in the productive powers of labour, which tend directly to reduce the rent price of manufactures, tend indirectly to raise the real rent of land. The landlord exchanges that part of his rude produce, which is over and above his own consumption, or, what comes to the same thing, the price of that part of it, for manufactured produce. Whatever reduces the real price of the latter, raises that of the former. An equal quantity of the former becomes thereby equivalent to a greater quantity of the latter; and the landlord is enabled to purchase a greater quantity of the conveniences, ornaments, or luxuries which he has occasion for.

Every increase in the real wealth of the society, every increase in the quantity of useful labour employed within it, tends indirectly to raise the real rent of land. A certain proportion of this labour naturally goes to the land. A greater number of men and cattle are employed in its cultivation, the produce increases with the increase of the stock which is thus employed in raising it, and the rent increases with the produce.

The contrary circumstances, the neglect of cultivation and improvement, the fall in the real price of any part of the rude produce of land, the rise in the real price of manufactures from the decay of manufacturing art and industry, the declension of the real wealth of the society, all tend, on the other hand, to lower the real rent of land, to reduce the real wealth of the landlord, to diminish his power of purchasing either the labour, or the produce of the labour, of other people.

The whole annual produce of the land and labour of every country, or, what comes to the same thing, the whole price of that annual produce, naturally divides itself, it has already been observed, into three parts; the rent of land, the wages of labour, and the profits of stock; and constitutes a revenue to three different orders of people; to those who live by rent, to those who live by wages, and to those who live by profit. These are the three great, original, and constituent, orders of every civilized society, from whose revenue that of every other order is ultimately derived. The interest of the first of those three great orders, it appears from what has been just now said, is strictly and inseparably connected with the general interest of the society. Whatever either promotes or obstructs the one, necessarily promotes or obstructs the other. When the public deliberates concerning any regulation of commerce or police, the proprietors of land never can mislead it, with a view to promote the interest of their own particular order; at least, if they have any tolerable knowledge of that interest. They are, indeed, too often defective in this tolerable knowledge. They are the only one of the three orders whose revenue costs them neither labour nor care, but comes to them, as it were, of its own accord, and independent of any plan or project of their own. That indolence which is the natural effect of the ease and security of their situation, renders them too often, not only ignorant, but incapable of that application of mind, which is necessary in order to foresee and understand the consequence of any public regulation.

The interest of the second order, that of those who live by wages, is as strictly connected with the interest of the society as that of the first. The wages of the labourer, it has already been shewn, are never so high as when the demand for labour is continually rising, or when the quantity employed is every year increasing considerably. When this real wealth of the society becomes stationary, his wages are soon reduced to what is barely enough to enable him to bring up a family, or to continue the race of labourers. When the society declines, they fall even below this. The order of proprietors may perhaps gain more by the prosperity of the society than that of labourers; but there is no order that suffers so cruelly from its decline. But though the interest of the labourer is strictly connected with that of the society, he is incapable either of comprehending that interest, or of understanding its connexion with his own. His condition leaves him no time to receive the necessary information, and his education and habits are commonly such as to render him unfit to judge, even though he was fully informed. In the public deliberations, therefore, his voice is little heard, and less regarded; except upon particular occasions, when his clamour is animated, set on, and supported by his employers, not for his, but their own particular purposes.

His employers constitute the third order, that of those who live by profit. It is the stock that is employed for the sake of profit, which puts into motion the greater part of the useful labour of every society. The plans and projects of the employers of stock regulate and direct all the most important operation of labour, and profit is the end proposed by all those plans and projects. But the rate of profit does not, like rent and wages, rise with the prosperity, and fall with the declension of the society. On the contrary, it is naturally low in rich, and high in poor countries, and it is always highest in the countries which are going fastest to ruin. The interest of this third order, therefore, has not the same connexion with the general interest of the society, as that of the other two. Merchants and master manufacturers are, in this order, the two classes of people who commonly employ the largest capitals, and who by their wealth draw to themselves the greatest share of the public consideration. As during their whole lives they are engaged in plans and projects, they have frequently more acuteness of understanding than the greater part of country gentlemen. As their thoughts, however, are commonly exercised rather about the interest of their own particular branch of business. than about that of the society, their judgment, even when given with the greatest candour (which it has not been upon every occasion), is much more to be depended upon with regard to the former of those two objects, than with regard to the latter. Their superiority over the country gentleman is, not so much in their knowledge of the public interest, as in their having a better knowledge of their own interest than he has of his. It is by this superior knowledge of their own interest that they have frequently imposed upon his generosity, and persuaded him to give up both his own interest and that of the public, from a very simple but honest conviction, that their interest, and not his, was the interest of the public. The interest of the dealers, however, in any particular branch of trade or manufactures, is always in some respects different from, and even opposite to, that of the public. To widen

the market, and to narrow the competition, is always the interest of the dealers. To widen the market may frequently be agreeable enough to the interest of the public; but to narrow the competition must always be against it, and can only serve to enable the dealers, by raising their profits above what they naturally would be, to levy, for their own benefit, an absurd tax upon the rest of their fellow-citizens. The proposal of any new law or regulation of commerce which comes from this order, ought always to be listened to with great precaution, and ought never to be adopted till after having been long and carefully examined, not only with the most scrupulous, but with the most suspicious attention. It comes from an order of men, whose interest is never exactly the same with that of the public, who have generally an interest to deceive and even to oppress the public, and who accordingly have, upon many occasions, both deceived and oppressed it.

表 11.1 小麦の価格

年 XII	その年の小麦 1 クォーター価格			その年の各種 価格の平均			現在の通貨による 各年の平均価格		
	£	s.	d.	£	s.	d.	£	s.	d.
1202	—	12	—	—	—	—	1	16	—
1205	—	12	—	—	13	5	2	—	3
	—	13	4						
	—	12	—						
1223	—	12	—	—	—	—	1	16	—
1237	—	3	4	—	—	—	—	10	—
1243	—	2	—	—	—	—	—	6	—
1244	—	2	—	—	—	—	—	6	—
1246	—	16	—	—	—	—	2	8	—
1247	—	13	4	—	—	—	2	—	—
1257	1	4	—	—	—	—	3	12	—
1258	1	—	—	—	17	—	2	11	—
	—	15	—						
	4	16	—						
1270	4	16	—	5	12	—	16	16	—
	6	8	—						
1286	—	2	8	—	9	4	1	8	—
	—	16	—						
合計 平均価格							35	9	3
							2	19	1¼

表 11.2 小麦の価格 2

年 XII	その年の小麦 1 クォーター価格			その年の各種 価格の平均			現在の通貨による 各年の平均価格		
	£	s.	d.	£	s.	d.	£	s.	d.
1287	—	3	4	—	—	—	—	10	—
1288	—	—	8	—	3	— $\frac{1}{4}$	—	9	— $\frac{3}{4}$
	—	1	—						
	—	1	4						
	—	1	6						
	—	1	8						
	—	2	—						
	—	3	4						
	—	9	4						
1289	—	12	—	—	10	1 $\frac{1}{4}$	1	10	4 $\frac{2}{4}$
	—	6	—						
	—	2	—						
	—	10	8						
	1	—	—						
1290	—	16	—	—	—	—	2	8	—
1294	—	16	—	—	—	—	2	8	—
1302	—	4	—	—	—	—	—	12	—
1309	—	7	2	—	—	—	1	1	6
1247	—	13	4	—	—	—	2	—	—
1315	1	—	—	—	—	—	3	—	—
1316	1	—	—	1	10	6	4	11	6
	1	10	—						
	1	12	—						
	2	—	—						
1317	2	4	—	1	19	6	5	18	6
	—	14	—						
	2	13	—						
	4	—	—						
	—	6	8						
1336	—	2	—	—	—	—	—	6	—
1338	—	3	4	—	—	—	—	10	—
合計 平均価格							23	4	11 $\frac{1}{4}$
							1	18	8

表 11.3 小麦の価格 3

年 XII	その年の小麦 1 クォーター価格			その年の各種 価格の平均			現在の通貨による 各年の平均価格		
	£	s.	d.	£	s.	d.	£	s.	d.
1339	—	9	—	—	—	—	1	7	—
1349	—	2	—	—	—	—	—	5	2
1359	1	6	8	—	—	—	3	2	2
1363	—	15	—	—	—	—	1	15	—
1369	1	—	—	1	2	—	2	9	4
	1	4	—						
1379	—	4	—	—	—	—	—	9	4
1387	—	2	—	—	—	—	—	4	8
1390	—	13	4	—	14	5	1	13	7
	—	14	—						
	—	16	—						
1401	—	16	—	—	—	—	1	17	4
1407	—	4	4 $\frac{1}{4}$	—	3	10	—	8	11
	—	3	4						
1416	—	16	—	—	—	—	1	12	—
合計							15	9	4
平均価格							1	5	9 $\frac{1}{3}$

	£	s.	d.	£	s.	d.	£	s.	d.
1423	—	8	—	—	—	—	—	16	—
1425	—	4	—	—	—	—	—	8	—
1434	1	6	8	—	—	—	2	13	4
1435	—	5	4	—	—	—	—	10	8
1439	1	—	—	1	3	4	2	6	8
	1	6	8						
1440	1	4	—	—	—	—	2	8	—
1444	—	4	4	—	4	2	—	8	4
	—	4	—						
1445	—	4	6	—	—	—	—	9	—
1447	—	8	—	—	—	—	—	16	—
1448	—	6	8	—	—	—	—	13	4
1449	—	5	—	—	—	—	—	10	—
1449	—	8	—	—	—	—	—	16	—
合計							12	15	4
平均価格							1	1	3 $\frac{1}{2}$

表 11.4 小麦の価格 4

年 XII	その年の小麦 1 クォーター価格			その年の各種 価格の平均			現在の通貨による 各年の平均価格		
	£	s.	d.	£	s.	d.	£	s.	d.
1453	—	5	4	—	—	—	—	10	8
1455	—	1	2	—	—	—	—	2	4
1457	—	7	8	—	—	—	—	15	4
1459	—	5	—	—	—	—	—	10	—
1460	—	8	—	—	—	—	—	16	—
1463	—	2	—	—	1	10	—	3	8
	—	1	8						
1464	—	6	8	—	—	—	—	10	—
1486	1	4	—	—	—	—	1	17	—
1491	—	14	8	—	—	—	1	2	—
1494	—	4	—	—	—	—	—	6	—
1495	—	3	—	—	—	—	—	5	—
1497	1	—	—	—	—	—	1	11	—
合計 平均価格							8	9	—
							—	14	1

	£	s.	d.	£	s.	d.	£	s.	d.
1499	—	4	—	—	—	—	—	6	—
1504	—	5	8	—	—	—	—	8	6
1521	1	—	—	—	—	—	1	10	—
1551	—	8	—	—	—	—	—	2	—
1553	—	8	—	—	—	—	—	8	—
1554	—	8	—	—	—	—	—	8	—
1555	—	8	—	—	—	—	—	8	—
1556	—	8	—	—	—	—	—	8	—
1557	—	5	—	—	17	8 $\frac{1}{2}$	—	17	8 $\frac{1}{2}$
	—	8	—						
	2	13	4						
1558	—	8	—	—	—	—	—	8	—
1559	—	8	—	—	—	—	—	8	—
1560	—	8	—	—	—	—	—	8	—
合計 平均価格							6	0	2 $\frac{1}{2}$
							—1	10	0 $\frac{5}{12}$

表 11.5 小麦の価格 5

年 XII	その年の小麦 1 クォーター価格			その年の各種 価格の平均			現在の通貨による 各年の平均価格		
	£	s.	d.	£	s.	d.	£	s.	d.
1561	—	8	—	—	—	—	—	8	—
1562	—	8	—	—	—	—	—	8	—
1574	2	16	—	2	—	—	2	—	—
	1	4	—						
1587	3	4	—	—	—	—	3	4	—
1594	2	16	—	—	—	—	2	16	—
1595	2	13	—	—	—	—	2	13	—
1596	4	—	—	—	—	—	4	—	—
1597	5	4	—	4	12	—	4	12	—
	4	—	—						
1598	2	16	8	—	—	—	2	16	8
1599	1	19	2	—	—	—	1	19	2
1600	1	17	8	—	—	—	1	17	8
1601	1	14	10	—	—	—	1	14	10
合計							28	9	4
平均価格							2	7	5 $\frac{1}{3}$

表 11.6 1595-1764 年聖母お告げの日とミカエル祭のウィンザー市場における最高または最大の時点の小麦 9 ブッシェルの $\frac{1}{4}$ の価格、双方を含む。各年の価格はこの二つの市日の最高価格の中間。

年	£	s.	d.	年	£	s.	d.
1595	2	0	0	1621	1	10	4
1596	2	8	0	1622	2	18	8
1597	3	9	6	1623	2	12	0
1598	2	16	8	1624	2	8	0
1599	1	19	2	1625	2	12	0
1600	1	17	8	1626	2	9	4
1601	1	14	10	1627	1	16	0
1602	1	9	4	1628	1	8	0
1603	1	15	4	1629	2	2	0
1604	1	10	8	1630	2	15	8
1605	1	15	10	1631	3	8	0
1606	1	13	0	1632	2	13	4
1607	1	16	8	1633	2	18	0
1608	2	16	8	1634	2	16	0
1609	2	10	0	1635	2	16	0
1610	1	15	10	1636	2	16	8
1611	1	18	8	16)40			0
1612	2	2	4	平均	2	10	0
1613	2	8	8				
1614	2	1	$8\frac{1}{2}$				
1615	1	18	8				
1616	2	0	4				
1617	2	8	8				
1618	2	6	8				
1619	1	15	4				
1620	1	10	4				
26)54			0				
平均	2	1	$\frac{9}{13}$				

表 11.7 小麦 1 クォーター

年	£	s.	d.	年	£	s.	d.
1637	2	13	0	承前	79	14	10
1638	2	17	4	1671	2	2	0
1639	2	4	10	1672	2	1	0
1640	2	4	8	1673	2	6	8
1641	2	8	0	1674	3	8	8
1642	帳簿欠如 1646 年の数字は フリートウッド 主教より			1675	3	4	8
1643				1676	1	18	0
1644				1677	2	2	0
1645				1678	2	19	0
1646	2	8	0	1679	3	0	0
1647	3	13	0	1680	2	5	0
1648	4	5	0	1681	2	6	8
1649	4	0	0	1682	2	4	0
1650	3	16	8	1683	2	0	0
1651	3	13	4	1684	2	4	0
1652	2	9	6	1685	2	6	8
1653	1	15	6	1686	1	14	0
1654	1	6	0	1687	1	5	2
1655	1	13	4	1688	2	6	0
1656	2	3	0	1689	1	10	0
1657	2	6	8	1690	1	14	8
1658	3	5	0	1691	1	14	0
1659	3	6	0	1692	2	6	8
1660	2	16	6	1693	3	7	8
1661	3	10	0	1694	3	4	0
1662	3	14	0	1695	2	13	0
1663	2	17	0	1696	3	11	0
1664	2	0	6	1697	3	0	0
1665	2	9	4	1698	3	8	4
1666	1	16	0	1699	3	4	0
1667	1	16	0	1700	2	0	0
1668	2	0	0	60) 153	1	8	
1669	2	4	4	平均	2	11	$0\frac{1}{3}$
1670	2	1	8				
繰り越し	79	14	10				

表 11.8 小麦 1 クォーター

年	£	s.	d.	年	£	s.	d.
1701	1	17	8	承前	69	8	8
1702	1	9	6	1734	1	18	10
1703	1	16	0	1735	2	3	0
1704	2	6	6	1736	2	0	4
1705	1	10	0	1737	1	18	0
1706	1	6	0	1738	1	15	6
1707	1	8	6	1739	1	18	6
1708	2	1	6	1740	2	10	8
1709	3	18	6	1741	2	6	8
1710	3	18	0	1742	1	14	0
1711	2	14	0	1743	1	4	10
1712	2	6	4	1744	1	4	10
1713	2	11	0	1745	1	7	6
1714	2	10	4	1746	1	19	0
1715	2	3	0	1747	1	14	10
1716	2	8	0	1748	1	17	0
1717	2	5	8	1749	1	17	0
1718	1	18	10	1750	1	12	6
1719	1	15	0	1751	1	18	6
1720	1	17	0	1752	2	1	10
1721	1	17	6	1753	2	4	8
1722	1	16	0	1754	1	13	8
1723	1	14	8	1755	1	14	10
1724	1	17	0	1756	2	5	3
1725	2	8	6	1757	3	0	0
1726	2	6	0	1758	2	10	0
1727	2	2	0	1759	1	19	10
1728	2	14	6	1760	1	16	6
1729	2	6	10	1761	1	10	3
1730	1	16	6	1762	1	19	0
1731	1	12	10	1763	2	0	9
1732	1	6	8	1764	2	6	9
1733	1	8	4	64)	129	13	6
繰り越し	69	8	8	平均	2	0	$6\frac{19}{32}$

表 11.9 小麦 1 クォーター

年	£	s.	d.	年	£	s.	d.
1731	1	12	10	1741	2	6	8
1732	1	6	8	1742	1	14	0
1733	1	8	4	1743	1	4	10
1734	1	18	10	1744	1	4	10
1735	2	3	0	1745	1	7	6
1736	2	0	4	1746	1	19	0
1737	1	18	0	1747	1	14	10
1738	1	15	6	1748	1	17	0
1739	1	18	6	1749	1	17	0
1740	2	10	8	1750	1	12	6
10)18 12 8				10)16 18 2			
1 17 $3\frac{1}{5}$				1 13 $9\frac{4}{5}$			

訳者あとがき

はじめに

これはアダム・スミスの『An Inquiry into the Nature and Causes of the Wealth of Nations』の全訳（になるはずのもの）だ。いわゆる「The Wealth of Nations」、国富論で、原著は1778年に出てから、1780年代を通じて何回か改訂されている。底本としては、特にすごい方針はなくて、Penguin Classicsのものや、Dover版、ネット上のプロジェクトグーテンベルクのものなど、いろいろ見ている。が、こうしたもののほとんどは、基本はスミスが最後にまとめた第五版を元に行っているようだ。ネット上で、バージョンまできちんと明記したものはThe Library of Economics and Libertyのものくらいで、1904年にエドウィン・カナンがまとめたものだとされ、スミスによる改訂履歴や彼の主張の背景などについて細かく脚注までついている。<https://www.econlib.org/library/Smith/smWN.html> 翻訳も、おおむねこれを参照して行っている。

題名と翻訳について

さてこの本はもちろん経済学の古典だ、というか、この本で経済学がはじまったようなものだ。だから、これは何度か訳されているのだ。が……それらの翻訳の多く、日本の歳寄りたちの、理解しがたい風習にとらわれている。

Nation というのを「国民」と訳す、という変な風習だ。

たとえば岩波文庫（昔の）ではこの本は「諸国民の富」という題名になっている。Wealth of Nations で、Nations を諸国民と訳したわけだね。

ところが序文をちょっと読んでだけで、本書 Wealth of Nations の題名に出てくる「Nations」というのが国のことであって、国民のことではないというのはすぐにわかる。「諸国民の富」というのは、だからタイトルからして明らかにまちがっているんだ。

たとえば冒頭の一文。

The annual labour of every nation is the fund which originally supplies it with all the necessaries and conveniences of life it annually consumes.

さて、もしこれが国民なら、どうしてスミスはこれを it という非人称の代名詞で受けるの？

Whatever be the soil, climate, or extent of territory of any particular nation...

土壌や気候や領土の広がりって、個々の国民については言わないでしょう。うちの庭の気

候なんて考えないでしょう。スミスは農業者だけを考えているわけ？ そんなわけはない。この直後の有名なピンの分業から見て、この人は農業者以外の人を念頭においている。

The policy of some nations has given extraordinary encouragement to the industry of the country.

この Industry of the country って農業のことだけれど、国民が農業振興策をする？ 国に決まってるでしょう。

というわけで、自然に考えればこの nation は国なんだ。強いて言うなら、政治制度としての国 (State/国家) ではなく、人の集まりとしての国だ、とは言える。でも既訳は、これをどうしても国民と訳さなきゃいけないと思こんでいるもので、すっごいこじつけをする。「国民の気候」とか平気だし、国民が一人で農業政策したりする。途中でおかしいと思わないのかな。思わないらしい。

文脈より自分の勝手な思いこみを優先させる。中身をきちんと読んで理解せず、平気でねじまげる。そういう翻訳方針で、まともな訳になってるとはぼくはとても思えないな。実際、『国富論』のある邦訳は、別宮貞徳の欠陥翻訳シリーズに取り上げられるほどの代物だった。あのシリーズは、一ページに本質的なまちがいが 10 箇所はないととりあげないからね。ちなみにそのとき、なにやら訳者の弟子らしき学者が出てきて、「いや、あれはあれでいいんだ」と強弁してまわっていて、呆れ果てたなあ。文中で、「一軒の家はどう転んでも一軒の家だ」という強調で、「A house」と書いてあるのを、訳者が「A 型住宅」と訳して別宮貞徳に「プレハブ住宅じゃあるまいし」とバカにされていたんだけど、そいつは「いや、当時もそういう大量生産住宅があったかもしれない」とかなんとか。いやあ、恥も知らなければ、学者としての最低限の学問的良心もない、年寄りのご機嫌取りと提灯持ちだけのクズがいるんだね。

どうして日本の歳寄りは、nation を「国民」と訳するのが好きなんだろう。いまだに national accounts は国民経済計算という表現を使う。熟語になっちゃってるのはわかるけど、だれかが旗降って、せーので変えればいいのに。経済分野だけじゃない。アメリカのとっても有名な映画に Birth of a Nation というのがあって、D. W. グリフィスの大作なんだけど、これの邦題が『国民の創生』というのだ。なに、国民の創生って？ 意味不明でしょう。この映画はアメリカが独立してリンカーンが演説して、というアメリカ建国映画なのだ（ただし後半になって、いきなり KKK 翼賛黒人バッシング映画になってみんなひっくり返るけど）。だからこれは当然、『ある国の誕生』というのが正しい訳なのだ。でも日本の映画ヒョーロンカはこれを『国民の創生』と表記しないと、無知とかなんとか言ってせせら笑ったりする。この邦題がおかしいと指摘できないテメーらのほうがアホだあ。

この本の意義

さて、この本の意義は……きかなきゃわかんないようなら、かなり困りものなんだけれど……

えー、この本はさっきも書いたとおり、経済学というものを創り上げた一冊だ。現在の

あらゆる経済学は、すべてこの本を根底に持っている。冒頭に出ている分業の重要性、そして何よりも、需要と供給をマッチさせる見えざる手、といういまの市場経済の根幹をなす考え方を、アダム・スミスはこの一冊で確立した。経済学っていうのは、すべてこれをベースとしつつ、ときにこの見えざる手がうまく機能しない場合についてあれこれ議論している学問体系だと思ってまちがいない。いわゆるミクロ経済学は、ほぼアダム・スミスの枠組みの中にある。

マルクスはそこで、生産力がガンガン上がって供給関数という考え方が成立しなくなったときのことを考えた。同時に、労働という特殊な商品の特殊性について考えた。それは人間という存在を考えるとときには大事なんだけど、でもスミスの枠組みの中の、特殊ケースでしかない。ただそれは、個人レベルで見れば、どうしてもゆずれない最後の線だ。これ以下の値段ではおれが生きていけないという最低ラインがあって、それをどう確保するかがあるときには死活問題になる。だからある時代の労働者にとって、マルクス経済学は最後の砦となって、一時あそこまで世界を席卷したわけだ。実は、この供給関数が成立しない世界と、労働の話の部分とは、ぼくは必ずしも整合性があるとは思わない。それって実は、だいじなんじゃないかと思うんだけど、これはいずれまた考える。

ヴェブレンはそこで、金持ちは消費を見せびらかすのが目的だから市場は成立しないよ、という話をした。これまた特殊例だ。シュムペーターは、創造的破壊とか言ってかっこいいのでもてはやされる。でも、それは結局、スミスの枠組みは必ずしも固定なものではなくて、時代とともに変化していくよ、と言っているわけだ。あとはだれだ。いろいろいるけれど、みんなスミスの基本的な考えを精緻化したり、数式をつかって明快にしているだけなんだ。

たぶん、スミスから重要な形で発展が起きたのは、リカードが出てきて、そしてその後限界革命が起きたときだろう。それでもそれは、スミスの改良以上のものだったか、という点は議論が分かれる。唯一、ケインズだけがスミスに匹敵する新しい考え方をつくった。個人レベルではスミスはおおむね正しいけれど、社会全体として考えたら、需給がマッチしない場合もある。そのとき政府の公共投資や財政政策が意味をもってくるという、いわゆるマクロ経済学の枠組みだ。

この訳の意義

いや、本来であればいまさらこんな訳がでる意義は皆無のはずなのだ。岩波文庫や中公文庫ですら高すぎるというケチな連中が、ダウンロードして 1000 円ほど得した気分になってうっしっし、というその程度の代物であるべきなのだ。

ところが冒頭でも述べたとおり、既存の国富論の訳は、題名からして誤訳をさらけだして平然としている、恥知らずの代物だ。中公文庫も五十歩百歩。この経済学の基礎中の基礎の代物に、まともな翻訳がないのだ。したがって、それをまともな形で訳して紹介することには重大な意義がある。いま、多くの人にとっては初めて、『国富論』がまともな形で提供されることになる。

日本の経済学界は、それでも平然としている。冒頭でも述べた通り、既存の翻訳のだめさ加減については、別宮貞徳がビシビシ指摘を行っている。でも、それをきちんと受け止めて、まともな訳を出そうというだけの気概も良心もないわけね。

もちろんいまさらアダム・スミスでもないでしょう、という気分はあるのかもしれない

い。不均衡動学のこの時代に、

一方で、『国富論』には経済の　これもウソだ。確かにこの本は、いわゆる経済学の元祖だ。だから経済学ジャーゴンは使っていないという意味ではわかりやすいかもしれない。でも、まずその代償として、くださしくてまだるっこしい。専門用語が使えれば一発ですっきりすむところが、うじゃうじゃと書かれている。

さらにもっと重要なこと。この一冊を書いた段階では、アダム・スミスは自分のどこがすごいのか、よくわかっていない。さらに、当時はもちろん経済学という学問はなかったんだけど、それはつまり、ぼくたちの考える経済学以外の話もいっぱい入っているということだ。とりあえずなんでもぶちこんであるし、そしてそれが必ずしも一貫していない。そりゃこれだけ長い本だもの。

そしてもう一つだいじなこと。アダム・スミスの考え方には、まちがったところ、不十分なところがたくさんあった。だからこそ、その後それが発展して改良されて、いまの経済学が成立した。ときどきアダム・スミスを読みかじって「アダム・スミスは有限会社を認めていなかった!」とか「アダム・スミスは経済だけでなく道徳も重視した!」なんてことをしたり顔で語る馬鹿な連中がたくさんいる。ふーん、それで?　アダム・スミスは、マルクスのような教祖様にはならなかった。だからアダム・スミスの書いた話をもとに現在の経済学その他を批判しようというのは、まったくのナンセンス。マルクス主義経済学なら『資本論』の268ページでマルクスがこう言っている」といえばそれは有効な批判になるかもしれない。でも近代経済学では、スミスが何か言っていたということは

じゃあ何のために?　正直いって、経済学を勉強したいなら、こんなものをちんたら読むよりスティグリッツでもマンキューでもサミュエルソンでもいいから、経済学の教科書をお読みよ。

どこに優れた洞察があったか、そしてどこでまちがったか。そのまちがいは、実はマルクスにも受け継がれている(たとえばその労働価値説なんかに)。数学や科学なら、そこで練習問題を二十個くらい解いてみると、気をつけるべきポイントがだいたいわかる。でも経済学だと、なかなかそうはいかない。

ちなみにぼくは、マルクスだってまともな訳になっているとは思わない。代々木に巣くってるあの連中が、党の方針に従ってマルクスの著書の翻訳をねじまげている話は、金塚「オナニー」貞文訳の『共産主義者宣言』解説に書いてある。